
東方幻想入り

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想入り

【Nコード】

N1256Y

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

私、星空霽は不思議な世界に迷い込んだ。不思議な子、変な子、大人をバカにすることしかできない子供。そう言われ続けてきた私が迷い込んだのは、優しい人がたくさんいる、私以上に変な、独特な世界だった。その世界のことを、人は幻想郷と、呼んでいた。

・この作品は二次創作です。原作との相違点、キャラクターの違い、設定の違いが多々あります。ご了承ください。

迷い込んだ私（前書き）

迷い込んだ私

自己紹介から始めるべきだろうか。私の名前は星^{ほし}空^{ぞら}滯^{みお}。性別女性。生まれてから十年、楽しい事よりも辛い事の方が多かった。母とお父さんが六歳の時に離婚して、それからすぐに母が自殺したせいで、私は一人きりになってしまった。いや、ふたりがいたころも、一人きりだったようなものか。

今はお父さんが養ってはくれているんだけど、お金を送ってくるだけで、他に父親らしいことはしてくれない。

お父さんは私のことを愛してくれているはずんだけど、罪にならないギリギリまで私を放っておくみたい。怒ってくれるのを期待して学校を一ヶ月行かなかったこともあったけど、先生に怒られただけだった。

私は運も悪いのか、はたまた巡り合わせが悪いのか、学校の帰り道に攫われて死にかけるような目にも何度も遭った。何をしようとも父親が何も言っていない、というのがどこからか伝わって、私は犯罪者の格好の的になった。それでも五体満足で生きている私は、ある意味で運がいいんだろうけど。

こんな人生を歩んできた私は、いつしかどんなことにも動じない心を手に入れていた。もし今心臓の上にナイフが突き刺さっても、普段と変わらず状況を分析できる自信がある。大人はそれを心が死んだと表現したがるけど、私はそう思わない。冷静であるということは、生き残ることに繋がる。私は短い人生の中、得られた経験からそう悟っていた。

自分の自己分析が普通の子供達よりも明晰なものには理由がある。自分のことを冷静に、客観的に見つめられるようになったとき、自身の中の語彙の少なさに非常に困った。そのことに対して対策を講じたからに他ならない。

一人きりの私は、他の子供と違い、家族ではなく他人に頼ってし

か生きていけない。

冷静になったせいで感情を表情や行動で表すことに関して極端なまでに不得手になってしまった私が、自分のことを理解してもらうためにどうすればよいのか。私が出した結論は、話すことだった。痛い、苦しい、楽しい、嬉しい、気持ち悪い、気持ちいい、と言ったものを言葉で表現しなければならないと、私は考えた。

そのために必要な言葉を、私は家にいる間必死で覚えた。辞書に書いてある言葉の八割を覚えても、大人向けに書かれた本を読むのには苦勞した。だが、苦勞してでも知識を頭に詰め込んだおかげで、少しは理知的に物事をかんがえられるようになったと思っている。ただ、その弊害もあった。知りたくもないような醜惡な知識も、同時に頭に入ってきたのだ。

私の目の前に広がっている深い深い森。これも、私に恐怖をもたらした知識だった。本曰く、一度迷うと二度と元の場所に帰れない。私はそのど真ん中……どこが真ん中なのかはわからないが、とにかく三百六十度、木と草の緑と幹と地面の茶色で埋まっている。地面に目をむけると、土と草に混じり、色とりどりのキノコがいくつか生えていて、一層不気味に私は感じた。

今度は自分の姿を見る。私は白い素足を晒し、水玉模様の長そで長ズボンのパジャマに身を包んでいた。つまり私は、眠る前の格好のまま、ここにいるというわけだ。私は立ち上がると、何も考えずに前に進んだ。

どうせ方角を知る方法など知らないのだ。ならば、ひたすらに真っ直ぐに進めばいつかはどこかに出るだろう。出なければ、野垂れ死に。いつものことだ。何かに成功しなければ、死ぬ。

死ぬのか、死なないのか。わからないことが少しだけ、怖い。枝をくぐり、草をかきわけ進みながら、そんなことを考える。そして同時に、恐怖を感じながらも冷静に考える自分を奇妙に思う。

「……」

足の裏に痛みを感じ、足をあげてそこを見る。鋭い石を踏んだ

ようで、踵の部分の一部が裂け、血が流れていた。

このまま歩き続けたら化膿するだろうか。もしそうになったら、足が使い物にならなくなるのだろうか。……どちらにせよ、この痛みではもう歩けない。そう判断した私は、その場に座り込んだ。じめりとした感覚がお尻に伝わる。今もう一度立ち上がれば、お尻回りが土色に汚れていることだろう。

注意深く周りを見回しながら、重要なことを考える。

私はなぜここにいるのか。家のベッドで横になり、目を閉じたのは覚えている。しかし、私はここで目覚めた。

考えられるエピソードは、犯罪者に攫われたが必死な思いで逃げ出し、その途中で力尽き眠りについた、というもの。もしそうなら、私の眠る前の記憶があやふやなのが気になる。

……汚されたのだろうか。

少し不安になって、服やその他色々なことを調べた。服には脱がされた跡はなく、肌にも汚れはなかった。汚されたわけではないのがわかって、息をついた。

ならばなぜ私はここにいるのだろうか。問いが巡りだす。わからないことばかりで、少しだけ不安になる。一度は否定したはずの可能性が、再び頭をもたげてくる。

「あなた、こんなところで何してるの？ 死にたいのかしら」

そんな時、女の人が茂みの奥から出てきた。白を基調とした服装に身を包んだ、宙に浮かぶ人形を従えた摩訶不思議な人だった。

「助けてください。迷い込んでしまいました。踵を切ってしまい、動けません。肩を貸して頂けますか？」

私の丁寧語が間違っていたのだろうか、目の前の女性は驚いたような顔をした。

「……あなた、人間？」

「はい。私は星空濤と申します。助けていただけますか？」

女性は気を取り直すように咳払いをすると、手を翻した。すると彼女の周りで浮いている人形達が私の脇のしたと膝の裏に周り、

私の体を持ち上げた。急に体が浮く感覚に全身が逆毛立ったが、何も言わない。

「……私はアリスよ。変な子、あなた」

「そうですか。お世話になります」

私は頭だけ下げてお礼を言った。アリスは私を一瞥すると、踵を返して森の中を歩き始めた。彼女の足取りは淀みなく、まるでこの森が自分の庭であるかのような自然な歩みであった。

「あなた、ここがどこかわかってる？」

「わかりません。ここがどこか教えて頂けますか？」

「敬語やめて」

思ったりよりも鋭く、そんなことを言われた。多少面食らったが、初めて言われたことでもないのと言う通りにする。

「わかった。ここはどこ？」

「ここは幻想郷。知ってた？」

「……知らない」

幻想郷。知りたいような知りたくないような、そんな名前だった。

優しい人に出会った私

魑魅魍魎の拠り所。忘れ去られたモノの最後の居場所。幽霊妖怪鬼悪魔。人に近い人ならぬモノが跳梁跋扈する現世とは異なる違う世界。

「どうやら私は、そんな場所に迷い込んだようだった。

「つまり私は忘れ去られた、と」

私は結論をアリスに言った。

母に置いていかれ、父とも長い間会っていない上、ついに友人や先生にも忘れられてしまったのだろう。一か月休んだ後、さらに二ヶ月も学校にいかなければ、そうなるのは当たり前か。

「さあ。外の世界から来た人間は、必ずしも忘れられたから来るわけじゃないから」

「そう」

だからと言って、可能性が消えたわけじゃない。私が知ってる人全てに忘れられてしまった可能性は、未だにあるのだ。

「……忘れられてしまったのかもしれないのに、怖くないの？」

「怖い」

素直に答える。見知らぬ土地で一人迷い込んだせいか、得体の知れない恐怖が私の心の大半を占めていた。いや、それ以前の問題だ。お父さんも友人も、先生も。皆が皆、私というものを忘れてしまう。そんなのは嫌だった。真実は、どうなのだろう。

「とか言う割に、冷静みたいだけど？」

「怖いのは事実だけど、それを態度に出すかどうかは別だと思う」
「的確な表現ね」

褒めてもらえたはずなのに。心の奥が痛んだ。それは、振り向いたアリスの顔が、私に対する哀れみに満ちていたからだろうか。なぜ、この美しい女性は私を哀れむのだろうか。外から来る、というところが珍しく、そして可哀想なことなのか？ それとも、ここに来る

理由は複数あるようなことを言っていたが、それが優しい嘘なのだろうか。

もしそうなら、真実なんて知らない方がいいのだろう。

「あなた、なんでそんな話し方なの？」

「なんで、とは？」

そんな、とはどんな話し方なのだろう。よほど癪に障る言葉遣いなのだろうか。それとも、ここではタブーになっているような言葉を知らず知らずのうちに使っているのだろうか。

「その、言葉から感情を抜き取ったみたいに変なやつ。理由あるの？」

「理由……？」

言われて、少し悩む。

なぜ、このような話し方にしたのだったか。その記憶はかなり曖昧だった。元の話し方が、大人達を怒らせるからだったのか、他人に頼るに不利な口調だったからか。よく覚えていない。

「なぜかは、覚えてない」

「じゃあ、特に理由はないってことね。その話し方もやめたら？
もっと子供らしい話し方した方がかわいいよ」

「……」

親切心から、そんなことを言ってくれているのだろうか。嬉しくもある反面、悲しくもある。

「子供らしさなんて、要らない」

「……そう」

私に必要なのは物事を考えることのできる頭と、知識。体なんて鍛えてもたかがしれているが、頭なら、心なら。それならば、何かあった時死なずにすむかもしれない。読む本はつまらなかったし、楽しくなかった。それでも死にたくない一心で頑張った。

頭の中が今のような頃には、私の中の子供らしさ……可愛いものが好きだとか、フリフリとした服を好むとか、人形がお気に入りだとか、そういったことは私の中から排除されていた。……いつ

か消えるものなのだ、惜しくはない。そう思っているはずなのだ。

「……何かあったの？」

私は思わず首を傾げた。今まで私を哀れんでいた瞳は、今度は心配そうに私を見つめていた。今までなら、大人達は皆、私のことなど知らない振りをしたのに。

「な、何かって、何？」

「……怖い目に遭った？」

私は呆氣に取られた。なぜだろう。なぜこの人は私にこうも気をかけるのだろう。

「……あ、遭ったことなんて、ないよ」

「そう。辛いこと聞いちゃったわね」

それきり、アリスは黙った。怒らせただろうか。嘘をついたのが、わかってしまったのだろうか。

「私の家、空き部屋結構あるから、しばらく泊まっていていいわよ」

「ありがとうございます」

そうお礼をいいながらも、私は戸惑っていた。なぜ、この人は私を泊めてもいいなんて言うのだろう。家族は何も言わないのだろうか。そもそも、なぜ警戒しないのだろう。私が悪人だとは思わないのだろうか。

「……それから、元いたところに帰るまでくらいなら、食事くらいは用意してあげる」

「……同情？」

本で読んだことがある。あまりに可哀想な人を見てしまうと人はつい優しくしてしまうのだと。私は、可哀想な人なのだろうか。

「……。嫌だったかしら」

「ううん。すごく嬉しい」

嬉しいのは嬉しいのだが、反応に困る。こういう時、どんな反応をすれば喜んでもらえるだろう。……しばらく考えて、お礼を言う以外に思いつかなかった。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで。帰るまでだから、きつとすぐでしょ」

そう言ってアリスが笑うのと同時に、開けた場所に出た。相変わらず木と土とが視界のほとんど占めているが、広間のようなこの場所には木製の家があった。小さい家だが、ただ広い私の家とは違って人の温もりがありそうな、優しそうな家だった。

「あれ、私の家だから」

「お邪魔します」

アリスは私のお礼に苦笑すると、家まで行って玄関の扉を開けた。内装はさながらログハウスのようで、台所からテーブル、食器棚から食器にいたるまで全て木製で、テーブルの上にはおしゃれなクロスがかけてあった。壁の上のほうに備え付けられた棚には、アリスの周りに漂っているような人形たちが所狭しと並べられている。

私はアリスの人形に運ばれ、テーブルの近くにあったソファの上に座らされた。

「ここで待っててね」

アリスはそう言うと、玄関とは違う方の扉を開けて、どこかへ行った。人形達が私の前でふわふわと浮き、何やら踊りを踊っている。その様子はなぜか楽しそうで、微笑ましかった。

「楽しんでくれてるみたいね」

「うん。アリスが動かしてるの？」

頷いたアリスの手には、木製の籠があった。救急箱だと思う。彼女は私のそばまで来ると、怪我をした足を取った。怪我をある程度見終わると、驚いた様子で言った。

「かなりざっくり切ったわね。痛くなかった？」

「痛い」

私がそう言うと、アリスは苦笑した。

「なら痛がるなり泣くなりしたらいいのに」

私は首を振った。

「これが私の精一杯」

私は別に無理に痛いのを我慢して冷静を装っているのではなく、自然体でこうなのだ。そもそも私は痛いと言ったし歩けないとも言った。ちゃんと伝わったと思うのだが、足りなかったのだろうか。もっと言葉を尽くさなくてはならないのだろうか。

「そうなの。……どんな感じ？」

「傷口同士が触れ合って今でも裂かれるような痛みがする。血が止まらないのが少し不安。跡が残ってしまわないかどうかかわからないのが怖い」

私は傷に関して思っていること全てを伝えた。過不足はないと思う。

「わかりやすく助かるわ。その点に関しては大丈夫よ。ちゃんと血は止まるし、痛いのもなくなる。ここまで大きいと跡になるでしょうけど、小さいものよ」

そう言いながら、アリスは籠の中からガーゼと包帯を取り出して、手当を始めた。見ず知らずの私に医療道具まで使ってくれるなんて嬉しい。

「消毒するから、ちょっとしみるわよ」

「わかった」

消毒液がついたガーゼが、足の裏に当たり、染み入るような痛みが走った。つんとするような臭いに、少しだけ嫌悪感を抱く。

「えっと、踵に包帯を巻く時は……と」

テキパキとしていたアリスの手際が、急にたどたどしくなる。おそらく手当をすること自体は多いのだろう。包帯を巻くほどの怪我は少ないのだろうか。

もしかしたら、こんなやさしい女性にかいがいしく手当をしてもらえるのなら怪我をするのも悪くない、と思う人がいるかもしれない。

アリスの顔に視線を移す。人形なんかとは比べ物にならないくらい美しく凛々しい顔立ちの美しい人。でもそれは綺麗すぎて、見る人によっては彼女に冷たい印象を抱くかもしれない。こんなにも暖

かくて優しい人なのに、もったいないとは思う。

「はい、これでよし……と痛かったわね、賢いわ」

アリスは私の頭を撫でながらそう言った。足に目を見やった。踵から足首に巻かれた包帯は、手つきが拙かった割には綺麗だった。手先が人より器用なのだろう。そうでなければ人形を宙に浮かべるなんてできるわけがない。

「ありがとう、アリス」

「気にしないで、星空さん」

「漑、と」

私はアリスの目を見つめて言う。

「漑、もしくは星空漑と呼んで」

「名前、嫌いなあ？」

頷く。星空。美しくも儚い夜空に輝く星々と同じ名前。本来なら誇るべきところなのだろう。だが私は、この名前を同級生にからかわれ、先生にまで変な名前と言われたせいで、誇らしいどころか嫌悪感を抱いていた。お父さんと私を繋ぐの大切なものだけど、嫌いなものは、嫌いなのだ。

もしどうしても呼びたいというのなら構わないけど、名字だけで呼ぶというのはやめてほしい。

「そう。じゃあ、漑。これからのことなんだけど……」

そうアリスが楽しそうに切り出したところで、変化があった。家の外から空気を切る音が聞こえてきたのだ。それはだんだん大きくなってきて、思わず私は外の方を見た。

「……はあ」

アリスは心底面倒くさそうにため息をついた。その次の瞬間、アリスの家の玄関が開き、外から人が入ってきた。

「ういーっす！ アリス、元気にしてるかー？」

誰だろう。悪い人かな。私は立ち上がり、アリスの前に出る。いざとなったら、盾にならなきゃ。

「うん？ なあアリス、その子誰？ アリスの子供？」

侵入者の問いに、アリスは肩をすくませて首を振って答えた。

なんだろう、アリスに警戒心がない。もしかしてアリスの家族なのだろうか。そう思って、侵入者をよく見る。

大きな三角帽子をかぶり、さながらエプロンドレスのようなデザインの服に身を包んだ、金髪の綺麗な人。アリスとはまた違う綺麗さだった。アリスを人形の美しさに例えるなら、この人は自然の美しさ。雄大で、凛々しくて、それでいてしなやかで。だが、アリスに似ているかどうかで言えば、そうではない。……でも、やっぱり家族かもしれない。私も、お父さんにも母にも似ていないと言われてばかりだったから。

「濡、こいつは魔理沙。霧雨　魔理沙よ。」

まりさ。キリサメマリサ。独特な名前だな。私はそう思った。

アリスの知人だということがわかると、私は警戒を解き、ソファに座る。足の裏を見ると、血がにじんでいた。急だったので忘れていたが、私は怪我をしていたんだ。気をつけないと、傷口が開いてしまうかもしれない。

「私は星空濡と言います。アリスのご友人ですか？」

私がそう聞くと、マリサは不思議そうな顔をしたあと、大口を開けて笑った。

「あはははは！　ご友人だってよ、アリス！　あたしでもそんな言葉使わねえのによくできた子供だな！」

マリサはひとしきり笑うと、私の頭に手を乗せた。

「別に敬語なんて使わなくていいんだぜ？　子供は、子供らしいだけで可愛いもんなだからな」

「私は、可愛く見せたくて敬語を使ってるわけじゃないよ」
相変わらず、私の表情筋は機能を果たさなかった。でも、私は喜んでいなのだ。無理することはない。そう言ってくれたような気がして、嬉しくて。

「私、普通に話していると無感情だと言われるから。敬語の方が、そう言われることが少なくて」

私は感じていないわけではないのだ。ちゃんと痛いも苦しいも、嬉しいも楽しいも感じる。だが、このことについて言葉を尽くして説明して、誤解が解けた試しがない。だから私は、このことに関して他人に理解してもらうことを諦めた。

「そうなのか？　ま、やっぱり敬語よか親近感湧くよ。さっきよりも百倍いい。今度新しい人に会ったら、そうやって自己紹介したらどうだ？」

「う、うん」

ちよつと馴れ馴れしく感じて、返事が遅くなってしまった。これが、この人の普通なのだろうか。少し疑問に思う。

「……で？　何の用？　魔導書なら貸さないわよ」

アリスはつつけんどんにそう言った。魔法使い、なのかな。

「ああ、貸さなくていいぜ。パチュリーんところから貸してもらおうから」

「あんたの場合は盗み出すでしょうが。早く用件を言いなさい」

アリスがイライラとしながらそう言うのと、マリサは肩をすくめた。

「せっかちな、アリスは」

「いいから」

「わかったよ。霊夢が呼んでるぜ」

その用件に、アリスは訝しげな表情をした。レイムという人に出るのが嫌なのだろうか。

「なんであの子が？」

「行けばわかるぜ。来るか？」

頷いて、口を開こうとして、アリスは私を見た。

「この子がいるわ。だから」

「私、ここで待ってる」

「一緒に連れてけばいいじゃん」

私とマリサは全く別の意見を言った。一緒になんて行っても、足でまといになるだけなのに、この人は何を言ってるのだろうか。

「わかったわ。さ、濡。魔理沙の後ろに乗っけてもらいなさい」

「……。うん」

アリスは私を担ぎ上げて、外まで私を連れ出した。外には少し大きめの箒が立てかけられており、マリサはそれをひつつかむと跨った。この人は何をしようとしているのだろうか。そしてどうしてアリスはマリサの後ろに私を乗せたのだろうか。

気恥ずかしさで消え入りたくなるような気持ちになっているというのに、マリサは朗らかに言うのだ。

「じゃ、飛ぶから口閉じとけよ。舌嚙んじまうぜ」

言われたとおり口を閉じる。体が宙に浮くような嫌な間隔に見舞われ、上から豪風が吹いてきて、思わず目を閉じる。再び目を開けるとそこには目を疑いたくなるような光景が広がっていた。

「ここは……」

ここは、知らない世界。そう思い知らされた。本で見た世界地図と、共通点が見当たらない。そしてかつて学校の屋上から見た景色とは、まるで違っていた。ビルもなければコンクリートで舗装された道すらもない。あるのは緑とちよつとの家屋。

「きれいだろ？ あたしもこの景色好きなんだ」

「そう」

幻想郷。ここから元の世界に戻れるのだろうか。不安に思う。もし戻れなかったら今度こそ一人きりになってしまふ、と思うと、耐えがたい寂しさに見舞われた。マリサの腰に抱き着きついて、寂しさを紛らわす。

「魔理沙、もうちょっとゆっくり飛んであげたら？ 怖いのかも」

アリスの声がしたので、その方向を見る。すると、アリスが何も持たずにマリサと並行して飛んでいた。

「うん、速いか？」

「……うん。でも、このままでいい」

このまま、もう少しだけ人のぬくもりを感じていたい。久しぶりに触れた人の体は、すごく柔らかくて、いい匂いがしていた。人って、こんなにもよいものだっただろうか。

少し記憶を探って、自分が最後に人に抱きしめられた、もしくは抱きしめた記憶を思い出す。……吊り下がった母を下ろす時に、抱えたのが最後だった。嫌なことを思い出した。気分が悪くなって、吐き気さえしてくる。

「……」

あの時の母は、思い出したくない。綺麗な人ではあったが、死に顔は凄惨なものだった。口をだらしなく開き、目を見開き、ありとあらゆる穴から汚物を垂れ流していた母。私が死を忌避するのは、死んだら私もあなるのだ、と思っているからなのかもしれない。あんな物体になるなら、どれほど苦しかろうと生き抜いて見せる。おそらく私はそう心のどこかで思っているのだろう。

「漑、あれが目的地だぜ」

マリサは赤い鳥居のある神社を指さして言った。境内はそんなに広くなくて神社そのものも小さめ。あれは、どんな神様を祀っているのだろう。

「どんな神社？　どんな神様を祀っているの？」

「知らね」

マリサはそっけなく言った。興味が無いであろうことは後ろからでもわかった。

彼女は高度を下げ、その神社に接近する。アリスが先に境内に降り立った。マリサも彼女に続いて地面に降りると、私のことを抱き上げてくれた。

「遅いわよ、魔理沙！　……て、そのちっこいの何？　魔理沙の子供？」

神社の中から、肩口が露出した特殊な巫女服に身を包んだ女性が出てきた。黒い髪を後ろでまとめ上げて、大きなリボンで止めている。マリサもアリスも、そしてこの人も。この世界にいる人は皆、彼女たちのような珍妙な格好なのだろうか。

「私、星空漑。今は、アリスにお世話になってるの」

マリサに言われた通り、丁寧語を使わずに挨拶してみる。

「私は霊夢。よく挨拶できたわね、偉いわよ。……魔理沙が抱きかかえてるのはなんで？」

「この子足をけがしちゃって。一人にしとくのもかわいそうだから連れてきた」

アリスが神社のほうへと足を進めながら言った。

「あんまり知らないところを連れまわしても疲れちゃうだろうし、早く要件を済ませましょう、霊夢」

「わかったわ。神社の中で話しましょう」

レイムは頷くと、神社の中へと歩き出した。マリサも、彼女たちが続く。

「ちょっと話するけど、大丈夫か？」

「大丈夫。ゆっくりお話してて。私は考え事しとく」

マリサが呆れたように息をついた。私は彼女を見上げる。

「考え事って。もっと遊んだりとかしねえのか？」

「遊ぼうにも、足がこれじゃあろくに動けない。そもそも私に遊びは必要ない」

「そうかよ。じゃあ、今度あたしが教えてやるよ」

そういつてマリサはニカリと笑った。そんな反応をしてくれたのは、この人が初めてだった。

博麗神社と私

初めて入った神社の中は、意外と普通の家屋だった。畳の上に座らされ、三人は一つのちゃぶ台を中心にして座った。私はすることもないので横になる。眠ればよいのだが。

「で、霊夢。なんで私を呼んだの？」

「この前、あなた外来人を連れてきたでしょ？」

外来人、というのは私のように外の世界から来た人のことを指すようだ。先ほど、アリスに教えてもらった。

「ええ、それが？」

「最近、外来人が多すぎて、厄介な連中も増えてきたわ」

「……私のせいだと言いたいのか？」

「違うわ」

レイムは静かに言うのが聞こえた。

「ただ、外来人を分別なしに保護するのはやめてほしい、ということと言いたいだけ。今日みたいに」

「見捨てたら死ぬかもしれないの？」

「それもやむなし、という状況よ」

私は全身がこわばるのを感じた。もしかしたら、殺されてしまうのだろうか。体を起こして、三人を見る。

「どうしたの？ 喉かわいた？」

レイムが聞いてきた。優しい女性。でも、もしかしたら私の命を奪うかもしれない女性。

「……なんでもない」

「そう」

聞いても、悪く思われるだけだ。私はまた体を横にして、今度は三人の会話に集中する。

「何かあったのか、霊夢」

「ここに來るときに力を持った馬鹿が幻想郷で何かしようと企んで

る、ってだけよ」

「……それが、私がここに連れてきた人だ、ってわけ？」

アリスが悲しげな様子で言ったのが聞こえた。

「責めるつもりはないわ。ただ、これからは保護するなら保護する、見捨てるなら見捨てるではつきりさせてほしいってだけ。神社ではもう面倒見きれないわ」

「そんなに多いのかよ？」

「一日一人から二人。十日に一度はろくでもないのが迷い込むわ」

「多いな。あたしんところには来たことないぜ？」

「あんたはいつも空飛んでんでしょうが」

「はは、それもそうか」

マリサは笑っているけど、私は気が気でなかった。この話し合いの結果如何で私はどうこうされてしまうのだから。

逃げ出すか？ その選択肢は、すぐに消えた。ここから逃げたらそれこそ絶望だ。

「それはわかったけど、幻想郷の結界はどうなってんだ？」

「それが緩んでるから、大量に外来人が来てるんでしょうが」

「対策はあるの、霊夢」

「幻想郷を外から切り離す」

「今いる外来人はどうなるんだ？」

「結界が安定するまでは、残念だけどここにいてももらうことになるわ」

私はほっと胸を撫で下ろした。よかった。少なくとも、ここにいる三人に殺されることはないんだ。

「この子は？」

アリスが聞いた。どういう意味だろう。

「ちょっと変な能力もってるけど、まあ帰れるでしょ……？」

レイムがしばらく黙りこくった。

「霊夢？」

「この子、は」

私は違和感を感じて、体を起こした。

「な、なに？」

レイムの目は、なぜか潤んでいた。ゆっくりと私に近づくと、私のことを抱きしめた。痛いくらいに込められる力に、私は戸惑う。

「……あなたは、ここにいなさい。ずっと」

「れ、レイム？」

どうということだろう。　なんでこんなふうに抱きしめてくれるのだろう。

「元の世界に帰っちゃダメよ」

「なんで？　説明して。理由もなしに帰るなど言われても頷けない」

私は静かに言った。レイムもきつと戸惑っているのだろう。私の中に思わず涙を流してしまうほど凄惨な何かを見てしまったのだろう。巫女さんなんだから、他人の本質を見抜くくらいはできるだろう。

「おい、霊夢。何勝手なことやってんだ？」

「二人に頼みたいことがあるの」

私を解放し、涙を拭うとレイムは二人に向き直った。

「あなたたちを呼んだのは、さっき言ったことを各地にいる主要人物に伝えて欲しいの」

レイムがそう言うと、二人は訝しげな顔をした。

「……はあ？　なんで私が？」

「なんであたしなんだ、霊夢」

「信用に足るからよ」

レイムは私の隣に座ると、説明を始めた。私のことではうやむやにしたのに、このことではちゃんと説明するのか。もしかしてこの人の中で何か線引きがあるのだろうか。

「外来人を保護するか否かは発見した本人に委ねる。これはある意味で危険な案よ。無差別に広めれば、それは外来人への襲撃を公的に認めたと捉えられかねない。そんなことは、避けなければならな

いわ」

レイムは袂に手を入れると、その中から紙を取り出した。そこには地図のようなものが描かれていて、レイムはそれをちゃぶ台の上に乗せた。

「だから、注意して伝えて欲しいことがあるの。これは決定事項ではないことと、外来人を襲うことを認めるわけではないということ。それから、これは試験的運用でもあるから、信頼できる部下にのみ伝えてほしいということ。以上の三点よ」

穴がある。私はそう思った。けれど、それは落とし穴と同じで、人為的に作られたものだ。そう感じた。

これがもし全面的に広まったとしたら、悪意を持った人間は確実に外来人を食い物にするだろう。それを問題視させないための試験運用なのだろうか。それとも、騙すための試験運用なのだろうか。

こんなことをして、騙す相手は誰だろう。外来人だろうか。ここにいる二人だろうか。それとも、幻想郷の人間全てだろうか。

「わかったぜ。さとりとか紫とかレミリアとかに伝えればいいんだろ？」

「よくわかってんじゃない。よろしくね」

レイムは優しく微笑んでそう言った。私は半ば無理にでも立ち上がった。足の裏に鋭い痛みが走る。

「大丈夫、滯」

「うん。アリスも行くの？」

アリスはしばらく悩んでから頷いた。なぜ悩んだのだろう。

「じゃあ、私も行く」

「……危険よ？」

「それでも行く」

私はアリスのそばまで痛みを我慢しながら歩く。

「あなたは、ここにいなさい」

「ここはイヤ。行く」

レイムと一緒にいるのは、少し嫌だった。レイムと一緒にいた

ら、最後には閉じ込められてしまうのではないか、そんな恐怖が全身を襲ったからだった。

「……そう。嫌になったらいつでもここに来なさい」

レイムは残念そうにはしていたけど、特に怒ったような様子や、壊れてしまうような様子はなかった。私は安心すると、アリスの方を向く。

「最初はどこへ行くの？」

私が聞くと、アリスはマリサと目を見合わせた。

「私はこの近くにある紅魔館に行くわ。各地に伝え終わったら、伝書鳩を飛ばすから。あなたもそうして」

「ういっす。じゃああたしは天子んとこ行ってくるぜ」

マリサは駆け出して外に出ると、箒に跨った。

「ごめんな、濡。遊び教えてやれなくて。でも今度会ったら絶対教えてやるからな！　じゃあな、元気でな〜！」

そう言い残すと、返事も聞かずに行ってしまった。まるで、嵐か台風のような人だったな。

「私達も行きましょうか。歩ける？」

頷くと、一歩踏み出す。傷をかばう歩き方をしたせいか、かくりとバランスを崩し、膝をついてしまう。

「大丈夫？　見せてみて」

「大丈夫、歩けるから」

私は強がって言った。もしここで足手まといだと思われたら連れて行ってもらえないかもしれない。そんなことになったら、私はレイムと二人きり。そんなのはイヤだった。

それにしても、なぜ私はただの想像を根拠にこれほどレイムを嫌うのだろう。私は、偏見で人を判断するような人間にはなるまいと思っていたのに。

「霊夢、子供用の靴とかある？」

「ないわ」

だから、ここにいて。そう恫喝されたように感じて、私はアリ

スの後ろに隠れた。恐らく私は何かをレイムに感じ取って、それを恐れているのだろう。愚かな私。

「……えらく嫌われたわね、霊夢」

「まあ、私子供受けよくないから。それじゃあね、アリス、漣。また会いましょう」

そう言うとレイムは神社の奥の部屋に消えていった。

「足、どうする？」

「歩く」

「傷開くわよ？」

「構わない」

とにかくここから出たい。こんなにも一つの場所を恐れる自分に憎悪さえ抱く。レイムだって私を迎え入れて、抱き締めてさえくれたのに、なぜ私は恐れるのだろう。よくわからない。わかりたくもないような気がする。

「はあ。あなた、頑固ね」

「足手まといにはなりたくない」

アリスはまたため息をついた。怒らせただろうか。

「もう。わかったわよ。急ぐ用事でもないでしょうし、ゆっくり行きましょう。辛くなったり痛かったりしたら言いなさい」

「ありがとう」

私はお礼を言うと、境内を素足のまま歩く。おもわず叫びそうになるくらい痛むけど、嫌われたりするわけにはいけないのだ、黙って歩く。アリスと一緒に境内を出て、階段を降りる。それから、土がむきだしになった街道を歩く。

「漣、紅魔館に行ったら次は永遠亭に行くわよ」

「永遠亭？」

なんだろう、その素敵な響きは。永久を手に入れれる場所、とかならば素晴らしい場所だな、と思う。

「病院よ。流石にちゃんとした医者に見てもらいたいでしょ？」

病院、か。お父さんに行くなど言われてからは、行っていない。

大病を患えば死が確定するが、お父さんが言うのなら、別にそれでもかまわない。

「病院はいや？」

「ううん。久々だな、って思っただけ」

「へえ。具体的には？」

「四年くらい」

アリスは驚いた。

「すごい。怪我もしなかったの？」

私は首を振った。

「行かなかっただけ」

「え、お父さんとかは？」

私は首を振った。大人なら、これだけで理解してくれるはずだ。普通の人に、私とお父さんとの絆は理解できないだろうから。

「ご、ごめん」

「いい。謝ってくれるだけ、嬉しい」

お父さんは死んだ。そう伝える方が、お金だけ送って来てあとは放ったらかしというのよりも理解されよう。お父さんとのことで嘘をつくのは気が引けるけど、こんなことでそうダラダラと会話するのもイヤなので、私は話を切り替える。

「紅魔館って、どんなところ？」

「え？ ……吸血鬼、レミリア・スカーレットの住居よ」

吸血鬼。血を吸いとる鬼。そんな恐ろしい存在がいる場所に自ら足を運ばねばならないことを、私は嘆いた。

「怖い？」

「うん。でも大丈夫」

私は上手く踵をかばいながら歩く。ひよこひよここと変な歩き方になっているが、アリスは笑おうともしない。優しい人だな。

「ふうん。まあ、ほんと無理だけはしないでね」

「うん」

吸血鬼ってどんなのなんだろう。それこそ、人を食糧にしか

見てないような、そんな存在なのだろうか。……私、外人だし、食べられるのかな。

「まあ、すぐには紅魔館に着かないし、ゆっくりおしゃべりでもしながら行きましょ」

「うん」

暇しないように配慮してくれるのが、嬉しかった。この気持ちを笑顔で表現できない自分が恨めしい。

「アリス、ここは妖怪がたくさんいるの？」

「まあね。でも大丈夫よ。私を守るから」

そう言ってアリスが指をひらめかせると、周りに浮いていた人形達の手には様々な武器が握られていた。斧や槍、剣などの恐ろしいものを可愛らしい人形が持っているのが、不気味だった。

「それで、殺すの？」

「殺しはしないわ。撃退するだけ。まあ」

「人間だー！」

甲高い声が聞こえた。周りが闇に閉ざされる。まだ昼間だというのに、なぜ。

「あなたは、食べてもいい人間？」

声が聞こえる。想像するに、女の子の声だ。年齢は私と同じくらい、小さい子。その子は、きっと私の後ろにいる。息が右の耳にかかるほど、近い場所。多分、この子は妖怪だ。人を食うような、怖い妖怪。おそらく私の心臓の鼓動さえ、気取られているのだろう。

なんと答えたら、助かるのだろうか。なんと答えたら、殺されてしまうのだろうか。

「答えて？ あなたは、食べてもいい人間？」

彼女の問いにどう答える。肯定する？ その場で齧られ、食われてしまうかもしれない。否定する？ もしかしたらこの質問はただ趣味で聞いているだけで、嫌がる人間を食うのがいい、とか言われるかもしれない。

「答えないの？ 食べちゃうよ？」

「やめなさい。ルーミア、その子は食べてはいけない人間よ。手を出さないで」

暗闇の奥から、アリスの声がした。

「そーなのかい。じゃあ、かえるのだ」

そう言うと、子供の妖怪……ルーミアは去って行った。闇が晴れ、視界が戻った。一步も動かなかったため、景色は変わっていなかった。勝手に移動させられたということはなさそうで、よかった。

「大丈夫、滞」

アリスが私のそばに駆け寄ってくれた。よく見ると私の周りに人形がたくさん浮いている。いざとなったら、あの妖怪と戦ってくれたのだろうか。

「うん、大丈夫」

「驚いたわ。普通の子は驚いて騒いだり走ったりして大変なことになるのに」

アリスは歩きながら感心するように言ってくれた。私はアリスについて歩く。足の痛みにもなれた。

「私は、いつでも冷静だから」

「そうね。でも、怖くなかった？」

私は素直に答えることにした。

「もうここで食べられて終わっちゃうんだって思った」

「そんなこと思ってたのによくじつとしてられたわね」

「生きるためなら、なんでもする」

私は静かに言った。この先泥水をすすするような目に遭っても、生き抜く。

死にたくないから。母と同じになりたくない。またお父さんと会いたい。だから、死ねない。

「随分と固い決意ね。すごいわ」

「ありがとう、アリス。……ところで、ルーミアはどんな妖怪なの？」

私は質問してみた。今度一人でルーミアに遭っても死なないようにするための、情報が欲しかったからだ。

「あの子は闇を操る人食いよ」

「私を食べようとしてたのかな」

アリスは奇妙なことに首を振った。

「まあ、そうなんだけどね。でも、無理矢理食べられたりしないわ。

あの子、食べてもいいか聞いて、許可がもらえないと食べてこないから」

「どうして、妖怪なのにそんなルールに縛られてるの？」

私の中の妖怪という存在に対するイメージは、自由奔放、気まぐれで人を殺したり救ったりするような強大なものだったのに。随分と、イメージと違う。

「まあ、どんな妖怪も多かれ少なかれルールの中で生きてるわ。もちろん、そのルールを破る奴もいる。……そこは人間も一緒でしょ？」

私は頷いた。

「わかってくれて嬉しいわ。で、ルーミアはルールに縛られているタイプの妖怪よ。ルーミアに食べられなくなったら、私は食べてはいけない人間です、って言えばいいのよ。簡単でしょ？」

頷く。なんだ、変に深読みをしてしまった。そんな単純なものだったら、素直に答えるべきだったな。情報がなかったのだから仕方ないといえば、仕方ないのだろうが。

だが、これからは情報を多く取り入れるよう注意しなければ。知らないことが理由で、死にたくない。

「アリス、話は変わるけど、外来人ってどんな人がいるの？」

すると、アリスは困ったような顔をした。聞いてはいけないことだったかな。

「ううん、多すぎて一概には言えないわ」

「じゃあ、たとえば、外来人が近づいてはいけない場所とか、しちやいけないこととか、ある？」

この質問にも、アリスは言葉を濁すだけだった。

「まあ、ないことはないけどね。あなたにはどう頑張っても無理だから安心して過ごさない」

「なんにもないの？」

アリスは少しためらって、頷いた。

「まあ、そりゃ入ったら怒られちゃう場所はあるけど、それも外人だから、で特別に案内するとかあるから……」

私は驚愕する。なぜこんなにもこの人は警戒心がないのだろう。そんな私の疑問を感じ取ったのか、アリスはにっこりと笑った。

「この人、基本的にお人よしが多いから」

「そうなんだ」

私はそう言うのとほぼ同時、道が開け、視界いっぱい湖が広がる。思わず、声が漏れる。これほどきれいな景色を、私は見たことがない。そして、湖の奥には赤い館があった。

「あの奥にあるのが、紅魔館。さ、行きましょう」

アリスは湖の円周沿いに歩き始めた。

紅魔館への道のりと私

綺麗な湖を眺めながら、私とアリスは歩いていた。舗装されていない道を歩くのは辛いけれど、我慢する。だんだん慣れてきたし。

左側にはアリスが歩いていて、その背景にな森と青い空があった。右を向くと、目を見張るような美しい湖が見える。

水面は光り輝く網をはったように太陽の光を乱反射し、まぶしいくらいにきらめいている。湖の水は、ここからでも中心の底を見れるんじゃないかと思うほど透き通っていた。

「この湖、おきにいり？」

「私はこの景色を美しいと思う。だから、好き」
アリスの方を見る。

「素直にキレイだから好きって言えばいいのに」
アリスは苦笑しながら言った。

その様子は、まるで親しい人間にするような、柔らかい顔だった。私がアリスの家族になったかのような錯覚に陥り、それを振り払おうと首を振る。

「どうしたの？　また何か理由があるの？」

「違う。アリスと家族になったような感覚がして。それを頭から振り払っていた」

アリスはしばらく悩むような仕草をした。やはり、気持ち悪がられただろうか。せつかく仲良くなれたのに、残念だ。

「別に、いいけど」

「……？」

いい？　何がいいのだろうか。

「別に、家族になってもいいよ」

「……本気？」

私に新しい家族ができる？　アリスが、こんなに優しく綺麗な人が私の家族に？

「本気も本気」

「……なぜか、聞いてもいい？」

アリスはしばらく顎に手を当てて悩んだ。本人もわかりかねているのだろうか。しっかり悩んで、結論を出して欲しい、半端な考えで家族になって、いけないから、で捨てられるのは嫌だから。

「私、あなたを助けるって決めたから。霊夢が言うには長いこと滞在してもらわなきゃいけないのよね。その間ずっと一緒にいるわけだし、それってもう家族と一緒にでしょ？　まあ、あなたが帰るくらいまでなら、ね」

私はすぐに頷くことができなかった。家族が一緒にいるのが当たり前かのように言われて、戸惑ったのだ。やはり私はおかしい。そう再認識した。

「私、アリスの家族になるの？　なっているの？」

「ええ。この際だし、別にいいわ。でもちゃんと帰るのよ？」

ああ、なぜ私は笑顔や仕草で喜びを、この全身を包む幸福を表現できないのだろう。

私は自分のできる精一杯として、アリスに抱きつくことにした。

「ありがとう、アリス……お姉ちゃん」

「お母さんと呼ばれる覚悟だったんだけど……。まあ、いいか」

アリスは照れ臭そうに頬をかくと、まあ、家族だしね、と言って抱きしめてくれた。

お母さんではだめ。お母さんと呼んでしまえば、アリスも母のよう……。うに……。

「漣、震えてるわよ？」

「嬉しくて。喜びに打ち震えるというものだと思う」

私の言い訳を、アリスは信じてくれた。私はお礼を言ってアリスから離れる。私は震える体を無理に動かし、湖の奥に見える紅魔館を目指す。

「漣、どうしたの？」

すぐにアリスが追いついてきた。

「なんでもないよ」

吊り下がった母の遺体が思考の端から消え、体の震えが止まると、私はアリスのそばに行って手を繋いだ。姉妹はこうするものだと思うたからだ。

「おー？ アリスじゃない！」

紅魔館へ進もうとしたとき、声がした。私達の目の前に氷の粒が集まって、それは人型をとり、やがては一人の女の子になった。

その子は短い水色の髪に、水色を基調としたブラウスを着ていて、背中には三対の氷柱が翼のように生えていた。

「こんにちはチルノ。用事があるからあんたの相手はしてやれないの。どっかいって」

アリスは冷たくあしらうように言った。

アリスが誰にでも分け隔てなく優しくするような人間でないことがわかって、少しだけ安心する。

聖女と共に暮らす自信はない。

「私が相手してほしいのは、その人間なのだ！」

チルノ、とアリスに呼ばれた子供は私のすぐそばまで来て言った。空気が急に冷え込んだような気がする。私の本能が警鐘を鳴らしているのだろうか。

警告に従い、私は何歩か後ずさる。

「おー。なんの力も持っていない人間だ。名前は？ あたいは『氷精』チルノ！ 氷を自在に操れるのだー！」

氷を、自在に？ そんなもの、人間が、少なくとも私が叶う相手じゃない。なんとかして生き残らなければ。どうする。

「私は星空漣」

アリスの名前を名乗リたかったけど、教えてもらっていないから名乗れなかった。あとで聞こう。生き残れたら。

「ほー。星空か。いい名前だな！」

「漣って呼んで」

チルノはあっさり頷いた。

「わかったぞ、滞！ さあ、弾幕勝負だ！」

そんなことを言って、チルノはいきなり攻撃してきた。氷粒がいくつも、無数に飛んでくる。

知覚はできている。ちゃんと見えている。けれど、避けられない。私はまだまだ未熟な上に華奢だ。怪我もしてる。

氷の弾の雨にさらされた私は、後ろに吹き飛ばされて地面に転がる。お腹が痛い。体がうまく動かない。

「チルノ！ あんた何してるの！？ いきなり撃つとか何考えてるのよ！」

「い、いやまさか本当に何もできないなんて思わなくて、あっさりよけて反撃するんだとばかり……」

「あんた滞の力量見切ってたでしょ！？」

「あ、あれは、その、なんていうか……」

「なによ」

「当てずっぽう……」

「ああ、もう！ とっとと失せろ！」

「わ、わかったのだ。ご、ごめん滞。」

それきり、チルノの声はきこえなくなった。アリスが駆け寄ってくる音がした。

「大丈夫滞！？ お腹見せて。内出血してわね。痛い？」

抱き起こされ、聞かれる。正直、傷みはもう引いている。

「チルノのこと、許してあげて」

「はあっ？ なんの滞があいつを庇うのよ？」

「あの子はきつと、ただ子供なだけで、普通に悪気があったわけではないはずだから」

悪意があれば、去り際謝るなんてことしないだろうし、そもそも私は死んでいるだろう。

「優しい子ね」

私はそう言われて嬉しかった。ここに来る前はなにを言っても何をして、誰も何も言ってくれなかった。気味が悪いといって近づ

いてもくれなかった。

それなのに、この人達は。

「ありがとう、アリスお姉ちゃん。もう歩けるから」

自力で立ち上がると、ふらつきながらも歩き出す。アリスも心配そうについてくる。

「そうだ、アリスお姉ちゃん」

「どうしたの？」

私は紅魔館を見つつ、アリスに聞く、

「アリスお姉ちゃんの名前はなんていうの？ 私、お姉ちゃんの名前を名乗りたくて」

星空。こんな名前、いない。いくらお父さんの名前でも、関係ない。お父さんとは血が繋がっているんだから、名前が違ってても繋がって入れるはずなんだ。だったら、こんな名前は、捨てる。

「マーガトロイドよ。そんなに名前が嫌？」

頷く。私は今から、滯……。

ミオ・マーガトロイドだ。少なくとも、この幻想郷にいる間は。

「じゃ、行こうかアリスお姉ちゃん」

「わかったわ。ホントに大丈夫？」

「大丈夫」

私はそう言うと、少しだけ歩む速度を上げた。傷みが増してくるけど、構いやしない。

歩いてからかなり経って、紅魔館の門が見えてきた。遠くで見たときはそうでもなかったのに、今見ると物凄く大きな館だ。壁から屋根、窓枠に至るまで全てが朱色に染められているところは、さすが吸血鬼の住処だ、と思った。

「こんにちは、アリス。今日はどんな御用ですか？」

赤く染まった門の前には、中華風の衣装に身を包んだ女性がいて、アリスにそんなことを聞いた。門番さんだろう。ここまで大きい館なら、門番くらいはいて当たり前なのだろうか。

「今日はレミリアに伝言があって来たわ」

「……伝言？」

「ええ。霊夢からの大切な伝言よ。通してもらえる？」

「……何か書類はお持ちでしょうか」

「持っていないわ」

そうアリスが言っていると、門番は少々お待ちを、言っただけで門の中に入った。話し声が聞こえるのでおそらく内線か何かで主と連絡をとっているのだろう。

「妙に嚴重ね」

「いつもは違うの？」

アリスが不思議そうにしていたので、聞いてみた。すると訝しげな顔をしたまま、私に教えてくれた。

「いつもは用件言えば大抵通してくれるのよ。そもそも昼寝していることもあるし」

「門番がそんなので大丈夫なの？」

「まあ、この主は強いから。ちよつと腕に自信がある、くらいで忍び込んだところで夕食にされるだけだからね。……まあ、今日は様子が違うのだけど」

「どうしてだと思う？」

アリスは肩を竦めた。興味がないのだろうか。もしかして、アリスはあまり他人に興味がない？

「お待たせしました。通ってよい、とのことですよ。それでは、お通りください」

門から出てきた門番は、私たちを中へと案内した。

「ありがと。美鈴」

「いえ」

そう言って恭しく一礼したメイリンという女性は、私たちを見送ると再び門番としての仕事を果たすため、門の外に立った。

クールビューティという言葉が彼女ほど似合いそうな人は、今まで見たことがなかった。

「どうしたの？ 美鈴の方ばかり見て」

「……なんでもないよ」

私はアリスに促され、ちゃんと前を見る。赤い大きな扉が目に入ってくる。この先に、吸血鬼がいるのか。

思わず震えそうな体を感じながら、私はアリスについていく。無意識的に、ぴったひと寄り添うように歩く。アリスは私を見てにこりと微笑んで、扉を開けた。

「いらっしやいませ、アリス様。お嬢様がお待ちです」

広々としたエントランスの中央で、メイド服にみをつつんだ人形のような女性が待っていた。彼女は綺麗なのは綺麗なのだが、なぜだか、背筋が凍るような悪寒を感じた。

「……はじめまして」

そう私に言ったメイドの瞳は、夕日のような真紅だった。

吸血鬼と私

真っ赤な扉が等間隔でいくつも続く、真っ赤なカーペットが敷かれた廊下を、私とアリスはイザヨイサクヤというメイドに先導され歩いていった。

「……ね、ねえサクヤさん」

「なんでしょうか」

冷たい声が浴びせられる。体の芯から冷えるような感覚がして、少し震える。怖くなって、アリスの手を握りしめた。

「あ、あなたは、吸血鬼……なんですか？」

「……さあ……。そうです、とも言えますし……違います、とも言えます」

どうということなのだろう。……ハーフなのだろうか。いわゆるダンプールという人種。

「……興味があるのですか？」

「え？」

「吸血鬼に」

私は首を振った。サクヤは前を向いているから、話さなくてはならないことに気づくのに、しばらくかかった。

「う、ううん」

「そうですか」

サクヤの声が怖い。まるで、調理台の上に乗っているような、そんな嫌な気分。

「ねえ、咲夜。あなたはもし外来人を好きにしていると言われたら、どうする？」

なんで、アリスは今そんなことを言うのだろう？ 反応が気になるのだろうか。サクヤはここで初めて、振り返って私の方を見た。視線だけで、貫かれたような気分になる。

「その少女を私に……。そういう意味ですか？」

「違うわ。どうするか知りたいだけ」

この人はどんな反応をするのだろう。お願いだから、普通の反応をして。そう心の底から願う自分がいた。

「そうですね。もしそのようなことになったら、お嬢様と妹様の食材を安定して調達できますね」

思わず、アリスの後ろに隠れてしまった。

「ちよっと、滞り？ どうしたの？」

「……な、なんでもない」

アリスの影から、サクヤを見る。普通の女の人にしか見えない。だけど、人とは違う何かを、この人は備えていた。

廊下の一番奥にある大きな扉の前まで来ると、サクヤは静かにノックした。

「お嬢様。お客様をお連れ致しました」

「わかったわ。お通しして」

扉ごしだというのに丁寧な礼をしたところを見ると、この人の主人に対する忠誠はかなり高いものだということがわかった。サクヤは重そうな扉を片手で開けると、私たちに中へ行くよう手で促した。中に入っても私はサクヤに対する恐怖が消えず、彼女の方を見ていた。

「それではお嬢様、失礼致します」

「ええ。ご苦労様」

「ありがたきお言葉」

私達が部屋に入ると同時、サクヤが消えた。足音一つさせずに消えるなんて。暗殺者か何かなのだろうか。

「ようこそ、アリス。久しぶりね」

私はここで初めて、紅魔館の主を見た。

王様が座るような赤い豪華な椅子に座っているのは、私と同じかそれより下の年齢に見える、幼い女の子だった。西洋人形のように整った顔立ちをしていて、ネグリジェのような服装が、幼さを一層引き立てている。この子が、吸血鬼。私達人間を食らう、化け物。

彼女は私を見て、舌なめずりをした。背筋に冷たい汗が流れる。

「……あら、お土産？　気が効くじゃない」

「違うわ、レミリア。外来人で、私の妹よ」

「へえ」

レミリアという吸血鬼は、興味深そうに立ち上がると、私のすぐそばまで来た。レミリアの顔が、視界いっぱい広がる。全身が恐怖で凍りつき、レミリアの紅い瞳から目が離せない。殺されてしまうのだろうか。臓腑を撒き散らし、私を咀嚼するレミリアを想像する。その様は酷く似合っていて、神秘ささえ醸し出していた。

「……あなた、私のことが怖くないの？　吸血鬼だってわかってるのに」

「怖い」

そう言った私を、レミリアはじつくりと観察する。何を見られているのだろうか。全てを見られているのだろうか。

「この子、面白いわね、アリス」

「面白い？」

アリスがレミリアに聞いた。怖いと言った私を気遣ってか、レミリアの前に立ってくれる。私はすかさず、アリスの後ろに隠れる。

「そうね。心拍数も呼吸も体温も全て、恐怖を感じた時と同じもの。なんだけど、表情だけは平静そのもの。眉ひとつ動かさない。でも、怖いのよね」

にやりと、レミリアは嫌な笑みを浮かべた。

「うん」

頷いた私に、ずっとレミリアが青白い指先をのばした。顎のラインをなぞるように動く指。恐怖からか、くすぐったいからか、背筋が凍るような感覚がする。

「随分と、うまく表情を殺すじゃない。どれ、ちょっと運命を……」
そう言ったレミリアの顔色が変わった。私の顎にあった手が離れ、それは彼女の美しい口元に。

「あなたの運命は……凄まじいわね」

「運命？」

私は首をかしげた。

「そう、運命。いずれ来るべき未来。避けることのできない決定事項。私はその一部を読むことができ、ある程度の干渉もできる」私は黙って話を聞く。聞きたいことはあるが、それは全てレミアアが話終わってからだ。私の命は今、レミアアが握っているのだから。

「あなたの運命は強力すぎて微調整すらできないけど……」

そう言うと、レミアアは私の耳元に口を近付けた。耳たぶを齧られると思った私は、一歩下がった。

「とって食いやしないわ。内緒話がしたいだけ」

そう言うと、もう一度レミアアは口を私の耳元に近付けた。

彼女の冷たい吐息が耳にかかってくすぐったい。思わず声を出してしまいそうになるのを、必死で抑える。

「これからきつと、死を懇願したくなるような目に遭うわ。そうになったら、一人でここにいらっしやい。楽にしてあげるわ」

その言葉が、心の奥の奥まで染み渡った。ような感覚がした。そして同時に、得体の知れない根源的な不安が、全身を包んだ。

「どういう、こと？」

「それは、来てからのお楽しみ」

そう言ったレミアアの言葉が、足の先から頭の上まで駆け巡った。気持ちの悪いような、でももっと聞いていたいような、不思議な感覚だった。

「……ふふふ。で、アリス。どんな伝言なの？」

私から離れると、レミアアは子供のように笑いながらアリスに聞いた。レミアアの声がもう少しだけ聞きたくなって、思わず一歩前に出た。

「……外来人の処遇に関してよ」

「何？ 絶対に保護しなきゃいけなくなったの？」

不快そうにレミアアは顔を歪めた。その顔すらも美しく思えた。

私はこの時、自分の異常に気付いた。最初は恐怖の対象でしかなかったレミリアが、非常に魅力的に、あるいは神秘的に感じるようになったているのだ。

私の感じていた恐怖は、心を歪ませてでも解消しなければならなほど強くはなかった。にも関わらず、私の中の感情は劇的というほど変化していた。なぜか。

「逆よ。必ずしも保護する必要はなくなった、ということよ」

「へえ、それは重畳。実に喜ばしいことだわ」

皮肉めいたその言葉をもっと聞いてみたいと思う私は、おかしいな。私はレミリアに好意を持っている？ 血を吸う鬼が好きになるなど。

「無差別にやってはダメよ」

「わかってるわ。伝言ご苦労様。それじゃあね、アリス」

「ええ」

アリスが踵を返し、部屋を出ようとする。私はずっと、レミリアを見ていた。視線が彼女から離せない。ずっと、見ていたい。

「濡、何してるの？ 早く行くわよ」

「え、あ、うん……」

私は名残惜しげに、レミリアから視線を外し、アリスのそばまで歩いた。

「咲夜。お客様がおかえりよ」

レミリアがそう言って手を叩くと、私たちのすぐ前にサクヤがいた。恐ろしい思いは、すぐに全身を包んだ。

レミリアには好意を、サクヤには嫌悪と恐怖を抱く自分に不安を感じる。何かされたのだろうか。……レミリアに。

「館の外までご案内します」

「よろしく、咲夜」

外に出たらアリスに相談しよう。優しいアリスのことだ、きっと、相談に乗ってくれる。

私は淡い期待と共に、サクヤと一緒に外へと向かった。

レミリアに対する好意は、歩く度に強くなっていった。自分の意思とは関係なく強くなっていく気持ちが恐ろしい。

そして、好意や恐怖を感じる自分と、こうして冷静に自分を考えている自分との距離が離れていつていような気がするのが、妙に気になった。

感情の変化と私

アリスに相談しようにも、どう切り出せばいいかを悩んでいる内に、私はついにその機会を逃してしまった。つまり、私はレミリアに対する好意を消したくないと思うほどになっていた。

レミリアに会えない寂しさを感じながら、紅魔館を出てしばらく歩いたところで、神社から素足のまま歩き通しの私の体に限界が来た。足から力が抜け、砂利だらけの道に思い切り膝をついてしまう。

「漣、大丈夫!？」

アリスが私の顔を覗き込んでいた。これがレミリアの顔だったらどれほどよかっただろうか。

そう心の底から願う自分が恐ろしかった。一体、何をされたのだ、私は。

「大丈夫。足から力が抜けただけ。何も問題はない」

「大有りよ! ……って、あなた」

私を覗き込むアリスが、驚愕に目を丸くした。

「あなた、目が」

「どうしたの？」

紅い。そう言われて喜びを感じたのは、レミリアに好意を寄せる自分だった。絶望を感じたのが、冷静な自分だった。

「目が、紅い」

「そう、真っ赤よ? ……さっきレミリアに何かされたの?」

「多分」

アリスの肩を借りて、立ち上がる。足の裏が痛むが、この痛みは覚悟しているので、もはや問題ではない。問題なのはむしろ、もはや恋心や、愛と呼べるほど強まったレミリアへの好意だった。まさか、人間の男性に恋する前に吸血鬼の女の子に恋をするなんて。なんて、数奇な。

「何をされたの? 今、どんな感じ? 説明できる?」

「……わからない」

「わからない？」

「何をされてるのかは、わからない。でも、どんな感じかは説明できる。曖昧な表現を含むかも。いい？」

頷いてくれたアリスに、私は必死で伝えようと決める。今しかない。今伝えなければ、私の心は彼女でいっぱいになって、彼女以外の何も考えられなくなるかもしれない。

歩こうとして、アリスに止められた。

「無理しなくていいから、早く話して」

「……わかった」

私は口を開いた。

「あの時、レミリアに会ってから私の心が激変している」

「……激変？」

頷いて、続きを話す。

「具体的には言えないけど、レミリアを求めている。際限のない気持ちさが心の奥から湧き上がってきて、頭の中が溢れてしまいそう。このままでは、彼女のこと以外何も考えられない人形のようにになってしまうかもしれない」

「……そんな、レミリアが、そんなことを？　あなた大丈夫なの？」

私は首を振った。素直な、でもかなりワガママな気持ちを伝える。多分、冷静な自分が頭から追い出された時点で、恐れている瞬間は訪れる。だから、その前に。

「アリス」

「な、何かしら」

会ってからあまり経っていないアリス。私が、こんなことを言っているのか。悩むけど、言わなければ。今、ここで。

「助けて」

ピクリと、自分の体が震えた。レミリアに対する愛情が、弾けたように強まった。急な感情の変化を、私は受け止めきれなかった。その場で蹲ると、今こうして冷静に考えている自分を必死に保とう

と努力する。

「漑!?! ……あのドラキュラ! やっていいことと悪いことが……!」

ドラキュラ。そんな蔑称のような呼称でレミリアと呼ばれたことが、非常に腹立たしく思う。そう思った自分を見限りたい気持ちを抑えて、ひたすらに溢れる感情から冷静な自分を守る。

「……永遠亭しかないか。漑、急ぐわよ。怖いけど、耐えてね」

そう言うのと、私は宙に浮いた。急に空に浮かされたというのに、もう恐怖すら感じなくなっている。目を閉じればレミリアが思い浮かび、目を開ければ驚くような早さで景色が流れていく。

森を行き、竹の林を飛んで抜けた先にあったのは、小さな庵のような家だった。

「永琳! 急患!」

ドタバタと慌ただしくうちに急いだ様子の着地に、庵の中から左右非対称の色をした奇怪な服をした女の人と、ウサギ耳をつけた女子高生のような格好をした女の人が出てきた。

「アリス、急患って……。その子の足? 大したことないわ。化膿してるけど消毒すれば……」

「この子、レミリアに何かされたみたいなの! 助けてあげて!」

もはやどうでもよくなった足の傷を言ったエイリンという女性に、アリスは私を差し出すようにして見せながら言った。

「あら、この子の目……」

「何? わかったの?」

頷いたエイリンは、静かに私の症状を的確に告げた。

「魅了されかかってるわ、この子。確かに急患ね。じゃ、処置するからアリスは居間で待ってて」

そう言っ、私はエイリンに受け渡された。……もう、限界が近い。

「……よ、よろし、く、お願い……します」

「ええ、わかったわ。よく耐えたわね。偉いわ」

ニコリと笑ったエイリンを最後に、私は耐えきれなくなって、冷
静な自分を失った。
でももう大丈夫。そう思えた。

お姫様と私

……。

「で？　永琳。レミリアのバカはなんだって滯を魅了なんてしたの？」

アリスの声が聞こえる。なぜかひどく苛ついたような声色だった。「ううん、なんていうかね、この件に関してレミリアは悪くないのよ」

「なんでよ。この子、レミリアに魅了されたんでしょ？」

アリスの怒ったような声が聞こえる。それに、エイリンの声も。彼女は少し申し訳なさそうな声色だった。

「それは間違いないわ。でも、それ以上にこの子の能力が今回の件の原因ね」

「……能力？」

エイリンはアリスの問いに、しばらく答えなかった。目が覚めきった私は、目が覚めたことを悟られないよう注意しながら、二人の話聞く。

「幻想郷の流儀に乗っ取って彼女の能力を表すなら……『特殊能力を増幅する程度の能力』ってところかしら」

程度？　能力？　……増幅？　嫌な予感がしつつも、私は聞くのをやめなかった。聞かないことはできる。何？　みたいなセリフを言いながら体を起こせばよいのだ。二人とも声を潜めているだ、きっと私には聞かれたくないのだろう。……でも、私はこうして聞いている。

「それが、原因？」

「そう。しかも、彼女の能力は、他者へ干渉する力を持ってないから、必然的に他者から受けた特殊能力を増幅することになるわ」

「ようするに？」

「ようするに、支援効果と、敵からの体に留まるタイプの攻撃全て

を増幅することになるわ」

私は何を言われたのか理解しなくなかった。つまり、私は。

「……この子、チルノの攻撃食らってたけど」

「体を買いた？ 違うでしょ？ 体の中に入った時点で増幅されるから、もしあの子の攻撃が滯ちゃんの皮膚を突き破って体の中に留まったら、もしかしたら氷のオブジェになってたかもね」

椅子が弾かれるように動いた音が聞こえた。アリスが驚いて立ち上がってくれたのかな。

「……レミリアに魅了されかかったのは、あの子がレミリアの視線にこもった僅かな魔力を……」

「増幅し続けた結果、というわけよ。まあ、滯ちゃん的能力はまだ未完成。完成したら特殊能力を食らったら死ぬ世にも珍しい子供になるわ」

特殊な力を持つてる人って、この世界にどれだけいるんだろう？

私はどれだけその人たちと会うのだろう。それが不安だった。

「……そう。わかったわ」

「理解してくれて嬉しいわ。そろそろ麻酔が切れて起きる頃だから、不審に思われないよう何か話ときましょ。何か話題ある？」

アリスは呆れた感じでため息をついた。

「あんたいつもにまして尊大ね……」

「ま、患者じゃないし」

「はいはい、わかったわよ。……話題はあるわ」

「聞かせて貰いましょうか」

「外来人の処遇について、よ」

そろそろいいだろう。私はゆっくりと体を起こした。お腹に感じていた妙な痛みも、足の裏の擦れるような痛みも、私の中にあった燃えるような情愛も全て消え失せていた。

私の中にあるのは自分で制御できる正しい私だけだった。ほっと、胸を撫で下ろす。

「あら、おはよう」

「おはよう、エイリン。おはよう、アリスお姉ちゃん」

エイリンは診察室のような部屋で、お医者さんが座る場所に座っていて、アリスは患者さんか、患者さんの保護者が座る場所に座っていた。私はその隣にある小さなベッドに寝かされていたようだ。自分の見回すと、パジャマから白い入院患者が着るような服に着替えさせられていた。なぜ、誰が、私の服を着替えさせたのだろう。少し気になる。

「あら、自己紹介したかしら？」

私は首を振った。

「私の名前はミオ・マーガトロイド。アリスお姉ちゃんの、妹です」
私の自己紹介を聞いて、エイリンは目を丸くした。そのまま、アリスに視線を移す。

「この子が、あなたの？」

「何よ。文句あんの？」

「私は、この幻想郷にいる間だけ、アリスお姉ちゃんの家族にしてもらいました」

そう私が言うと、エイリンはさらに驚いた様子を見せて、そして大きく笑った。

「ふふ、アリス、あなたの数倍、人間ができてるわね」

「うるさい」

頬を膨らませて、アリスは言った。

「……外来人の話なんだけどね。これからはそんなに躍起に外来人を保護しなくてもいいらしいわよ」

「詳しい話を聞かせてもらえるかしら」

「いいわ」

黙って話を聞いていた私に、エイリンが何かを思いついたような表情をした。

「あなたはここを好きに見ててもいいわ。地下には入らないでね」
どうするかをアリスに目だけで相談すると、アリスは笑顔で頷いてくれた。

「じゃ、いつてきます。ありがとう、エイリン」

私はお礼を言うと、診察室の扉を開けて、外に出た。木の廊下に、襖の扉。まるで昔話に出てくるような作りの日本家屋だった。

「あ、目が覚めたんだ。元気になった？」

廊下の右と左、どちらに行こうか悩んでいる私に、そんな声がかかった。右を向くと、廊下の奥からウサギ耳をした女の人と、その人にぴったりと寄り添うような形で歩いている男の子がいた。男の子は綺麗な顔立ちをしているけど、表情は暗い。私と同じ、入院用の白い服を着ている。

「はじめまして。ミオ・マーガトロイドです。エイリンから地下以外を好きに見て回ってもいいと言われました」

そう言うと、ウサギ耳の女の人は驚いたような顔を一瞬すると、笑顔になって私の頭を撫でた。

「すごい、すごい。よく自己紹介できたね。私は麗仙。で、こっちの子がノーマ」

ノーマと呼ばれた子は、私に小さく一礼しただけで、挨拶一つしなかった。

「私は、ミオ・マーガトロイド。よろしく、ノーマ」
嫌われたのだろうか。いつものことだ。いちいち気にしないことにする。

「あー……。滞ちゃん、この子は口が利けないの」

「失語症？」

確か、言葉を失うことをそう言ったと思う。

「う、ううん、ちょーっと違うかな。なんていうか、口を開かないの。話す気力もない……。のかな？」

レイセンの質問に、ノーマは悲しそうな顔をして首を振った。……何か、ノーマにはあるのだろうか。

「筆談は？」

「え？ ……この子、まだ六歳くらいよ？」

小学校に入る少し前、か。

「でも、他者とのコミュニケーションを取る手段が他にないなら努力するはず」

私は、努力した。動かなくなった表情をカバーできるよう、必死で言葉を学んだ。幻想郷にくる前までは、その努力が功を奏したことがなかったが。

「え、えっとね、そんな、先生もなしにそんなことできる人なんて」
「……それもそうか」

普通の親は文字習得を学校に任せる。その学校に就学する前なら、文字が扱えなくとも無理はない、か。

「そもそも、ノーマは親はいた？」

ノーマは嬉しそうに頷いた。その表情が私の心に刺さる。みんな、親がそばにいるのだろうか。お父さんに、会いたい気持ちが強くなつた。

「あ、あなたはどうなの、滞？」

「母はいない。お父さんは……いないようなもの」

冷静なまま、私は言った。いつものように言葉を濁さなかったのは、あわよくば同情してほしかったからだろう。

「ご、ごめん」

レイセンは、怒られたと思ったのだろうか。もっと愛想良くできればいいのだが。

「いい。……レイセン、地下以外に行ってほしくない場所、ある？」

これ以上話題を続けたくなくて、私は半ば無理に話を切り替えた。

「え？ そうね、一番奥、姫様のお部屋には入らないで欲しいな。」

それから、厨房も避けてほしいかな」

私は頷いた。……姫様、か。頭に湧いた疑問を疑問のままにして、私はレイセンとノーマの横をすれ違うように通り抜けた。

「あ、滞ちゃん」

「何？」

私は振り向いた。レイセンと、不安そうな顔をしたノーマが見えた。

「あなた、人里から来たの？」

私は首を振った。

「私は別の世界から来た、外人」

「そ、それじゃあさ、ノーマと仲良くしてあげてくれない？」

そう言って、レイセンはノーマを私の方へと押し出した。死んだ魚のような目をした彼は、私が近づくとレイセンの方へと下がってしまった。やはり、嫌われた。

「ノーマが私を嫌っている。仲良くすることはできない」

「で、でも」

「それに、コミュニケーション手段を持たない人とは意思疎通が行えない。私はそんな人と友達にはなれない」

そう言くと、レイセンが止める声も聞かずに廊下の奥へと歩き出した。

……レイセンにも嫌われただろう。仕方あるまい。私は私のことを子供らしい子供として扱う人と仲良くなれた試しがない。

「ずいぶん、冷たくあしらうのね」

廊下の奥の、意匠の凝らした襖が開き、中から人が出て来た。この世のものとは思えぬほど美しい女性だった。十二単のような豪華な着物に、床まで届きそうな長い黒髪。この人が、レイセンが言っていた姫様か。私は瞬時に理解した。これほど完成された人に、姫様という呼称以外は似合わない。そんな気さえした。

「姫様。どうされたのですか？」

後ろから、レイセンの戸惑うような声が聞こえた。

「かわいらしい声が聞こえたものだから。子供なんて、久しく見えないわ」

そう言って、姫様は私のそばまで歩いてくる。しゃがんで、私の顔を覗き込む。近づけば近づくほど、姫様の造形の美しさが際立つ。

「あなた、お名前は？」

「私はミオ・マーガトロイド。幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹になった、外人」

私の自己紹介に、姫様はクスリと優雅に微笑んだ。

「ふふふ、面白い子ね。私は蓬萊山輝夜。輝夜でいいわ」

カグヤ。そして、姫様。もしかして、この人は。

「かぐや姫？」

「そう呼ばれたことも、あったわね。何年前かしら」

この人が、かぐや姫。私が唯一知ってる昔話の登場人物。

「あなたの物語を小さい時に聞いて育ちました。お会いできて光栄です」

私は思わず、手を差し出していた。握手……してほしかったのだろう。

「……ふふっ。大人っぽいと思っていたら、心根はちゃんと、子供なのね」

「おかしいでしょうか」

「いいえ？ とっても、愛らしいわ」

そう言って、カグヤは私の手を握ってくれた。すべすべで、柔らかくて、冷たい感じがするけど、でも確かに暖かくて。しばらくそうしたあと、私は名残り惜しげに手を離れた。

「ありがとうございます。思い出になります」

「気にしないでいいのよ」

私にそう言って微笑むと、カグヤはレイセンのそばまで歩いた。

「ウドンゲ、その子、まだ声が戻らないのかしら」

ノーマの頭を撫でながら、カグヤは言った。

「はい。会話を交わそうとはしているのですが、どうにも反応が薄くて」

「……会話はもう諦める、というのもそろそろ視野に入れるべきね。今度から筆談を覚えさせて」

カグヤの指示に、レイセンは何も言わずに礼をした。

「それと、てゐは？」

「今葉の材料を取りに竹林に向かっており、ここにはおりません」
「そう……」

カグヤは残念そうに肩を落とした。その様子も美しく、私は惚れ惚れするような気持ちを感じた。

「……わかったわ。レイセン、てゐが帰ってきたら私の部屋に寄越して。話があるから」

そう言つてカグヤは歩いて私の方へと向かってくる。きっと、部屋に戻るのだろう。

「そうだ、漑。永遠が欲しかったら私達のところへ来なさいな」

「……永遠？」

「そう、終わりのなき生を、共に楽しめましょう？」

襖を開けて、部屋に戻る寸前、カグヤは私にそんなことを言った。

「……考えておきます」

「ふふ、応対の仕方は立派な大人ね。それじゃあ、よい返事を期待してるわ」

ぱたりと襖が閉じられ、カグヤの姿は見えなくなった。

「綺麗な人」

母よりも綺麗な人というのを、私は初めて見た。

それにしても、永遠？ なんのことだろう。人はいつか死ぬというのに。それとも、あの人は永遠に生きる術を持っているのだろうか。……母のようにならずに済む方法があるのだろうか。

「……漑ちゃん？ 姫様の言うこと、本気にしたらダメだよ？」

レイセンがそばに来て、そんなことを言った。

「なぜ」

「姫様、気まぐれで物を言うから……」

「それでも、死なずに済む方法があるのなら」

私は、永遠を求めるのだろうか。ずっと、ずっと生き続けるのだろうか。

レイセン、あなたなら……どうする？

「漑！ 次行くわよ！」

そうレイセンに聞こうとしたとき、レイセンの後ろの方にあった襖が開き、アリスが出て来た。

「アリスお姉ちゃん」

「そこにいたの。楽しめた？」

私はアリスのそばまで歩いてから、頷く。

「そう？　ここ、なんにもないでしょ？」

「かぐや姫がいた。それだけで十分」

「かぐや姫？　……ああ、輝夜のことね。まあ、子供にとっちゃ馴染み深いか……」

アリスはそう言うと、私の手を握った。

「さ、行きましょ。パジャマは私の家に運んでもらえる手はずだから、安心していいわ。靴も、くれるみたい」

そう言って、アリスは手元の鞆から小さな、私の足に合いそうなサンダルのような靴を取り出した。

「レイセン、滯が世話になったみたいね」

アリスが歩くと、レイセンもついてきた。玄関先まで送ってくれるのだろうか。

「いえ。しっかりとした子供さんですね」

「ホントよ。というか滯が昔話を知ってたことが驚きよ。難しい本ばかり読んでるイメージだったわ」

私は首を振る。

「難しい本は楽しくないから嫌い」

「正直なところも、子供らしいのね」

「らしいも何も、私は子供だ。一人では何もできない未熟な存在だ。これから、どちらへ？」

「まあ、閻魔のところを予定してるけど、今日は無理ね。滯も疲れたでしょうし、今からあいつのところ行ってたら日がくれても帰れないわ」

玄関までたどり着くと、アリスは私の前に靴を置いてくれる。

「ありがとうアリス」

「これくらい気にしないで」

私は置かれた靴に足を入れた。少し大きいけど、問題なく歩ける。

さつきまでとははるかに違う。アリスも同じように靴を履くと、玄関の引き戸を引いた。

外には竹の林が生えており、ここを抜けることができるのだろうか、そんな不安に駆られる。

「じゃあね、麗仙。永琳によろしく言っというて」

「はい、それでは」

アリスは私の不安に構わず、竹林に入って行く。

大人の外来人と私

麗仙が小さくなって、永遠亭が見えなくなるころには、私はすっかり方向を見失ってしまっていた。

「だ、大丈夫なの、アリス」

「大丈夫よ」

同じような景色が延々と続くここが、少し怖い。

アリスにくつついてしばらく歩いていると、男の人を連れた女の人が視界に入った。

男の人はスーツを着ていて、小さな鞆を下げていた。日本だったら違和感ないのだろうけど、こんな竹林じゃ不審人物に見えてしまう。

女の人は白い長髪に、頭に大きなリボンをつけていた。白い上着に赤いオーバーオールのようなズボン。赤い瞳をしていたため、私は彼女が吸血鬼ではないかと思った。

「ん、アリスか。永遠亭の帰りか」

けど、彼女には恐怖を感じない。むしろ暖かい人柄ではないかと想像した。

「ええ、元気みたいね、妹紅。そっちは外来人？」

「まあな。その子もか？」

「そんなところ」

軽く挨拶を交わすと、二人はお互いが連れてる人物が気になったらしく、すれ違う寸前で止まった。

「……よ。私は藤原妹紅。そっちは？」

「私はミオ・マーガトロイドです」

「一応、うちの妹。そっちの中年は？」

アリスが聞くと、モコウという女性は後ろのスーツ姿の男性に目配せした。

「私は東野康介」

そう自己紹介した彼の声は、上ずっていた。

「だから、康介、無理して気張るなって」

「黙ってくれ。早く帰してくれ。仕事があるんだ」

気を遣ってくれたモコウに、東野は冷たくそう言った。

「あなた随分冷たいのね」

アリスも私と同じことを思っていたようだった。

アリスの言葉に、東野はさらに言った。

「君には関係ないだろう。それに、言葉遣いに気をつけたらどうだ？ 私はこれでも、社員五千人を抱える会社の代表取締役だぞ？」

この人、そんな上の役職の人なんだ。少し私は感心した。

「何？ 暗号？」

「こいつずっとこんな調子なんだよ。どっかから電波受け取ってんのか、とか本気で思ってたよ。今から永琳んところに行くつもりだったんだ」

もしかしてモコウは、東野が病気だとも思っているのだろうか。その可能性は否定できないが、訂正はしておいた方がいいだろう。

「モコウさん」

「ん？」

「代表取締役というのは、日本のとある会社形態で上位に位置する役職」

「へえ、偉いさんだったのか、あんた」

モコウが感心したように東野を見ると、彼は偉そうに胸を張った。

「ようやく理解してくれたか。にしても君、小さいのに物知りだね。偉いぞ」

そう言って、東野は私の頭を撫でようとした。ふと、背中に悪寒が走った。

「ありがとうございます。お気持ちはありがたいのですが、あなたの手に恐怖を感じるの、撫でるのをやめてください」

私は一歩下がった。東野はピクリと動きを止めた。なぜだろうか、この人の手がとてつもなく怖かった。

「あはははは！　なんだこのガキ！　面白い拾いもんしたな、アリス！　いやあ、愉快愉快」

残念だったな、と言ってモコウは東野の肩を叩いた。彼は顔を赤くしてその手を振り払った。

「黙れ！　なんだこの子供は！　アリスと言ったか、一体どんな教育をしてるんだ！」

「いや、私に言われても」

「私は外来人です。アリスはここに居る間だけ、家族になってくれると言ってくれました。アリスを責めないで」

私が言うと、東野はう、と言葉を詰まらせた。

「……君は何を考えてそう大人をからかうような事を言うんだ？」

「からかうなど。私は私の思ったことを伝えただけです。悪意はありません」

「何をバカな！　子供がそんな口を聞くときはな！　大人をバカにしてる時だと決まっているんだ！　もっと子供らしく話せないのか！？」

東野の言葉に心がささくれ立った。この人は、私がいた世界にいた大人と同じことを言うのか。私は間違っていない。何も嘘をついていない。

だけど、私が間違っていると判断されてしまうのだろう、きっと。いつものように、そういうことにされるのだ。モコウも、アリスも、大人である東野のことを信じて……。

「ちょっと、あなた？　さっきから随分偉そうな口を利いてるけど、ちょっとは落ち着いてモノを考えたらどう？　この子みたいに」

「な、何を。君は、そんな子供の言うことを信じるのか？」

「当たり前。あなたの数倍信用に足るわ」

アリスは、言い切ってくれた。私のことを疑いもせず、信じてくれた。

「ふん。さっきから表情一つ動かさない子供が信用に足る？　血迷ってると思えん」

「……あなた、いくつ？」

「？ 三十五だが」

「無駄に生きたわね」

「何をっ!？」

アリスに、東野が掴みかかろうとした。私はアリスを後ろに引張って、代わりに私が前に出た。東野の前に、両手を広げて立ちはだかる。

「アリスお姉ちゃんに、手を出さないでください」

東野は拳を振り上げた格好のまま、動かなかった。しばらくして、拳を下ろした。

「……わかった。行こう、妹紅。こんなやつらと一緒にいたくない」
「酷い言い草だな、私の知り合いに。」

……ああ、そうだ、言い忘れてた。私はあんたを永遠亭に送り届けたら帰るんで、あとは一人でなんとかしろよ」

永遠亭の方に足を向けた東野が、驚いたようにモコウに顔を向けた。

「何驚いてんの？」

「い、いや、まさか置いていかれるとは」

「は？ なんで私があんと行動一緒にしなきゃいけないんだよ」
「そういうと、東野は私を指さした。」

「そいつだって外人だろう？ 外人人は保護するべきではないのか!？」

モコウは呆れたように肩を落とした。

「あのな。お前……。いや、違う世界で子供も大人もないわな。」

まあ、あれだ。さっきまで持論展開してたじゃん」

「あ、ああ」

「あれが気に食わないんで、一緒に行動できない。理解したか？」
「そんな、と東野は呟いた。鬼のような形相になって、私に向かってきた。」

「……」

「いい、私一人で大丈夫だよ、アリスお姉ちゃん」

武器を持った人形を取り出したアリスを、私は手で制した。殺させるわけにはいかない。

私のところに向かってきた東野は、私の胸ぐらを掴んで、吊り上げた。苦しくて、息がつまる。

「お前のせいで、私はこの得体の知れない場所で一人になってしまった！ どうしてくれる！？」

「私のせいじゃない。あなた自身の責任」

「何だと！？」

頬に痛みが。はたかれたのだというのは、いちいち確認しなくともわかった。

また、この人も怒るのか。なぜ、私は大人を怒らせてしまうのだろう。大人達が言うように、私が悪いのだろうか。

「落ち着いて考えてください。あなたが彼女たちなら、どう思うかを」

「なぜお前にそんな偉そうに言われなければならない！」

偉そうに。いつも大人達は言う。偉そうに聞こえてしまうのは、きっと私の丁寧語が間違っているせいだ。

まだまだ、私は勉強し足りない。もっと学ばないと。

「お前が黙っていれば、私は！」

「私はその子がしゃべってくれて嬉しいけどな。危うくバカと一緒に行動するとこだった」

モコウの言葉が嬉しいけど、今は少しそれどころではない。

「黙れ！ 今私はこいつと話してるんだ！」

胸をさらに締め上げられ、さらに痛みが増す。殺されてしまうのではないだろうか。そんな不安がわずかに生まれた。

「やめてください。話し合いましよう」

「うるさい！ 大人の私が、黙けてやるのだ！」

ギリギリと音がして、息がし辛くなる。この体を、壊させるわけにはいかない。

この体は、母にもらった大事なものののに。

それに、傷がついてしまったら、またアリスが心配する。

「お、落ち着いてください。私はあなたに何もありません。悪意もありません」

「無表情で言われても、説得力などない！」

どうすればいいのだろう？

東野の気持ちも理解できないわけではない。この人はきっと、一人になることが怖くて、一人になってしまいう原因を自分に帰結したくないから、私をこうして攻撃しているのだろう。ならば、一人でないことを示してあげれば大人しくなってくれるだろうか。

「あ、あなたは、一人ではありません」

「何を知った風なことを！」

「きつとこの幻想郷には、あなたと気が合う外来人がいるはずですから」

「そのばしのぎの言い訳をするな！ ああ、本当に、お前を見てるとイライラする！」

私は説得を諦めた。私では、言葉が足りなかった。なぜ、私はこうも上手く言葉を運用できないのだろう。

もう、この人は私の言葉を聞かないだろう。全身の力を抜いて、私はただされるがままにされる。少しだけ、楽になる。

見たところ、東野はここにくる前まではごくふつうに働いていたはずだ。今こうして私の胸ぐらをつかみ、そして首がしまっていることに気付かないのも、今まで喧嘩などしたこともなく、加減をしないから。ならば、私が気絶すれば、殺してしまったと思うはずだ。いくらなんでも、その時点で我に帰ってくれるはず。

「……」

どさりと、私は地面に落ちた。硬い地面にお尻が当たって痛かったけど、首を締められるよりはるかにマシだった。

東野の方を見ると、二体の人形が彼の腕を押さえつけていた。動かしているのは、もちろんアリスだった。

「あなた、人の妹を殺そうとするんじゃないわよ」

「う、うるさい」

「因果応報。死ね」

槍を装備した人形が一体、東野の前までふよふよと浮く。いくら小さいと言っても凶器は凶器。あんなので首なり心臓なりを刺せば、死んでしまうだろう。死なせるわけにはいかない。

なぜか保護しているはずのモコウは見て見ぬ振りを決め込んでいるし、私がやるしかない。

私は東野と槍人形との間に入って、東野をかばうように両手を広げた。

「どいて」

「殺さないで」

アリスはため息をついた。

「なんでよ？ あなた、後ろの彼に殺されかけたのよ？」

「この人は私を殺せない」

「根拠は？」

私は後ろを振り向いた。東野は私がなぜかばうのか理解できないようで、呆然と私のことを見ていた。アリスの方を見て、私は自分が考えていたことを伝える。

「この人は戦闘はおろか殴り合い一つ経験したことがないはず」

「だから？」

「あのまま首を締め続けたところで、私が気絶した時点で殺したと思っ
て手を離す」

「……ま、そうかもね」

アリスはそう言ってくれた。ほっと、私は息をついた。

「でも、そいつ、それでは納得しないみたいよ？」

アリスに言われて、後ろを振り向く。

「私をそんな風に見ていたのか。大人をなめるのも大概にしろ」

「……私、あなたを守ろうと」

「うるさい！ お前のようなガキに守られんでも、私は一人でなん

とかなった！ 勝手なマネをするな！」

この人は何を言っているのだろう。何か勝算でもあるのだろうか。私が恐れずに槍人形の前に出てこれているのは、アリスは私を守るために力を振るってくれていると信じているからだ。もしアリスが敵なら、私は全てを投げ出してでも命乞いをするだろう。

この人は、勝つつもりなのだろうか。勝てるつもりなのだろうか。

「……戦うつもりなの？ アリスと？」

「なぜそんな目で見る！ 大人をなめるな！」

「もういいかげんにしろよ、康介」

今まで傍観していたモコウが、ようやく口を開いた。東野はモコウの方を見た。モコウは東野の目を見て、それから嫌味たっぷりに嘲笑った。

「お前、ほんとに滑稽だな」

「な、何が」

「元の世界でのプライドか？ おーやだやだ。偉いさんになると、自ら命を捨てても守るべきプライドがあるんだねえ」

「何を言っている！？」

東野にまるでとりあわず、モコウは私を見た。

「どいてやれよ」

「でも、どいてしまったらこの人は死んでしまう」

「別にいいだろ。こいつ、お前の家族か？」

私は首を振った。この人が私の家族かと思うと、吐き気がする。

「じゃあ、ほっとけよ」

「私はもう人の死体を見たくない」

モコウは深くため息をついた。

「気持ちはずげーよくわかる。ホント、痛いくらいにな。

でも、割り切れよ。いや、そりゃ最初は無理だろうよ。でも、一回だけだ。一回、敵が死ぬのを見逃すだけでいいんだよ。な？ 目を閉じて、一歩下がれ。そうすりゃ、お前の敵はいなくなる」

「ここを動いて、そしてこの人が死んだら、私が殺したようなもの」

妙に優しいモコウが気になったが、構わず私は続けた。

「……あのな。殺すのはお前じゃねえ。アリスだ」

「なら、なおさら。私は家族に人を殺して欲しくない」

「お前のためだぞ？」

「それでも」

私はアリスを見た。アリスは呆れ返った様子で私を見た。

「アリスお姉ちゃん、お願い。この人を見逃してあげて」

「……あなたは、それでいいのね全く、お人好しね」

頷く。槍人形と東野を拘束していた人形がアリスの元へと帰って行く。

「だいじょう……」

後ろを振り向くと、東野が私を捕まえようと、両腕を広げていた。それから私は精一杯抵抗しようと思ったけれど、身動きを取る前に捕まっていた。腕を首に巻きつけるようにして回されているため、私は動けない。こんな状態では、何もできない。

「ははは、さようならだ康介。ホント、濤に感謝だよ。クズと行動することになりかけた」

モコウの手のひらから、煌々と燃える拳大の火の玉があった。

「ち、近づくな、私に手を出すな！ こ、この娘がどうなってもいいのか！」

「お前、自分が燃え尽きる前に祈る以外の何かができるとでも思っ
てんのか？」

モコウは火の玉を東野にぶつけようと、思い切りふりかぶった。

「待って、妹紅」

「なんだよ。お前も濤と同じ考えか？」

「違うわ。万が一にも濤に引火したら、濤が死ぬわ」

「……は？」

アリスは私の能力のことを言っているのだろう。私は知らない振りをするしかない。

「とにかく、濤に全く当てない自信があるなら、やってちょうだい」

「いや、無理だし。髪ちよつと焼いても大丈夫だよな、って言うおもうと思ってたんだが」

「女の命に何するつもりだったのよ、全く。で、どうやって始末する？」

アリスとモコウはまるで冗談でも飛ばしあっているような雰囲気では会話する。私は別に構わないのだけど、東野は違うみたい。

「お、お前らふざけるな！　い、いいか！？　私が逃げるまで手を出すなよ！？」

「とか言ってるけど。……やっぱり私がやるしかないわね。死になさい」

アリス後ろから魔方陣が現れ、そこからいくつもの人形が出てくる。それは全て凶悪な武器で武装されていた。

「アリスお姉ちゃん」

「すぐ助けてあげる。目を閉じて」

……さすがに、連れ去られたら何をされるかわからない。ここは、割り切るしかないのだろうか。

自分の命と東野の命、どちらを優先させるべきだろうか……。

私には、ついに判別がつかなかった。だから、黙った。アリスに任せることを選んだ。アリスの言うとおりに、私は目を閉じた。

「よし、よく選んだわ、漑」

ひゅんひゅんと周りに何かが飛ぶ音がする。これで、私は十字架を背負うことになるのだろうか。

そう思っていたら、ぐい、と思い切り首が締まって、振り回されるような感覚がしたあと、お腹に突き刺さるような痛みが走った。

目を開けて、疑問に思う。どういうことだろう。なぜ私は、アリスの人形に刺されているのだろうか。

「は、はははは！　私ではない、お前が刺したのだ！　こ、これであつただろう！　わかつたら、私に手を出すな！」

アリスの人形の動きが止まった。そうか、私は盾に使われたのか。なんてふがない。私の存在が、アリスの枷になっている。なぜ、

私ごと攻撃しないのだろう。決心がつかないのだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に構わず」

「……」

アリスは何も言わず呆然と立っていた。なぜ。どうして今、何もしてくれないの。

ゆっくりと、アリスと私の距離が遠ざかる。そして、離れる速度はだんだんと早くなってくる。

「……助けて」

アリスの姿が完全に消える直前、私はアリスの方へと手を伸ばした。

星をつかもうと夜空に手を伸ばしているような気分になった。

アリスはきつと、私を探してくれる。もし切り捨てられたら、その時はその時だ。

連れ去られている最中も、私は考えることをやめない。

どうやって逃げ出すか。力では及ばない。脚力も相手の方が強い。思考力も、何もかもが私の上を行く。そんな大人から、一体どうすれば生き延びられるか。

私はそんなことをかんがえながら、ただ連れ去られるがままに身を任せた。無駄に抵抗して殺されるわけにはいかないのだ。

殺されさえしなければ、生きて帰れさえすれば、それでいい。

私は、必死に逃げ出す東野を見た。

その顔は怯えと恐れに染まっていた。それは、今こうして人質になっている私の心境と非常に良く似ていた。

壊れた大人と私

竹林の中にあった小さな洞窟に、東野は入り込んだ。入り口は狭く、入る時に私の服の一部が裂けてしまった。パジャマじゃなくてよかった、と一瞬だけ思った。

東野は私を洞窟の奥の方に放った。ゴツゴツとした岩肌にお尻をぶつけた。小さい穴のあいたお腹とお尻が痛いけど、それ以上に、怖かった。

この洞窟はとても小さく、どんなに大きく見積もっても四畳は超えないだろう。湧き水がどこから染み出しているらしく、壁の岩は全て濡れていた。土臭い匂いがして、むせそうになる。明かりは東野がいる入り口から注がれる光だけ。

こうして入り口を塞がれては、どうあっても逃げられない。

後ろを振り向くと、行き止まりだった。つまり、私はアリスが助けに来るまでこんな狭い場所で東野と二人きり。

「ま、全く。バカな女だ。ははは、私を、誰だと思ってる……」

そう言うと、東野は入り口に座った。逃がすつもりはないらしい。私はひたすら黙っている。今、私の命を握っているのはこの人。機嫌を損ねて殺される羽目にだけはなりたくなかった。

「にしても、あの二人、美人だったな。ふふふ……」

彼の頭の中では、一体どんな想像が繰り広げられているのだろう。絶対に知りたくない。

「……お前も、中々。まだまだ子供だが、将来性はある」

「なんの、話をしているの」

品定めするかのような東野の物言いに、私はつい、口を開いてしまった。

「教えてやろうか？」

失敗した。

東野は腰を上げ、私に近づいて来る。目がおかしかった。据わっ

ていて、頬も妙に赤い。スーツのネクタイを緩めると、ゆっくりと私の肩に触れた。

「……わ、私は、まだ子供」

「知ってるよ。大人にしてやるよ」

ダメだ。早くなんとか切り抜けないと、取り返しのつかない事になる。

「近づかないで」

にじり寄ってくる東野は、止まらなかった。

この人はきつと、命の危険が迫って、理性よりも本能の部分が思考の半分以上を占めているのだろう。だから、私のような子供にすら、欲情するのだ。状況判断力も鈍っている。ならば……どうする。何かを言う？ 何を言っても無駄だろう。むしろ、余計に煽るだけかもしれない。

何かをする？ 大人相手に何をしろと。

服を脱がそうと迫ってくる手を見つめながら、私は思考する。

このままあえて、汚される。それならば、あるいは。少なくとも、その間は殺される心配はない。ない、が……。

「この期に及んで、まだ眉一つ動かさないのか？ 何もしないとも思っているのか？ 大人だから、子供を守るものと、本気で思ってるのか？」

違う。大人は子供を守ろうとはするが私を守ろうとはしない。

「……やめて」

私の服がはだけさせられる。上半身の全てをこの人に晒してしまふのが、気持ち悪い。このまま私は、一生ものの記憶を、植え付けられてしまうのだろうか。そんなのは嫌だ。この男が私の最初で、そして一生残るなど、気持ちが悪くて仕方がないだろう。

「ふん、本当にそう思っているのか？ 嘘の塊だな、お前は」

なんとかしなければ、早くしなければ私は、知りたくもない痛みを刻まれる。

そうだ。私に手を出さなければまだ命だけは助けてくれるかも、

ということを伝えれば、躊躇してくれるかも。

「し、死にたくないでしょ」

「ん？ ああ、そのことか。もういいんだ」

私は思考を止めてしまった。

「私は、あの二人に殺されるだろう。ここだってどれだけばれずに済むかわからない。だから……」

私は耳を塞ごうとする。私の両手が東野に押さえつけられ、岩肌に取り付けられるような格好になる。まるで押し倒されたかのような感覚だった。向こうももちろん、押し倒してる感覚なのだろう。

「だから、最期にお前の悲鳴を、お前が表情を歪めるところを見たい」

ダメだ、諦めよう。

ここまで強い決意を揺るがすほど強い言葉を私は知らない。私は言葉を発するのをやめ、全身から力を抜いた。今の私はただの人形のようなものだ。

抵抗をやめた私を、東野は好き勝手にいじる。下の服に手が伸びようとしたとき、東野が凄いい勢いで振り向いた。

「な、なんでこんなに早く」

「ここは、私の庭だ。ほら、濡を出せ。今なら命だけなら助けて……」

東野が慌てて私を左手だけで思い切り抱きかかえ、首を掴んだ。

モコウとアリスがショックを受けたように目を見開いているのが見えた。首が痛くて苦しいけど、もういい。

「……何をした？」

「は、はははははは！」

東野はただ笑った。ついに精神に異常をきたしたのだろうか。

「この娘に大人の恐ろしさを心の底まで刷り込んでやった！ これ以上この娘に何かしてほしくなければ、私が逃げるのを」

「……」

モコウはやれやれと首を振った。それとほぼ同時、肉が焦げる嫌

な匂いがした。その直後、私は解放された。

「ぎゃあああ!？」

「わかってねーな。ほんと、わかってねえよ」

東野の方を見ると、彼の右手が炎に包まれていた。それはやがて、腕全体に燃え広がっていく。

「もうお前、死ぬしかねえよ」

苦しそうに叫ぶ東野の叫びが、耳に障る。

「漣!」

アリスに抱きしめられて、東野から引き離してくれた。東野についた炎は全身に広がり、彼の全てを焼き尽くそうとした。

「ま、待ってモコウ」

私は彼女を止めようと口を開いた。

「ダメだ。こいつは燃やす」

「殺さないで」

「アリス。先永遠亭に行つてろ。あんまりこういうのガキに見せんな」

私の言葉は、届かなかった。

でも、届いてくれなくてよかった、と思う私もいた。

「わかった」

アリスは私を抱きしめたまま、空を飛んだ。浮遊感が少し嫌だったけど、アリスに抱き締めてもらえて、凄く安心する。

「大丈夫よ、漣。永琳はすごく優秀な医者だから、何も心配はいらないわ。大丈夫」

「……ありがと、アリス」

疲れた。久しぶりに悪い大人に攫われたから、妙に体力を消費した。何も感じなければ、こんな風に思うこともないのだけれど。なんとかして感じずにいる方法はないだろうか。

「ちよっと眠るね。疲れちゃった」

「ええ。ゆっくり眠りなさい」

アリスに了解をもらうと、私は目を閉じた。

意識がおちる寸前まで、迫る大きな手と、東野が燃える姿が瞼の裏に浮かんで離れなかった。

古い記憶と私

目が覚めると、アリスの顔があった。心配そうな表情になっていた顔は、私が目を開けたことで嬉しそうな表情に変わった。

「おはよ、漣。気分はどう？」

「おはよう、アリスお姉ちゃん。身体的には問題ないと思う」

お腹をさすって見たが、痛みは感じなかった。真新しくなっている入院服を捲り上げてお腹を見ると、傷一つなかった。

「エイリンは？」

「ここは私の家よ。傷が完治したんで、帰ってきたの」

そういえば、ここは永遠亭とはかなり作りが違う。全体的に木製だし、壁の上の棚やベッドの小物入れのところには大小様々な人形が大量に置かれていた。

「そう」

私は体を起こした。アリスが優しく手で体を支えてくれようとするけど、私は首を振った。ありがたいけど、自分でできることはする。

「……ごめんね、漣」

「何が？」

私は首を傾げた。何か私は、アリスに謝られるようなことをされたのだろうか。

「その、お腹、刺しちゃって」

「そのこと。気にしないで。悪いのは、アリスお姉ちゃんじゃないよ」

東野は……死んだのだろう。私は一つの命を見殺しにした。そして、彼が死んでよかったと思う自分が、許せない。

「……ありがとう、漣。その、それからね、あなたが東野にされたことなんだけど……」

あわあわと言いにくそうに、アリスは切り出した。そういえば、

私は東野に汚されたことになっていたのだったか。なぜ彼はあんなことを言ったのだろうか。

……死にたかったのだろうか。よくわからない。

「その、あれは……」

「知ってるよ、大丈夫」

「大丈夫って……」

「何もされなかったから」

私は真実をアリスに告げた。アリスはぼかんとして、聞き返してきた。

「な、何も？ でも、あいつは……」

「最後の彼は様子がおかしかった。……でも、間一髪だったのは事実。本当にありがとう、アリス。あなたのおかげで、痛みを知らずに済んだ」

もし、あのままアリスの助けが来なかったら、私はどうなっていたのだろうか。体は壊れ、心も狂い、私は私でなくなってしまったのだろうか。そんな恐れが体を包む。

「そ、そんな。気にしないで。そうか、よかった。まだだったんだ。間に合ったんだ、私は……」

そう呟くように言うと、アリスは私の方に近寄って、両手を広げて抱きしめようとする。

「……」

一瞬だけ後ろにさがろうとして、なんとか自分を押さえる。

アリスは敵じゃない。

そう自分に言い聞かせる。やはり、私の中で東野に襲われたことは大きい事のようにだ。警戒心が変に強まっている。

「本当に、よかった、無事で……」

ゆつくりと、私は抱き締められた。東野にされたみたいに乱暴ではなく、まるでコワレモノにでも触るかのようだった。

おずおすと、私も抱き締め返す。

「……ありがとう、アリスお姉ちゃん」

しばらく、私たちはそうして抱き合っていた。温かくて、やらわらかくて。ずっとこうしていたいような感覚がしてくる。

「滞、私はもう失敗しないから。今度はちゃんと守るから、安心して」

アリスは私から離れて、私の目をしっかりと見てそう言った。

「うん」

私は素直に頷いた。

「ふふ、素直ね。……ふああ」

安心したのか、アリスは手で口をおおい、大きなあくびをした。

「眠いの、アリスお姉ちゃん？」

「ん、まあね。普段なら寝てる時間だから」

私は周りを見回して、時計を探す。いくら探しても、時計らしきものはこの部屋に一切なかった。

「ああ、正確な時間は知らないわ。日が落ちてからどれくらい経ったか感覚で判断してるだけだからね」

「時計なくて、不便じゃない？」

アリスは小さく笑った。

「ぜーんぜん。そもそも私時計がいるほど正確な時間必要としてないし」

そんな人がいるのか。私は驚いた。

でも、確かに学校や仕事など、正確な時間が必要である場所に所属していなければ、正確な時間はなくても生活に困らない……のだろうか。

「じゃ、私寝るから、もうちょいスペース空けて」

「え、うん」

私はそう言われて、アリスがいる方とは反対側に少し移動する。

アリスは部屋の明かりを指を鳴らすだけで消すと、私の隣で横になった。ベッドは確かに広めだけど、まさか一緒に寝るなんて思いもしなかった。

「アリス、私床で寝る」

「気にしないの、ほら布団」

「あ、ありがとう」

アリスに掛け布団を被せてもらう。

アリスに迷惑ではないだろうか。やはり、どいた方がいいのだろうか。

違う。私は自身で自分の考えを否定した。

私は怖いのだ。誰かと同衾することが。何をされるのか、何があるのか、どうなるのか、わからなくて、怖いのだ。

アリスは女性だ。そんなことはわかっている。それでも、私は記憶の中の誰かとアリスを重ねてしまう。そんなのは、絶対に嫌だった。

「あ、アリスお姉ちゃん、怖い」

「どうしたの？」

「ごめん、アリスお姉ちゃん。ごめんなさい。私、誰かと一緒に眠るのが怖い」

抱きしめようとしてくれたアリスの手が止まった。

「……詳しく、話を聞かせてもらってもいい？」

頷いて、私は口を開く。誤解されてはいけない。アリスが嫌いだから一緒に眠れない、だなんて思われてはいけない。

「私、あまりよく憶えてないのだけれど、何かがあったみたいで、何故か、誰かと一緒に眠ると怖くて怖くて仕方がなくなるの。アリスお姉ちゃんのことを嫌いなんじゃないの。大好きだから、嫌いたくないの。それだけはわかって。お願い」

私は精一杯、言葉を尽くした。嘘は何一つ言っていない。

信じてくれるだろうか。

「そうなの。……それは、ごめんね。わかったわ、あなたがここで眠りなさい」

「でも、ここはアリスお姉ちゃんの家だし」

「いいのよ。何かあったら、呼びなさい」

私が止めるのも構わず、アリスは立ち上がって部屋を出ていった。

しまった。

……嫌われたかな。一人で布団をひっかぶり、目を閉じる。
アリス、ごめん。大好き。

私は眠りに就いた。それから、夢を見た。

元いた世界の夢だった。

今と同じように、私が眠っている。その隣に、美しい女性……母
と一緒に眠っていた。

「ねえ、滞」

「なあに、ママ」

そうだ、この時の私はまだ無知で、滅多に帰ってこないお父さん
と優しくて美人の母の言うことを聞いていれば全とうまくいくと、
心の底から信じていた。母も、お父さんも、滅多なことでは話しか
けてすらくれなかったけど、そう思っていた。

「あなたは、私と一緒にいたい？」

「うん！ ずっと、ずうっと一緒にいたい！」

「そう……」

ああ、思い出した。この夢は、あの時の記憶だ。忘れていた、私
の過去の夢だ。なぜ今更思い出してしまおうのだろう。

「じゃあ、一緒に行きましょう？」

「どこへ？ おでかけ？」

母が頷くのが見えた。電気が消されて、母が何をしようとしてい
るのがよく見えない。

「とっても、いいところよ」

「！」

この時の私は、息が詰まるのを感じていた。今なら、紐で首を締
められているということがわかっただろうに。

「な、なに、を……かはっ。何をするの、ママ？ やめてよお……」

「大丈夫よ、滞。すぐ楽になるから」

あの時は、何を言われているのか理解できなかった。どんどん紐

に込める力が強くなる。意識がぶつりと切れかけたあたりで、ようやく私は殺されようとしていることを理解したのだったか。

「……い、いや……助けて、やめて、ママ……」

「大丈夫、大丈夫よ。何も心配はいらないわ。すぐにママもいくからね。ずっと、ずっと一緒に」

確か、必死で助かろうともがいた記憶がある。首に手を当てて、紐を外そうとするのだけど、できなかったことを思い出した。

ああ、そうだった。この時の母は、私を殺そうとする時に細いワイヤーを使ったのだった。我が母ながら、残酷なことを。

「……い、嫌、死にたくないよお……!」

「!」

この時初めて、私の必死の懇願が届いた。ワイヤーから力が抜け、私はようやく新鮮な空気を吸うことができた。

「ごほっ、がほっ! ま、ママ……。うわあああん!」

私が号泣している隣で、母は自分がしようとしていたことに気付いたらしく、自分の手を見つめてわなわなと震えていた。

「……滞」

泣いてる私に構わず、母はどこかへ行ってしまった。しばらくすると私は泣き疲れて眠ってしまった。どこかへ行った母を追おうとはしなかった。

そして、次の日の朝、目が覚めて、全てを忘れていた私は、いつものようにリビングへ行き……。

吊り下がって揺れる母を見つけた。

「!」

私は飛び起きた。そうか。

私がアリスと眠ることを恐怖したのは、母と重ねてしまったからか。

にしても、今日の夢で様々なことを思い出せた。疑問も、同時に湧いてきた。

なぜ母は私と心中しようとしたのだろう。

……考えても詮無いことだ。考えても、気が滅入るだけ。もう一度眠ろう。そうすれば、幸せな夢が見れるだろう。

それから朝まで、私の意識が途切れることはなかった。

二日目の朝と私

眠い。仕方あるまい、と自分を諫める。

「入るわよ、滞」

「どうぞ」

アリスは入ってくるなり驚いた。

「……目充血してるわよ?」

「眠れなかった。おはよう、アリスお姉ちゃん」

私はベッドから降りて、昨日エイリンにもらった靴を履いてそういった。誰かに朝起きておはようと言えたのは、随分久しぶりだった。

「あ、おはよう。眠れなかったって、どうして?」

「夢を見た」

「どんな夢?」

私はアリスのそばまで行くと、アリスを見上げた。昨日と似たような模様の服の上から、エプロンをつけている。料理していたのだろう。

「隣で眠っていた母に殺されかける夢」

「……そう。それは怖い夢ね」

「夢だとよかったのだけれど」

「え?」

なんでもない、と私は首を振った。

「ふうん……。今ご飯できたんだけど、眠いんなら寝とく?」

「いい。朝寝坊の癖がついたら困る」

たとえサボリ気味とはいえ、学校に通っているのだ、早起きの習慣はなくしたくない。

「そ、そう。ほんと、しっかりしてるわね。こっちに朝ごはん用意してるから」

「ありがとう、アリスお姉ちゃん」

隣の部屋に移動したアリスについて歩く。

本当にご飯までくれるのだろうか。申し訳ない気持ちでいっぱいになる。私に何かできることはないだろうか。小間使いの代わりくらいなら、できるだろうか。

「アリスお姉ちゃん、私に何かできることはない？」

「ん？ ……そうね、じゃお皿洗い頼んでもいいかしら」

「もちろん」

私は頷いた。家事くらいなら、私でもできる。掃除、洗濯、買い物に料理に。ここに来るまでは全部一人でやっていたのだ。

「じゃ、ご飯食べてお皿洗いしてもらったら、今日も行きましょうか」

「うん」

アリスは、すでに料理が乗っているテーブルについた。私もアリスの向かい側に座る。木製の皿に、スープのような白い液体が入っている。これが朝食だろうか。アリスが食べ始めるのを見てから、私も食べ始める。

「いただきます」

「……ねえ」

私がスプーンを持ってスープを飲もうとしたところで、アリスが声をかけてきた。何かしてはいけないことでもしたのだろうか。

「ちょっと気になったんだけど、その『いただきます』って何？」

言われて、初めて気づく。そういえば、アリスは食事の前に何も挨拶をしていなかった。この世界では食前に挨拶をする習慣がないのだろうか。もしくは、アリスにその習慣がないか。

「挨拶。意味は知らないけど」

「ふうん」

アリスはそう言うと、小さくいただきますと言った。

「これでいいのかしら」

頷く。

私は食事を始める。何の料理か聞きたいのだけれど、食材を知っ

たせいで食欲が失せるということが往々にしてあるので、知らないまま口に運ぶ。毒ではないはずなので、知らなくても大丈夫……な、はず。

口に含んでしばらく味わう。人肌程度の温度なので、舌が火傷するなんてことはなかった。甘い香りとろとろとした食感で、味も良好。とてもおいしい。シチューではないだろうか、と予想する。

「すごくおいしい」

「お口にあってなによりだわ」

何の料理だろうか。キノコが多めに入っているから、キノコシチュー……なのだろうか。

「何の料理？ 帰ってから作ってみたい」

「あなた料理できるの？」

「一通りは」

「すごいわね」

アリスは感心してくれた。必要に迫られて覚えた事だったが、こうして褒めてくれるのなら、覚えてよかったと思える。

「これはキノコシチューよ。いっぱい作ったから、少なくとも今日はずっとこれだからね」

「わかった」

これが三食か。目の前に出されている分だけだと、昨日一切の物を口にしていない身としては物足りない気もするが、食べられるだけで幸せなことなのだ。我慢しよう。

「おかわり、してもいいのよ？」

「……いい」

「迷うくらいだったらすればいいのに。変に遠慮しすぎよ」

私は首を振った。

「これ以上食べたら、お腹を攻撃された時に吐いてしまうかもしれない」

「攻撃されること前提で物を考えないでよ。……ここ、そんなに危険じゃないから」

そうは言われても、昨日は二人もの人間に襲われた。チルノという氷精を名乗る子供と、東野の二人だ。元の世界でも、一日に二回も襲われることはなかった。

「……ごめん、アリスお姉ちゃん。それでも、私は警戒してしまう」
私がそう言うと、アリスは残念そうに肩を落とした。

「まあ、信じろっていう方が無茶よね。でも、お腹空くわよ？」

「満腹で動けなくなるよりかはマシ」

「ホント、普通の子供とは真逆に考えるのね」

そう言ってアリスは笑った。嘲笑でないことは、アリスの顔を見ればわかった。

「……話を変えるけど、今日はどこへ行くの？」

少し気になって、聞いてみた。

「ん、昨日も通った魔法の森を抜けて、再思の道を越えて、三途の川を渡って、それから裁判所の閻魔に会いに行くわよ」

私は空いた口が塞がらなかった。その行程にはかなりの無理があるようにしか思えなかったからだ。

「え、し、死ぬの？」

「は？ ……あつ、そういえば、そうだったわね。ごめんごめん、勘違いさせたわね」

少し逃げるかどうかを考え始めていた私に、アリスは手を振って否定した。

「え？」

「幻想郷じゃあね、閻魔大王は別に死ななくても会えるのよ」

「……」

会いたくない。閻魔様に会ったら、私はきっと舌を抜かれてしまう。ただでさえ他人よりコミュニケーション手段が少ないのに、言葉まで奪われたら、私は……。

「何心配してるの？」

「え？ 舌を抜かれないか……」

私がそう言うと、アリスは大笑いした。

「あはははは！ 大丈夫よ、澤。その閻魔ルールには厳しいけど、生きてる人に何かする、なんてことないから！ にしても、あなたもそんな面があったのね」

なんだかバカにされてるみたいで、むっとする。

「変？」

「いや、とっても可愛いわ」

「……」

なんだか、もうどうでもよくなった。可愛い、か。初めて言ってもらえたな。嬉しい。

「ご馳走様でした」

キノコシチューを食べ終わると、私は両手を合わせて礼をした。

「それも挨拶？」

頷く。私よりも先に食べ終わったアリスは、遅めではあるが手をあわせ、ぎこちなくご馳走様をした。

「……毎日こんなやつてんの？」

「うん。毎日、毎食」

アリスは煩わしそうな顔をした。

「へえ。面倒なのね、外の世界って。前に来た外来人もやってけど、あいつが特殊なんじゃなくて、外で習慣付いてんのね」

アリスの言葉に、少し気になるところはあった。私の前にアリスのところに来た、外来人。……昨日、レイムはアリスが連れて来た外来人が何かを企てているということを言っていた。もしかして……。

想像だけで物を考えていた私は、かぶりを振って思考をやめた。

決めつけで考えてはダメ。

「どうしたの？」

「え、えっと、シャワー浴びていい？ 浴びたくなっちゃって」

多少無理のある言い訳とは思ったが、アリスは不審に思うことはなかった。

「そう？ その扉を出て右がバスルームよ」

「わかった。浴びて来る」

私は椅子から降りると、言われた通りにバスルームに向かう。

脱衣所も湯船も木製で、そうでないのはシャワーヘッドくらいだった。

脱衣所でパジャマと下着を脱いで裸になると、私はバスルームに入った。バスルームと脱衣所を仕切る扉を占めると、私は驚いた。

ここは森のど真ん中、電気も水も来ているはずがないのに、最新式の電子パネルが備え付けられてあった。

どういう原理なんだろうと思いつながら、ありがたいので使わせてもらう。熱いシャワーを浴びて、体を洗う。昨日東野に触られたところは、念入りに洗った。

「濡。サイズが合うかどうかわからないけど、私が子供の時の服貸してあげる。ここにタオルと一緒に置いておくから」

最後に髪を洗い終わったところで、見計らったようにアリスがそう言ってきた。

「え？ あ、ありがとうアリスお姉ちゃん」

またパジャマを着るつもりだった私にしたなら、それは嬉しい驚きだった。

……でも、いいんだろうか、こんなに色々してもらって。

バスルームを出ると、アリスの言っていたとおりに、タオルの下に着古したような服が置いてあった。下着も一緒だったのは、素直に嬉しかった。お古だとかそういうことは、気にならなかった。

最初私は幻想郷にいる間パジャマと同じく下着をずっと着るしかないと思っていたのだ。まさか、こうして服を着替えることができるなんて。

アリスに渡された服を着て、洗面所にあった鏡を見た。黒い長い髪と、黒い瞳、全く動かない表情をして立っている私は、アリスが今着ている服をそのまま小さくしたような服を着ていた。

なんだか本当にアリスの妹になったようで、とても嬉しかった。

「アリスお姉ちゃん、お待たせ。アリスお姉ちゃんは浴びなくてい

いの？」

大きめのバスケットのような鞆を下げ、出かける準備を終えたアリスに私は聞いた。

「まあね。夜浴びるわ。何か持ち物……なんて、なかったわね。じゃ、準備はいい？」

うん。私は頷いた。

「じゃ、行きましょうか」

自然な動作で手を握ってくれて、さらに私はアリスと家族になったかのような錯覚した。

家を出て、森を歩く。靴があるのとないのとは、大きな違いなのだということを肌で実感した。

幻想郷に来て二日目の生活が始まった。

裁判所までの道のりと私

昨日と同じように森に行く。硬い土を踏みしめ、木々を越えて、アリスは迷わず進んで行く。

「ねえ、アリスお姉ちゃんは どうして方角がわかるの？」

「え、方角？ ……ううん、方角はわからないわ」

私は首をかしげた。方角もわからずに、どうして進めているのだろうか。

「こちら辺は私、よく来てるから。もう道を憶えたわ。それだけよ」

「へえ」

それでも、できるだけすごい。

「ふふ、あなたも見知った道なら地図いらないでしょ？」

「そうだね。それと同じかな」

アリスは頷いた。

「じゃあさ、その再思の道ってどれくらいでつくの？」

私の質問に、アリスはしばらく黙った。

「そうね、だいたい……。日が登り切る前には着くわ。そんなに遠くないわ」

正確な時間は教えてもらえなかったが、わからないのはアリスも同じだろう。

「そうなんだ。ありがとうアリスお姉ちゃん」

私たちはそれからしばらく黙って森を歩く。

昨日、聞きそびれたことがあったのをひとつ、思い出した。しかし、聞いてもいいのかどうか、悩む。

私の手を握りながら歩くアリスを見上げる。綺麗で、優しくて強い私のお姉ちゃん。嫌われたくないし、嫌いたくないのだけれど。

「ねえ、アリスお姉ちゃん。一つだけ、聞いていい？」

「いいわよ」

「東野、どうなったの？」

アリスは黙った。目を閉じて、何かを考えている。

「……漑。あなたは優しい子よ」

「え、あ、うん、ありがとう」

優しくなんかない。私は、東野に死んでいてほしい、って思うような悪い子なのだ。優しいなんて、間違った評価だ。

「だから、言うけど。」

……東野は、死んでないわ」

私が驚いたのは、嬉しかったからか、怖かったからか。わからなかった。

「え？」

「そりゃ、酷いことされかけた漑からしたらあいつが生きてるのは居心地悪いかもしれないけど、大丈夫よ。あいつ、二度と悪さできないから」

そうは言われても、不安ではある。また、襲って来たら。今度、私は助かることができるのか。最後の最後、彼は私に興味を持っていた。もしかしたら、というのものもあるかもしれない。

「……どうしても、っていうなら、妹紅のところに私が出向いて、その」

「いい。……私は大丈夫。東野が生きていても、気にしない」

私は言いにくそうに言葉を濁すアリスに無理をして言った。本当なら、殺してと言ってしまいたかった。でも、それをすればそれこそ本当に私は十字架を背負ってしまうことになる。そうなれば間違はなく、東野は私の中でずっと残り続けるだろう。そんなのは、ごめんだった。

「そう。ありがとうね、漑」

「教えてくれてありがとう、アリスお姉ちゃん」

私は精一杯の感謝を込めてそう言った。表情が動いたのなら、どんな顔になっているだろうか。

「ねえ、再思の道ってどんなところなの？」

「三途の川と地獄を結ぶ長い道よ」

「ふうん」

三途の川、か。渡っていたら死んでしまったりして。

……いや、あるいは、もう私は死んでいるのかも。アリスはちょっと変わった死神で、私に同情してしまい、こうして家族ごっこを続けている。本当なら、巨大な鎌で私の魂を刈り取らなければならぬというのに……。

そんなストーリーが頭に浮かんだ。

「ねえ、アリスお姉ちゃん」

「ん？」

「私、実は死んでて、ここはあの世、ってことはない？」

アリスは否定も肯定もしなかった。なぜだろう。

「……なんとも言えないわね」

「どうして？」

「前に、自分が死んでた事に気付かずここに来た人がいたことがあったから……」

私も、そんな人間の可能性がある、ということか。

死んだと気付かず、存在しない体を守るため、必死になる人間は、さぞかし滑稽だろう。笑い話にすらなるかもしれない。

「アリスお姉ちゃんは、どう思う？」

「あなたなは生きてるわ。保証する」

アリスの言葉がきっかけで、私は思い出した。……よく考えたら、私は足を切ったり腹を貫かれたりしたではないか。痛みも感じた。それは何よりの、生きている証拠であろう。……痛みを感じたことを喜ぶなど、変な私。

「そう？　なら、信じる」

私の中ではもう結論が出ていたけれど、そう言った。このことだけじゃなくて、私がアリスに何かを騙されている可能性は、否定しきれないけど。

……まあ、別にアリスになら、騙されてもかまわない。割と本気でそう思う。

「ふふ、とっても嬉しいわ」

アリスは笑ってくれた。私に本当の姉がいたら、こんな感じなのだろうか。

「ねえ、アリスお姉ちゃんには、妹いる？」

「ん？ あなたがいるわ」

「本当の妹」

アリスは寂しそうに首を振った。

「いないわ。……そういえば、ちょっと気になったことがあって」

「何？ なんでも答えるよ」

こちらからばかり聞くのもどうかと思っていた矢先、アリスがそう言ってくれた。

「あなた、普段は……どうやって生活してるの？」

「……普通に」

「でも、ご両親二人ともいないんでしょう？」

昨日も交わしたような質問だった。私は昨日はぐらかすような答え方をした。しかし、今は違う。今は、ちゃんと答える。

「ううん。母がいないだけで、お父さんはまだ生きてる」

「え？ ……でも、昨日は」

「昨日は、お父さんは病院に連れて行ってはくれないという意味」
後付けだけど、嘘をついていました、よりは遥かにマシだと判断した。

「……ふふふ。隠さなくても大丈夫よ。昨日はまだ、警戒してたんでしょ？」

「アリスお姉ちゃん。私は、あなたのことが嫌いなんじゃなくて」
「わかってるわ」

必死で言い訳を始めた私に、アリスは微笑んでくれた。

「警戒心があるのは悪いことじゃないわ。出会ってばかりの人に家庭の事情を話せ、っていう方が無理よ。だから、気にしないでいいわ」

そう言ってもらえて、私は安心した。

「ごめん、アリスお姉ちゃん。でも、今度はちゃんと話すから」

「辛いのを無理に話さなくていいのよ？」

大丈夫。私はそう言っ、何から話すかを頭の中で整理してから、口を開いた。

「私のお父さんは、物凄く偉くて、物凄く働いてて、物凄く稼いで、私にたくさんのお金を贈ってくれるの。」

お父さんは、いないのと同じもの。でも、世界で一番愛してる。きっと私は、お父さんがいるから、元いた世界に帰りたいんだと思う」

「お金って……。もっと他にあるでしょ？」

「ない。でもいい。」

お金が、私とお父さんとの愛の証。見えない、あやふやなものでなく、愛を形にしてる。毎月、お父さんはたくさんのお金を贈ってくれる。一度計算してみたけど、毎日山のように食べて、遊び倒してもまだ余るくらいにお金をくれる」

「いや、お金のことはもういいから、他の」

「それが、お父さんが私を想ってくれているという証拠。だから私は、お父さんの愛を無くしたくないから、ギリギリで生活していた。毎日、五百円に食費を抑える。光熱費、水道代、削れる所は全部削って、お父さんの『愛』を残せるだけ残す。いつか、数えきれないくらいの『愛情』を集めて、会いに来てくれたお父さんにどれだけ私がお父さんを愛したか、わかってもらう。きっとそうすれば、お父さんだって私と一緒に暮らしてくれる」

「いや、あのね、滯」

「お父さんは私のことを愛してくれてる……はずだと思う。一緒に暮らしてくれないのは、きっと母を思い出してしまうから。だから、きつといつか、私を認めてくれれば、多分、一緒に暮らしてくれるはず」

「滯」

話し終わった私に、アリスが話しかけてくれた。

「……あなたの想いはよくわかったわ」

「わかってくれた？」

私はうれしくなる。やっと、私達の愛を理解してくれる人が現れた。やっぱり、アリスは優しいな。

「ええ。ごめんなさい。私、気付いてあげなかった。あなたは、まだまだ、子供だったのにね」

「私は、一度も大人になったことないよ」

「ごめんなさいね、滞。元の世界に帰れば、あなたは、暖かいご飯が用意してあって、ご両親が迎えてくれると勝手に思ってた。だから、今こそ言うわね」

アリスが、私の手をしっかりと、握りしめてくれる。

「私とずっと……いえダメ、まだ、速いか……。帰りたくなかったら、言いなさい」

「え？」

「だから、もし元の世界に帰りたくなかったら、私に言いなさい」
アリスは奇妙なことを言った。

「なんで？ 私、絶対に帰るよ？」

そう私が断言すると、アリスは残念そうに首を振って、小さく、本当に小さく何かを呟いた。

「こんな家庭で育って歪まないはずがないじゃない。……なんで気付かなかったのよ、私のバカ」

私には聞こえなかったけど、アリスの顔は悔しそうだった。

「どうしたの、アリスお姉ちゃん」

「なんでもないわ。……さ、もうすぐ森を抜けるわよ」

森の木々が晴れ、私の視界は一気に広がった。地平線の向こうまで続く長い道の周りを、赤々しい彼岸花が咲き誇っている。そんな道を、私とアリスは行く。

「ここが、再思の道？」

アリスは頷いた。ここまで綺麗な道を歩くのはどこか気が引ける。
「ええ。ここは本来、死にたがりを思い直させるための道なのよ」

「……」

死にたがり……。自殺志願者か。気持ちはわからなくもないが、ある命を自ら捨てるというのはやはり、理解に苦しむ。

「あなたは？」

「？」

「あなたは、死にたい？」

アリスは奇妙なことを聞いてきた。

私は首を振って答えた。私が、死を望んでいる？　あり得ない。

「そ、そう。変なこと聞いてごめんなさい」

アリスは慌ててそんなことを言った。

「アリスお姉ちゃんは？」

「え」

「アリスお姉ちゃんは、死にたいって思ったこと、ある？」

アリスは否定も肯定もしなかった。なぜだろう。

「……興味ある？」

「何に？」

「人が死に関してどう思ってるか」

興味。ないわけでは、ないだろう。けれど、こんな質問をする、ということとは、アリスとしては聞かれない部類の質問なのではないだろうか。

「あるよ。でも、アリスお姉ちゃんが嫌なら、言わなくていいよ」
アリスはクスリと笑った。

「ふふ、ありがと。滯は、本当にいい子ね」

「そんなことないよ」

私達はそれきり、しばらく黙って歩いた。

彼岸花が綺麗。道の脇を固めるようにして咲く花々は不思議で、本当に死者の国に来たみたい。

「ねえ、滯」

「なあに」

「あなたは、お父さんのこと、好き？」

私は首を振った。

「愛してる」

何よりも、誰よりも。

「……そう」

アリスはそういうと、何も言わずに歩く。私も疑問を口に出さず、アリスと手を繋ぎながら歩く。

しばらく変わりばえのしない道を歩いていると、前の方から女の人が歩いて来た。

「ん？ ……アリスじゃないか！ どうしたんだ、こんなところに！」

その女の方は、ほとんど一瞬、いや、一步でこちらのすぐ前まで来た。

「あなたのところの閻魔に用があつて来たのよ」

「へえ、映姫様に？」

アリスは頷いた。構わず歩いているのだが、その女の方は私達について歩いている。

女の方は着物のような古式ゆかしい服装で、腰には大量の古銭を吊り下げ、手には大鎌。髪の色は赤みがかっていて、眼光は鋭い。チャキチャキの姉貴風、といえはわかりやすい……のだろうか。

「小町、あなたこそ何の用？ 仕事はいいの？」

「いいんだよ。最近外界から裁判所に来ることが多くなってな、あたしは商売あがったりさ！ ま、困るかそうでないかといえば、困らないんだけどね！ あはははははははは！」

コマチ、という人は豪快に笑った。ひとしきり笑ったあと、ようやく私の方に視線を向けた。

「うん？ アリス、こいつ誰？」

「漚よ。ほら、漚、自己紹介」

アリスに促され、私は口を開いた。

「私はミオ・マーガトロイド。外来人で、幻想郷にいる間だけアリスお姉ちゃんの妹にしてもらいました。よろしくお願いします」

私は簡単にそう言うと、軽くおじぎをした。

「へえ、よくできた子供じゃないか。あたしは小野塚小町。三途の川の舟守さ」

三途の川……。舟で渡るのか。知らなかった。

「にしても、お前、死にたいのか？」

「どうして？」

「いや、普通の子供は地獄になんて行きたがらないからさ。もしかしたら、って思ってたな」

確かに、私だってアリスがここに用事がなければ来たいと思わなかっただろう。

「私は、死にたくないから」

「そりゃ重畳。一つしかない命、粗末にすんなよ」

「ありがとう、コマチさん」

「小町でいいよ」

そう言いながら、コマチは快活に笑った。

「そうやって諭してると、死神っぽいだけだね」

「うるさい、あたしはいつでも模範的な死神さ！」

「どの口が言うのよ……」

アリスは笑っているけど、怖くはないのだろうか。この人は、死神を名乗っているのに。

私の怯えを、コマチはいともたやすく読み取った。

「うん？ 滯、あんたあたしが怖いのかい？」

「……ごめんなさい」

私が謝ると、意外にも彼女は嬉しそうに笑った。

「気にすんな！ こんなでも怖がってもらえるんだな！ いやあ、アリス、本当にこの子はいいい子だな！」

「あのね。もうちょっと弁明しようとは思わないの？」

アリスが言くと、コマチは何かに気付いたような顔をした。

「ま、怖がらせるのは悪いよな。滯、あたしは死神だけど狩る方じゃない。運び屋さ」

「……そうなの？」

私が聞くと、コマチはニカリと笑った。

「おおよ！ その証拠を見せてやる！ ……アリス、目的地は映姫様んどこでいいんだな？」

「まあ、送ってくれるってんならありがたいけど」

「おっしゃ！」

そうコマチは嬉しそうに言うと、死神の鎌を振り上げ、遥か遠くを見つめた。

「滞、これがあたしの……力だ！」

ヒュカ、と地面に鎌が突き立った。が、特に変化は見られない。

「さ、一步踏み出しな。そうすれば、あたしの力の凄さがわかるよ。じゃあね、滞、アリス」

そこにいて、これからもかなり歩かなければならないのに、コマチはまるで目の前に目的地があるかのような口ぶりだった。

「ありがと。じゃあね」

アリスは一步踏み出した。すると、消えた。

「……アリスお姉ちゃん？」

「ほら、あんたもついて行くんだよ！ 死神妙技、名付けて縮地！ とくと味わいな！」

「それは仙人の……」

言葉を言い切る前に、私はコマチに押され、一步進んだ。すると、景色は一変していた。花の咲き誇る美しい道から、荘厳な裁判所の入り口まで、一瞬で移動していた。後ろに下がっても、また景色が一変する、ということとはなかった。

裁判所の前で待っていたアリスの前まで駆け足で行く。

「すごいでしょ、小町の能力」

私は頷いた。本人は縮地と言っていたが、それとはまた違うような気がした。

「さ、三時間ほど短縮できたわね。運がよかったわ。さ、映姫に会いにいくわよ」

そう言うとアリスは裁判所の扉を開けた。

「……え」

その向こうには、驚くべき光景が広がっていた。

愛するお父さんと私

裁判所の中は、テレビで見たようなものとほとんど変わらなかった。違うのは、裁判官が座る場所と、証言台しかないこと。弁護人が座る場所も、検察が座る場所もない、奇妙な裁判所だった。

今はそこにスーツを着た男性が立っており、口うるさく何かを言っている。その言葉を黙って聞いているのは、小さな、私くらい女の子だった。頭に偉そうな冠をかぶって、手には錫を持っていた。「アリスお姉ちゃん、今審理中だよ、いいの？」

「……難しい言葉知ってるわね。いいのよ。黙って聞く分にはあいつ何にも言わないから」

おもちゃを見つけたような顔をしたアリスは、裁判所の周りを囲うようにして設置されている傍聴席の、裁判官と証言台に立っている人とがはっきり見える席に座った。私達以外に、傍聴している人はいなかった。

「ほら、滯。ここ座って。どんなヤツがどんな言い訳してるか聞きましょう。面白いわよ」

私は黙ってアリスの隣に座ったけど、内心穏やかではなかった。いくらなんでも、趣味が悪いと思ったからだ。人間、必死になれば何でもするし何でも言う。嘘もつくなんて当たり前。それを面白がるなんてことは、私にはできなかった。

「へえ、あいつ面白いわよ、ほら、みてご覧なさい」

そもそも、なぜここはなんのチェックもしないのだろう。ザル警備にもほどがある。

「滯、ほら」

「え？」

アリスに言われて、私は証言台に立つ男性を見た。全然面白くなかった。アリス、どうして、どうして。

「お父さん」

「え？」

ねえ、アリス。どうしてお父さんがここにいるの？

「お父さん！」

私は思わず、叫んでしまっていた。いけないことだと知ってはいたけど、けど。

私が叫ぶと、女の子は私の方を見た。それからお父さんを見て、一言。

「……と、彼女は言っていますが。何か弁明はありますか、ななほし 七星」

私と同じくらいの年の女の子は、私と同じくらい冷たい声色でそんなことを言った。

「お、俺は知らない！ あんな子供も、あんな女も、知らない！」
知らない？ ……知らないって、どうして？ 忘れてしまったのかな。私は、忘れられたから、ここに来たの……だろう、お父さんの口ぶりからすると。

「知らない？ 忘れていた？ ……それは通りません。ならばなぜあなたは……毎月大量の金銭を彼女に送っていたのです？」

「そんなの、愛してるからに決まってる！」

まるで咎め立てるような女の子の言い方に、私はつい、口を出していた。女の子は私の方を見ると首をかしげ、次にアリスの方を見た。

「アリス。説明を求めます」

「私もよくわからないわ。連れ出しましょうか？」

アリスの提案に、女の子は首を振った。

「……その方が、より早く彼に罪の重さを理解してもらえるでしょう。その年頃の娘には辛いでしょうが、いつか知ることです。むしろ、今知らねば永遠に知る機会は訪れないでしょう。」

星空滯。発言を許可します」

私は一度深呼吸をした。大丈夫。お父さんは悪くない。だから、だから大丈夫。

「な、何から説明したらいい？」

「……そうですね。あなたとこの男性の関係について、ですかね」

「わかった、裁判長さん」

「映姫です」

私はきよんとした。

「裁判長と呼ばれるのは相応しくないのでやめてください。映姫、もしくは閻魔とお呼び下さい」

「う、うん、わかった、映姫」

よく考えて。お父さんが悪く思われないように、言葉を紡いで……。

「嘘は、厳罰ですよ」

「……舌、抜かれちゃうの？」

「厳罰です」

エイキは否定も肯定もしなかった。怖くて、全部本当のこと話してしまおうかと思ったけれど、ダメだ、と首を振る。私の舌と、お父さん。どっちが大事ななんて、比べるまでもない。

「私も、お父さんも、愛しあってます。家族として」

嘘は言っていない。そうだ、悪いことなんて、何もないんだから、包み隠さず言えればいいのだ。

「……あなたは、父を愛している。それは誰が見ても明らかです。では、彼はどうか？」

エイキは、お父さんの方を向いた。見ているこっちが凍りそうな、冷たい瞳だった。

「お、おれ、俺は！」

「嘘は、厳罰ですよ」

再び、エイキはそんなことを言った。けど、私に対して言った時よりも数倍、本気を感じた。

「……俺は、そんなガキを愛していない」

私は、何も考えられなくなった。

何も、考えたくなかった。

「お、お父さん？　なんで、なんでそんなこというの？」

「なんでもクソもあるか。あの女が浮気して作ったお前なぞっ！」

浮気。ウワキ。お父さんの言葉を信じるなら、私は、お父さんの子供じゃなくて。私は、要らない子で。

違う。私は頭を振る。

「じゃあ、なんでお父さんは私に『愛』をくれたの？」

「愛い？　んなもん、俺は……」

「毎月、送ってくれた。たくさん『愛』を、毎月、たくさん！」

それが、お父さんが私を愛してるっていう、何よりの証拠じゃないのっ！？」

「そんなもん送ってない！」

「いいえ」

エイキが、鋭く口を挟んだ。

「あなたの送ったお金」

「それがどうした？」

「彼女は、それをあなたからの愛だと、思っているようですね」

エイキの言葉のせいで、お父さんは私を露骨に嫌そうな目で見た。存在すら許さない、そんな、この場にいる誰よりも冷たい目をしていた。

「は、はは。……気持ち悪い」

必死で積み上げていたのに、完成する寸前で崩された積み木を思い出した。いや、あるいは、賽の河原で、ただひたすらに石を積み上げ、あと少しのところまで鬼に崩されたような……そんな感覚が、私の中ででした。

「ど、どうして。私、お父さんのこと、愛してるんだよ？　家族として、お父さんとして。どうして気持ち悪いなんて」

「それが、気持ち悪い。お前は、俺の子供じゃねえ。だから、早く、消えろ」

私は、黙ることができなかった。

「なんで！？　私は、お父さんが帰って来た時のために、必死で、

お父さんからのお金貯めてたんだよ!? お父さん、お願い、気持ち悪いなんて言わないで! 一緒にいて! そばにて!」

言葉を尽くせば尽くすほど、お父さんと私との距離は離れて行く。「なんでもする。どんなお願いでも聞く。だから、お願いだから」これが、本当の気持ち。私の、包み隠さない真実。

「お父さん、私を……愛して……!」

「……断る」

返ってきたのは、拒絶だった。違う。もっと、近くで。もっと、そばに! そうすれば、わかってくれる。わかってくれる……。

私は傍聴席から飛び出し、お父さんのそばまで走る。誰にも、止められなかった。お父さんのそばまで、すぐに辿り着いた。お父さんを見上げる。久しぶりに見たお父さんは随分と痩せこけていて、疲れている様子だった。大丈夫、私が癒してあげれば、何も問題はない。

「お、お父さん。わ、私は、星空滯、だよ。私、私なりにお父さんのこと愛してる。大好き。一緒に暮そう? ね、きっと、疲れもとれる、かもしれないし。」

……だから、愛して、お父さん。娘としてじゃなくてもいいから「黙ってくれ、もう。帰れ。消えろ。……死ね」

視界が、歪んだ。目の前の光景が潤んで、何も見えなくなる。

「……判決、黒。これ以上審理の必要性は認められません。地獄で娘の心を歪めた罪、とくと反省なさい」

「はっ。お前のせいで地獄行きだ。どうしてくれる。ほら、お前も死ね!」

怨嗟の声が、私の心を埋め尽くす。うん。お願いだ。やっと、かけてもらえた言葉だ。叶えてあげたい、かなえなきゃ。

「わかった! 待っててね、お父さん!」

私はとびきりの笑顔をお父さんに向けて言った。

「連れて行きなさい。それから、その娘の保護を頼みましたよ、アリス。それが善行になります」

誰かが扉を開けて、お父さんのことを連れて行こうとする。足音が私のそばまでくるけど、気にせず、私は声をお父さんに向けた。

「待って」

私は、黒装束に身を包んだ人達を止めた。お父さんが、振り返ってくれた。

「お父さん、最期に、抱きしめ……おてて、つないでいい？」

「……好きにしろ」

私はいそいそと、お父さんと手を繋ごうとして、その手が、すり抜けた。

「……え？」

「気付かなかったか？ 俺は、お前のせいで、死んだんだ！ お前も、早く俺を追って死ね。地獄で虐め抜いてやる」

「うん、わかった。すぐに逝くね」

死んでいた。お父さんは、すでに死んでいた。だったら、娘の私も、後を追わなきゃ。それが、私の義務なんだ。お父さんも、そう言ってるし。

「何をしているのです。早く、連れて行きなさい」

黒装束の人達は、一礼するとお父さんをどこかへ連れて行ってしまった。

「……死ななきゃ」

振り向いたところで、女の人……アリスが、私の前に立ちはだかっていた。

「どいて、アリス」

「アリス『お姉ちゃん』でしょうが。どこへ行くの？」

さっきまで、私達の会話を知っているはずのアリスは、なぜかそんなことを聞いてきた。

「死に行くの」

「地獄行きよ？」

「地獄に、行きたいの」

お父さんが、待ってくれてるから。

「あなた、あいつの」

「お父さん！」

私は、思わず怒鳴っていた。

「……あなたのお父さん、なんて言ってたかホントにわかってる？
虐め抜いてやるって言ったのよ！？」

「わかってるよ。でも、それがお父さんなりの愛なんですよ。どんな形であつたとしても、私はお父さんに愛してくれるなら、それでいいよ」

私がそう断言したとき、エイキが私のそばまで歩いてきた。背の高さは私と同じか、私よりも低いくらい。でも、この人は多分私じや比べ物にならないくらい、違う。何もかもが。

「自己紹介がまだでしたね。私は四季映姫。あなたは？」

「星空滯」

私はそう名乗った。すると、エイキが手に持った錫を、私に突きつけた。

「それは、悪行ですよ」

「……？」

「あなたは、この幻想郷では『マーガトロイド』を名乗るとアリスに言ったのではないのですか？」

「でも、お父さんに認めてもらわないと」

私は相手が誰かなど考えもせず、反論していた。

「血の繋がりはないかもしれない。心の繋がりがさえもないかもしれない。ならば、名前だけでも……。その気持ちには、十二分に理解できます。故に悪行ではある罪ではありません」

まるで、学校の先生みたいな口ぶりだった。でも、学校の先生でさえ比べられないくらい、偉いのだろうということは、簡単に理解できた。確かに、一度交わした約束を破るのは、いくら繋がりを確かにするためとはいえ、褒められたことではない。名前などの繋がりがなんてなくとも、死んで地獄に行けば、お父さんから愛してもらえるんだから、何も心配はいらないのだから。

「ごめん、アリスお姉ちゃん」

「え、まあ、いいわよ」

アリスは少し照れた様子だった。

「アリス、よく許しました。善行ですね。滞、よく頭を下げました。これで、先ほどの悪行は帳消し、です」

「ありがとう、エイキ。じゃあね」

「行かせるわけにはいきません」

踵を返して一人になろうとしたところで、エイキに服を掴まれた。
「どうして？」

「自殺は罪です」

「そんなの知ってるよ」

「賢いですね。最近では自らの命は自らの物だという理論から、命を投げ捨てる人間が増えてきています。その中でも、自殺は罪だと理解しているあなたは、十分に素晴らしいです」

話が長い。でも、すぐわかりやすい。エイキの表情からは読めないけど、言葉尻から、私のことを褒めてくれているのだということがわかった。

「ありがとう、エイキ」

「いえ。では」

「それでも、私は死ぬよ」

錫で額を打たれた。軽くではあるけど、痛いものは痛い。

「父に歪められたあなたに、罪はありません。けれど、私は一人の年長者として、あなたを打ちました。思い直してください」

「嫌」

私はキッパリと、言い切った。なぜ悪行ですらないのかは知らないけど、それでも私は死ぬのを諦めたくなかった。お父さんが愛してくれる、最後のチャンスかもしれないのに。

「……アリス。もし、この娘が壊れたとして」

エイキは私の目の前で、そんな風に話を切り替えた。

「な、何を縁起でもないことを……」

「あなたは、この娘が治るまで支えることを約束できますか？」

私、何かされるのかな。少し、不安になった。どう壊されるのだろうか。恐い。

「……当たり前、よ」

「閻魔との約束は、重いですよ。では、滯」

ようやく、エイキは私の方に目線を合わせた。

「あなたの父親は、あなたを愛していません。今までも、これから
も」

「嘘だ」

ピシリと、私の中にヒビが入ったような感覚がした。

「閻魔が嘘を吐くとしても？ ……彼は、いや、あなたは本来ならば
祝福されて産まれる子供だった」

「そうだよ、母は優しくかったし、愛してくれた！」

「幻想です」

私は、何も言えなくなった。私の頭の中が、真っ白になる。

「あなたは、世間一般、特に外界の日本における愛情を体験したことがありません。だから、両親からの虐待を、愛情だと思い込むことができたのです。いくら本や、物語で真実の愛を知っていても、体験したことがなかったから、そんな離れ業ができたのです」

「お母さんからお父さんからも虐待なんてされてない！ 私は、何もされなかった！ 殴られもしなかった、蹴られたりもしなかった、タバコを押し付けられたことも、罵倒を浴びせられたこともなかった、犯されたり、殺されかけたりなんてこともなかった！ 私、虐待されてなんか」

「そうですね。あなたは何もされなかった。料理を作ってくれることも、褒めてくれることも、微笑みかけてくれることも、服を買ってくれることもなければ抱き締められたこともない。与えられたのはただ一つ、なんの暖かみもない、お金のみ」

「それが、お母さんとお父さんの愛情表現だったんだ！」

「ネグレクト、という言葉に聞き覚えは？」

「……」

「賢いですね。よく、勉強しましたね。でも、気付きたくなかった。違いますか？」

「ダメ、なの？」

「ええ。愛情を勘違いしてもらっては、困ります。お金は、愛情を表現するのに足る媒体であることは否定しませんが愛情そのものであることは決してありません。あなたは生い立ちからして不幸であり、幻想に浸りたくなる気持ちもわかりますが、今は前を向いて、アリスとの家族関係を」

「エイキ」

「なんですか」

「私、ダメなのかな」

「……」

エイキは何も言ってくれない。アリスでさえ、何も。

「『愛して』って、そんなに思っちゃダメな事なのかな」

もう、何も見えなかった。生暖かい液体が、視界全体を覆って、潤んで、歪んで。頬に流れる生暖かさが、気持ち悪くて。

「……まさか」

「私、頑張ったんだよ。エイキ。愛してもらおう、って必死だったんだ。お父さんが難しい話をしてでも合わせられるように勉強したよ？ お父さんがお金に困っておうちを訪ねて来たときにお金を好きだけ渡せるよう、お金も貯めた。それでも足りなかったとき、身体を売る覚悟だった。気持ち悪かったし、怖かったんだよ？ 私があげれる全部をあげるって伝えたんだよ？ でも、ダメだったねえ、エイキ。なにが間違ってたのかな？ 私のどこが、ダメなんだと思う？ 私がどうすれば、お父さんは私を愛してくれたと思う？」

エイキは、しばらく目を閉じ、そして、こう言った。

「本当に、頼みますよ、アリス」

目を開けると、鋭い眼光が、私を射抜いた。

「あなたがどう努力しても、あなたは愛されることはなかったでしょう。あなたの存在そのものを、彼は認めていなかったのですから」私は、かくりと膝から力を抜いた。そんなわけがない。お父さんが、私のことを愛してないなんて。そんなわけ。

「……あなたは、外界では……いわゆる、要らない子供、ということになります」

私は、今日なんと心を碎かれただろう。なんで、私、は……。

「もう、やめて」

「だから、例え死んだとしても、悪霊になりかけている父親に愛されることは、けしてありません。むしろ、いたずらに傷を広げるだけです。だから」

「やめてッ！」

もう、嫌だ。こんな、こんな辛い思い、したくない。嫌だ。苦しい。

……こんな人たちに構っている暇なんてない。早く、お父さんの元へ。

私は二人に見えないようにうつむき、舌を伸ばす。気付かれないうちに、一気にそれを噛んだ。

血の味が口全体に広がって、い、いき、が。

「滞！？ え、映姫何したのよ！」

「舌を噛んだのです、急いで医師を……小町を呼んで、永遠亭まで早く！ いらないなら、永琳を呼んで来てください！ 応急処置はこちらでやっておきますから！」

「ええ、わかったわ！」

アリスが走ってどこかへ行った。

「……大丈夫です。あなたは、死なせません」

口の中に、エイキの小さな手が入ってきた。

……死なせてよ、辛いから。

私は酸素がなくなったせいか、だんだんと意識が薄れていって、いつしか、私の意識は途切れた。

もう二度と、目覚めたくなかった。

嘘と私

目が覚めると見知らぬ天井だった。体を起こして、周りを見る。

この部屋には私の寝ていたベッドしかなかった。全体的に暗いイメージで、私から見て右の壁に、学校にあるようなスライド式の扉があった。六畳ほどの空間に、アリスとエイキ、そしてエイリンがいた。アリスは私のそばにいて、エイキは入り口そばの壁にもたれかかるようにして立っている。エイリンはアリスの隣で、私のことを見つめていた。

「もごご」

挨拶しようとして、出来なかった。何かが口に嵌められていることはわかった。それが何か触って確認しようとして、それすらもできないことに気付いた。

「お目覚めですか、滯」

「もぐ、もが？」

「自殺未遂に加えて、死にたがり。失礼は承知で猿轡と拘束服を着せています。着替えさせたのは女性なので、なんら心配する必要はありません」

……私が自殺しないための処置だろうか。なら、嘘を吐いて、この人から離れて、そこで死のう。

「……ねえ、滯。舌、もう噛まない？」

頷く。もちろん、嘘。

「嘘は、厳罰ですよ。永琳、お願いします」

「はいはい」

エイリンが私の後頭部に手をやって、口にかかっているタオルを外してくれた。拘束服の方は、まだ脱がせてくれないけど。

「……ありがと、エイリン」

私がお礼を言うと、彼女は首を振って立ち上がった。

「気にしないで。もう死のうだなんて思っちゃダメよ。……じゃあ

ね、映姫」

「ええ。またお願いしますね、永琳」

スライド式の扉を開けて、永琳は部屋を出て行ってしまった。死のうと思っては、ダメ？ なぜ？

「……。では、滞」

ゆっくりと、私にエイキが近づいてくる。錫を胸の高さで持っている姿は、まさしく地獄の閻魔大王。

「その前に。お父さん、どうなったの？」

歩みを止めることなく私のすぐそばまでくると、エイキは私を憐れむような目で見つめた。

「あなたの父親は、半悪霊となってしまいました」

「私がすぐに死ななかったからだよ。目の前で死んであげれば、少しは」

その続きは、唇に錫が当てられたために言い出すことができなかった。

「父親を想う純粋な気持ち。それは評価します。しかし、だからと言って自殺は認められません」

キッパリと、エイキは言った。

「お父さんのそばにいちや、ダメなの？」

「はい。あなたの父親はもう死んでしまいました。あなたの関係ないところで、勝手に、自らの命を絶ったのです」

お父さん、自殺だったんだ。私のせいだ、と言っていた。

「じゃあ、私はお父さんを追うね」

また錫で打たれた。

「いけません。それはいけません。……アリス、この娘はかなり冷静で理知的だという話でしたが？」

「……父親のことになると、年相応よ。いえ、それ以上に盲目的ね」
エイキはアリスの言葉を聞いて、少しだけ残念そうにした。

「あなたほどの年頃だと、父親、母親が世界の全てに思えるでしょう。両親以外の大人が信用に足るに値しないような人間ばかりだっ

たなら、なおさら」

「じゃあ」

エイキは錫を自分の胸元まで戻すと、静かに言い切った。

「それでも、あなたは死ぬべきではありません」

「死ぬことが、娘としての義務なの」

「そのような義務はあなたの頭の中にしかありません」

「お父さんが死ぬと言っていた!」

「だからと言って、素直に死ぬ必要はありません」

「……わかった、もういい!」

この人に認めてもらうことは、できない。そもそもこの人はお地蔵様みたいに石頭だ。一度決めたことは、例え何があるうと変えない、そんな人なのだろう。この人は説得しようとするだけ無駄だ。

「じゃあ、私アリス……お姉ちゃんと帰るから、これ、着替えさせて」

私が言うのと、しばらくエイキは悩んだ。懷から何かを取り出そうとして……やめた。

「約束してください。自殺しないと」

「うん」

私はすぐに頷いた。私にだって、策はある。

「約束、しましたよ。信じています」

嘘は、厳罰です。幾度と聞いた言葉は、発せられなかった。

「……使わないの?」

アリスが、意外そうに聞いた。

「何をです?」

「浄玻璃の鏡」

エイキは首を振って、アリスのそばまで歩いた。

「あれは、罪人に使う物です」

「使おうとしてたじゃん」

「……はい。悪行ですね、全く。私としたことが、子供の言うことを疑うなどと」

ズキ、と胸が痛んだ。ジクジクと、膿むような痛みが心を襲う。

「では、アリス。漑を頼みますよ」

「わかってるわ。妹、だからね」

嬉しそうにアリスは微笑んだ。その様子を見て、また胸が痛む。

「ああ、それから、博麗霊夢に伝言が」

「何かしら」

「あまり隠し事はないようにと」

「わかったわ」

アリスは頷くと、私の手を引いて外に出ようとした。

「それでは、漑、アリス。善行を積み、良き人間となるのですよ。特に、漑。あなたはまだ幼い。間違うこともありましようが……絶望せずに、前へ進むのです。さすれば、いつかは道がひらけましよう」

格言めいた、長い言葉。でもそれは、全部私を思つてのこと。こんなにも気にかけてくれている人を、私は、騙すのか。

「……うん、わかったよ」

「そうですか。では」

私はアリスと一緒に部屋を出た。長い廊下が続く、変な場所だった。

「さ、ついてきて。帰ってお祝いしなきゃ」

アリスは嬉しそうに私の手を引いて、歩き始めた。多分、ついていけば外に出れると思う。

「……お祝い？」

「ええ。自殺、思いとどまってくれたでしょ？ そのお祝い」

胸が軋んだ。

「そんなの、いちいち祝わなくても」

「いいえ。家族が死んでしまって、一人きりになって、その後を追いたい、って気持ちを振り切るのはとても大変よ。あなたみたいな子供なら、なおさら。」

それに、自殺なんてしなくてよかった、って思ってくれなきゃ困

るわ」

痛い。胸が痛い。優しい言葉なんてかけないで。私はあなたに嘘をついてる。私、まだ死ぬつもりなのに。まだ、自殺願望は消えてないのに。

「……？ どうしたの、顔が暗いけど」

「私、行きたいところがあるの」
痛い。けど、けど。

「どこ？」

ごめん、アリス。私は、それでもやっぱり、お父さんのそばにいたい。これがきつと最後なんだ。お父さんに見てもらおう、お父さんに愛してもらおう、最後のチャンス。だから、私は。

「……昨日見た湖」

ごめん、エイキ。ごめん、アリス。

体の変化と私

それから四時間ほど、歩いた。もうすっかり夕暮れ時で、空もかなり赤くなっている。湖の水が赤を反射して、すごく綺麗だった。

「……こんなところに何か用？」

「景色が、見たくて」

……死にたい。けど、アリス達を裏切りたくない。だから私は賭けることにした。

紅魔館の主、レミリア・スカーレット。彼女が私の気配を感じ、ここに使者を送ってきたら死ぬ。そうでなければ、お父さんには六十年後くらいに会いに行こう。

そこまで思っ、自分で自分を笑う。

レミリアの言った通りになった。私は今、心の底から死を望んでいる。死にたくなるような苦痛があるという暗示だとばかり思っていただけに、少し不思議な気持ちだった。

……レミリア、気づくかな。気づかないかな。

私は綺麗な湖を眺めている。もっと、こんな景色を見たい自分がある。こんな景色をアリスと見ていたい自分が、いた。自分の中では、二つの思いが激しくぶつかっていた。

死にたくない。アリスを、エイキを裏切りたくない。

死にたい。お父さんに会わなきゃ。会って、愛してもらわなきゃ。自分が二人いるかのような錯覚に陥った。

「……」

チクリ、と手に刺すような痛みが走った。ゆっくりと手を見ると、手のひらの中に小さなコウモリがいた。

「アリスお姉ちゃん」

「ん」

「おトイレ」

私はそう言うと、アリスの横を通り抜け、湖のそばにある森に入

る。アリスが見えなくなったところで、コウモリを手放す。そのコウモリはたくさんに分裂し、いつしか黒い塊になっていた。その黒塊はやがて小さな人の形をとり、やがてはレミリア・スカーレットになっていた。

「こんにちは、ミオ。わざわざこんなところに出向いて、しかもひと気のないところまで移動してくれた、ということは……。いいのね？」

賭けの結果は、お父さんに会いに行くことに決まった。

「うん」

「じゃ、行きましょうか」

頷く。バサバサと耳障りな音が私を包む。

「ミオ？ 何の音……っ！」

気付かれたけど、もう遅かった。私の体はコウモリの集団に持ち上げられ、地面を離れていた。

「レミリア！ 止めなさい！」

「私はただこの子の望みを叶えてあげるだけ。じゃあね」

「望み！？ まさか、ミオ！？」

レミリアと一緒に私は宙を飛んで紅魔館の中へと入った。レミリアと始めて会った、謁見室のような部屋だった。腕を引かれ、豪華な椅子の裏にあった扉まで連れていかれた。扉を開けると、部屋の中の様子が見えた。

天蓋付きのふわふわもこもことしたキングサイズのベッドが、一つだけあった。クッションもたくさんベッドの上においてあり、まるでお姫様が眠る場所のようだった。

「ここは？」

「私の寝室よ」

レミリアは部屋に私を連れ込むと、扉を閉めて鍵をかけた。ここから出す気はないらしい。私も、出る気はない。ここが私の墓場になるのだ。

改めて部屋を見回すと、ここだけ、壁の色が赤というよりもピン

クに近い色をしていた。なぜかを聞けばきっと、内臓の色だから、などという可愛げのない回答が返ってくるのだろうけど。

私は腕を掴まれ、半ば力づくでベッドの上に放り投げられた。ふわりとした感触が、背中全体を包んだ。心地よい感覚に、安心する。

「……食べないの？」

「食べるわよ」

きしりと、ベッドが少し軋んだ。レミリアが、私を見下ろすように私のことを見ている。その瞳は酷く扇情的だった。……何も感じないが。

……なぜなにも感じないのだろう。私はあらゆる能力を増幅し、少しの攻撃で死ぬのではなかったのか？

「どうしたの？ 難しい顔して。私だけを見なさい」

す、とレミリアは私の顎に指を当てた。背筋が痺れるような感覚がした。

「……食べないの？」

「食べるわよ。……色んな意味で、ね」

思わず体を起こそうとして、肩を押さえつけられた。悪戯をしているときの子供のような顔で、レミリアが首を振った。

「あなたは、女の子」

私は思わず、そんなことを口にしていた。

「あら、耳聡いのね。いくつ？」

「……十歳」

レミリアはにこ、と笑みを深くした。

「まだ、あなたの年頃の子は食べたことなかったわ。……痛いのは嫌でしょ？ だから、気持ちよくしてあげる。ほら、怖がらないで……」

レミリアはそれから、私の全身を撫でていく。東野にされていることは同じはずなのに、不思議と嫌悪は抱かなかった。

「……ふふ、頃合いね」

全身を撫で回され、すっかりできあがってしまった私に、レミリ

アは淫靡に舌なめずりをした。私の首筋に口を寄せる。

「……レミリア。いいよ」

「……いただきます」

あれ、なんでレミリアがその挨拶を？

そう思ったのとほぼ同時、私の首にレミリアの牙が突き立っていた。皮を引き裂き、血管に牙を滑り込ませる。首に生暖かい液体が大量に流れていることがわかった。

様々な痛覚神経を刺激しているはずなのに、私は全く痛みを感じなかった。

むしろ。

「……ん」

「くくっ……くくっ……」

むしろ、もっと。全然、痛くない。それどころか。

「……あ」

「じゅる、じゅるる……」

吸われることを、嫌だと思えない。このまま吸い尽くされたいとさえ思う。この経験したこともないような快楽が手に入るなら、私は。

「……ん？」

私の血を啜っていたレミリアは、扉の外に目を向けた。波のように押し寄せていた快感が、嘘のように消えた。

「レミリア、飲まないの？」

私の声はまるで乞うようだった。そんな自分に、嫌気がさす。

「待って。……来る」

レミリアの妖しく光る赤い瞳は、扉の向こうに誰かを見つけたようだった。その、次の瞬間。

寝室の扉が吹き飛んで、たくさんの人形を従えたアリスが、立っていた。

「ミオはどこ？」

視線をキョロキョロとさせていたアリスは、素裸にされていた私

の方を見ると、顔を歪ませてレミリアに向かって叫んだ。

「濡に何をした！」

「ただ、請われるままに血を吸っただけよ。痛くなんてしてないわ。至上の快楽を、一緒に与えてあげたの。見て、この顔……は、変わらないわね。この子の身体、触ってみて？ 全身しっとり濡れてるわよ？ まるで甘い蜜のよう。ふふっ」

レミリアに撫でられて、私はピクリと体を跳ねさせた。それが、さらにアリスの怒りを加速させた。

「痛い目みたくなかったら、濡を離しなさい」

騎士のような甲冑を着込んだ、アリスよりも大きい人形が、レミリアに向かって一歩進んだ。あれを、アリスが動かしているのか。

「この子が、望んだことよ」

「ひゃっ」

私の内腿を慈しむように撫でられ、思わず声を上げてしまった。

「……っ。死にたいの？」

「今あなたはどんな気持ちなのかしら。目の前で大切な人が壊されていく感じ？ それとも、犯されて心身ともにメチャクチャになった家族を見る感覚？」

「黙れ。何がしたい」

「この子を食べたい」

まるで見せつけるように、レミリアは私の耳たぶに口をつけると、噛みちぎった。耳から血が流れていくのは感じるが、痛みは感じない。

「……ん？」

しっかり咀嚼したあと、レミリアはそんな風に疑問符を浮かべた。「それ以上、妹に手を出さないで」

「……食事の邪魔をしないで」

レミリアは、ふわふわとしたスカートの中から、カードのようなものを取り出した。

「……弾幕勝負？ 勝負？ そんなもので、私の怒りが収まるとで

も!？」

「譲歩してやろうって言うてんのよ。吸血鬼に、なりたての魔法使いが敵うとどと思ってるのかしら」

アリスは腕を指揮者のように動かした。彼女の後ろから、大小様々、古今東西を問わず優秀な武器防具で武装した人形が出てきた。人とよく似ているけど、呼吸音がしないし、血が流れていないことはすぐにわかる。

「……本気、ってわけ? 咲夜達はどうしたのかしら」

「眠ってもらってるわ」

レミリアはここで始めて、焦ったような顔をした。

「へえ。やるじゃない」

「ミオを返せ。さあ、あなたにも見せてあげる。私の、力を……を?」

アリスは、最後で不審な声を上げた。脈拍が少し上がってる。何かを恐れ……いや、驚いてる?

「……あ、あなた、み、耳たぶが」

「……え?」

指摘されて、自分の耳たぶを触る。さっきレミリアに齧られたところが、きれいさっぱり再生していた。

「……」

「痛いっ!」

いきなりレミリアは私の拳に噛り付き、そのまま噛み砕いた。なぜか、もう痛みは感じるようになっていた。

レミリアはしばらく咀嚼して、すぐにベッドの上に吐き出した。ぐちゃぐちゃになった私の拳がぶちまけられる。

「……アリス、この子は返すわ」

「こういう風の吹きまわし? それからこの子の拳を食べたこと、どうしてくれるわけ?」

比較的柔らかい装備をしている人形が私のそばまできて、私のことをゆっくりと抱き上げた。アリスのところに運ばれるころには、

食べられた私の拳は再生していた。

「ライオンがライオンを食べないように、人間が人間を食べないように、吸血鬼も吸血鬼を食べないわ。それが答えよ」

私は、その答えの意味がわかってしまった。

「わ、私、は」

私はきつと、いつも通りの無表情。でも、声には、身体情報には私が怯えているということが出ているはずだ。何を言われたのか、わかってしまったからこそ、怖かった。

「ようこそ、吸血鬼の世界へ。ミオ・マーガトロイド」

レミリアはニヤリと笑ってそう言った。

「……くっ。ミオ、取り敢えず、帰りましょう」

警戒しながら、アリスはゆっくりと下がっていく。

「……あら、あら。逃げられるといいわね、クスクス」

私たちが謁見室のような部屋を出る寸前、そんなからかうような声が聞こえた。

アリスは、何も言わなかった。

再確認と私

吸血鬼になってしまった。アリスと一緒に暮らしていけるのだろうか？

私が真っ先に心配したのが、そのことだった。アリスの心拍や呼吸数が詳しくわかるというのも怖かった。吸血衝動もある。けど、なにより嫌なのは、アリスに見限られること。生きているのに一人それは、何よりも恐ろしくて、何よりも嫌なことだった。

そして、そこで始めて、私は気付いたのだ。私は、何をしようとしていたのか。こんなにも、こんなにも必死で助けてくれる家族がいるのに、私はお父さんへの想いを優先させてしまった。その、罪深さを。

「……アリスお姉ちゃん」

「何？」

アリスは私を抱きかかえながら、曲がり角の向こうを確認していた。今、紅魔館から逃げる最中。アリスと私は隠れながら移動を続けていた。ここへ来るときも、隠れて移動してを繰り返し、人形を取り出したのはレミリアの寝室の前だったそうだ。

「アリスお姉ちゃん、私戦う」

なぜだか、今は誰にも負ける気がしなかった。かつて他人に感じていた恐怖がまるで嘘みたい、に、薄れては消えていく。

「……無理しなくていいのよ」

苦々しい様子でアリスは言った。

「お姉ちゃん、ごめん」

「何が」

「約束、破ってしまって」

アリスは何も言わなかった。

「お姉ちゃんとの約束も、エイキとの信頼も裏切って、一人で死のうとした。ごめんなさい。私、お姉ちゃんのこと、全然考えれてな

かった。お父さんのことで、頭がいっぱいになって、それで」

アリスは、私の頭に乗せた。

「あのお父さんじゃ、いっぱいいっぱいになるのも仕方ないわ。それは、わかってる。でもその口振りじゃ、もう死ぬ気はないんでしょ？」

頷く。もう、自殺はしない。お父さんに会うのはもっと後になる。

お父さんは、きっといくら後になっても愛してくれる。そう、地獄で、お父さんからの終わることのない『愛』を。

「どうする？ お姉ちゃん、皆、殺しちゃうの？」

アリスは首を振った。

「いえ、誰一人傷つけないわ」

「……サクヤは倒したんでしょ？」

「まさか」

アリスはニヤリと笑ってそう言った。全部はったり、だったのか。

「今なら大丈夫、行きましょ」

「うん。……それからお姉ちゃん、私一人で歩けるから」

私を担ぎ上げたまま走り出そうとしてたアリスに私はそう言った。はやく体を動かしたい。暴れたい。そんな衝動が体の中にあった。「そう。わかったわ。行きましょ、ついて来て」

アリスは一気に走り出した。私も彼女についていき、入り口まで一気に駆け抜けた。

エントランスまで辿り着くと、アリスが足を止めた。そこには、一人のメイドが立っていたからだ。

「お客様。私や美鈴に連絡なしに館に侵入されては困ります。すみませんが、外に案内させていただきます」

「……よろしく、サクヤ」

私はサクヤに対する恐怖が消えていた。いや、それどころか、彼女に対して乾くような変な気持ちを感じる。

「……お嬢様からは、丁重にお送りしろと仰せっております。ので、私はあなた方をお送りします」

それはまるで、命令がなければ何かをしている、という宣言であるかのようだった。

「それはどうも……」

アリスは警戒を解き、普段通りの調子に戻った。

「しかし、次無断で館に入られた場合……」

二度と館から出ることは出来ないでしょう。……とだけ、忠告いたします」

精一杯の脅し。私はサクヤのセリフをそう感じた。怖いどころか、必死さが伝わってきて微笑ましくさえある。

「わかったわ。胸に刻み込んでおくわ」

「ありがとうございます……」

サクヤは玄関の大扉を開けた。アリスと私はサクヤに一礼をしてから紅魔館から出た。

「……面白かったね」

「え？」

私の感想に、アリスはたじろいだ。

「……ごめん、なんでもない」

「そ、そう？」

彼女の反応で、自分の抱いた感情が、異常なものだと気付いた。死の危険を感じさせようと必死なサクヤが、面白くて、楽しくて。私は人間ではなくなったということを、嫌でも実感した。

「おかえりですか、お客様」

「え、ええ」

メイリンは鋭い目つきで私とアリスを睨むようにして見ると、門を開けてくれた。

「次からは、私のところから入ってきてください」

「わかったわ」

アリスは頷くと、半ば駆け足で紅魔館から出た。私もゆっくりとした足取りで、アリスに続く。空を見上げると、月が上がっていた。思ったより長い間レミリアと過ごしていたようだ。

「……ねえ、漣、あなた、目が赤いわよ」

「……ごめん、お姉ちゃん。私吸血鬼になってしまった」

アリスは、なんと言うだろうか。

「歩きながら、話しましょうか」

頷いた。アリスの手を取ろうとして、私は自分が人間ではないことを思い出し、手を下ろした。

その次の瞬間、アリスが私の手を握ってくれた。昨日も歩いた森を、ゆっくりと私たちは歩いている。

「……吸血鬼に、ね」

「うん。でも、迷惑かけそうになったら出て行くから、嫌わないで。ううん、嫌ってもいい。せめて、殺さないで」

吸血鬼は人間の敵だ。人間の味方であるアリスからしたら、憎い仇も同然である可能性は十分にあるのだ。

「いや、別に嫌いもしないし殺さない……とは、約束できないわ」

「……そうだよね」

まあ、嫌われはしないのだからいいか。

「あなたが私を食べようとしないう限り、殺さないわ」

私ははっと、アリスの顔を見た。

「いいの？　ありがとう」

よかった、よかった！　私、殺されないんだ。退治されちゃわないんだ……。

「にしても、吸血鬼に、ねえ。どんなことができるか、わかる？」
アリスに言われて、自分の中を探してみる。けど、体感的には普段通り。

「わからない。ごめん、お姉ちゃん」

「いいのよ。でも、何ができるかくらいは知っておいた方がいいわね……。永遠亭にでも行く？」

私は首を振った。

「いい。私は、お姉ちゃんの妹なんだから、吸血鬼の力なんて積極的に使いたくない」

「嬉しいこと言ってくれるわね」

アリスはそう言って笑ってくれた。吸血鬼などという化物になった愚かな私に、こんな微笑みをくれる。

ああ、この人が、私の家族なんだ。身を包む幸福にを噛みしめる。

「……お、お姉、ちゃん」

この流れにまかせて、言ってしまう。言いたかった一言を。なんて、返してくれるだろうか。お父さんみたいに返されるのだろうか。怖い。アリスに死ねなんて言われたら、どうしよう。でも、きっと、多分。

私は一縷の望みかけて、言ってみた。

「なに、滯？」

「あ、愛、してる」

「……。私もよ、滯」

私はやっと、誰にも首を傾げられないような愛情というものを理解できる。そう感じた。

新しい愛情と私

アリスの家に帰って、私とアリスは食事を取ることにした。

朝に採った食事と寸分違わぬ食事。

「いただきます」

「いただきます」

朝と違って、二人合わせて挨拶をする。僅かな違いだったが、より家族の繋がりのようなものを感じて、嬉しかった。

「ねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

アリスがスープを口に含む前に、話しかける。

「レミリアのところには外来人、いたのかな」

「いたんじゃない？ でもどうして？」

少しだけ言うのをためらう。

「レミリアが私を噛むとき、いただきます、って言ったから」

「……」

思った通り、アリスは快い表情をしなかった。

「……あなたはご飯になりに行ったのよ」

「うん、ごめんなさい……」

叱られてる。先生以外に叱られるなんて、初めての経験だった。

怖い、とは感じる。

「……次は、ないわよ。もし次自殺なんてしようものなら、縛り付けてでも改心させてやるからね」

「はい」

家族の縁を切る、なんて言われるかと思ったけど、そんなことはなかった。だから、嬉しい。叱ってもらえた。悪いことをしたら叱られる。当たり前のことなのに、嬉しかった。叱られて喜ぶなんて変だとは思ったが、それでも、悪い気はしなかった。

「レミリアのところの外来人が来た、っていうのはわかったけど、

エイキのところにはいないのかな？」

アリスはスープを飲みながら、何かを考えている様子だった。しばらく黙ったあと、ゆっくりとアリスは口を開いた。

「あなたの父親を連れていった黒服。あれ、外人人だって噂よ」

思い出す。随分冷たい印象がするから死神だと勝手に思っていたが、外人人だったのか。

「でも、なんか冷たかったよ？」

「連れて行く相手が相手だし、仕方ないんじゃない？」

「お父さんは、悪い人じゃないよ」

「あなたの中ではね」

思わず、違うと叫びそうになったけど、やめた。すぐにわかってもらう必要はない。ゆっくり、私とお父さんとの愛情を理解してもらえばいいんだ。

「うう……。わかった。じゃ、いただきます……」

挨拶はしたのだけど、ついもう一度そう言って、スープを口に入れる。

……。

「どう？ おいしい？」

「うん。とってもおいしい」

何も味を感じなかった。砂でも食んでる気分になる。味もしないのに舌の上を転がる液体みたいな物質が気持ち悪くて、吐き出しそうになる。それでも、半ば無理に飲み込んだ。

こんなとき、普段表情が変わらないというのは便利だ。何か驚きがあっても隠せるし、美味しいと言ってるのに嬉しそうでなくとも疑われない。

「ねえ、お姉ちゃん。吸血鬼の主食ってやっぱり」

一度は騙せたのに、私は疑われるようなことを口走っていた。もう二度と、家族を騙したくない。そんな思いからだった。

「……血よ。あなたまさか、血が欲しいとか？ さすがに、血は用意してやれないわ。……でも、その代わり、『狩り』を咎めるつも

りも……ないわ」

「大丈夫、そんなに欲しくないから」

ふるふると、首を振った。血が欲しいのは事実。でもそれはまだ本が欲しい、自転車が欲しいのとほとんど変わらない。

でもこの気持ちは、もっと強くなるのだろう。その時私は、どうするのだろう。

「ご馳走様」

「ほとんど食べてないじゃない。出された物は全部食べる。この家では、それがルールよ」

「……はい」

家のルールを教えてもらって、それに従う。それは私がゲスト扱いから家族になった証左のようで嬉しいのだけど、食べるものが何の味もしないものだったなら、流石に辟易する。

栄養を摂取するために食べるわけではない。味を楽しむために食べるのではない。

ならば、一体この食事になんの意味があるのだろうか。

「お姉ちゃん、食べる意味、ってなんだと思う？」

「私は、習慣かな。本当は食べなくてもいいんだけど」

知らなかった。つまり、お姉ちゃんも人間じゃないのかな。聞いても大丈夫かな、変に思われないかな。

「お姉ちゃん、ちょっとだけ、聞いて欲しいのだけど」

アリスが人間でないなら、きっと、私の悩みもわかってくれるだろう。そう思ったから、私は打ち明けることにした。

「何？ 嫌いだから残すっていうのならダメよ」

「違うの。味を、何も感じないの」

「嘘、ついたのね」

私はすぐに謝った。

「ごめんなさい」

はあ、とアリスはため息をついた。

「……味付け、薄かったかしら」

「そういう意味じゃないの。朝は美味しかったのに、なのに」

アリスはまだ、私の悩みを理解してくれなかった。もっと、言葉を尽くさないと。

「私、もしかしたら、血以外の味を感じないかもしれない。もしそうだったら、どうしたらいい？」

アリスは傷ついたような表情をしたあと、ゆっくりと口を開いた。

「……レミリアに、聞いてみたら？　もしかしたら、何かわかるかも」

「アリスは、わからないの？」

ごめんなさいね、とアリスは言った。

「私、魔法使いで人間とは違う存在だけど、それでも、吸血鬼の体の仕組みとかは知らないわ」

つまり、私はもうアリスの理解の埒外だと。そういうことなのだろうか。

「お姉ちゃん、私不安。私が悪いのはわかってる。でも、不安なの」

「……何とも言えないわ。そもそも、あなたがレミリアのところに行かなければ、こんな目に遭わずに済んだのよ」

アリスの言葉に、私は何も言えなかった。感じるのは失望や、怒り。

「……私、お姉ちゃんを怒らせた」

「そうね」

「……出て行った方が、いい？」

バン、とアリスが机を思い切り叩いた。私は驚いて肩を跳ねさせた。

「……あなたは、あの父親に歪められたのよ」

でも、次にアリスが言ったのはそんな憐れみに満ちた言葉だった。「違う」

「違う。私はあなたが死のうとしたことも、吸血鬼になったことも、こんなことで出て行こうとしたことも全部、あいつのせい。

だから……絶対にあの父親から解放する」

それは強い口調だった。何がなんでも達成するという意気込みを感じるほどの、強力な意志。

「私はお父さんに縛られてなんかいない」

「父親にかけられた僅かな言葉に歓喜して、その言葉を軸に今まで積み上げてきたものの全部捨てようとしてるのよ？ 縛られていないければなんなの？」

「愛」

アリスは首を振った。

「もうあなたの父親はいないの。死んだの！ 父親の影を見て父親を追うのはやめなさい！」

「違う！ 私はお父さんの影なんてみていない！ お父さんは私のせいで死んだんだ！ だから私は！」

アリスの表情はどんどん険しくなっていく。

「どんな事情があったか知りもしないで、盲目的に父親の言うことを信じて！ あなたはあいつの」

「あいつなんて言わないで！」

「あいつよ！ 父親としての責務を果たせない人間を、父親だなんて呼べるか！」

私はアリスのように机を叩いた。机が真二つに割れ、アリスの作ってくれたスープが二つとも地面にぶちまけられた。

「お父さんは、お父さんだ！ 何があっても、何をしていても！」
私も、アリスも、そんなことに構わず口論を激化させていく。

「違う！ あいつはあなたを切り捨てた！ あなたに死ねと、後を追えと強制した！ あなたは、愛をくれなかった上にそんなことを言う人間を、父と呼ぶの！？」

「当たり前！ 私は四年、お父さんを想い続けたんだ！ 愛してくれるって信じて！ お父さんのために、お父さんと仲良くなるためだけに捧げた四年を、無駄にしたくない！ 無駄にするわけにはいかない！」

私はお父さんに愛してもらうんだ。絶対に。

「あなたは、あいつから返事を聞いたでしょう!? あいつは、全部知って、それでもあなたを拒絶したのよ!？」

「地獄に行けば、お父さんは私に触れてくれる! 抱き締めてはもらえないかもしれない。でも、私のことを見てくれるんだ! それは、私にとっては愛なんだ!」

アリスは、言葉を詰まらせた。

「物心ついてから、私にはお父さんにちゃんと見てもらったことがないの! だから、見てくれるだけでも、十分にありがたいの、嬉しいの! だから、私は!」

アリスは、首を振った。

「あなたのそれは、愛なんかじゃない! 普通の愛をあなた、知らないわけじゃないでしょう! さっき言ってたじゃない! さっき言ってくれたじゃない、愛してるって! あなたみたいに聡明な子が、虐待と愛情を取り違えるなんて……!」

「……!」

私の頬に涙が流れた。今まで、誰にも話さなかったし、どんな大人にも勘付かれなかったのに。閻魔大王でさえ、私のことを勘違いしたのに。

気付いて、くれた。私は、涙を流して、アリスを見る。

「……お姉ちゃん、私ね」

私は、ゆっくりと話す。私の様子が変わったことに、アリスは気付いてくれた。

「実はね、本当はね、知ってたんだ」

実は、全部知っていた。

ずっと懂れてた。ずっと、羨ましかった。普段は、心の中にさえ浮かべないようにしているけど。それでも、私の本心は、私の本当の心は。

「愛ってね、心地いいものだってね、知ってたんだ」

痛くない、苦しくない、冷たくない、辛くない、嫌じゃない。それが、愛情。そんなのは、知っていた。本に、私の知っている愛は

なくて。だからいつしか、私がおかしいということに気付いた。気付いていたのだ。

「じゃあ、なんで？　なんで、そんなに頑なにお父さんに従うの？　愛を知らない振りまでして」

「だってね、お姉ちゃん。私ね、諦めたくなかったんだ。お父さんから愛情が欲しかったのは、ホント。それだけは、嘘じゃない。でもね、『普通の』愛情が欲しかったんだ」

でも、ダメだった。

『自分のせいで娘が歪んだ』と思えば反省して愛してくれる。それが、私が賭けた、最後の望みだった。ほんと、私はダメな子だ。親をだますようなことを考えて。

「そのために、必死で頑張ったんだよ。この動かない表情と他の子より言葉を思いつくこの頭を精一杯使って、お父さんに普通に愛してくれるよう頑張ったんだ」

けれど私の頑張りには、無駄だった。初めから、成功することのな可能性に私は四年を費やした。

「……それだけ？　それだけで、本当に死のうとしたの？　私じゃダメなの？　私は、普通の愛情をあなたにあげれるよ。それでも、私じゃダメ？」

私は首を振った。違う。アリスが悪いんじゃない。

「お父さんから愛してもらわなきゃ、世間一般の『普通の愛情』じゃないんだよ。お父さんがいて、お母さんがいて。どっちか片方だけだったにしても、最大限の愛をもらえて。それが、普通なんだ。父親にも母親にも愛されたことがないなんて、普通じゃない、異常だよ。それに！」

私はアリスの方を見た。アリスは悲しそうに顔を歪めて、今にも泣き出しそうだった。

「それに、お父さんからの愛が欲しいって、そんなに変な願いかな……？」

高望み、だったのだろうか。だから、全部失敗したんだ。ああ、

そうか。

「そうか、そもそも私に普通の愛なんて」

「漣！」

ぎゅっと、抱き締められた。ふわりと柔らかいアリスの服と、服越しに伝わるアリスの体温。

「あなたに普通の愛はもう手に入らないかもしれない。でも、私が代わりに、いや、普通以上の愛情をあげる。だから、だから！」

会って、まだ二日なのに。それなのに、どうしてアリスは私の事をこんなにも、こんなにも……。

愛してくれるのだろう。

「……お姉ちゃん」

「もう、愛が手に入らないなんて悲しいこと言わないで。もう、お父さんからの全てが愛だなんて苦しいこと言わないで。ここが、あなたの家だから。ここが、あなたの安心できる場所で、私が、あなたに愛をあげる。だから」

だから、なんだろう。

「だから、あなたも私を愛して。もういなくなったお父さんと同じくらい、私のことを愛して」

ああ、本当に、私は何をしているのだろう。こんなにも。

「……ありがとう、お姉ちゃん……！」

それから先は、言葉に出なかった。数年かぶりに私は幼子のように泣いて、泣いて、泣き通した。アリスを力強く抱き締めて。今までの寂しさを打ち消すかのように。大声で泣いて、再び産まれるかのように。

「……漣、愛してる」

私は、バカだ。

大事なものは、すぐそばにあったのに。

ふとした異常と私

気が付いたら、私は目が覚めていた。

体を起こし、部屋を見回す。私の隣にはすやすやと気持ち良さそうに眠るアリスがいた。もう少し周りを観察すると、窓が朝の日差しを取り込んでいた。どうも私は泣き疲れて眠ってしまったようだ。アリスに視線を移す。白一色のパジャマに身を包んで眠っている。私の方を向いて、横に眠っている。

私がそばにいると言うのに、警戒心をかけらも抱いていないような、油断しきった顔だった。

この人が、私の大切な家族だ。
自分に強く言い聞かせる。

「……お姉ちゃん」

耳元で話しかけても、反応はない。もっと、耳元に。すんすんと、匂いを嗅ぐ。甘い匂いがする。香水だろうか？ 昨日アリスは香水をしている雰囲気はなかったが……。

「お姉ちゃん」

少しだけ、肩を揺する。反応はない。露わになった首元が、私を惹きつける。

白い、すべすべとした感じの首。

つつつ、と指でなぞってみる。

「ひゃっ」

バツ、と飛び退くように離れた。声は上げた。けど、起きては……いないみたい。

「お姉ちゃん、朝だよ」

美しいアリス。キレイな首。

血もきつと、おいしい。

頭に浮かんだ思っではいけないことを、振り払う。私は吸血鬼である以前にアリスの家族なのだ。食糧なんかじゃない、ぜったいに。

「……う、ううん」

アリスが、目をひくりと動かした。体が自発的に動いた。起きるのか。

「……お姉ちゃん」

「……ん、おはよう滞」

アリスは体を半ば起こし、私の方を見た。しなやかなその格好は、ともすれば淫靡なものに見えた。

「ん、おはようお姉ちゃん」

私はベッドから降りた。アリスから離れたかった。血が欲しかった。

「朝ご飯、どうしましうか」

「私はいらないよ、お姉ちゃん」

アリスはしばらく黙っていた。私は寝室でアリスの方を見ずに話を続ける。

「いらないって、あなた栄養……。あ、ごめん」

「いいよ。自業自得だし」

私は静かに言った。アリスのことを見てはいけない。アリスはご飯じゃない。アリスは家族。アリスは大切な人。アリスは私の愛する家族。だから、だから、だからダメ。

「……滞、眠くない？」

「あまり」

そういえば、眠くない。なぜだろうか。吸血鬼は夜に起きるものだとはかり思っていたが。

「……そう。その、血が吸いたかったら私のことは気にせず、吸いに出かけても、いいわよ」

そんな言葉が出てくるあたり、アリスも人間ではないのだな、と実感する。

「血なんて吸いたくない。私はお姉ちゃんの妹で、バケモノじゃないんだから」

私は振り返ってアリスの方を見た。

体の奥底から湧き上がるような熱い気持ちを感じた。情欲にも近いこの感情を、家族に対して向けている自分が許せなくて、気持ち悪かった。

「お姉ちゃん、やっぱり私ダメだ。私、永遠亭行ってくる」

きつと、治してくれる。それができなくても、せめてこの熱い思いを消してくれる。

「……わかったわ。すぐ準備するから、ちょっとだけ待ってね?」

私は首を振った。

「一人がいい。一人で行く」

アリスの返事も聞かず、私は家を飛び出していた。

「待ちなさい! その森は!」

だから、その警告は聞こえなかった。

森の中を駆け抜ける。昨日は全く、何もわからなかったというのに、方向を見失わずに済んでいる。

もうアリスが走っても追いついてこれないような場所まで来ると、私は走るのをやめ、歩く。

「こどもが、こんなところになんのようだ?」

それからすぐに、森の茂みの右から、大きな鬼が出てきた。赤くて、角が二本生えている。

「ここがどこだか知らないようだな?」

左の方から、青い鬼が出てきた。一つ目の鬼で、角はなかった。

「……許してください」

まずいものからまれた。化物が、こんなところにいるとは。アリスと歩いている時には何もなかったのに。……そうか、アリスがいたから、こいつらも出てこれなかったのか。

「だ、め、だ! 食べてやるうっ!」

赤鬼が思い切り、腕を振るってきた。とっさに、腕を交差させて防御行動をとる。来るべき衝撃に備えて、目を閉じる。

腕に、衝撃。でも、それだけ。想像したような、両腕とも吹き飛んで十メートル吹き飛ばされる、とかいうことは全くなって、ただ

衝撃が来ただけだった。

「……え？」

「な、なんで、なんでなんともないんだよ!？」

私と、鬼。二人一緒に驚いた。

その次に私は鬼の腕を弾くようにして自分の腕を広げてみた。すると、面白いくらい簡単に、鬼の腕は弾かれる。

「……」

その一連の事象で、私は確信した。

私は強くなっている。人とは比べ物にならないくらい、強く。

「……」

私が鬼たちを見ると、彼らは怯えたように一步下がった。

「ゆ、許してくれ」

「だめ。いただきます」

人間でないのなら、アリスでないなら。

私に攻撃してきた者全てが、食糧だ。

私は力の限り暴れた。存外、気分がよかった。

……うん、美味。

「……」

私は青鬼の右腕を千切って、食べられる大きさにする。一口サイズにすると、口に運んで咀嚼する。血の甘い匂いなんともいえない至上の味が広がって、最高においしい。内臓を見る気にはなれないから、まだお腹は裂いてない。いつか残さず食べれるようになればいいけど。

「……ああ」

久しぶりに食事をとったような気分になって、思わず声が漏れた。「へえ、素晴らしいじゃないか」

そんな声が、どこからともなく聞こえた。私は振り返る。誰もいない。周りを見回す。誰もいない。

「誰？」

私はそんなことを聞いていた。名乗りを上げて、襲ってきたら食べてやろう、そんな軽い気持ちだった。

「漚！ 漚！」

返事を待っていると、後ろから声が聞こえた。アリスの声だ。こっちに向かってくる。食べるのをやめた私は、鬼二人の胴体しか残っていない死体を森の奥の方へと放った。茂みに消えて、見えなくなる。

「漚、だいじょ……」

「お姉ちゃん」

アリスはさすがに、固まっていた。血の海になった地面の中心で、血塗れになった私がいたのだ。驚くのも、無理はない。

「どうしたの、これ」

「鬼二人に襲われて、許してと言ってもやめてくれなかった。攻撃してきたから反撃したら、死んでしまった」

全く嘘はついていない。だけど、なぜが罪悪感が身を包んだ。

「そ、それで、その、えっと」

「ごめんなさい、お姉ちゃん。血が吸いたくなって、お腹も空いてたから……食べてしまった」

アリスはさらに驚いて、それから一度首を振ると、ゆっくりと私に近づいてきた。

「永遠亭にはまだ行くつもり？」

「うん、もちろん」

私は私のことを知る権利があるし義務がある。そう思う。

「わかったわ。ついていってもいい？」

さっきとは違い、私は頷いた。アリスに感じていた渴きを、私は感じなくなっていた。よかった。心の底から安堵する。

ただお腹が空いていただけだったんだ。だから、思考回路が変になっていた。そういうことだ、きっとそう。

「うん、一緒にいこ、お姉ちゃん。おてて、つないでいい？」

「ええ」

しっかりと手を繋ごうとして、自分の両手が血に濡れていることに気が付いた。

「あ、ごめんお姉ちゃん。手が汚れてるから繋げない」

そう私が言うと、少しだけ残念そうな顔をして、しかたないわね、と言った。

「じゃ、行きましょうか」

「うん」

さっき聞こえてきた不思議な声はなんだったのだろう。そんな疑問を私は持ったけれど、アリスには言わなかった。

私とアリスは永遠亭に向けて足を運んだ。まだ、アリスからの愛情は感じる。

鬼を食べても、私を家族だとみてくれる彼女の愛は、普通の愛では、ないかもしれない。私はそう感じ始めていた。

けど、心地いい。だから、まあいいか。そう思った。

それから何事もなく歩いて永遠亭に着く頃には、昼前になっていた。

訪れた永遠と私

「あなた、結構運悪いのね」

診察室で、私はエイリンにそう言われた。アリスは今待合室で私のことを待っている。

私はここに来て一番最初に事情を包み隠さず言って、調べて欲しいと頼んだ。エイリンは了承してくれて、それからいろんな検査を受けた。そして、今その結果を聞いているわけだ。かなり時間が経った。もう日が傾いている。

アリスがいないのは、家族にいらぬ不安を与えぬようにするため、らしいが……。何か、問題でもあったのだろうか。

「そうですか」

「ええ、最悪」

運、の問題なのだろう。幻想郷にくる前も、何度も攫われ、何度も死にかけた。運が悪いから、このようなところにいるのだろうか。「三日間で、全く別の症状で、三回もウチの診察を受けたのってあなたくらいよ。しかも」

エイリンは私の体を上から下までじっくりと眺めた。

「しかも、種族まで変わるなんてね」

「……」

私は今黙って話を聞いているわけだ。

自業自得、吸血鬼になったのは自分が悪い。だが、好きで吸血鬼になったわけではない、と叫びたい自分もいる。自分が二人になったような感覚に、目眩を覚える。

「で、いろんなことをやってもらったわけだけど」

光を当てられたり握力計を握ったり、意味のわからない質問に答えさせられたり。本当に、疲れた。これでわかりません、だったら暴れてやろうか。

……何を私は。自然に暴力を振るうことが頭に入っていて、自分

で自分に恐怖する。それはともすれば、笑える光景なのだろうか。

「結果を言くと、あなたは規格外、よ」

「測るまでもなく弱い、ということ？」

エイリンは首を振った。

「測れないほど強いということよ」

私は、思わず固まった。私が、強い？　なぜ？　普通、噛まれた

吸血鬼は弱いというのが相場なのに。

「あなたは普通の人とは違う体なの」

「……吸血鬼、ですから」

エイリンはまた首を振った。いや、まあ、エイリンが能力のことを言っているのはわかるのだが、それでも一応、知らないふりをしない。

「違うのよ。あなたには攻撃や支援を増幅する力があるの」

「そうなんですか」

普段通りに答える。エイリンは私に続きを話す。

「だからあなたは、レミリアから注がれた『吸血鬼としての力』を増幅できるだけ増幅させて、その結果、真祖もかくや、というほどの力を持つに至ったわ」

「しん、そ？」

知らない単語だった。どんな意味を持つのだろうか。

「そう。吸血鬼の中の吸血鬼。人々の畏怖をそのまま形にしたかのような力を持つ、まさしくバケモノ。それが、真祖」

私は、頭が殴られたような衝撃を感じた。バケモノ。私が、人から恐れられる、怪物。創造はしていたが、そんなものに、私はなっってしまったのか。

「……レミリアも、真祖？」

「本人は真祖の直系を主張してるけどね」

つまりは、違うということだ。私はレミリアよりも強くなったのだろうか。

「それからあなたは、吸血鬼の弱点の殆どをもっていないから」

「え？」

「真祖は本当にバケモノだからね。太陽の光なんてちょっと熱いくらいにしか思わないし、水の中だってちょっと嫌、くらいにしか感じないわ」

日光も大丈夫で、水の中も平気？　なんだ、それは。弱点のない吸血鬼なんて、バケモノそのもの……なのか。

「治らない？」

エイリンは黙って首を横に振った。

「あなたの場合、吸血鬼としての力や吸血鬼の血を排除しても、僅かに残ったそれらを極限まで増幅させるから、かなり強力なものをつかわないとダメなの。そして、その強力な手術や薬は、幼いあなたには耐えられないわ。吸血鬼じゃなくなった瞬間死ぬ、なんて嫌でしょ？」

「……そんな」

「ごめんなさい」

……これが、医者が匙を投げる、というものか。初めて経験したが、こんな経験一度としてしたくなかった。こんな絶望を味わうのか。

「……でも、吸血衝動を抑える薬くらいは処方できるわ」

「どんな薬？」

「血を吸いたい、って気持ちを少なくしてくれる薬、よ。でも、毎日三回、飲み忘れたら我を忘れるくらい飢えや渴きを感じるのだけど……」

「じゃあ、いらない」

もし飲み忘れて、アリスに襲いかかってしまったら？　そうになったら、私は家族をまた失うことになる。そんなことになるくらいなら、いくら苦しくても頑張って耐えた方がいい。

それに、吸血衝動を抑えたところで、私がバケモノであることは変わらないのだ。

「ありがとうございました」

私はエイリンに礼を言うと、診察室を出た。

診察室の外ではレイセンが立っていた。ずっと待っていたのだろうか？ ノーマは、どこだろう。殺された……ということはないだろう。この人がそんな酷いことをするとは思えない。

「アリスはこっちの部屋にいるよ。いこ、滞ちゃん」

そう言っ、案内してくれる。少し長めの廊下をしばらく歩いてい、かぐや姫とすれ違った。

「あら、この前の」

「こんにちは、姫様」

私は挨拶をした。綺麗な、本当に美しい人。もっとずっと、見ていたい。

「永遠が欲しくてきたの？」

「え？ いや、そんなことは」

「ふふふ、あなた見たところ日本人でしょ。ダメよ、遠慮しちゃ」
そう言っ、かぐや姫は袂をまさぐって、何かの薬瓶を取り出して私にくれた。

「永遠が欲しくなったら、この薬を飲みなさい。それだけで、永遠が手に入るわ」

私は手の中にある薬瓶を見つめる。これが、永遠。これを飲むだけで、私は死なずに、母と同じにならずに済む。でも、お父さんとも会えなくなる。

……どうしようか。

「……姫様、ありがとうございます」

とりあえず、もっていることにした。

「そんなかしこまらなくてもいいのよ？ 私はずただの居候、帝に求婚された姫、なんて過去のことよ」

そう言っ、姫様は優しく微笑んでくれた。

「……そう、ですか」

憧れ、というものは人によっては苦痛を与える。だから、口にはしなかつた。

「それじゃあね。永遠を手に入れたら、とりあえず私のところに来なさいな。永遠の生き方というものを教えてあげるから」

そう言うのと姫様は私達とは違う方向へと行ってしまった。

「……綺麗な人だね、本当に」

「顔だけはね」

どういう意味だろう。憧れはその人の人となりを知らないから抱けるもの、というのをどこかの本で読んだ。憧れを失望に変えたくない私は、レイセンに深く聞かなかった。

レイセンは一つの部屋の前で止まると、扉を開けた。

「終わりましたよ、アリス」

中では、退屈そうに足をぷらぷらさせていたアリスと、全身を包帯に包まれた人間がいた。

「終わったの？ そう。じゃ、行きましょうか、漣」

「……お姉ちゃん、その人は？」

アリスは怪我人に対してお父さんが私に向けたような冷たい目を向けた。

「東野よ」

「……」

私は部屋の中に急いで入って、アリスと包帯だらけの男との間に入って、両手を広げた。

「お姉ちゃんに手を出さないで」

でも、心の奥にいる私は、手を出して欲しいと言っていた。そうすれば、誰にも咎められることなく血が吸えるから。

違う。私はアリスを、守りたいんだ。だから、こうしているんだ。

「……漣」

アリスが、私を呼ぶ。

「手を出させはしない、東野」

まだ、恐怖は消えない。ここにきた最初の日におもちゃにされかけたことが、まだ頭にこびりついている。気持ち悪くて、吐き気がする。こんな、こんな満身創痍の人間にでさえ怖いだなんて。

「……」

私は、ふと思う。でも、最初の日と、今は違う。この恐怖を消す方法を、私は知っている。しかも、その方法は簡単だ。

「……東野。あの時の復讐、してもいい？」

私は静かに言う。両手を下ろして、手を、物を掴む時の形にする。

「滯」

アリスの声が聞こえる。……。

思いとどまることができた。東野をバラバラにして、その肉を食らう衝動は消えてくれた。でも。ただで赦しはしない。

「あのとき、私は気持ち悪かった。何度舌を噛もうかと思ったくらいに。私の言葉をカケラも信じず、独りよがりな行動を続けた。あの時私の心に刻まれた恐怖を、あなたにも刻み返してあげようか」

東野は首を振って否定する。声は出ないようだ。よほど、丹念に燃やされたのだろう。

でも、許さない。こいつが私にしたように、私もこいつに恐怖を刻む。

「たとえ神や閻魔が許しても……私はあなたを許さない。この、強姦魔」

吐き捨てると、アリスの手を引いて部屋の外に出る。

「それじゃ、レイセン。私は帰る。エイリンに、よろしく言うておいて」

「え、ちょっと」

一方的に別れを告げると、私はアリスを連れて外に出た。アリスを連れて、私は歩く。

「……ずいぶん、気が大きくなったじゃない」

竹林に入ったところで、アリスが私に言った。

「……ごめんなさい」

「責めてるわけじゃ、ないんだけどね。まあ、いいわ。とりあえず、家に帰りましょうか」

私は頷いた。アリスと手を繋いで、私は帰路についた。

「……ねえ、お姉ちゃん」

「ん？」

私は手に持っている薬を、アリスに見せる。透明な、水のような液体だった。でも粘度がとても高く、まるで水あめのようなのだった。

「なんのお薬？」

「かぐや姫がくれた、永遠が手に入る薬、だって」

アリスは難しい顔をした。そんなアリスに、私は言う。

「……でも、きっと私からかわれてるんだよ。死なずにいれるだなんて、ありえないもの」

「吸血鬼だって、あなたの世界ではありえないものはずよ？」

私は黙った。手の中にある薬を見つめる。これを飲めば、死なずにいれる。のだろう。

「……何を迷うの？」

「これを飲めば、お父さんに会えなくなる」

アリスはため息をついた。

「ま、気持ちわかるけどね。飲んでほしいかな」

私はアリスの方を見た。アリスの表情からは、何を考えているのか読めない。

「どうして、そう思うの？」

「あなたが死ななくなれば、あなたの死に様を見ずに済むわ」

「やっぱり、見たくないよね」

人の死に様なんて、見れたものじゃない。昨日のことのように思い返せるほど、母の死に顔は凄惨だった。

「……どうしよう」

「ま、しっかり悩みなさい」

飲む、飲まない。いくら悩んでも、答えは見えなかった。

死にたい理由はお父さんに会いたいから。死にたくない理由は母のようになりたくないから。どちらにせよ、両親が絡んでいることに、苦笑すら浮かびそうだった。私の表情は、相変わらず変わらないけど。

「……アリスは、どうしてほしい？」

「さっき言ったじゃない」

「私が死なないと、嬉しい？」

アリスは頷いた。新しい、この世で最も大切な人が、頷いてくれた。でも、でも、お父さんと会えなくなるのは、困る。どうする。

そこで、思いつく。

「ねえ、アリス」

「ん？ 決めたの？」

「幻想郷で、できないことってなに？」

「ん？ ……そうね、すぐには思いつかないわ」

「生き返らせることって、できるかな」

アリスは、首を振らなかった。頷きも、しなかったけど。その反応で、私は確信する。簡単ではないだろう。けど、人を生き返らせることはできる。

「……質問の意図を、聞いてもいいかしら」

「決まってる。お父さんを、生き返らせる」

アリスは苦い顔をした。

「いくら時間がかかっても、いつか！」

私は決心すると、薬瓶のふたを開けて、薬を飲む。

言葉にしたくないほど残酷な匂いがした。もし味を感じる体だったら、どんな味がするのだろう。

とにかく、私は飲み切った。味を知らなくてよかった、と心の底から思った。

「……滞。あなたは、まだ」

「大丈夫だよ。お父さんの蘇生は気長にやるから。それよりも、これですと家族だね、お姉ちゃん」

私はぎゅっと、アリスの腕を抱きしめた。

「……なんだかこそばゆいわね」

「嫌だった？」

「不快だったら振り払ってるわ」

不快じゃない、と言われて嬉しくなる。ふと、思い出す。

「あ、そうだ。かぐや姫のところに行ってもいい？」

「どうして？」

かぐや姫に言われたことを思い出したのだ。

「永遠の生き方を教えてくれるんだって」

「ふうん」

アリスは立ち止まって、私の顔を見た。

「今から？」

「……だめ？」

アリスは首を振ると永遠亭の方へと足を向けた。私も、アリスについて歩く。

「もう、あなたは永遠なのね。少し、感慨深いわ」

アリスは僅かに微笑んだ。

「アリスは、永遠なの？」

「魔法使いだしね。それに近くはあるわ」

ということは、アリスに先立たれることはないのだろう。きっと。

「……滯」

「何？」

「私の亡骸は、花畑に埋めて」

私は、俯いて地面を見る。

「そんな話、しないで」

「……ごめんなさいね」

謝ってはくれたけど、さっきの遺言じみた言葉は本心なのだろう。

「……アリス、死なないでね」

「努力するわ。全力でね」

そう言ってくれることが、うれしかった。

それから私たちは、永遠亭につくまで無言で歩いた。

きさくなお姫様と私

「あれ、アリスに滞ちゃん。どうしたの？」

永遠亭につくと、ノーマを連れたレイセンが出迎えてくれた。ノーマは出会った時と変わらず黙っていたが、その顔は少し明るかった。

「姫様は？」

「え？ ……まさか、本当にあれ飲んだの？」

なんだろう、その言い方は。そうか、私は騙されたのだろう。かぐや姫の少しの戯れ。それに付き合わされただけ。悲しくなったが、よくよく思い返してみれば、そう簡単に永遠が手に入るわけがない。子供を騙すなんて趣味が悪いとは思うけど、楽しいのは事実だろう。

「うん」

「何考えてるの？ アリス、なんで止めなかったの？」

「いや、だって」

レイセンの勢いに、アリスはたじろぐ。

「だって、だってなに？ アリス、こんな子供に永遠を背負わせるの！？」

永遠を、背負わせる？ 何を言っているのだろう。永遠は素晴らしいものではないのか？

「そんなこと言われても」

「あなた仮にも滞の姉名乗ってるんでしょ！？ なら、止めなさいよ！」

レイセンが叫んでいると、彼女の後ろから姫様がやってきた。

「何事？ 騒がしいわね」

「姫様。あの薬、飲みました」

そういうと、かぐや姫は手で口を覆って、上品に笑った。ああ、私はからかわれたのか。まあ、この人に遊ばれるのなら別にいいか。「それはそれは。では、こっちにいらっしゃいな」

私は靴を脱いで、永遠亭に上がる。レイセンに止められそうになるけど、かわしてかぐや姫のそばまでいく。

「ふふふ、あなたの目、まだ疑ってるわね」

「すみません」

かぐや姫は首を振った。綺麗な黒髪が舞う。

「いいえ。疑うな、というほうが無理よ。だから、信じさせてあげないよね」

ずっと、私は細長い指に絡め取られるように抱き寄せられた。かぐや姫の柔らかい匂いがする。ものすごく、安心する。私はかぐや姫の顔を見上げる。にっこりと微笑んだかぐや姫は本当に、うっとりするほど魅力的だった。

「本当にあの薬を飲んだのね？ 嘘だけはつかないで」

私は頷く。ほっと、かぐや姫は胸を撫で下ろした。その手は一度と袂にいき、何かを握り込んだような形で私の胸まで運ばれた。

「騙されたかどうか、不安でしょ？ その不安、消してあげる」
ざくり、と、私の胸で音が鳴った。

「……！」

私は腕を振るって、かぐや姫の右手を弾いた。すると、かぐや姫の腕が切り落とされ、永遠亭の床に大量の血を撒き散らした。私の胸からも、見るからに致死量だとわかる量の血が流れている。胸には、大きなナイフが突き刺さっていた。

「姫様！」

「濡！」

アリスは私に、レイセンはかぐや姫に向かって駆け出した。

「大丈夫、濡！」

「……」

声を出せない。苦しい。殺される……？

「ふ、ふふふ。どこからそんな力が？」

「私は……吸血鬼……」

「あら。それはそれは。不滅の吸血鬼なんて、素敵ね」

かぐや姫がレイセンを右手で押しのけ、私の方へときた。私もアリスの前に出て、両手を広げてアリスをかばう。

「姫様、私で遊ぶなら構いませんが、アリスには何もしないでください」

「怯えなくても大丈夫、アリスには何もしないわ」

にっこりと微笑んだまま、かぐや姫は私のそばまで来て、私の胸のナイフを抜いた。

「ぐっ……」

私は胸を抑えて、うずくまる。

アリスが、私とかぐや姫の間に割って入った。

「どういうつもりかしら、死なずの姫。うちの妹傷物にして」

「ふふふ、見てみなさい、アリス。ざっくり刺さってるわね。どう見ても心臓にも刺さったわね。ちなみにこれは銀製品。さすがの吸血鬼でも、これは効くはずよ。真祖だったとしても、しばらくは穴があきっぱなしになるわ」

私はアリスの足の間からかぐや姫の掲げるナイフを見た。長いナイフの半ばまで血で濡れていた。

「最初なら、このくらいかしら。ほら、どきなさい」

「何を」

ぐい、と半ば無理やりアリスをどけると、私の肩をつかんで上体を起こした。始終笑顔のままのかぐや姫。美しいけど、恐ろしかった。

「どう？　これが不老不死よ」

つ、とかぐや姫は私の胸をなぞった。くすぐったいけど、痛くはない。かぐや姫の手は両手ともちゃんとあったし、私の胸も完全な状態だった。

「……私、死んだかと思った」

「これからは死なないわよ。いくら死にたくてもね」

そう笑うと、かぐや姫は私にナイフを握らせた。

「いきなり刺してごめんなさいね。でも、これが一番なの。さ、ど

うぞ」

そういうと、かぐや姫は両手を広げた。どういう意味だろう。

「どうしたの？ お返しよ。刺してもいいわよ」

「え、いや、そんな」

私はナイフを捨てた。あら、と言った表情をかぐや姫はした。

「……あのね。輝夜。この子が刺せるわけじゃないじゃない。というか刺させるのですか」

私のすぐそばまで来ると、アリスはナイフを拾ってレイセンに渡した。

「子供にこんなさせるんじゃないわよ。教育に悪いわ」

「ふふふ、それはごめんなさいね」

そう言くと、かぐや姫は私に向かって丁寧な頭を下げた。

「ごめんなさい」

「え、う、うん。気にしないでください」

私がそういうと、かぐや姫は私を抱きしめた。荒々しいけど、暖かみのある抱き締め方だった。

「嬉しい！ ホント、あなたを選んで正解だったわ！ 永遠によろしくね、滞。これからあなたと私は、永遠の親友よ！」

強引な人だ、と思った。なんていうか、イメージと違う。

「え、ええ。よろしく願います」

「だめ！ 敬語なんてダメよ、滞。友達に敬語なんて使う？」

私は首を振った。

「でしょ！？ だ、か、ら！ あなたも私にタメ口！ わかった？」

「は、はい」

「はい、はだめ！」

「……うん」

私がそう言っていると、かぐや姫、カグヤはぱあっと明るく笑った。

「うんうん、それでいいわ！」

強引。イメージと違う。でも、私はこの人となら友達になれそうだと思った。さっきまでは殿上人だった人が、自分のいるところま

で降りてきてくれたような、そんな感じがした。

「……殆ど別人じゃない」

後ろで、アリスがため息をついて言った。

「姫様、親しい人には甘えるタイプですから……」

「ふうん。全く、妬けるわね」

アリスは苛立たしそうに言った。

「じゃ、濤。約束どおりレクチャーよ。死なずの体で気を付けなきゃいけないところはたったひとつ」

「何？」

「簡単。普段と変わらない生活することよ」

……それは、なんの秘訣なのだろうか。

「ほら、私ちよっとした実験もかねて一日一度自殺する生活を百年続けたことがあるけど、あの時の私は本気で狂ってたわ。普段通りの生活に戻したら心も戻っていった。生活は心に影響するわ。だから、生活には気を付けてね」

「うん、わかった」

私の返事にカグヤはまた笑った。

「わかってくれてありがとー！　ねえねえ、もっとお話しましょうよ！」

「ね、ねえ、カグヤ。私、ちよっと疲れちゃった」

私がそう返すと、カグヤは私を見た。

「あら？　……それもそうね。刺されたことなんてないだろうし、ましてや死ぬような目に遭ったことなんてないだろうしねえ」

「死ぬような目には何度も遭った。でも、その度に疲れてその度に眠った」

私の言葉に、カグヤは苦い顔をした。

「あら。ごめんなさいね。傷に触ったかしら」

「今はもう大丈夫」

そう言って、私の方からカグヤを抱きしめた。すぐに抱きしめ返してくれる。

「あらあら、本当に可愛らしい友達ができて、私は幸せものだわ」

「私も、こんな綺麗な人が友達で嬉しい」

「ふふふ、ありがとう」

そうしてしばらく私達は抱き合うと、どちらともなく離れた。

「私、今日は帰るね。またゆっくり時間がとれるときにここに来る」

「嬉しい。待ってるわ」

私はアリスの方を見た。

「いこ、お姉ちゃん」

「……ええ」

私はアリスの手を握って、玄関まで行く。靴を履いて永遠亭を出ると、カグヤが見送りに来てくれた。

「それじゃ、気をつけてね！ また遊びに来てね！」

私は手を振って返事をした。

「姫様、廊下の片付け、一緒をお願いしますね」

「え、鈴仙やってくれないの？」

「なんで姫様が故意に、汚す必要もないのに汚した片付けを一人でやらなきゃいけないのですか？ 甘やかすなど師匠から仰せつか

っているんですよ」

「ええー？ 鈴仙のいじわる！」

「いじわるで結構です。では、行きましょうか」

「はい」

そんな微笑ましいい会話を聞きながら、私は永遠亭をあとにした。

「カグヤ、思ったより楽しい人だったね」

「刺されたのよ？」

私は顎に手を当てた。

「まあ、死んでないし」

「その理論でいくならあなたこれから先何されても許すことになるわよ？」

たしかに、普段通りの生活を続けろと言ったカグヤの言葉に従うなら、怒るべきなのだろう。

「……でも、やっぱりいいよ。カグヤだけは、特別」

「ホント、あんた不老不死になったのね。実感するわ」

……少し、棘があるように感じた。でも、それも無理はない、か。心配してくれたのを袖にしたようなものだから。

「大丈夫、アリス。私、もしあれがカグヤ以外の人間だったら、許さなかったから」

「私でも？」

私は首を振った。

「アリスに殺されるなら、まあいいか、って思う」

アリスは不思議そうな顔をした。

「なんでいいのよ？」

「だってさ、私にとってアリスは、大切な、大切な家族なの。そんな家族に殺意を抱かせるくらい怒らせるような私なんて死ぬべきだと思う。もし何か理由があって殺されるなら、きつと、相当切羽詰まっているんだと思う。家族のために死ぬるなら、本望だよ」

はぁ、とアリスはため息をついた。

「あんた、そういう子だったわね。全く、本当に変だわ」

さつきと違って、柔らかい言い方だった。

「吸血鬼で不老不死。これで普通だと言う方が異常だと思う」

「違うわね」

アリスは笑ってくれた。昨日ケンカしたことが嘘かのよう。

「アリス、昨日は、ごめん」

「ん、何が？」

「テーブル、壊して」

そう言うと、アリスはうーん、と額に汗を流した。

「ま、ちよつとは困るけど、代わりになるのは家の周りに生えてるし、人形も……いえ、違うわね」

一度言い直すと、アリスは私を見て言った。

「あなたが、代わりのテーブル作ってちょうだい？」
仲直りの印、
よ」

そう言ってくれたことが、私の心に残った。
ああ、私はアリスと家族なんだ。
私は家族がいる幸せを噛み締めた。

ちよつとした転機と私

次の日。私は朝から森に出て準備運動をしていた。小学生をやっていたところに覚えたラジオ体操をして、一本の大きな木の前に立つ。「お姉ちゃん。これくらいの大きさでいい？」

私が指をさした木は、直径一メートルくらいの太さで、かなり上まで伸びていた。方々に伸びているかは木材としてつかえるかどうかはわからないけど……。

「ま、いいんじゃない？ 別に、合板でもいいんだからもつと切りやすいのでもいいのよ？」

私の少し後ろでは、小さな人形を四体、周りに浮かせたアリスが立っていた。

運搬用の人形だそうで、あの小さな体で大きなものを持てるそう

だ。

「じゃ、始める」

私は宣言すると、木の硬そうな皮を思い切り殴った。木の皮がめくれ、吹き飛ぶ。ぐしゃりという音がして、例えようもない激痛が拳に走った。

「……………っ!？」

私は拳を抑えてうずくまる。

「ちよつと滯大丈夫!？ だから人形で切ろうって言ったじゃない!」

アリスが駆けつけきてくれて、私を覗き込んでくる。私の拳は砕け、指が方々に歪んでいた。

「あ、あのね。いくら吸血鬼で不老不死だと言っても、いきなり無茶苦茶できるようになるわけじゃないのよ？ あなたは変わらず私の妹なんだから、自分の体を大切に……」

「治った」

すっかり元通りになった拳を握りこむと、少しだけ抉れた木にめ

かけて腕を振り上げ……。

「……やっぱ怖い。痛いのは嫌。アリス、頼んでいい？ 運ぶのは私がやるから」

手を下ろして、木から離れる。

「もう。最初からそう言えばよかったのに」

「自分の力を試したかった」

「その調子で人に勝負仕掛けないでね？ 幻想郷には幻想郷の勝負ルールがあるんだから」

物凄く大きい、木を伐採する用のノコギリを持った人形をアリスは召喚し、木に配置させた。木の反対側にもう一体の人形を配置させると、そのノコギリのもう一つの取っ手を持たせ、引かせる。ギコ、ギコ、と小気味のいい音と共に、木の粉があたりに舞う。

……あれが人の胴体で、飛ぶ粉が血飛沫だったら、もっと綺麗だろうな。悲鳴も聞こえて、きつと素敵。

頭に湧いた残酷な想像を、頭を振って否定する。な、何を私は。アリスはこっちまできて、そばにあった大きめの岩に座る。視線は、ノコギリを動かす人形に向いている。

「ルール？ どんな？」

「三つから四つの攻撃の手順を決めたカードを作って、対戦相手に宣言。カード全部使い終わって倒し切れなかったら、負けよ」

「へえ」

面白いルールだな、と思った。

「相手が死ぬまでやるの？」

「まさか。被弾数で勝敗を分けるのよ。だから、多くの人は攻撃の手数を増やすスペルカードを作るわ」

「……スペルカード」

私はその単語を反芻する。

「そうよ。あなたも作る？ 作り方なら、教えてあげるから」

私は首を振った。

「いい。私、戦いを知ったら抑えが効かなくなるかもしれないから」

私の言葉に、アリスは意外そうな顔をした。

「あら。そうかしら。最後まで冷静に戦うと思うのだけど」

「冷静なまま、極限まで戦いを楽しむと思う。それは、戦いに酔って戦闘に狂うのとほとんど同じ」

「……まあ、そうかもね」

アリスは納得した様子ではなかった。本音でないのが、わかったのだろうか。

「実を言うと、我を忘れそうだから嫌」

「ああ、納得。ま、いきなり吸血鬼になって、しかも不老不死。過ぎた力って持て余しちゃうよね」

まるで経験があるかのような口ぶりだった。

「経験、あるの？」

「一度だけ、ね！ ま、私も弾幕勝負、好きな方だしね。戦闘自体は、好き。他人の命がかかっているのは、嫌だけどね」

意外な言葉だった。優しいアリスから、戦闘が好きだなんて言葉を聞くなんて思わなかった。

「ふうん、そうなんだ。私も、一度戦えばアリスにみたいに見えるかな」

「さあ、わかんないわ。フランみたいにならないとも限らないし」

「……フラン？」

知らない名前だった。そもそも名前なのだろうか。慣用句的な使い方をしていても限らないし。

「レミリアの妹よ。閉じ込められてたからか、それとも生来のものなのかは知らないけど、ぶっ壊れてるけどね」

つまり、アリスは私が戦闘で壊れないかどうかを心配してるわけ、なのだろうか。

「それにしても、ここ二日であなた、変わったわね」

「そうだね」

吸血鬼になったのが二日前だなんて信じられない。しかも、その次の日に、私は永遠に生きるようになった。

「で、永遠で、吸血鬼になった心地はどう？」

「ん……」

私は言うべきか言うまいか迷う。ことあるごとに残酷な想像をし
てしまうのは、なぜだろうか。

吸血鬼だからなのか、それとも私が元々持っているものなのか。

「……ちよっと、変な感じ」

「そうでしょうね。でも、もっと何かないの？」

私は首を振る。何もない、と思う。

「ふうん、そう。そうそう、ずっと思ってたんだけどね」

「なあに？」

アリスが言うのに合わせて、私は返事をする。

「あなた、お父さんのことになる人と別人よね」

「……そうかな」

私はそう言うしかなかった。自分の中では、他の自分と違うとは思
っていないからだった。

「あなたは、お父さんに対してだけは、年齢通りよ。なぜかしら？」

年齢通り、か。私の年齢は、十歳。たしかに私の普段は少し変で

はあるかもしれない。

「そんなのわからない。私は、私」

「そうよね。変なこと聞いてごめんなさい」

アリスがそう言ったとほぼ同時、大木が大きな音を立てて倒れた。

「……運ぶ」

「ありがと。じゃ、あなたは根の方を持ってくれる？」

アリスの人形四体が木を持ち上げ、私もそれを手伝う。人形につ
いて、アリスの家まで向かう。

「今日は……どうしようかしら」

アリスが歩きながら悩んでいると、一羽のハトが飛んできた。頭
が赤く塗られていて、他のハトとは違いアリスが手をあげると、自
然にそこに止まった。

ハトの足には、何か紙のようなものが結わえ付けられていた。

アリスはそれをほどこき、広げた。

「……マリサが結構やったみたい」

「へえ」

「マヨイガ、じごく、地霊殿、天狗の山……他にもいろいろ行ってるわね」

定時連絡、か。そういえばアリスとマリサは外来人について他の権力者達に教える為に各地を回っているんだった。

「ねえ、みんなに伝えたの？」

「ん？」

「その、レイムが言ったことを」

アリスは頷いた。

「ま、あなたが気絶してたり眠ったりしてる間にね。……テーブル作ったらいったん博麗神社に向かいましょうか」

アリスの決定に、私は頷いた。

「……重くない？」

「全然」

持ちながら、自分でも驚いていた。まさかこれほど大きな木を空気のよう感じるなんて。

「ほんと、強くなったわね。もう襲われても対処できるわね」

私は頷く。是非、襲って欲しい。そうすれば、なんの気兼ねなく血を吸えるから。

「ねえ、この森って危険なの？」

昨日一人で歩いていきなり襲われたことを思い出し、聞いて見た、

「まあね。生身の人間が単身で入ったら二時間と生きられないって言われるくらいだから」

すごい。この森なら、食糧には困らないかも。

「まあ、妖怪もバカじゃないから私みたいにあからさまに能力持ってる人間にまで攻撃してこないわ」

ということ。私も、そのあからさまに、という人種にはいるのだろうか。入らなければいいのに。

「ま。いいじゃん、そんなこと。さ、ついたわよ」

アリスの家の前には、天狗がいた。黒い翼に赤い小さな六角帽子、そして一本足の高下駄。その天狗は女の人で、年齢は十六歳くらいだろうか。

「あら、射命丸じゃない。ちょっとどいてくれる？」

「あいや、お久しぶりです、アリスさん」

挨拶はしたけど、雰囲気はあからさまに適当だった。シャメイマルは私の方を見ると、そばまできた。

「こんにちは、お嬢さん。お名前、教えてくださいませんか？」

「ミオ・マーガトロイド」

「偽名はいいから、本名教えてくださいな」

「これが本名」

「あやや」

なんだろう、この人は。メモ帳片手に、何をするつもりだろうか。

「じゃあ、幻想郷に来た感想は？」

「なぜ、そのようなことを聞くの」

取材だと、彼女は言った。取材？ 新聞記者だろうか。

「取材はお断りさせていただきます」

新聞は、きらい。テレビのニュースも、きらい。

「まあまあ、そう言わずに。感想は？」

この人、強引。カグヤと違う強引具合。私は、この人が苦手。

「怖いところ」

「……なぜそう思ったのか、聞かせてもらってもいいですか？」

私は唇に人差し指を当てた。

「秘密」

キョトンと、シャメイマルは目を瞬かせた。にやりと笑うと、メモ帳にペンを走らせた。

「ありがとうございます。では、最後の質問です。あなたの能力は？」

不思議なことを聞いてきた。なぜ、このどう見てもひ弱な少女に

しか見えない私に、そんなことを？

「ない」

「ないことはないでしょう」

「なぜ」

私はアリスの方を見た。不快そうに顔を歪めている。

「ご存じないようなので伝えておきますと、ここ最近、幻想郷にきた全ての外来人に特殊な能力を持っているのです」

「……東野も？」

シャメイマルは、首を傾げた。

「東野？」

「……なんでもない。ノーマも？」

今度は、頷いた。ニコニコとした様子でメモ帳をめくった。

「ノーマ君はですね、『生き続ける程度の能力』を持っていますね。何をされても、何があっても絶対に死なない。不老不死とも言います。まあ、不幸があつて、ノーマ君は口を閉ざしてしまったようですが」

メモ帳に書いてあることをそのまま読みあげるような口調だった。不幸なこと。それは、なんだろう。嫌な予感がする。その中身は、知りたくない。

「ちなみに、不幸というのは」

「射命丸。相手を考えなさい」

耳を塞いだ私を慮ってか、アリスがぴしゃりと言ってくれた。

「あや、これは失礼をば。では話を戻しますが、あなたも外来人なのですから、何か力があるはずだ、と踏んだわけです」

「私は何の力も持ってない子供」

私が言うと、シャメイマルは呵々大笑した。

「何をバカな。あなたの手に持つるのはなんですか？」

私は木から手を離れた。それでも変わらず、木はアリスの人形に持ち上げられている。シャメイマルは驚いたような顔をした。そこでですかさず私は言う。

「何の力も、私は持っていない」

「……ふむ。わかりました。いつかまた。それでは、失礼します」

次の瞬間、豪風が吹きすさび、私は思わず目を閉じた。次に目を開けるともう烏天狗の姿はなかった。

「急に離してごめん」

「中々いい判断だったわよ」

アリスはそう褒めてくれた。

「あの人は？」

アリスは人形をあやつり、大木を地面に下ろした。ノコギリを持った人形を配置すると、まとまった形に切らせ始める。

「射命丸文。新聞記者よ。幻想郷で一番速い天狗よ」

「ここで、一番」

そんなすごい人だったんだ。

「まあ、でもあなたも思ったと思うけど、ロクな奴じゃないから」

私はなるほど、と思った。あんな人も、ここにいるんだ。

「でさ、さっきの話聞いてどう思った？」

「能力のこと？」

アリスは頷いた。私はエイリンから能力のことを聞かされているけれど、アリスはそれを知らない。隠そうとしてくれたことを無下にするわけにもいかないだろう。

「ないんじゃないかな。そもそも私、吸血鬼に、不老不死。十分特殊」

まあね、とアリスは苦笑した。ゴトリ、と音がした。木が切り終わってちょうどいち大きさに揃えられた。これからテーブルの形に削っていくのだろうけど、アリスは人形達を操作しなかった。しばらく悩むと、頷いた。

「……ま、テーブルはあとでいっか。ちょっと聞きたいことがあるから、とりあえず霊夢のところ行くわよ」

アリスは人形達にノコギリを捨てさせ、私の脇の下まで移動させた。また運んでもらうのか。してもらってばかりは、居心地が悪い。

……けど、飛ぶ時ばかりは、運んでもらわないといけないのも、事実。

「じゃ、急いでるから飛んで行くわよ」

何度か体験した気味の悪い浮遊感と共に、私の体は浮き上がった。幻想郷を見下ろしながら、かなりの速度で移動する。

それから博麗神社に降り立ったのは、すぐだった。

新勢力と私

最初にここに来た時、私は世界で一人きりで、アリスやマリサは何かを狙っていると本気で思っていた。

でも今は、アリスはお父さんと同じくらい大切な家族だ。

「いらっしやい、漑、アリス」

境内を竹ぼうきで掃除していたレイムは私とアリスを交互に見て言った。

神社の鳥居から歩いて来た私達とレイムとの距離は十メートルくらい。それでも、レイムの声はよく通った。

私はアリスの後ろに隠れた。なぜか、レイムに対する恐怖が消えなかった。

「……おかまいなく。聞きたいことを聞いたら帰るわ」

「そう。何？」

「外来人のことなんだけど」

「何かしら」

アリスはゆっくりと、切り出した。

「外来人に皆特殊な力があるって、どういことかしら」

「調査中よ」

嘘だ、ということがなぜかわかった。レイムは何かを知ってる。でも理由があって、言えない。どんな理由で言えないのだろう。

「……そう。わかったわ。あとそれから、映姫から伝言預かってるわ」

「？」

「あまり隠し事はないように、だつてさ」

そうアリスが言うのと、レイムは苦い顔をした。

「……そうね、わかったわ」

レイムがそう言ったとき、私は後ろに気配を感じて後ろを振り向いた。物凄い速さで、マリサが飛んで来た。境内に着地すると、砂

埃を上げながら減速し、アリスとレイムの間ぐらいの場所で止まった。

「マリサ」

「おう！ 元気にしてたか滞！ ん？ お前、目が……」

箒から降りたマリサは、真っ先に私のことを見た。

「ごめん、マリサ。私、私……」

「気にすんな！ あたしは気にしてないし、言いたくなけりや言わなくてもいいんだぜ！」

ぽん、ぽん、とマリサが私の肩を優しく叩いてくれた。凄く安心する。

「……ありがと」

「おう、どういたしまして、だぜ」

マリサはそう私に言うと、レイムの方に向き直った。

「レイム」

「……何よ」

レイムは、マリサの視線から目をそらした。

「聞きたいことが、ある」

妙に真剣な表情で、マリサが聞いた。その様子に観念したかのように、レイムはため息をついた。

「……中、行きましようか」

「そうだな。滞は、ここで……」

「私も行く」

マリサは、アリスの方を見た。

「ま、聞きたいっていうんなら、聞かせてあげれば？」

「いいのか？ その、やっぱり子供にゃ辛い話だし……」

アリスは首を振った。

「そんなの、覚悟してるでしょ。滞は、ちゃんとわかってるわ」
アリスの確信に満ちた表情に、二人とも頭に疑問符を浮かべていた。

「見ないうちに随分仲良くなったなあ」

マリサの疑問に、私達は顔を見合わせて答えた。

「なんたって、家族なもの」

「ね」

ふうん、とマリサは頷いた。

「ま、アリスがそこまで言うんなら、いっか。じゃ、行こうぜ霊夢」
「……ええ」

マリサに背中を押され、霊夢は神社の中にある部屋まで行った。私達も、彼女に続く。縁側のようなところから靴を脱いで上がる。アリスとマリサ、レイムはこの前のようにちゃぶ台を囲んで座った。この前と違うのは、私もその輪の中にいるということ。

「お茶、用意しようか」

席を立とうとしたレイムを、マリサが手で制した。

「……レイム。単刀直入に聞かせてもらう。……外来人が力づくで元の世界に帰ろうとしているのは、本当か？」

レイムはしばらく黙って、それから、深く、辛そうな表情で頷いた。

力づく、で？ どういうこと？

「私は初耳よ。説明お願いできるかしら」

アリスが不満顔で言った。蚊帳の外だったのが気に食わないのだろう。見たところアリスとレイム、マリサは仲が良さそうだし。

「前々から、特殊な力を持つてる外来人が帰りがって暴発しそうな動きはあったのよ。でも、特殊な力を持つてる外来人なんて滅多にいなかったから、幻想郷全土に及ぶほどの影響力はなかった。一人が暴れたくらいなら、瞬殺できるし」

レイムが言い切ることに、私は空恐ろしいものを感じた。

「最近、もはや異常なまでに、特殊な能力を持った外来人が増えてきて、その動きはさらに活発になった。それだけじゃなく」

レイムが言ったところを、マリサが繋げた。

「仲間を増やしてるんだろ？」

レイムは頷いた。

「その連中は、外人全員を仲間にして、自分達の意見が外人の総意であると主張したいのよ。まあ、そう言うのを異変として殲滅するのも悪くないんだけど、そんなことすりゃ人里の人から恐れられちゃうしなあ」

レイムの口ぶりは、恐れられてしまうことだけを懸念しているようだった。勝てる前提、殲滅できる前提で話を進めていて、しかもそれをアリスとマリサが疑問に思わないということが、怖かった。

レイムは、ものすごく強いのだろう。私なんか息をする間もなく殺せるくらいに。

「……でね、そいつらの問題点は、従わない外人人に危害を加えること、なのよね」

「どういうこと？」

私は思わず、声を上げた。発言するつもりは、なかったのだが。私が言っても、レイムは顔色を変えなかった。

「ま、あなたには大事な話よね。」

そいつら、『解放団』を名乗ってるんだけど、解放団に従わない外人人には酷いことしてる、ってもっぱらの噂よ。永遠亭って知ってるかしら？」

私は頷いた。

「そこにノーマって子がいたのは？」

それにも、頷いた。

「その子、ここにきた初日に解放団に誘われて……ね」

言葉を失うほどの目に遭わされた？ 不幸があったって、元の世界でじゃなくて、この世界でだったのか。

「私はまだ誘われてない」

私がそう言うと、レイムはうーん、と悩み始めた。

「たぶん、向こうがあなたのことを感知していないわけではないと思うわ。……でも、あなたこっちにきてからあんまり一人で行動してないでしょ？」

頷く。完全に一人になったときなんて、一度か二度だ。そこで、

思い出す。

そういえば、あの時、鬼二人を食べた時、声が聞こえた。あれが、解放団の？

「解放団の連中、私達幻想郷の人間を目の敵にしてるから、顔を合わせたくないんでしょ。だから、一人になったら誘われるかもね」顔を合わせたくないから、アリスべったりの私は誘われなかった、ということか。そして、離れたから私は勧誘されかけた。私は噛み潰して理解した。

「で、レイム。トップの名前と能力、割れてんのか？」

「ええ。御陵臣、『他人に感情の芽を植え付ける程度の能力』よ」

「何よそれ」

アリスが不思議そうな顔をして聞いた。

「言葉通りよ。そいつは小さな感情の芽を他人に与えることができるの」

「大したことないじゃん」

私はアリスの服の裾を引っ張って、注意をこちらに向けた。アリスがこつちを向いたところで、私は首を振った。

「お姉ちゃん、感情っていうのはとても大事なものだよ」

「んなことわかってるわよ。だからあんたあんなに苦しんだんでしようが」

お父さんのことを言っているのだろうか。

「うん。もしその人が、幻想郷にいる人たちに対する敵意を植え付けたら？ あるいは、郷愁を植え付けたら？」

私の言葉に、アリスは納得したような顔をした。

「そいつがリーダーやってる理由がわかったわ。ったく、厄介な」
「へえ、賢いじゃねえか、滯」

ガシガシと音がしそうな手つきでマリサは私の頭を撫でた。

「ありがと、マリサ」

「にしても、お姉ちゃん、ねえ。似あってるぜ、アリス」

マリサはにかつと笑ってアリスにいった。アリスは照れ臭そうに

顔を逸らした。

「……馬鹿言ってんじゃないわよ、もう」

二人の様子に、レイムが呆れ返っていった。

「はいはい、いちゃつかないで、話続けるわよ。正直、いざとなったら殲滅できると言っても、解放団は厄介よ。それに、解放団がそろそろ一勢力としての力を確保しそうなのは、間違いないわ」

「そんなにいるの？」

アリスの問いに、レイムが頷いた。

「射命丸が情報源だから正しいのかどうか不安だけど、幻想郷にいる外来人の七割から八割が、解放団所属、らしいわ」

……相当数に登るのではないだろうか。確か、レイムの話では外来人はかなり多く、しかも間引きに近いことをするほど、外来人が幻想郷に来る機会も多い。その内の、七割。

「結界を閉じるのも、後回しにせざるを得ない状況よ」

「ん？ それはなんでだ？」

マリサは首を傾げた。レイムはしばらく黙って……何かを考える様子を見せた後、口を開いた。

「結界を閉じたことで解放団が武力に訴えてきたら、やつらを殲滅しても批判が噴出するわ。さすがに、信仰心が離れていくのはこまるしね」

そういえばここ神社だった。私はレイムの話聞いて改めて思い出した。話が政治的すぎて、忘れていた。故郷の神社もこんな話を……するわけないな。

「ま、そりゃそうだな。で、解放団になんか対策あんのか？」

レイムは苦々しげに首を振った。

「向こうは強硬姿勢を崩さないし、こっちはこっちで交渉のカードもってないしね」

「本当に何もないのかしら。探せばあるんじゃない？」

レイムは指を顎に当てて思案を始めた。

「……一定周期で外来人を外の世界に返す、というのがギリギリのラ

イン、かしら。しかも返せるのも特殊能力を持ってない外来人に限られるし……」

私は思わず立ち上がった。

「どうしたの？　お手洗い？」

「今、なんて」

私の質問に、レイムは何かに気づいて、目をそらした。

「なんて」

「……特殊な能力を持った外来人は、元の世界に返せないわ。外の世界を幻想郷からの帰還者に壊させるわけにはいかないのよ」

「じゃあ、私は？」

私の声は震えていたかもしれない。まさか、まさか。

「……微弱な、本当に弱々しい能力なら、帰してもいいことになってるけど……」

「……私は、不老不死で吸血鬼」

レイムとマリサは目を見開いた。

「……この四日間、何があったの？」

「色々あったのよ」

アリスは衝撃を受ける私をよそに、そんなことを言った。

「ごめんなさい、濡。あなたを元の世界に、返すわけにはいかない。不滅の吸血鬼なんていう絶対者になり得る存在を……外の世界には出せないわ」

私は、悲しいのだろうか。それとも、化け物と判断されたのが嫌だったのだろうか。わからなくなった。

「……私、永遠にここにいるんだね」

帰れない。それは、先生にも、学校のクラスメイトにも会えないということであり、そして、四年間集め続けたお父さんからの、あ……お金が、本当に無駄になったことを意味していた。

「……いい。お父さんは、この世界にいるのだから」

「お、ならいいじゃねえか！　家族一緒に」

「その父親、半悪霊で濡のこと虐待してた上に憎んで、死ねとか

いう人よ」

「……ごめん、滯」

アリスの冷たい言い草が私の心に突き刺さった。

「いいよ。私がお父さんを愛してるのは変わらないから。もちろん、アリスのことも大好きだし愛してるよ」

私は誤解されないように、アリスに言った。お父さんのことはまだ愛してる。でも、アリスだって愛してる。二人に家族の愛を感じるのは、異常なことではないはずだ。マリサとレイムは、私の言葉に苦い顔をしていたけど。

「……ありがと。滯、やっぱり、元の世界に帰りたい？」

私は、頷けなかった。ここに来た時帰ったのは、お父さんがいると思っていたから。お父さんがこの世界にいるのなら、正直言って帰る意味はかなり薄れる。

けど、それでも、あの家に帰りたい、という気持ちはある。解放団に入ってからここにいる人たちと敵対してでも帰りたいかといえば、違うけど。

「あんまり」

「そう……」

アリスがほっと胸を撫で下ろしてくれたことが、妙に嬉しく感じた。何気ないことで、愛されてると感じれる。

「……まあ、それなら、何より。滯、今からでも遅くないから、神社にいなさい。守ってあげる」

私はレイムの提案を首を振って否定した。

「私、吸血鬼。それに、レイムに守ってくれなくてもアリスが守ってくれる」

私は座って、アリスの腕に抱きついた。そもそもなぜレイムがこんなことを言うのかはわからない。

「……そう。じゃあ、少なくとも、解放団には入らないでね、お願いだから」

「わかった」

私は頷いた。もし誘われても、絶対に入りたくない。レイムやマリサ、アリス、エイキにエイリンにカグヤ。こんなに沢山の人に優しくしてもらったのに、その人たちと戦うなんて嫌だ。

「いい返事ね。それから、ちょっと出ててくれる？」

レイムが、私にそんなことを言った。

「どうして？」

「これから話すことは、あなたに聞かせたくないの」

「覚悟はある」

どんな醜悪な情報だって、私は受け入れる。

そんな覚悟があるというのに、レイムは首を振った。

「ダメよ。あなたのことに関してなんだから」

「……自分のことを知るのは、ダメ？」

レイムは首を振った。

「じゃあ」

「お願い。聞かないで」

真剣な表情だった。何の話をするのだろうか。気には、なる。

「私を、退治するかどうか？」

「あなたを退治なんて、誰もできないわ。だから安心して」

私はその言葉を聞いて、立ち上がった。

「わかった。じゃあ、外で待ってる」

私は縁側まで行くと、靴を履いて外に出た。ふと何かにもたれかかりたい気分になって、何か背中を預けられるような物がないか探す。少し遠かったが、鳥居があったので、私はそれにもたれかかることにした。

鳥居まで行くと、鳥居にもたれかかって三人が話している姿を遠目から眺める。三人とも、何を話しているんだろう。

「……星空霽、だね」

「誰」

後ろから聞こえた声に、私は聞いた。鳥居の後ろ、私の反対側にいるのはわかった。匂いからして、人間だった。男性の声だけど、

濁ったような変な声だった。ボイスチェンジャーでも使っているのだろうか。

「君は我々の希望だ。吸血鬼にして、永遠。そして、外来人。最大級の戦力になる」

「解放団か」

私の返事に、鳥居の後ろにいる人は感心したような声をあげた。

「我々をご存知だったか。何より敵がそばにいたから、誘うのが遅かった。済まなかったね」

「……あなた、御陵臣？」

まさか、ここに誘われた？ 能力を使われたのか？ だから、こうして何かに背中を預けていると妙に安心するのだろうか。

「ご明察。聡明なお嬢さんだ。ならば、私がここに来た理由もわかってくれるかな」

「私を勧誘しに来た」

そのとおり、と解放団のリーダー、御陵臣は嬉しそうに言った。

「君には最大級の待遇を用意してある。我々の力になってくれるね？」

「断る」

私は断言した。誘われても、断ると約束したのだ。それに、この人はまだ私を信用していない。だから。

「そうか。残念だよ」

ピン、と小さな音がした。首に、違和感と、痛み。息がしにくくなって、苦しくなってくる。

「……な、何を」

「君には改心してもらうよ。いやあ、君は不老不死だからね。他の人みたいに殺さないよう手加減する必要があるっていうのが楽だよ」
ギリギリ、と私の首が締め上げられる。かつて、母に殺されかけた時のことを思い出した。あの時は、死ねば終わりだったが、今は違う。死にはしない。ならば、またアリスに会える。ならば、大丈夫。

「暴れられても困るから、ね」

首が鳥居に押し付けられるような感覚がする。意識が薄れてくる。話している三人を見る。まだ気付いていないみたい。叫ぶこともできなかったし、遠目からじゃきつと、鳥居にもたれてるようにしか見えないだろう。

「その首、落とさせてもらうよ」

プツン、と自分の首の皮が切れる音を聞いた。痛みが強くなって、血がとめどなくあふれて、自分の血で溺れそうになる。息ができない。意識が遠ざかる。

ゴトン、という何かが落ちる音と同時に、私は意識を失った。

苦痛と私

次に目が覚めた時、私は地獄にいた。少なくとも、私にとってはそうだった。地下室のような、コンクリートでできた大きな部屋で私は目覚めた。

「お目覚めかい、お姫様」

「……」

私の目の前には、顔だけは好青年に見える男の人がいた。服装は現代風な、チャラチャラと無駄に装飾された服。この男は、鳥居にいた人間と同じ匂いがする。おそらくこいつが、御陵臣。

周りを見ると男や女、たくさんの人が入り混じって私を取り囲んでいた。私は壁に背を向け、足と手を縛られ、鎖で壁と繋がれている。まるで当然とでも言うように、私は裸に剥かれていた。

扉は私のいる壁の反対側にあったが、逃げられない私には意味のないものだった。どういうわけか全身に力が入らない。

「逃げようとしても無駄だよ。かなーりキツめの薬打ったからね」

「外道」

私がそう言うと、男は壁に大量にかけられている拷問道具の内の一つ、大きなヤスリを持つと、それで私の顔を一撫でした。

耐え難い痛みが顔面に走り、思わず叫びそうになった。

ヤスリには私の顔の皮がへばりついていたが、すぐに私の顔は元通りに治った。

「へえ、すごいね。叫ばないんだ。大抵の人は今ので仲間になりますっていうんだけど」

「人でなし」

思い切りお腹を蹴られた。息が詰まって、何度か咳き込む。

「痛い？ ……ねえ、滯」

ぐい、と私の顎を掴まれた。力づくで横に顎を外された。顎を押さえたくとも、手が縛られているのでそれすらもできない。

「仲間になるって言って。そうすれば、こんな辛い思いをせずに済むんだよ？」

顎も、すぐに元に戻る。痛みも消え失せる。

「ゴミと同化するなんて虫唾が走る」

御陵臣は、大きなノコギリを持つと、私のお腹に当てて引き始める。形容し難い、文字通り引き裂かれるような痛みと共に、血飛沫が御陵臣の顔や前面にかかる。反射的に体を丸めようとするけれど、その回避行動さえも痛みを私にもたらしした。内臓がぼたぼたと落ち、自分で自分の体が気持ち悪いと感じた。上半身と下半身が完全に別れるまで切られる頃には、麻痺して痛みを感じなくなっていた。

「もしかして、痛くない？ あれ、おかしいな？ 吸血鬼が痛みを感じないなんて聞いたことないんだけど……。顔色も変わってないなあ」

その言葉の途中で、私の体は繋がりに、完全な姿になっていた。

「ううん、じゃあ恥辱はどうか」

どきりと、心臓が跳ねた音がした。

どうする。いくらなんでも、拷問の一環として経験するのはごめんこうむりたい。……。しかし、やめてもらうには仲間にならないければならない。

レイムにマリサ、そしてアリスと約束したのだ。約束を破るわけにはいかない。

「いや、いくらなんでも壊れてもらっては困るんだからなあ」

そう呟くように御陵臣は言う、今度は斧を掴んで胸を縦に割られた。全身が縛られたような感覚がしたあと、息ができなくなる。ごり、ごりと体に入った斧が動くたび、狂いそうになるほどの激痛が私を襲う。

「もがく、ってことは痛いんだよね。すごい、ここまでされて眉一つ動かさないなんて、よっぽどだ。痛いのに、我慢してたんでしょ？ 中々できることじゃない」

斧を引き抜くと、今度は私の手を掴んだ。爪の先に、何かを刺し

こまれた。全身をよじって、痛みに耐える。

「次はどんなのがいいだろ？ 普段できないのがいいなあ」

「拷問、狂が」

せめてもの抵抗に、私はそう吐き捨てた。

御陵臣はにっこりと笑った。その手には、大きな杭が握られ、もう片方の手には大きなハンマーがあった。

「何本刺さるか、実験してみよう」

心臓に杭の先端があてがわれる。杭は急ごしらえなのか、あまり先端が尖っていなかった。ハンマーが振るわれ、胸の中心に衝撃が来る。私の体は小さく跳ねた。痛いのに、避けられない。苦しいのに、逃げられない。

「あれ、刺さらないな」

その次の衝撃と痛みは、今までのとは一線を画していた。皮を裂き、肉を潰し、胸の骨を砕き、私の体に侵入してくる。

「がっ……や、やめ」

「お、やっと声をあげたね。じゃ、どんどん行くよ」

何度も何度も、ハンマーが振るわれ、私の体に杭が入り込んでくる。痛みから逃れたくて、私は体を必死で動かす。無駄だとわかっていても、そうせずにはいられなかった。

「おい、心臓に杭を打たれても生きてるって、不幸だねえ」

私は何も言えなかった。息ができない。

「じゃ、次は両手両足、いつてみようか。それが終わったら目、両目が終わったら口の中に杭を打ち込んで、最後は全身に打ち込んであげる」

私は足首に杭の先端を感じ、足を動かして逃げようとする。御陵臣が私の足を掴んで、押さえ込んだ。足に体重を感じ、足が動かなくなる。今度は太腿に、杭の先端を感じた。

「今なら、頷くだけで仲間にしてあげる。ほら、頷きなよ」

私は首を何度も振った。

「ふうん。勇気あるね」

それから私は全身に杭を打ち込まれた。

身動きをとらなくても、反射で体が動き、そのせいで痛みを感じて反射が起こり、という螺旋に囚われた。しだいに痛みに狂い、壊れようとしていた。

私とは一体なんなのか、そもそもこの痛みは存在するのか、全て夢ではないのか、夢であってほしい。こんな痛み、ここに来る前ならば感じずに済んだのに、心臓に杭を打たれた時点で何も感じなくなっているはずなのに、なぜ私はいまだに痛みを、苦しみを感じているのだろうか。

どれくらいの時が過ぎただろうか、少しずつ、痛みを感じる場所が少なくなってきた。麻痺したのだろうか、と思ったが、違う。杭が抜かれているのだ。荒々しい手つきで抜いてくれる。目に刺さった杭が抜かれると、すぐに視界が戻った。最後に、心臓の杭が抜かれ、私は苦痛から解放された。

「どうだった？ 二時間ほど放っておいたんだけど」

私の顔を覗き込んだ人間がアリスやマリサ、レイムではないと知って、私は絶望に襲われた。

「……あなたは、鬼畜生よりも、最低」

「さらなる痛みをご所望らしいね」

それから私は、何をされたのだったか。私は変わらず縛られ、繋がれたままだったが、対する御陵臣は全身を真っ赤に染め上げている。もちろん、全て私の血だ。妙な倦怠感と、絶望が私の心を支配していた。

「しぶといねえ。さすがに、疲れちゃったよ」

「……」

声を出すのも、気だるい。

「さ、最後だよ。君が頑固なのがいけないんだよ。素直に仲間になって、我々の英雄になってくれたらよかったのに」

ゆっくりと、御陵臣は私の体を撫で始めた。今まで与えられ続けた刺激と百八十度違う性質のものに、私の体は歓喜した。

「……いい反応だね」

「下衆」

私はどうあってもされるがままでいるしかないというのが、悔しかった。一体私はどれほどの傷を心に刻まれればよいのだろう。

東野と御陵臣が、頭の中で重なる。

「……やめて」

「へえ、何されるかわかるんだ。意外にませてるね」

「許して」

「なんだ、最初からこっちから責めればよかったんだ。やめてほしければ、仲間になって」

私は、頷こうとした。けど、頭の中に、アリスの優しい笑みが浮かんだ。カグヤに抱きしめられた感覚を思い出す。アリスとカグヤ二人とは、たとえ脅されたからといっても敵になりたくない。

「ならないの？」

「……うん。私、あなたの仲間にならない。だから、好きにして」
覚悟は、決まった。これから何をされても、かまわない。何日、何週間、何ヶ月、何年かかろうがきつといつか、アリスやカグヤが助けてくれる。その時、きつと二人は慰めてくれる。優しく抱きしめて、優しく言葉をかけてくれる。だから。

「へえ、本当にいいの？」

「私は、あなたには屈しない。好きなだけ、好きなことをすればいい」

「じゃ、遠慮なく」

私は、これから幾度となく辱められるだろう。でも、大丈夫。アリスがきつと、助けてくれる。

「ふふふ、いただきます」

私の唇と、御陵臣の口が合わさろうとしたとき、壁の奥にあった扉が跳ね飛ばされるような勢いで開いた。

それに合わせて、御陵臣が扉の方を見た。

私は、一筋涙を流した。

アリスが、助けに来てくれたからだった。

「ゴミ共。妹は返してもらおう」

アリスは私と御陵臣の方へと走って来た。

「あんたが、濡を！」

「おっと」

彼女の周りには、人形が何十体と浮いている。人形達の手には、武器が握られていたが、綺麗なままだった。

「じゃあね、濡。我々は、諦めないよ。何度でも勧誘するよ。それと、お口にチャック、忘れないでね」

御陵臣は私から離れると、霞のように消え失せた。一体、どうやって。

「お姉ちゃん、あいつが……」

私の手枷、足枷を外している最中のアリスに、私は言おうとしたところで、口を閉ざした。

それにしても、なんであんなに逃げ足が早いのだろう。

「あいつ、どこいったかわかる？」

「わからない。お姉ちゃん、誰か殺した？」

アリスは首を振った。

「無抵抗で通してくれるもんだから、躊躇っちゃった。御陵も仕留めそこなって、ごめんね」

「いいよ。何もされなかったから」

私は嘘をついた。心配をかけたくなかったからだ。

「で、でも、この部屋……」

「全部、私のじゃない。私、ずっとほかの人がいじめられるのを、見せられていた。次が、私の番だった」

全くのでたらめ。お願い、信じて。

「そう、間に合ってよかった。とりあえず、神社に戻るわよ」

私は胸をなでおろした。よかった、信じてくれた。

アリスは私を優しく抱き上げた。

「どうして？」

「解放団のことについての話し合いに、あなたも参加して欲しいの」
それくらいなら、別にいくらでも参加してもいい。痛みを感じないなら、それで。

「私に何もしない？ 私、何も言わなかったよ、私、仲間になってもないよ。信じて」

私は隠すつもりだった本心を、勝手に打ち明けていた。

大切なアリスに恐怖を感じるほど、私は痛みというものに怯えていた。

……アリスに心配をかけたくなかったのに。こんなこと言えば、優しいアリスが心配しないわけがないのに。

「何言ってるの！？」 私があなたに何かするとも思ってるの？

……まさか、さっきの、全部、嘘だったの？

「え、そ、それは……」

「滞」

アリスに凄まれ、私はつい、うなずいてしまった。

「もう二度と、そんな嘘つかないで。私、あなたを傷つけたくないの。だから、ちゃんと教えて。ちゃんとサインを私に出して。そうでないと、間違ってしまうから。」

……それに、そんな風になるまで痛めつけられるくらいだったら、仲間になってもよかったのに。裏切ったらよかったのよ」

「たとえ嘘でも、裏切る前提でも、アリスと敵になりたくなかった」
私の答えに、アリスは。

「もう、本当にあなたは……。頑張ったね。偉いわ。でも、次からは、すぐに仲間になるっていいなさいよ。そうすれば少なくとも、危害を加えられることはないんだから」

そう言って、労ってくれた。

「ねえ、お姉ちゃん」

「何？」

私はアリスの腕の中で、縋り付くようにアリスを抱きしめた。
「疲れちゃった。眠っていい？」

「もちろんよ。好きなだけ休みなさい」

許可をもらうと、私は目を閉じ、眠りについた。

安心は感じている。けれど、さっきまでの痛みと苦しみは、すぐに思い出せるほど鮮明に刻み込まれていた。

幻想郷の会議と私

再び目を開けると、私は神社で寝かされていた。布団にくるまって寝ていれるのが妙に安心した。私のことを、レイムが覗き込んでいた。

「起きたわよ」

レイムは周りにそう言った。誰かいるのだろうか。そう思って体を起こすと、私は驚いて、一瞬体の動きを止めた。

レイム、マリサ、アリスがいて、カグヤとエイリン、エイキ、レミアとサクヤと、他にも数人、たくさんの人が私を取り囲んでいた。何をされるのだろうか。

「……怯えなくてもいいわ。ここに居るのは、あなたの味方よ」

レイムにそう言われても、安心できなかった。なんでレミアがここに？

「霊夢、あまり滯を疲れさせてはいけないわ、早く始めましょ」

カグヤがレイムにそう言った。カグヤの仕草、口調はお姫様モードで、とても優雅だった。

「そうね。じゃ、解放団対策会議を始めらわ。まず、被害状況。アリス……は、滯が一人ね。で、マリサはどうだった？」

レイムの質問に、マリサは手をあげて答えた。

「あたしんところは外来人がいないんでゼロだぜ。ま、行く先々で被害に遭ったやつはいたけどな」

そう、とレイムは言った。やはり、さっきマリサがレイムに聞きに来たのは、解放団に痛めつけられた人を見たから、だろうか。

「じゃ、次カグヤ」

マリサの隣を指してレイムが言った。カグヤは後ろに侍るように座っているエイリンに目配せをすると、エイリンが手をあげた。

「永遠亭も被害はごく少数。けれど、解放団の人に助けを求められたことはあります」

「具体的には？」

「逃げたいから、助けてくれと言ってきました。ある程度の監視の元、匿っています」

エイリンの報告に、レイムはしばらく何かを考えた。

「内情を探ろうとする動きはある？」

「ありません」

「そう。じゃ次閻魔」

「映姫という名前があるのですが……」

そう文句を言いながら、エイキは手を上げて、他の人と同じように報告を始めた。

「裁判所、被害少数。詳しい人数はあがっていませんが、友達がいなくなったら相談を受けた死神が数人いました」

「解放団に攫われたってこと？」

エイキは首を振った。

「断言はできません。しかし、生還した外来人が解放団所属になっていたことを考えれば……」

エイキは錫の先端を顎に当てて悩み始めた。

「ねえ、その帰ってきた外来人は、どうしたの？」

「どうした、とは？」

私の問いに、エイキは不思議そうに聞き返してきた。

「だから、敵じゃないかと確かめなかったの？」

「……濡。彼らが解放団にほだされたとして、帰ってきて、解放団になったと伝えますか？」

「でも、本当になりたくないなら、何されても我慢するのが」

「あなただけよ」

レイムに口を挟まれた。私はエイキから視線をレイムに移した。

「何されても我慢する覚悟なんて、そうそうできるものじゃないわ。それから、発言するなら手を上げて」

「……はい」

私はしゅんとなってそう言った。

「まあ、こんどその外来人に話を聞きにいきましようか。じゃ、次レミリア」

はい、と返事をしたのはレミリアに仕える人間、サクヤだった。この中で今唯一立っているのだが、それはやはり威圧感を演出したいからだろうか。

「紅魔館、被害ありません」

「……。そう、じゃ次、さとり」

指を指されて手を上げたのは、紫の髪に私みたいな、感情を抜いたような表情をする女の人だった。赤い太めの紐に繋がった目玉をアクセサリーみたいにしてつけている。奇妙だけど、あれはまさか本物なの、だろうか。

知らない人だったけど、挨拶はあとにしようと思った。今は、この会議になぜ私が参加させられているかも含めて、色んな事をよく考えなければならぬから。

「地霊殿、被害多数。外来人と暮らしていた多くの鬼が外来人の失踪を訴えている」

……。鬼。私は昨日を思い出した。吸血鬼になった次の日に初めて食べたお肉は、鬼だった。生で食べたのに美味しいと感じた自分を、今更ながらに恐れる。

「やっぱり、人が多い場所だと被害も多いわね。次、紫」

はい、とまるで子供のように返事をしたのは十代に見えるキレイな女性だった。ここにいる人はみんな綺麗だけど、二番めくらいに綺麗。一番は、もちろんカグヤ。

「うちはね、被害ゼロよ。でも解放団が直接ちよっかいかけてくるわ」

「ありがと。次、慧音」

手を上げたのは、青白い髪をした、不思議な帽子をかぶった女の人だった。二十代後半くらいだろうか。この中では年長者の部類にはいるのでないだろうか。

「人里の被害は甚大だ。寺子屋の子供達も一クラス分程度いなくな

っているし、人里に行くたび、誰が消えた、誰々がいなくなったという話を聞く。誰が解放団のメンバーかわからない故、対策も取りづらくてな。数にすれば百をゆうに超える」

ケイネという人の報告に、この場にいる私以外の人は痛ましげにうなった。

「想像はしてたけど、やっぱり人里が一番か……。ありがと、慧音。天子、次お願い」

手を上げたのは、普通の女子高生に見える女の人だった。青い髪という特異点を除けば極普通で、学校に通っていても違和感はないだろう。その丹精な顔は、怒りに満ちていた。

「天界、被害一。霊夢、いつ解放団を潰すの？ 私も手伝うわ」

その表情と雰囲気から何かを読み取ったのか、レイムは静かに頷いた。

「わかってるわ。でも、もう少しだけ待って。最後、早苗よろしく」

「はい！」

元気良く挨拶したのは、緑の髪の女の人だった。レイムのような、脇と肩を露出した特殊な巫女服に身を包んだ、変な巫女さんだった。

「被害数、把握しきれません」

「それほど多いの？」

サナエは首を振った。

「参拝者が随分減ったのですが、その人たちが解放団に入ったからなのかただ信仰がなくなったか判別がつかなくて……」

「……そう。ありがとう、早苗」

ここにいる全員が報告し終わると、レイムは静かに口を開いた。

「解放団は、正直私にとっては、ただ馬鹿が騒いでるようにしか映らない」

衝撃を受けた私を、レイムがじっと見つめた。

「……けど、特殊な力を持ったせいで帰れなくなった、幻想郷に住まわざるを得ない人達にとっては、解放団は救いに映るかもしれない。あるいは、恐怖の対象か。謀反するのは勝手だけど、関係のな

い、力のない人間にまで手を出すのはいけないことよ」

だから、とレイムは私に向かって言った。

「あなたに協力してほしいの」

「どんな力を貸せばいいの？」

私は即答した。アリスの友達力にならないという選択肢なんて、私は持っていない。それに、解放団には、入りたくない。あんなところ、殺されても行きたくない。

「情報が欲しいの。顔とか、覚えてない？」

……顔？ 顔って、誰の？ もしかして、御陵臣？ 話していいの？ 話したら今度こそ、壊れるまで痛めつけられるのではないだろうか。さっきは最後には仲間になるといえば苦痛は終わった。でももし私が話したことがばれて、捕まって、しまったら……。

「……霊夢、質問やめて」

「え、なんで？」

紫色の髪したさとりという人が、レイムに言った。

「この子、御陵臣に怯えてる」

「普段通りじゃない」

「それでも、心の中は不安と恐怖でいっぱい。こんな子に余計な負担を与えるべきではない」

さとりがそう言うと、レイムは唸って、それから頷いた。

「わかったわ。ごめんね、滞。辛い思いさせて」

大丈夫、と私は首を振った。私は視線をさとりに向けた。なぜ、この人は話してもいない私の感情を読んだのだろう。

「……」

さとりは唇に指を当てた。言わなくてもいい、口をつぐんでいてもいいというサインなのだろうか。

私が疑問に思っていると、さとりは頷いた。

……不思議な人だ。

「で、対策会議というのはわかるが何を話すのだ？」

手を上げて、ケイネが言った。不思議そうに私を見ていたレイム

は、彼女の方に顔を向ける。

「正直な話をする、解放団の厄介なところは、その性質上力づくで全滅させりゃいいってものじゃないってところよ」

マリサが手を上げた。

「なんでだ？」

「解放団のアジトが仮にあったとして。そこにいる人間の誰が脅されて嫌々入った人間で、自分から進んで解放団に参加したかわかる？」

マリサは首を振った。

皆が手をこまねいているのは、だからなのか。誰が悪人で、誰がそうでないかを判断できないから、強行手段に出ることができない。「ほうっておく、というのもありじゃない？」

そう言ったのは、レミリアだった。不敵な笑みを浮かべて、ニヤニヤと楽しそうだった。

「……あのね、レミリア」

「奴らの理念上、最後の最後には武力による直接手段に訴えてくるわ。その時向かってくる奴を皆殺しにすれば、最後に残るのはビクビク怯えて動けない、無理矢理解放団に入れられた人達、ってこと」
レミリアは本気でそんなことを言っている……のだろうな。人間のことを食糧か何かにしか思っていない。私もいつか、あんな風になるのだろうか。ああにだけは、なりたくない。

「トップが前線に出てきて、最終手段に訴えてくるまでの人的被害を無視できるんなら、それもありかもね。そんなの無理よ」

じゃあ、とケイネが手を上げた。

「いっそのこと帰すというのはどうだ？ 元凶を外の世界に出せば、この世界でもう解放団は存在しなくなる」

「それはダメよ」

「特殊能力を持ってるからか？ そんなもの、特例にすれば……」
レイムは首を振って強く否定した。

「十歳の女の子に酷いことできる特殊能力持ちがいる集団を外に出

せるわけないでしょ。無力な外来人なら別に帰してもいいけど、それじゃ向こう納得しないでしょ」

うむむ、とケイネは唸った。

「あまり褒められた手段ではありませんがトップかその側近を殺害、ないしは捕縛すれば自壊するのでは？」

エイリンの提案にもレイムは首を振った。

「私もそれがいいと思ったんだけどね。でもトップ殺して、部下が暴発する形で戦争が起こったら、無辜の解放団の人までも命の危険を感じて武器をとる可能性があるわ。そうになったらそれこそ、解放団VS幻想郷の構図が最悪の形で完成するわ。だから、最終的に戦争になるとしても、最初の引き金は向こうに引かせないと」

話がだんだん、私の理解の範疇を超えていく。いくら人より勉強したとはいえ、政治の話などかけらもわからない。

「だが、引き金を引かせるまで待てば人的被害は今よりなお増加します。事態は可及的速やかに解決しなければならないのですよ？」

エイリンが鋭い口調で言った。

「じゃあどうしろってのよ」

「……そうですね、いっそのこと結界を閉じて、修復後、少しずつ帰していく、というのはどうでしょう？」

「それじゃトップが納得しないでしょ」

次にエイリンが言った言葉は、私の常識を大きく外れていた。

「全員もれなく帰すと約束するのです」

「そんなのできるわけが」

「無辜の解放団を優先的に帰し、帰しても問題のない特殊能力持ちを帰す。最後に残るのは、強力な力を持った、首謀者達のみ。あとは、殲滅するだけです」

「却下です！」

立ち上がって叫んだのは、エイキだった。エイリンは涼しい顔で、彼女を見る。

「なぜ？」

「私の前でよく堂々と騙し討ちを宣言できましたね！ そんな非道な真似はできません！」

「しかし、全ての問題が収束します」

本当だろうか。そんなことをして、誰も文句を言わないのだろうか。

「ダメよ、エイリン」

「なぜですか、紫」

今まで一言もしゃべらなかつたユカリが、初めて話し合いに参加した。

「それ、結界を閉じれる前提で話進めてるでしょ」

「閉じられないのですか？ あらゆる境界をいじることの妖怪であるあなたと、博麗の巫女が揃っているのに？」

ユカリはこくと頷いた。この人、妖怪だったのか。

「それがねえ。今の幻想郷、少年漫画みたいに能力同士がぶつかり合う、とっても混沌とした世界になってるのよ」

「なぜ」

「なぜかは、調査中よ。でも、こんなおチビさんがワケのわからない力を持つくらい、能力の幅は増えてきているの」

ユカリの言い方は、私の能力がまるでいい物のような感じだった。

「……滞が？」

そう思ったのは、私だけではなかつたようだ。エイリンが頓狂な声を上げて、私を見た。

「そ。ま、この子の力はこの四日で成長して、完全な物になったからねえ。『力を増幅し、その後耐性を得る程度の能力』、なんて素敵なんですよ」

？ 私は、あらゆる攻撃に弱いのではなかつたのか？

「……まさか」

「さすがエイリン気付くの早いわね。そう、本来ならこの子は攻撃に限らず、受けた特殊能力を増幅してしまい、ちよっと妹紅に燃やされただけで灰になるような子供。でも、この子の力には先があっ

たのね。

一定まで力を増幅したあとは、その力に対する完全な耐性を得るのよ。だから、一度妹紅に燃やされて灰になったあと、蘇ってからもう一度燃やされても、熱いとも感じないはずよ」

……そんな。そんな力が、私に。

「ま、話戻すと、こんな感じの能力を持った人間が何人もいてね。相乗効果で結界が閉じれないのよ」

ユカリの言葉に、ここにいる全員が、何かを一樣に考え始めた。

「……解放団の件については、正直もっと情報がほしいわ」

レイムが、私の方を見て言った。さっきも言ったことだった。

もう、私は理解した。

「私が行く」

こう私から言ってほしかったのだ。きつとそう。

でもいい。私は、アリスの友達の力になれるなら。

「……そう、ありがとう」

「反対」

アリスとカグヤが、強い口調で言った。

「なぜかしら」

ユカリが、じとりとした視線を二人に向けた。

「こんな子に偵察任務なんて荷が重すぎるわ。もしばれたらそれこそおかしくなるまで痛めつけられるわ。助けた時だってあんなに怯えてたのに」

「そうよ。それに、私の友達が危険な目に遭うなんて許せないわ」

ユカリはやれやれとでもいうように首を振った。

「吸血鬼で、しかも不老不死。これほどの人材、放っておけるわけないでしょう？」

「いいえ。いくらなんでも分別はつけるべきよ」

「やらないきや何の罪もない人が死ぬのよ？」

ユカリがさらに言った。

「濡だって、なんの罪もない子供よ」

「並行線ね」

ずっと、ユカリは立ち上がってみんなから背を向け、縁側からどこかへ行こうとした。

「どこ行くの紫」

「勝手にやらせてもらうわ」

「解放団への独断先行はしない。それが約束できるなら」

ユカリは頷いた。ユカリの進行方向の空間が裂け、別の空間に彼女が行った。スキマができたような、そんな感じの穴だった。スキマにユカリが入りきると、それが閉じて、ユカリはすっかり消えてしまった。

「ったく、あのスキマ妖怪。勝手なんだから」

「スキマ妖怪？」

レイムの呟きを、私は聞き逃さなかった。

「ええ、そうよ。空間の境界を弄ってできるスキマを、あいつは自由に操れるの。あいつとあいつの下僕が神出鬼没なのはあれがあるからよ」

神出鬼没、自由奔放。私のイメージする妖怪そのものだった。

「では、私も好きにさせてもらうわね。行くわよ咲夜」

レミリアは立ち上がって後ろのサクヤに呼びかけた。深く礼をしたサクヤは、どこからか大きな傘を取り出してさした。

「じゃあね、皆」

サクヤから傘を受け取ると、ゆっくりとした足取りで神社から出て行った。

「……はあ。皆も、解散。お疲れ様」

レイムの一言で、この場にいるものから緊張が消えた。

あれだけ話したのに、何も決まらなかった。

会議は踊る、されど進まず。この言葉、誰が言ったんだろう。すごく、的確だ。

さとりと私

会議が終わって、私は気分転換に外に出ていた。縁側に素足を投げ出し、ぷらぷらとさせる。すぐに皆を呼べる場所で、私はアリス達の会話を聞いていた。やっぱり、まだ解放団のことを話してる。

「辛い？」

声をかけられて、驚いて振り返った。紫色の髪をした女性、さとりがいた。

「ううん」

「そう……。お名前は？」

「……私は、ミオ・マーガトロイドと言います」

「私は、古明地さとり」

さとり。なんだろう、どこかで聞いた名前。

私がそう思っていると、さとりの赤い目玉のアクセサリーがぎょろりと私の方を見た。

動いた？

「驚かせてごめんなさい。私は、サトリ……人の心が読める」

そうだったんだ。すごい。さっき混乱していた私に助け舟を出してくれたのは、そのおかげだったのか。

「あなた、もう自己犠牲はやめたほうがいい」

「自己犠牲なんてしてない」

私がそう言うと、さとりはため息をついて、私の隣に座った。背丈は私と同じくらいなのに、纏っている雰囲気がまるで違った。

「あなたは気付いていないけれど、あなたのその盲目的な愛情は、自己犠牲に他ならない」

「……それでもいい。アリスが、お父さんが喜んでくれるなら」
ぽん、とさとりが私の頭に手を置いて、優しく撫でてくれた。

「……その気持ちだけで、アリスは喜ぶわ」

「行動に移さなきゃ意味ない」

さとりは静かに首を振った。

「いいのよ。アリスも霊夢も魔理沙も輝夜も、心の底からあなたの安全を願ってた」

でも、レイムは。

「レイムは、敵の情報を話して欲しかっただけ。けして、あなたに解放団のスパイをして欲しかったわけじゃないの」

そうだった、のか。レイムは、私に死地へ向かって欲しかったわけでは、ないのか。よかった……。

「やっぱり、不安よね」

私は首を振った。

すると、抱き寄せられた。

「いいのよ。泣いてもいいし、辛かったら辛いって言っても。言わなきゃ、わかってくれないわ」

わかってほしいんじゃない。わかってもらわなくてもいい。私は大切な人に、嫌われたくない。もう二度と、捨てられたくない。殺されたくない。

「……不安っていうのはね、誰でも感じることでよ。何も変なことじゃない。私だって、アリスだって、霊夢だって、魔理沙だって、紫やレミリアだって不安なのよ」

……そんな、馬鹿な。皆、強いはずで、弱いのは私だけなのではないのか？

「強さと、不安を感じることは、別よ」

さらにぎゅっと、抱き締められた。

……私は、何度この温もりに、他人の暖かさに救われているのだろう。マリサに、アリスに、そしてさとり。

代わりに私は何をあげただろう。何もしていない。何もできてない。

「しなくていいの。ここににいるということが、大切なのよ」

「……違う」

さとの言葉を私は否定した。

「私は何かアリスに、皆にお返しがしたいの」

「今でなくてもいいわ」

「したいと思った時にしなきゃ。アリスは永遠じゃないんだから」
私は死なないけれど、アリスは違う。母みたいに、お父さんみたいに、死んでしまうんだ。もう、私は誰の死も見たくないのに。

「優しい子ね。でも、その気持ちだけで十分なの」

私はさらに、強く抱きしめられた。本当に、そうなのかな。

「……さとり、みんな、私のこと嫌ってない？ 私のこと、役立たずって思っていない？」

私が聞くと、さとりは神社の中で話す五人を見た。すると、さとりは薄く微笑んだ。

「ふふふ、素晴らしいわね。ここに来て日も浅いの……。もう、家族と親友がいる。私には、できないわ」

そんなことはない。さとりは、私の大切な人。私のことを気遣ってくれた、優しい人。

「ありがとう、滞」

どういたしまして、と言って私はさとりから離れた。

あの憎たらしい匂いが近づいてきたのが、わかったからだ。

風が舞い、木の葉が集まる。私の前に柱のように集まった木の葉が散ると、そこには御陵臣がいた。

「何の用」

「勧誘。我々の仲間になってくれないかな。こんな心を盗み見るような奴と一緒にいると、大切な事全部ばれちゃうよ？」

心がささくれだつ。私の……友達、に。友達に、なんてことを。

「なんでこんなところにいるの？ ふざけるのもやめて。私は、あなたの仲間にはならない」

「君は、外人だろう？ 虐げられて、帰れなくなって嫌じゃないのかい？ 我々につけば帰れるんだよ？」

御陵臣の言い方に、私は怒りを感じずにはいられなかった。

「私の帰る場所は、お父さんのいる地獄かアリスの腕の中だけだ。」

消え失せろ」

私の言葉に、さとりはぎょつとしたように、目を見張らせた。私も怖いのだ。少しでも、強く見せないと。

「……酷い言い草だね。君、本当に来ないの？」

私は頷いた。

「そう。じゃあ、言葉での説得はこれでおしまい。次からは、体に語りかけてみるよ。楽しみにしててね」

そう言って、御陵臣は消えた。色素が抜け落ちて、透明になっていくような消え方だった。なぜ、こんなところに、みんながいる前で危険を冒すような真似を……。

「……さとり」

「大丈夫、守ってあげる」

さとりは立ち上がって、神社の中にいる人を呼んだ。ゾロゾロと慌ただしい様子で皆がこちらに来了。

「御陵が来たって！？ 大丈夫濡れ！？」

レイムが私の左隣に座った。色々、ペタペタと触って私の無事を確認した。

「濡、なんで叫ばなかったの？ また攫われちゃったらどうするつもりだったのよ、もう」

アリスが私の右隣に座った。ぎゅっと右手を握ってくれた。もう二度と離すまいとしているかのようにだった。

「ちよっとぐらい捻ってやればよかったのにな。濡、強くなったんだろ？」

そう言ってマリサが私の頭に顎を乗せ、背中から抱きしめてくれた。包まれるような感覚がして、ほっとする。

「全く。言ったでしょう、濡。普段通りの行動を心がけなさい、と。普通の女子はかつて自分を痛めつけた人間を見れば悲鳴をあげるなりなんなりするはずですよ」

マリサの隣にお姫様らしく座って、私の肩に手を置いた。

「やはりあなたは自己犠牲が過ぎます。もっと年長者を頼りなさい」

私の後ろで、エイキがそんなことを言った。

皆に私は愛されている。本の中でしか見たことのなかった、理想の形がここにあって、私は身に余るほどの幸せを感じていた。

「……皆、ありがとう。私、大丈夫だよ」

嘘でもなければ強がりでもない、素直な気持ちで、私はそう言った。

そう、何があっても大丈夫。私は、みんなに守ってもらえる。御陵臣に攫われて、私が私でなくなって、壊れてしまったとしても、この人達がいれば治してもらえる。私が私を取り戻すまで待つられる。

そんな安心感が、私を満たしていた。私は……幸せだ。

「私、知ってること全部話すね。役に立たないと思うけど、みんなの力になれば、いい」

私は皆に囲まれながら、言葉を紡いでいく。私が言われたこと、されたこと、御陵臣の特徴や、話し方。知っていること全てを、止まる事なく話していく。

話し終わって、私は皆に言った。

「これで、全部」

「……想像以上にイッてるわね、そいつ」

レイムが静かにそんなことを言った。他の人も、その評に異を唱えることはしなかった。

「私は、滯の保護を優先したいわ」

「私も」

アリスが言って、カグヤが同意した。

「確かに、これ以上滯に心理的、身体的負担は酷と言うものです」
エイキがレイムとアリスを交互に見ながら言った。

「二人が保護する、というのはどうでしょうか」

「永遠亭はどうして選択肢に入っていないのかしら？」

エイキはカグヤの言葉に驚いたように少し眉を動かした。

「……いつもは、我関せずを貫くあなたがどうして滯に限って？」

「友達を守るのに、別の理由があるかしら？」

エイキは小さく、友達、と呟いた。

「そういうことなら、永遠亭、アリスの自宅、神社の三箇所で交互に漕を保護しましょう。道中は三人が責任を持って守るように」

ちよっと、と言ったのはレイムだった。

「なんでそんなわざわざめんどいことしなきゃいけないの？　ここ
でいいじゃない」

どうしてレイムは私をそばに置こうとするのだろう。最初は僅かな疑問だったけど、今はかなり大きなものとなっている。思い切つて聞いてみようか。いや、やめておこう。藪をつついて蛇が出てくるのは嫌だ。

「一つの場所にいろと言われたら、いくらこちらにその気がなくとも、この子は閉じ込められたと思うでしょう」

「閉じ込めたりなんか」

「わかっています、霊夢。しかし、窮屈に感じてこの子が飛び出しては、元も子もないのです」

むむむ、とレイムは唸った。

「……わかった。じゃ、今日明日はここで、ね。次にアリスの家、最後に永遠亭。これで決定。文句ない？」

アリスとカグヤは順番に気に食わないのか渋い顔をしていたけど、頷いた。

「よし、じゃあ今度こそ解散。漕は明後日アリスの家に行くわよ」

レイムの言葉に、私は首を振った。

「行くんじゃないよ。アリスの家には、『帰る』の」

私がそう言うと、レイムはきよとした顔になった。

「……そうね。帰るのね。わかったわ。……そろそろ、お夕飯ね」
レイムの言い方は、まるで催促しているかのようだった。

「私は帰る」

真っ先にさとりがそういつて、どこかへと歩き出した。

「……私も帰るわ。漕、いい子でね」

「うん」

私が頷くと、アリスは私に微笑みかけて、空を飛んで帰ってしまった。

「では、私たちも」

「そうね。これから不自由かもしれないけど、安心して。絶対に、守るからね」

カグヤはお姫様の仮面をかぶったまま、私にそう言って歩いて帰っていった。

「……皆、滞にお熱だな。羨ましいねえ」

マリサが茶化すように言った。私の隣に移動して、私の肩にもたれかかるように体重を預けてくる。でも、本気でもたれかかっているわけではない。マリサの体重が、心地いい。

「……羨ましい？」

「おお。皆に守ってもらえて、幸せもんだよ、滞は」

私が、幸せ者。

「そんなこと、言われなくっても知ってる。私、今すごく満たされてるから」

そうか、とマリサは言って、縁側から境内に下りた。どこからともなく箒を取り出すと、一気に飛び上がった。

「達者でな、滞！ 遊びはまた明日教えてやるよ！ とびつきり楽しい遊びをな！

楽しみにしてろよ！」

私は上空にいるマリサに頷いた。

私が頷いたのを見届けると、私はレイムと二人きりになった。ちよつと怖い。

レイムは立ち上がると、神社のさらに奥に向かった。

「……ほら、行きましょ。そろそろ日が落ちるわ」

言われるまま、私は神社の中に向かった。

衝動と私

私が連れてこられたのは、生活スペース兼寢室の、六畳くらいの小さな部屋だった。レイムはさっきまで私達がいた部屋からちゃぶ台をもつてくると、私の前に置いた。私の反対側に座ろうとして、止まる。

「何か飲む？」

私は首を振った。レイムは腰を下ろすと、私に向き直って口を開いた。

「ごはん、いるかしら」

「いない」

私は首を振った。

レイムは手を私の方に差し出した。白い、美しい肌が見える。レイムの表情は、何かを試しているかのようだった。

「血は、いるかしら」

「……。あ……。い、いない」

私は必死になって首を振った。レイムが手を引っ込める。

「ほんとあなたすごいわね。普通、なりたては吸血衝動我慢できないわよ？」

「その、もう食べた、から」

何を？　と言った顔をレイムはした。

「昨日、私は襲ってきた鬼を、食べた」

意外な顔を、レイムはした。

「へえ、あなた、戦えるんだ」

「で、でも！　それは人間じゃなくて、しかもわかりやすいくらい弱かったから……」

そう、昨日私が食べた鬼は、レミリアや東野に感じたような恐怖は全く感じなかった。だから、戦えた。弱者にしか力を震えない、弱くて愚かな私。

「……ま、別に敵と戦え、なんて言わないから。ちゃんと、守ってあげる」

どうして、この人は、この人達は、守ってくれるんだろう。

「どうしたの？ ……何か、聞きたいこともあるの？」

「あ、あの、怒らないで聞いて。どうして、守ってくれるの？」

レイムは、私の質問に、苦い顔をした。不意を突かれた様子はなく、予想はしていたけどされたくない質問、だったようだ。

「……まあ、その。これ以上は、聞かない方がいいわよ？」

「それでもいい」

もうこれ以上悪いことなんて、そうそう……。

「あなたはね……その、壊滅的に運が悪くて……。その、正直言って底が見えないくらい」

……まさか、私の運の悪さにお墨付きがつく日が来るとは思わなかった。

「……そう」

「そ、そんなに落ち込まないで！ だ、大丈夫よ、私が、いえ、私達を守ってあげるから」

あわあわと可愛らしく慌てるレイム。この人はきつと、私に同情したんだ。あまりにも酷い運勢と運命を持つ私がいかに哀れで、つい、肩入れしてしまっている。……は。

笑い話だ。

「私、これからどうなるの？」

でも、好意を向けてくれる理由がわかって、すぐくほつとした。わからないことは、怖いから。たとえそれがどれほど凄惨なものだったとしても、知らない、わからないよりもいい。

「……その、どういう意味で？」

「いっぱいあるけど……とりあえず、レイム達の間で、私をどうするつもりなのか知りたい」

これは、答えてくれるだろうか。

「……は？」

「監禁とか幽閉とか」

疑問の声を発したレイムに、私はそう答えた。するとレイムは呆れたようにためいきをついた。

「あんたねえ。警戒しすぎ」

「……でも」

でも、ここに来る前は、警戒心を強くして、警戒しても、その隙を縫うようにして、私は攫われたりしたのだ。

「まあ、あなたの運ならこれまでの人生も、辛かったでしょうね」

「警戒を緩めた私が悪い」

「子供は、警戒しなくても大人が守ってくれるものなの。本来はね」つまり、私は本来とは違う子供だということだ。なぜか、シヨツクだ。

「レイムは、優しい人」

「照れるわね」

「マリサも、アリスも、エイキもエイリンもモコウもカグヤもコマチもレイセンもみんなみんな、優しい人達。……私、こんなに優しくしてもらっていいのかな」

不安はいつまで経っても消えない。幸せを感じて、喜びを感じてもこうして何気ない時間を過ごしていると、ふと思うのだ。私は、これほどの優しさや幸福に見合うだけの人間だろうか。母からの心中を拒否し、お父さんの後も追えず、情報を話すことすら躊躇し、鬼を喰らった人ならざる私が、幸せなんて手にしていいのだろうか。「生物はすべからく、幸せを求めるべきだし幸せになる権利があるのよ」

「私を除いて」

「違うわ」

レイムは私の目をしっかりと見つめた。

「卑屈になりすぎよ。大丈夫。あなたは幸せになってもいいのよ」その言葉は、私の心に少しづつ、浸透していった。

「……ありがとう」

私は立ち上がって、レイムの隣に座った。恐る、恐る。レイムに腕を絡める。

「……い、今まで避けてごめんなさい。で、でも、大好き、だよ」
私はつかえながらも自分の気持ちを伝えた。

「……ふふふ、私、子供には絶対好かれたいものだと思ってたわ」
そう言って、レイムは私の頭に手を乗せて、撫でてくれた。

うん、幸せ。この幸せは、感じていてもいいことなんだ。私はそう思った。もう何も怖いことなんてない。このあとにはずっと幸せが続く。私は、そう思った。

さっき私がレイムに何を言われたか、なんてことは綺麗さっぱり忘れて。

夜、私はレイムと布団を並べて眠っていた。あれからレイムは食事をとって、それから夜になるまで些細なことを話して、そして、布団を敷いて床に就いたのだった。すぐに眠れたのだが、妙な胸騒ぎがして目覚めた。

だが、よく考えれば私は吸血鬼。夜に起きるのは普通のことなのだ。

血が滾る感じがする。視覚も、聴覚も嗅覚も、昼間より鋭い。それに、今なら真後ろから攻撃されても反応して、こちらに攻撃が届く前に反撃できる気さえする。

なんだ、夜ってこんなに安心するものだったのか。知らなかった。外に出ようとして……やめた。今の私は抑えが効かない。今の私はおそらく、敵が来たら殺し、人が来たら襲う、想像のままの吸血鬼なのだから。

隣で眠っているレイムに視線を移す。昼間着ていた巫女服を少し変えた、特殊な服を着て寝ている。

首が露わになっていて、その白い珠のようなきらめく肌は、まるで魔力が込められているかのように、私の視線を釘付けにした。

ごくり。

「……」

私はあわてて首を振った。違う。違う。私に優しくしてくれたレイムを食べるなんてしちゃだめ。絶対に。

おいしそう。

ダメ、違う。

私は自分が二人になったかのような錯覚を覚えた。

食べよう。押さえつけて、首に牙を埋めて、血を啜ろう。痛くならない。だから。

違う。そんな、恩を仇で返すような真似はダメ。

きつとおいしい。鬼の時の数倍、それこそ今まで食べたどの料理よりもおいしい。だから食べよう。

違う、レイムはごはんじゃない。

ちよつと血をもらうだけ。

ちよつとでもダメ。

渴いた。

それでもだめ。渴こうと飢えようと干からびようと、この人を食べるのだけは嫌だ。

「……どうしたの？」

「レイム」

起きてくれて嬉しい私がいて、ほつとする。

起きて残念がる私がいる。いて、自分に失望する。

「……眠れない」

「ん。吸血鬼だもんね。私の寝床のそばにいた、ってことは血を吸いたかった？」

私は首を……。

頷け。そうすればもしかしたら吸わせてくれるかも。

否定しなければ。レイムに心配や心労をかけるべきではない。

「かなり辛い？」

「うん」

こうして悩むんなら、私の意識なんてないほうがいい。

「……狩りに出かける？」

私は首を振った。

「行かない。私はそこまで落ちぶれない」

そうは言ってみたが、私の全身がレイムの血液を求めていた。違う。人間の血が欲しいだけ。レイムの血を欲しているわけではないはずだ。

「ほんと、我慢強いよね」

「レイム、あり、が、と」

プツリと、一瞬だけ意識が飛んだ。気がついたら、レイムの首筋に噛み付きかけていた。レイムにのしかかり、口を大きく開いてレイムの首筋に、噛むその寸前まで迫っていた。

「……滞」

「ち、違うの」

私はレイムから飛び退き、全身を使って否定する。

「私、気がついたら……」

「……。わかった。自分を見失うのね？」

頷いた。

「でも、私を吸いたくはないのね？」

これにも、頷いた。

「どうする？」

「……私を、縛って。お願いしていい？」

私はそうきいた。

「本当にいいの？」

「あなたを噛むよりは遥かにいい」

レイムはため息をつくと言いついて、ふすまを開けてどこかへ行ってしまった。しばらくすると、大きな縄を持ってきた。私が全力で暴れても切れそうにない太い縄だった。

「これくらいでいい？」

「うん、ありがと」

じゃ、と言ってレイムは私のそばまで来て、私を縛っていく。私

を寝かせ、作業に入った。まず、両手。その次、両足。御陵臣にされたことと同じ。御陵臣とレイムを重ねそうになって、頭の中で否定する。

「レイム、もっと嚴重に」

「ん？ 変な注文するのね。わかったわ」

そう言っ、レイムは私の両膝と両肘を縛った。もうろくに身じろぎさえできない。

「ありがと、レイム。これで私、何があってもレイムを襲わずに済む」

はあ、とレイムはため息をついた。

「あんたは嬉しいかもしれないけど、こっちは子供縛った上にその子にお礼言われて戸惑ってんの。だから、何も気にせずもう寝なさい」

そのキツ目の言い方が、まるで家族に向かっていうような言い方だったのが、妙に嬉しい。

「うん。お休みなさい」

私はそう言っ、目を閉じた。

四日目の生活がおわろうとしていた。

異様な気配と私

五日目の朝。私は身動きがとれない状態で目が覚めた。
どういふことだろうか。

何かあったのか。

想像する。何があるだろう。レイムが私を縛る理由。

「……おはよう」

私を見下ろすように、レイムが私を覗き込んでそう言った。彼女の顔はどこか申し訳無さそうだった。

「レイム、おはよう。どうして私縛られてるの？」

「覚えてないの？」

頷いた。すると、レイムは難しい顔をした。

「……まあ、あなたが縛ってって言ったのよ」

「私が？」

何故私がそんなことを？ わからない、が……。

「私、壊れちゃったの？」

「そういうことではないのよ。でもねえ」

レイムはそういいながら、私の縄を解いていく。よほど緩かったのか、ちよつとレイムが手を動かすだけですぐに解けた。

「はい、お疲れ様。朝ごはんいるかしら」

「いない」

私は立ち上がった。レイムの言う通りなら一晩中縛られ続けているはずなのに、僅かな痛みも感じなかった。どんどん、人から離れていく自分が嫌だった。もう一昨日に鬼を食べてから何も口にしていないというのに、まるでお腹が空かない。食べなくても生きていけることを喜ぶべきなのだろうか。

「何か食べなさいよ」

「何の味も感じない物を食べたくない」

美味しくないものを感じないのはいいのだが、美味しい物を美味

しいと感じない、というのはショックだ。結局、今の私は泥水を飲むのとジュースを飲むのと、味覚の点では全く変わらないのだ。その事実がなぜか、食べることにへの虚無感に繋がっていた。

「……ま、無理にとは言わないけど。私は朝食摂るけど、その間あなただけ何する？」

何をしよう。外に出れば解放団に攫われて、またあの苦痛を味わなければならぬ。今日一日、ここにいななければならぬのだ。家主の許可なしにうろつくわけにもいかないし……。

「……レイムと一緒にいる」

私はレイムの手を掴んで、そう言った。

「そ、そう。でも私と一緒にいてもつまんないわよ？」

「色々聞きたいことがある」

せっかくなのだから、色々と質問してみよう。全部答えてくれるなんて、思わないけど。

「そう。じゃ、今から私朝食の準備するわね」

「手伝う」

「でも……いえ、ありがとう」

レイムはそう言って、台所に向かった。小さな、一人暮らし用の台所で、入口のふすまにはちゃぶ台が立てかけてあった。

「ちゃぶ台、持って行ってくれる？　それだけしてくれたら十分よ」

「そう」

私は紙みたい軽いちゃぶ台を片手で持ち上げると、昨日レイムが夕食を食べた、外が見える部屋まで持って運んだ。ここは縁側から外に続いていて、昨日会議をしたところでもある。

部屋の中央にちゃぶ台を置くと、私は座った。

しばらく目を閉じて匂いを嗅ぐ。大豆の匂いがしていた。お味噌汁、だろうか。なんだか、すごく懐かしい気がする。ここに来る前までは毎日作ってたのに。

もし、お父さんが私と一緒に暮らしてくれるようになったとき、毎日美味しいお味噌汁を作ってあげられるよう、頑張って練習してい

ただ。

まあ、結局、全て徒労だったわけだが。

……お父さん。

「どうしたの、俯いて」

「お父さんのこと考えてた」

レイムがお盆に一人分の朝食を持って部屋に入ってきた。

「ふうん」

レイムはちゃぶ台に朝食を置くと、箸をとって食べ始めた。お味噌汁に、サンマの塩焼きに、ごはん。さすが神社、質素な生活を心がけているんだ。

「あなたのお父さん、いい話聞かないわね」

「……知ってるの？」

「アリスとエイキから聞いたわ」

あの二人、意外とおしゃべりなのかな。いや、レイムはきつと偉い人なんだ。昨日の会議仕切ってたし、なんだか雰囲気か威風堂々としている。

「ねえ、レイムって偉い人なの？」

私がそう聞くと、レイムは不思議そうな顔をした。

「気になるの？」

「うん。昨日、エイキとカグヤ、それにレミリアも参加してた会議を取り仕切ってたし」

私がそう言うのと、レイムは溜息をついた。

「偉くはないわ。ただ、幻想郷の外と内を分け隔てる、結界を制御してるっただけよ」

そしてその結界は、この世界にとって重要なものなのだろう。レイムが上の人ならば、の話だが。

「レイム、すごい」

「博麗ならばできて当然よ」

その言い方が、妙に引っかかった。まるで、そう、結界を守ることは義務であるかのような言い方だった。

「滯、あなたはお父さんに会いたい？」
頷いた。

「自分からは、会いに行けないけど」
私はもう死にたくても死ねない体になったのだ。だから、地獄にいくことはできない。

「だけど、今度は、私がお父さんと呼ぶの」
しっかり、宣言した。いつか、いくら年月がかかったとしても、お父さんと呼び戻す。

「すごい決意ね。大変よ？」

「知ってる。でも、だからこそ」

私は静かに言った。

「……ふうん。わかったわ。変なこと聞いてごめんなさい」

レイムはごはんを食べ終わると、手を合わせた。そのあと、私のすぐそばまで来て、私の隣に座った。

「聞きたいことあるって言ってたけど、なあに？」
優しく、聞いてくれる。

「……レイム、幻想郷って、何？」

私の質問に、レイムは苦笑しながら悩んだ。

「そうね。違う世界、とも言えるし同じ世界だと言うこともあるわ」
私は首をかしげた。どういうことだろうか。

「気になる？ よね」

私は頷いた。この世界のこと、もっともっと知りたい。知ればきつと、きつと何かわかるから。

「そうね。ここは、山の中なのよ。紫が張ってる結界と、博麗が貼ってる大結界の二つが、あるのね。それが、幻想郷とそうでないところを分けてるの」

「へえ」

つまり、厳密に言えばこの世界と元の世界とはつながっているのか。そして、山の中だから、マリサやアリスに幻想郷の全体を見せてもらったとき、海が見えなかったのか。

「でも、普通は入ることができないし、一度入ったら出ることができないの」

そうなんだ。

「でも、例外があつて……。それが、何の力も持つてなくて、迷い込んだ外来人」

力を持つている外来人は、変わらず帰れないのだろうか。

「ふうん。解放団の人達は、その例外の幅を広げろ、つて言つてるの？」

私が言うと、レイムは頷いた。

「だいたいそんな感じ」

「でも、ホントかな」

レイムは少しキツイ目をした。

「私の言うこと、信じられない？」

「違うの。御陵臣が私を虐めてる最中、物凄く楽しそうだったから、もしかしたら……」

私の言葉を、レイムが引き継いだ。

「もしかしたら全部嘘で、他人で遊ぶための方便にしか過ぎないかも、つて？」

「うん。他人を屈服させて、支配したいのかもしれない」

ううむ、とレイムは唸った。

「ありえる。けど、でもそれじゃあ……」

被害に遭った人が可哀想すぎる。そうレイムは言った。

「……なんとかして止める？」

「居場所もわかんないのにどうやって追うのよ」

本当に知らないのかな。

「私のこと、助けられたでしょ？」

「まあ、レミリアにあなたの匂いを追ってもらえたから。結局それも遅かったけどね」

そう言つて、レイムはため息をついた。

「にしても、結界の開閉はこっちにしかできないのは……確定で。」

足掻いても仕方ないのはわかってる……のにも、関わらず。

幻想郷の人間よりも、外来人の方が被害が多いのは……もしかして、……ってことはあるかもしれない」

私はじっと、レイムが考え終るを待った。待てども待てどもレイムは答えすつきりとした答えを出せなようだった。

「……もしかして、ね」

そういつて、レイムは立ち上がった。

「何が？」

「やつら、目的は別にあるのかも」

「そうだったら、どうするの？」

「とりあえず、事情を詳しく調べましょ。取り敢えず人里へ行きましよう。急いでるから飛んで行くわよ」

そう言つて、レイムは縁側から外に飛び上がった。私がほうけていると、レイムが不思議そうに私を見た。

「何やってるの？」

「私、飛べないの」

そんなこと言わなくてもわかってくれるものだと思っていた。

「あなた吸血鬼でしょ？ ほら、自分に翼があるとイメージしてみ
て」

言われた通りイメージして見る。あんまり吸血鬼の力は使いたくないけど、このままだと置いていかれそうだったから、自分で飛ぶことにする。

私の背中の皮を突き破つて、新しい器官が生えるのを想像する。

一つ羽ばたけば飛び上がり、もう一つ羽ばたけば前に進む、そんな簡単な翼を思い描く。

出てくれない。それなら、もっとリアルに想像する。

私の肩甲骨に流れている血液が、血管を突き破つて肉と骨の間を流れる。その血が集まって、小さな塊を作る。

ちよつと詳しく想像すると、その通りになった。

その塊は成長し、私の背中を突き破る。背中から噴水のように血

が出てくる。

「うわっ」

レイムが小さく声を上げ、目を背けた。気に留めず、創造を続ける。その血液はやがて大きな翼の骨格になる。染み出るように骨格に膜ができ、やがて神経が繋がり、私の背中には大きな、血に濡れた翼が生えていた。軽く羽ばたいて、血を払う動作をする。実際は、血を吸収しているのだけど。

周りを見る。大丈夫、汚してない。私は私の力を、完璧に制御できている。

「……できた」

一度羽ばたいて、飛び上がる。自分で飛ぶ空は、存外素晴らしいものだった。日光を受け止めている翼には、焼け付くような嫌な感覚がするが、問題なく動かせる。バサリ、バサリと何度も翼を動かして滞空する。

「もう少しその、視覚的に優しめにお願いね、次から」

「わかった」

私は青い顔をしているレイムにそう答えた。

「じゃ、行きましょうか」

レイムはそう言って、まるで滑るように浮いて進む。私は初めての空中を手探りで、ただレイムについていくことだけを考えて進む。必死にバタバタと動かし明後日のほうに進んでしまったり、ゆっくりに過ぎて置いていかれそうになったり。必死の思いで行ったせいで、私が人里に降り立ったときには、すっかり疲れきっていた。

「はい、人里に到着！」

「ここが、人里」

嬉しそうに両手を広げて私に紹介してくれたレイムに、私はそう答えた。

表情は変わらないけど、私が発した声は酷く疲弊の色が出ていた。ほとんど無意識的に翼をしまうと、ゆっくりとした足取りでレイム

の所まで歩く。

「……人があまりいない」

「そうね」

私が見回して、ざっと観察してみた限り、ここは商店が多く立ち並ぶ、本来なら活気付いている場所なのだ。まだ朝も早いし、朝食の材料を買いに来た人がいてもおかしくないのに、誰もいない。看板が屋根の上にあるのに誰もいない店もあった。

私は近くにあった商店の中に入る。

「ちょっと、滞り？」

レイムが不思議そうにして言った。私は目で大丈夫、と伝え、奥に進んでいく。ここはどうやら金物屋みたいだ。食器からナイフ、包丁まで幅広く取り扱っている。

「ん、いらっしやい。おじょうちゃん、何を探してるのかな？」

店の中をうろうろしていると、店の奥から職人氣質のおじさんが出てきた。角刈りの頭にねじり鉢巻きという、いかにも、という風体がわかりやすい。

「色々。ここ、人里？」

「ん？ ……ああ、そうだけど。それがどうしたんだい？」

私はガラスのケースに入れられた、日本刀に目を留めた。

「……人が少ないな、と思って」

それから、外にいるレイムを見る。レイムは不思議そうにしていたけど、私の言葉を聞くと妙に納得した風な顔をした。

「ああ、おじょうちゃん、知らないのか？」

「何を？」

私は日本刀をさらによく観察する。金物屋って、こんなものも取り扱っているのか。知らなかった。

「最近人攫いが多くてな。用がない人は外に出ないようにしてるのさ」

「……誰がやったか、とかわかる？」

さあな、とおじさんは肩をすくませた。

「興味あるのかい、おじょうちゃん」

「まあ……私は、弱いから。攫われたくなくて」

「違うって。それだよ、それ」

私が見ていた日本刀を指さしておじさんが言った。私は日本刀を見つめたまま、口を開いた。

「これ、良く切れる？」

「まあな。でも、売れないぜ」

「……どうして」

そう私が言うと、おじさんは私の後ろに回った。少しだけ警戒する。

「これは、武器だからな。おじょうちゃんが握るもんじゃねえ」

「自分の身は、自分で守らないと」

私がそう言うと、おじさんは笑った。

「ははは、いい心がけだな。だが、ま、今は大人に守ってもらえ」

私は後ろを振り向いた。彼は、ニコリと人の良さそうな笑みを浮かべていた。

「……わかった。助言ありがとう」

「おう、気にすんな」

私はお礼を言うと、レイムの所までいく。おじさんがついてきた。

「おじょうちゃん、ちゃんと家に帰れるか？ ……って、レイムちゃん。最近見てないけど、元気にしてるかい？」

おじさんの口調は軽かったけど、物凄く親しみのある言い方だった。

「ええ。まあ、おかげさまで。冷やかして悪かったわね」

「ああ、いやいや。俺も久しぶりに人と話せてよかったから、別にいいよ。それに、このおじょうちゃんが欲しがったものものだからな」

私、欲しがってなんてないけど。……でも、一番気になったのは事実。

「ふうん。……最近、出てないの？ 源さん散歩が好きって言って

たじゃない」

ゲンっていうんだ、このおじさん。

「まあな。でも、人攫いが多いのに出るわけにもなあ。うちも娘がいるし、守ってやらねえと」

そう言って、ゲンさんは腕組みをした。その腕は筋肉で膨れ上がっていて、すごく強そう。

「ちゃんと守ってあげてね。やっぱり、攫われている人って多いの？」

レイムの質問に、ゲンさんは頷いて、難しそうな顔をした。

「三件隣の佐藤さんとこと、隣の八百屋の居候が二人、いなくなっちまった。それから寺子屋に通ってたガキ共も何人か」

私はゲンさんが指さした方向をひとつひとつ見ていく。三件隣の家は見えなかったけど、隣の八百屋さんは、店を完全に締め切っている。ショック、だったのだろうか。

「かなり多いね」

「ああ。迷いこんだガキを引き取って、我が子のように可愛がってた連中、かなりショック受けてるな。……なあ、レイムちゃん。なんか知ってるか？」

レイムは首を振った。

「ごめんなさい、今調べてる最中なの」

「そうか……。協力できることがあったら言ってくれ」

ありがとう、とレイムは返した。

「源さん、色々ありがとう。また今度、フォークでも買いにくるわ」

「おう。ありがとよ」

レイムは飛び上がって、遙か空中に行ってしまった。……私、この人の前で飛ばなければならぬのだろうか。

「おじょうちゃん、レイムに連れて行ってもらわなくていいのか？」

「……自分で飛べる」

翼が生える感覚は、覚えている。さっきほど詳しくイメージしな

くとも、翼は生えた。けど、どうしても天使のようなキレイな羽は思い描くことができなくて、まるで悪魔のような翼が私の背中にある。

「……おじょうちゃん」

「ありがとう、色々。それじゃ」

驚くおじさんにお礼を言っていると、私も飛び上がり、レイムの隣に滞空する。

「中々上手く飛べるようになったじゃない。あなた、飲み込み早い
のね」

「……うん」

呆然と私を見つめるゲンさんを、私は見ている。彼は一体、今何を考えているのだろう。

「どこへ行くの？」

「寺子屋」

てらこや？ それはなんだろう。

移動を始めたレイムに私はついていく。さっきよりは安定して飛べるようになったが、それでも疲れが酷いのは変わらなかった。

人里から少しだけ離れた場所に、その小さな学校のような建物があった。玄関から何から木造だけど、私に通っていたような小学校によく似ていた。

「……てらこやって、学校？」

「え？ ……ああ、そういえば、説明してなかったわね。そうよ。

外の世界で言う学校が、慧音がやってる寺子屋よ」

ああ、思い出した。寺子屋か。

すたりと軽やかに校庭に降り立ったレイムに私は続いた。速度の調整が上手くいなくて、足が地面に激突し、激痛が走る。しばらく立ち上がれないくらいの痛みが続く。けど、ある一瞬を境に痛みが嘘のように消えていく。

「……大丈夫？」

「大丈夫」

私は翼をしまつて、立ち上がった。玄関を開けて寺子屋に入ったレイムに続いて、私も入る。

ひと昔前の旧校舎、というのが私の、この寺子屋に対する印象だった。全体的に古めかしい。

「慧音、いる？」

レイムがそう言うのと、すぐそばにあった扉がカラリと開き、青い髪をした女性、ケイネが頭を出した。小箱のような帽子が愛らしい。

「レイムか。入ってくれ」

「いいの？ 授業中じゃあ……」

「……」

ケイネは首を振って、私たちを教室の中へ促した。

レイムと私はゆっくりと教室に入る。

「……は？」

「嘘」

私とレイムは、絶句した。広い和室の中にたくさん並んでいる机に座っているのは、かつて私を攻撃してきた氷精、チルノだけだった。

「……おお。ミオだ。久しぶり。この前はごめんね」

「いや、別にいいけど」

私はチルノの前に立つ。心底申し訳なさそうな顔をしていた彼女は、私がそう言うのと安心したように明るくなった。

「そうか！ なあ、ミオ、今度は普通に遊ぼう！ 鬼ごっこしよう、鬼ごっこ！」

「いや、私は遊びにきたわけではないから……」

私は喜ぶチルノにそう言った。残念そうにする顔が胸に残る。

「……そ、そうか」

「他の子は？ いないの？」

わかり切っている質問を、私はした。

「うん。みんな、どこかへ行っちゃった。連れ去られて、それから……」

「そう」

何人が、連れ去られたのだろう。どう考えても、おかしい。なん
で何の力もない子供をこんなに攫う？

「酷いわね、慧音」

「ああ。もう寺子屋も閉めようかと思ってる」

後ろで、そんな話し声が聞こえた。私もチルノも、二人の会話を
聞いていた。チルノも、気になるのだろうか。

「やっぱり、多い？」

「異様なほどな。外来人でない子供もいなくなっているのだ。レイ
ム、どういうことだ？ 奴らは外来人を引き込んでいるのではない
のか？ ……わからないなら、対処を急いで欲しい。私も、手伝え
ることなら、なんでもするから」

レイムはケイネの言葉を聞いて、困ったような顔をした。

「ありがとう。私も、死力を尽くすわ」

そうか、とケイネは言った。それから、私たちの方を向いた。

「……滞ちゃん、だったな」

「うん」

「絶対に、一人になっちゃダメだぞ」

それは、切実な願いだった。もう一人も犠牲者を出したくない。
そんな、強い思いを感じた。

「約束する」

私は頷いた。そして同時に、確信する。御陵臣は悪い人間で、滅
ぶべき悪なのだ。

「チルノ、お前もできるだけ誰かといえるようにな」

「慧音と一緒にいる！」

チルノの何気ない言葉に、ケイネは思わず、といった風に涙ぐん
だ。嬉しいのだろうか。そして、悲しいのだろうか。もうこの子しか
生徒がいない、現状が。

「……詳しい情報は、後で書にまとめて持っていく。だから、それ
までは」

「わかったわ。慧音、協力ありがとう」

そう言って、レイムは教室から出て行った。

「私も行くね。また遊ぼうね、チルノ」

「うん！」

私はチルノとも約束して、レイムに続いて部屋を出た。

寺子屋の外に出た私たちは、お互いに顔を見合わせた。

「次は、どこ？」

「……そうね。一旦アリスの家にあなたを送りましょうか」

「足手まとい？」

レイムは頷いた。

「だから、アリスに守ってもらいなさい」

「……。わかった」

私は弱い。レイムと一緒に戦うなんて、できるわけがないのだ。

無理をして、捕まったりなんてしたら意味がない。

「ごめんね。色々と連れ回して」

「大丈夫」

私はそう言うのと翼を生やし、飛び上がった。レイムも続いて飛んでくる。

「だいぶ空にも慣れたかしら」

「うん」

私が答えると、レイムは頷いてから移動し始める。かなりの速度が出ているので、私も必死で追いつこうと翼をはためかす。距離は大体五メートルぐらい。時々レイムがこちらを向いて、安全を確認しつつ、進んでいく。きらりと、魔法の森の地面が少し光ったような気がした。

景色がどんどん変わっていき、あともう少しで魔法の森だ、と思った次の瞬間、拳くらいの大きさの何かが視認も難しいくらいのもので飛んできて……。

「あっ」

私は、撃ち落とされた。

狂信の源と私

「きゃっ」

私は何の抵抗もできずに地面に叩き落とされた。地面に激突する瞬間、思わず手をついてしまい両手がひしゃげてしまった。

何をされたのだろう。

私は上空を見上げる。レイムがこちらへ向かってきていた。よかった。助かる。

私の周りは、深い森になっていた。アリスのいる森だろう。アリスの家からも近いなら、大丈夫。

そう思っていると、私の両足首が誰かに掴まれた。

私は足の方を見た。

おぞましい笑顔を浮かべた、東野と目が合った。

「……あ、あなたは」

「ふは、ふははは」

ずるずると引き摺られ、私は遠くの草むらに隠された。それから両手が治り始めた。すぐに完治したけれど、足首を掴まれていたら身動きがとれない。レイムが降り立った方に顔を向ける。

レイムが、私がついさっきまでいた地面に降り立った。周りを調べても、周りの草むらを見ても私を見つけることはできなかった。すぐそばまでレイムがやってきたところで、私は声を上げようとした。喉を切られて何も言えなくなる。そうして私が黙っているうちに、レイムは別の場所へと行ってしまった。レイムが、遠い。

私は振り向いて、東野を見る。ナイフを持って、へらへらと気味の悪い笑顔を浮かべていた。私の足首へとナイフをあてがうと、にいつ、とさらに笑みが深くなる。

「……やめて」

私が小声でそう言うのと同じ時、私はアキレス腱を十字型に刻まれていた。言葉にできないような痛みと共に、足首から先に力が入ら

なくなる。

レイム、助けて。

私はレイムが行った方を見てそう思った。私の願いは届かず、レイムは私のいる反対側の森の奥へと消えていった。私はさらにずるずると引き摺られた。

抵抗、しない。

そう思って手を動かそうとしたとき、私は両手を掴まれてまとめあげられた。

「ダメですよ、東野。ちゃんと両手両足、使えなくしないと」

御陵臣だった。神出鬼没にも、ほどがある。なぜなんの気配も感じさせず、一瞬で現れることができる？

「すまん。だが、別にいいではないか」

「……やれやれ」

私はまるで捕らえられた猪のような、四肢をまとめ上げられた格好で運ばれた。あるていど森を進んで行くと、小さな小屋があった。もう使われていないような古い小屋で、東野達小屋に近付くと、中から人が出てきた。小さな男の子で、目はうつろ。私を見ると、少しだけ驚いたような表情をした。

「……」

彼は、ノーマだった。永遠亭にいた時よりも、その顔は沈み、暗かった。

「ふふふ」

私は小屋に連れ込まれた。

小屋の中は、凄惨たる状況だった。

人がたくさんいる。それは皆異様な表情をしていて、嬉々とした様子で、手術台のような台の上に縛り付けられた子供を様々な方法で痛めつけていた。中には、もう動かなくなっているのにまだ攻撃されいてる可哀想な子も見られた。

「ここ、ここ、は」

私の声は震えていた。ここはまるで、拷問室のようだった。壁に

はたくさん拷問道具が並び、小屋中から身を裂くような悲鳴がいくつも聞こえる。

「仲間になって最初にする儀式さ」

御陵臣がこともなげに答えた。私も、空いてる手術台に縛り付けられる。大の字に寝かされ、ピクリとも動けない。特別製らしく、私の力でも引きちぎる事ができなかった。

「こんなことしたら、仲間になるのをやめる人がいるはず」

私の問いに、御陵臣は首を振った。

「わかってないね。仲間を纏めるのに必要なのは共通の意識さ。

幻想郷から出ようとする意識と、そして、子供を痛めつけたときの記憶。この二つが、我々の結束をより強固なものにしてくれる」

前者はともかく、後者は足抜け防止、なのだろうか。

「私はこんなことしない。死んでも」

「君もやってみればわかるよ。他人は、おもちゃなんだって」

吐き気がする。なんなんだ、この人間は。レミリアだって、もう少し人間に敬意を払っているだろうに。

「取り敢えず、君にはそれ相応の対応を決めているよ」

「……？」

御陵臣が合図をすると、右から左から、男や女、たくさんの人が私を取り囲んだ。私の視界は人で埋め尽くされる。

「君は我々のことを一部でしゃべったからね。特別に、時間制にしてあげる。半日ほどしたら、また仲間になるかどうか聞いてあげる。それまで、地獄にいるといいよ」

私は周りにいる人を見た。皆、壊れたような笑顔を浮かべていた。こんな狂った状況に感化されてしまったのだろうか。それとも、生来の物なのだろうか。あるいは、御陵臣に洗脳されたか。

私にとって重要なのは、彼らの手の中にある、様々な道具。

「……やめて。私は、あなた達に何もしないから。お願い、許して」
返事代わりに、誰かに目を抉られた。例えばもない、神経が引き千切られるような鋭い痛みが頭全体に広がる。

「ふ、ふふ」

私をいじめて、誰かが笑った。

あ、そうなんだ。私は、おもちゃになるんだ。ただ弄ばれるだけの、愛玩人形。ちよつと用途は、違うけど。

それから私は、レイムの助けをひたすら待ちながら、抵抗らしい抵抗もできずされるがままにされた。

半日が経ったらしく、私のことを御陵臣が見ていた。頭がぼうつとする。何があつてこうなつてしまつたんだっけ。

「……仲間になる気は、ある？」

……仲間になれば、痛みはなくなるのだろうか。これほどの苦痛を、感じずにいられるのだろうか。

「私、は」

仲間になる。そう言おうとした時、私の脳裏にアリスやレイム、私が出会つた幻想郷の人に人々が頭に浮かんだ。あの人達は、仲間になつてもいいと言つた。

けど。

「な、ら……な、い」

途切れ途切れに、私は言つた。

「……そう。じゃあ、また明日。明日は一日中虐めてあげる。ほら、あそこに放り込んでいて」

私は解放され、六人がかりで運ばれる。私はもはや抵抗する気力がわかなかつた。

私が呆けていると、全身に鈍い痛みを感じた。どこかの部屋に放りこまれたということがわかつた。がしんと音がしたあと、鍵の閉まる音がした。私はそんなものに構わず、周りを見る。

「……こ、こは」

周りにいるのは全て、捉えられ、儀式に使われ、使い終わった子供だった。もうボロボロで、生きている子もいるが、虫の息だった。いや、違う。すでに死んでいるような子供達だった。

「い、生きてる、の？」

私は生きている子の中の一人のそばに這ってよると、声をかけた。
「……き、みは？」

息も絶え絶え、呼吸も苦しそうだったけど確かに生きている。両手両足もがれて、内臓をさらけ出しているというのに、生きている。それは却って、残酷なことのように思えた。

「ら、楽にしてあげよう、か？」

「……お願い」

だから私は、普段なら言わないようなことを言っていた。私はその子の目を見る。視線に力を込める。

だんだん、その子の目がとろんとしてくる。苦しみの色はどんどんと薄れていく。

「……楽に、してあげる」

「ありがとうございます……マスター」

これは、罪だ。子供を魅了し、その肉を喰らう。いくら、楽にしてあげたいからと言っても、やってはいけないことは、やってはいけないのに。

「……」

私は無言で、彼の首に齧りついた。痛くならないように、一気に全身の血を抜く。初めての、吸血。たてえようもない気持ちよさを感じる。喉がうるおい、腹が膨れるような感じがする。力がみなぎってくる。

そして、この子の記憶や感情、そういったものまで私に流れ込んできた。

「……ありが、と」

干からびて死ぬ寸前、この子はそんなことを言った。
名前もしらない、こんな吸血鬼にお礼を、言う。よほど、苦しかったのだらう。訪れるものが死だとしても、最期の瞬間くらいは安らかに。そう思ってたことだったが、間違っでは、いなかったようだ。

私は他にも中途半端に生きてしまっている子を探すと、許可をもらってから楽にしてあげる。部屋を一周するころには、十人程度の血液を私は吸い付くしていた。

「……みんな」

私はゆっくりと立ち上がる。血を吸う瞬間、あの子達の気持ちを感じていたことが流れ込んできた。辛くて悲しくて苦しくておぞましいものだったけど、私は受け止める。

そして私は、あることを決めた。

「滯っ！」

それとほぼ同時、レイムとアリスが部屋に雪崩れ込むようにして入ってきた。それから部屋の中の私を見つけると、近づいてくる。なぜか、二人とも警戒しながらだった。

「私は大丈夫。解放団の連中は？」

レイムは首を振った。

「一目散に逃げるもんだから、中々ね」

レイムも、非情にはなれないのだろう。どうせ、解放団の連中はレイムたちが来たら武器を捨てて逃げたのだろう。

誰が武器を放り捨てて、抵抗もせずにひたすら逃走する人間を後ろから攻撃できるだろうか。

……それをしたのが、解放団か。

「次からは、私も解放団と戦う」

私がそう言うと、二人は静かに首を振った。

「いいのよ。あなたは、休んでも」

「戦う」

私は両手を広げてそういった。私の手は、血に濡れていた。私の血ではない。周りにいる犠牲者達の、文字通りの血涙。

「この子達の仇を取ると、約束した」

レイム達は不思議そうな顔をした。

「……この子、達？ 滯、もしかしてここ、誰かいたの？」

「見えないの？」

私はこんなにくっきりと見えるのに、二人は少しも見えないのだろうか。

「ええ。全く」

この光景が、見えない。それは、きっと幸せなことだ。きっと、喜ばしいことだ。みんなもきつと、こんな残酷な姿の自分を、見られたくはないだろう。

「……そう。じゃ、行こう」

私は二人の手を引いて外に出た。灯りがついている拷問部屋が目に入る。私が縛り付けられていた手術台には、おびただしいほどの血が周りに飛び散っていた。臓物もいくつか見える。

半日間、私は何をされていたのだろう。よく覚えていない。思い出さなくてもいいことだ。

「……ここで何があったの？」

アリスが聞いてきた。私は真実を言おうとして、声が出なかった。脳裏に、まるで呪いのように御陵臣が言った言葉が蘇る。

『君は一部でもしゃべったからね』

私が、これ以上何かを話せば、私は、何をされるのだろう。半日記憶が消えたというだけでも恐ろしいのに、それ以上の恐怖と苦痛が与えられるのか。

……そんなのは、嫌だ。

「ごめん。言いたくない」

でも、嘘はつきたくない。だから私は、そう答えるに留めた。

「ど、どうして？」

「何をされたか覚えていない。私は大丈夫」

ひたすら戸惑う二人を無視して、私は外に出る。外は夜だった。私が攫われた時と変わらない森。だけど、昼間よりよっぽど安心できた。遠く、遠くまで見通すことができる。

私は空を見上げる。雲一つない星空に、まばゆく輝く満月があった。夜とは、このように美しいものだったか。

「滯、どうしちゃったの？」

アリスが慌てたように追いかけてきた。

「なんでもないよ、お姉ちゃん。帰ろう。私、疲れちゃった」

ノーマも小屋にはいなかった。きつと解放団の仲間になったんだろう。あのおぞましい儀式に彼が参加しているなど考えたくもなかったが、それは致し方あるまい。私だって、アリスたちと出会っていないければ……。

「で、でも、永遠亭に行ってみてもらわなくてもいいの？」

「いい。何をされたかなんて、知りたくない」

私は隣まで歩いてきたアリスの手を握った。暖かい。

「濡の手、冷たい」

「怖かったのかな」

覚えてないけど。

「……辛い？」

「さあ。今の私は、普段通り」

いや、普段よりよっぽど鋭い。今なら、なんでもできるような気がする。吸血したいと言う気持ちもまた、強かった。みんなの血を吸ったばかりだというのに。今のこの衝動は、飢えというのとは違う気がする。そう、アイスクリームやおやつがほしいというのと似た気持ちだった。

「帰ろう」

なんだかだるい。なんだかこの世界そのものが、くだらない事のように思える。もっと重要なものは、こことは違う、元の世界とも違う、私がまだ見たこともない世界にあるかのように思える。

……疲れてるのかな、私。半日弄ばれていたのだ、記憶はなくても、身体は覚えているだろう。

このままだと、疲れを解消するためにアリスかレイムを食べてしまいかも。手を握ったまま歩き出したアリスに対して、ふと衝動が訪れる。

「お姉ちゃん。今の私は、吸血鬼。ダメ。近付かないで」

私はアリスの手を振り払って、後ろにいたレイムに向かった。

「レイム、私どうすれば？」

「どうしたいの？」

どうすればいいだろう。どう伝えれば良いだろう。

わからなかった。

「……わ、わからない。ごめん、ごめん。私、どうすればいいのか……」

「まあ、方法がないわけではないけど
なんだろう。知りたい。」

「レミリアのところで眠る、っていうのは？」

私は、レイムを見た。それから、アリスの方を見た。アリスは、
頷いても首を振ってもくれなかった。

「お姉ちゃんは、どうして欲しい？」

私は聞いた。不安だった。まるでためらないなくレミリアのところへいけと言われたら、それはもう一緒に暮らせないことの証左である。そんなのは、嫌だ。もう家族と一緒に暮らせないのは嫌だ。

「あなたは、どうしたい？」

「私、お姉ちゃんと一緒にいい。アリスの、家族だから」

私は普段通りの口調でそういった。でも、内心は泣いていたのかもしれない。

「……わかったわ。じゃ、帰りましょうか」

「いいの？ ……じゃない、うん。私、絶対に、我慢するから。もしダメだったら、その時は私を磔にしても止めて。私、お姉ちゃんの血を吸いたくない。家族だから」

渋々だけど、アリスは頷いた。私は心の底から安心する。痛いのは怖い。苦しいのは嫌だ。でもそれ以上に、家族を苦しめるのはもっと嫌だ。

「……アリス」

「何かしらレイム」

帰ろうと森を歩き出した私達を、レイムがひき止めた。アリスに

顔を寄せ、ぼそぼそと耳打ちをした。

「私がそれやるの？」

「あなたしかいないの」

「あんたねえ。もっと何か言い方ってもんがあるでしょうが。相手考えなさいよ。嫌われて飛び出したらどうすんのよ？」

「大丈夫。澪はちゃんとわかってくれるわ」

二人は小声で話しているつもりなのだろうか。筒抜けだ。でも、重要なことは知らずに済んだ。よかった、よかった。

「いこ、お姉ちゃん」

「……わかったわ」

慌ててアリスは近づいて、手を握ろうとする。私はそれを無意識的に振り払おうとして、アリスに掴まれた。

ピクリと、全身が跳ねたように痙攣した。それは一瞬のことでアリスにはきづかれなかったけど、確かに、私は今体のコントロールを失った。

なぜ？

「……帰りましょうか」

「うん」

仕方なく私はアリスと手を繋いで帰ることにした。アリスの血の匂いが鼻について、襲いかかるのをこらえるので必死だった。血を、血をと求める体を心だけで抑え込んで、私は家までの道を歩く。

家に帰るころには、私の心はすっかり疲れきっていた。

私は、いったいどうなってしまったのだろうか。

秘めた不安と私

帰ってから二言三言会話を交わすと、私とアリスは二人並んで、ベッドで横になった。手を繋いで、アリスのぬくもりを感じながら、目を閉じる。アリスと母とを重ねないよう注意しながら、安らげるよう体から力を抜いて行く。

「……ねえ、滯」

「なあに、お姉ちゃん」

「……本当に、覚えてないの？」

私は黙った。覚えていない、ことはない。でも、確たるものはなにもない。夢かもしれないし、幻かもしれない。ともすれば、あの子達の記憶かもしれない。

「目を抉られたことは、覚えてる」

もちろん今は全く痛まないし、ちゃんと見えてもいる。だけど、あのとき私が感じたのは間違いなく、抉られた時の痛みだった。

「……目を。痛かったわね」

「他にも、いろんなことをされた……と、思う。覚えてないけど」
半日、私は捕まっていて、何をされたのだろう。あの手術台に撒かれていた血液は、異常なレベルだった。何をされたのだろう。

「バラバラにされたのかな。砕かれた？　もしかしたら、もっと酷いことをされたかもしれない」

もしそれが本当ならば、私の中に、その記憶があるということだ。おぞましい。忌まわしい。

「大丈夫よ。私がいるわ」

アリスが、不安に思った私を抱きしめようと手を伸ばしてくれた。ほのかない匂いが広がって、意識が飛びそうになる。吸血鬼としての私が、アリスを喰らえと言っている。違うのに。アリスだけは、違うのに。

「……お姉ちゃん、私に食べられなくなったらそれ以上近付かな

いで」

私は若干冷たく言った。そうでもしなければきっと、優しいアリスは無理にでも抱きしめてくれそうだったから。アリスは手を引っ込めてくれた。私は少しだけ離れる。

「優しいのね、滯は」

「優しくなんてない」

それから、思いついて私はアリスに提案した。

「お姉ちゃん、明日永遠亭に行こう」

「やっぱり、見て欲しい？」

私は首を振った。

「ノーマが、小屋にいたから」

アリスは複雑な表情をした。

「きつと脅されたんだと思う。助けないと」

私は確信を持ってそう言った。

「……でも」

「約束したんだ、あの子達と」

私は色んな約束をした。血を吸う時、私に願いと思いを託して死んだあの子達との約束。全部守る。全部果たす。そう決めたのだ。

「……あの子達って？」

「また、明るいうちに調べに行こう。そうすれば、全部わかるから」

私の言っている意味も、御陵臣がどれほどの悪かということも。

「……わかった。じゃ、明日、ね」

「うん、明日」

それからアリスは、しばらくすると眠った。安らかな寝息と、安心きった表情は、私を信頼している証だろうか。

アリスとは反対に、私は眠れなかった。吸血鬼は夜起きるものだと聞いていたけど、それは太陽の光が苦手だからという理由だと思っていた。だから、太陽が平気な私は昼間起きることも可能だと思っていた。けど、夜がこれほど心地いいのなら、昼間起きる意味が

ないようにも思えてしまう。

「……」

今は、今は、眠ろう。あと数ヶ月後ぐらいには夜に行動するようになったとしても、今は眠ろう。普段通り、いつも通り。

私はゆっくりと眠りに就いた。

夢の中で私は虐殺をしていた。大人、子供、男や女関係なく、ひたすら、一つの場所に集まった人間を一方的に殺し、その肉を悠々と喰らい、その血液を優雅にする。最高の快楽と至上の興奮が私を包んでいた。悲鳴と肉が弾け、骨が碎ける音を聞きながら、私は思う。殺戮はこれほど楽しいとは。これほど、他者を虐げるのが気持ちいいことだとは。

一人の男が目に入る。顔は見えない。どんな人間かもわからない。でも、そいつが目に入った。だから、私は気まぐれで、そいつを特に念入りにいたぶることにした。深い意味はない、ただの、暇つぶし。

まず弱い吸血鬼にして、簡単には死なないようにする。私の命令には逆らえない。でも、自由意志は残す。家族もこの場所にいるようだ。

はははと笑いながら、私は彼に酷いことをしていく。

両親を殺せと命じた。嫌々ながら、泣き叫びながら手をかけた。娘を痛めつけろと命じた。何度も何度も娘に謝りながら、私の命令を遂行する。殺してくれと娘が懇願するようになると、私は彼女の首にかじりつき、激痛と共に血をすする。完食しきってから私は、彼を少しづつ削って行く。少しづつ、消耗させていく。

かつて私がされたように。私に命じられ、彼が家族にしたように。「許して」

私は命乞いを無視して、彼を殺した。バラバラにして、ぐちゃぐちゃにして、私が楽しみ終わったときには、彼はもう肉の塊になっていた。返り血に汚れた服がうざったらしくて、私は自分の服を自

分で破り捨て、そこらじゅうに散らばる血を集め、服を作った。私の一部になった服は、返り血を吸収する性能がる。

私は笑いながら、肉をかきわけ、心臓を探す。

肉の中を探っていたはずなのに、傷に怯え、痛みを恐れる私と目が合った。そこで、気付く。

私がこうすることは、御陵臣と同じになるということ。

いや、本来は違う。つまり御陵臣が、私と同じ化け物なのだ。

人を殺す、最上級の化け物。それが、私。そして、御陵臣のだと。

私は目を覚ました、外を見ると、まだまだ暗い。隣のアリスを見ると、まだ眠っている。私も、まだ寝ておこう。再び目を閉じると、私は眠った。また同じような夢を見た。

……

「……おはよう」

私は眠い目をこすりながら起きた。隣にはアリスがいるのだから、寝坊はできない。アリスは体を起こすと、私の方を見た。

「おはよう。嫌な夢見なかった？」

「うん」

私はいい夢なんて見ていないのだが、あの夢は吸血鬼的には幸せな夢だろうから、頷いておいた。説明するのが面倒だというのもある。これ以上心配をかけたくない、というのが真相であるような気もする。

でも、よかった、夢で。あんな残酷なこと、したくない。あんな酷いことをやるくらいだったら死んだほうがいい。死ねないけど。

「お姉ちゃん、準備したら行こう」

私はベッドから降りてそう言った。

「わかったわ。じゃ、服着替えるから」

そう言って、アリスは部屋から出て行った。私も服を着替えようか。

あれ、そういえば、私どうして服を着ているのだろう。ぐちゃぐちゃにされたはずなのに、服が無事？ 不思議に思っ、服に触る。昨日は気付かなかったけど、服はしつとりと濡れていた。寝汗をかいた……というわけではなさそうだ。なんだろうか。

……それとも、全部私の妄想なのだろうか。昨日のあの痛みや苦しみは全部夢で、そんな夢を見たから私はこんなに寝汗をかいている。

面白い妄想だ。

「準備できたわ。行きましようか」

さっぱりとした様子のアリスが部屋に來ると、私はベッドから降りてアリスのそばに行く。

「歩いて行こうね、お姉ちゃん」

もう空は飛びたくない。あんな目に遭うなら、多少遅くなってもいいから地面を歩きたい。

「ええ、それはそのつもりだけど……」

「昨日は、飛んでて狙撃されたから」

誰がやったんだろう。御陵臣は感情の芽を植え付ける程度しか力がなかったはずだ。ということは、他の人が？

一体どれだけの人が、どれほど強い力を持っているのだろうか。

「……そうなの。ごめん」

アリスの謝罪が、妙に心に響いた。

「いい。行こう」

私はアリスと手をつなぎ、永遠亭までの道のりを幸せに過ごした。吸血衝動を我慢するのが、少し辛かったけど。

永遠亭の前にたどり着くと、エイリンが立っていた。

ちよっただけ驚く。けど、敵ではないことがわかったので少しは楽だ。

「……エイリン？　なんで？」

「姫様に言われたのよ」

わかりやすい理由だ。でも、なぜだろう。

「どうして？ 輝夜になんかあった？」

「ノーマがいなくなったのよ。他の外来人が攫われないよう、私は見張りやつてるの」

エイリンが忌々しそうに答えた。解放団の手は、こんなところにも伸びている。早く、止めないと。

「エイリン、カグヤに会いたい」

「わかったわ。麗仙がいるから、彼女についていきなさい」

エイリンはそう言うのと快く迎え入れてくれた。

「アリスはここで待ってて」

アリスは虚を突かれたような顔をした。

「いいの？」

「不死同士、秘密の話がある」

カグヤには、ノーマの事を伝えるのと別に、相談したいことがあるのだ。一人になるわけではないのだから、大丈夫だろう。

「……わかったわ。くれぐれも、気をつけてね。いざとなったら、ちゃんと仲間になるのよ」

私は頷くと、永遠亭に入った。玄関には、レイセンが待っていた。私は靴を脱いで廊下に入った。

「いらっしやいませ。姫様がお待ちですよ」

彼女は私にぺこりと頭を下げると、手を引いて私を案内した。レイセンの顔を見ると、キョロキョロと周りを警戒していた。ただの廊下。けど、今は解放団が潜んでいるかもしれない場所だった。

カグヤのいる部屋の前まで来ると、レイセンは頭を下げた。

「姫様。滞をお連れ致しました」

「はい。今行きます」

それからすぐに、襖がすらりと開いて、着物を着たカグヤが出てきた。相変わらず、絶世の美しさだ。

「あら、滞だけ？ ま、いいや。レイセン、堅苦しいことさせてご

めんね？　せっかくだし、お姫様ごっこしてみたかったんだ」

ごっこにしては徹底していると思う。

カグヤの言葉に、レイセンは息をついて、肩の力を抜いた。

「まったく。そうならそうと言ってくださいよ。色々肩肘張っちゃったじゃないですか」

「いいじゃない、たまには緊張も」

まあそうなんですけどね、と小さくレイセンは言った。

「じゃ、私はこれで。滞ちゃん、帰るときは呼んでね」

「うん」

そう言ってレイセンは廊下を歩き、ある扉の中に入って行った。それを見ていると、急に手を引かれ、体が引っ張られた。意識せず、目を硬く閉じていた。体が強張る。得体のしれない恐怖が全身を包む。

「……どうしたの？」

「か、カグヤ」

私は、恐る恐る目を開けてカグヤを見た。

「……お部屋、入ってもいい？」

「もちろんよ。いらっしゃい」

私はカグヤに手を引かれ、部屋に連れ込まれた。違う。連れて行ってもらった。

部屋の中はお姫様なカグヤのイメージと違い、ごく普通の、人が生活するための部屋だった。押入れがあって、コタツ……今は布団がないからただのテーブルになっているものがある、適度に散らかって……。なんだか、落ち着く。

私はテーブルのすぐそばにある、座布団が敷いてある場所に座った。カグヤが私を気遣うように手を押さえ、優しいな、心配そうな顔をした。

「気軽に友達の家、という雰囲気ではないけど……どうしたの？」

「私、ノーマを見た」

カグヤが、目を見開いた。

「どこで？」

「魔法の森の奥にあった拷問小屋の中」

私は自然とそんな単語を言っていた。カグヤは不思議そうな顔をした。

「拷問小屋？ そんなのあったかしら」

「解放団が使ってた、今は使われていない小屋だった。私が攫われたとき、ノーマがいた」

カグヤは色んなことに驚いた。それから、私の頭を優しく撫でくれる。

「攫われたの？ 大丈夫？」

「何をされたのか覚えていない。多分、記憶に蓋をしているんだと思う」

ゆつくりと、私は言う。

「もし、この蓋が外れたとき、記憶が蘇ったらどうなるか、わからなくて怖い。カグヤ、こんなことカグヤにしか相談できないの。」

ねえ、この恐怖から逃れるにはどうすればいいの？」

アリスには、心配をかける。レイムにも、同じ。なぜか、カグヤには心配をかけても大丈夫なように感じた。受け止めてくれると、感じた。同じ、不老不死だからだろうか。

「毎日死んで、死ぬことに慣れればこの気持ちが消えるの？」

私の問いに、カグヤは首を振った。

「私はあなたのように、捕まっていたぶられたことがないからわからないけど、その方法では、解決しないわ。記憶を思い出すことが怖くなるかもしれない。けど、そうなったとき、あなたは今のあなたとはかけ離れたものになっているのよ？」

ゆつくりと、髪を梳くように撫でてくれる。なんだか、心地がいい。

「あなたが感じてる恐怖って、あなたを、私やアリス、皆が大好きなあなたを捻じ曲げてでもして消したいの？」

怖いのは、怖い。けど、確かに、そこまでして、消したいのだろうか。自分の中を探る。良くないものに触れそうになりながらも、答えを探す。

ううん、違う。私が怖いのは、その先にあるんだ。記憶が蘇って、壊れてしまうのが怖いんじゃない。

「カグヤ、私が解放団に入らずにいれるには、どうすればいい？」
痛みと苦しみに私が折れて、解放団に入ってしまったのが怖いのだ。事実、私は半ば折れかけている。次攫われて半日でも痛めつけられたら、頷いてしまうだろう。そうになったら、苦痛に怯えて裏切ることさえままなくなるだろう。心の底から、解放団に従うようになる。そんなのは、嫌だった。

「……戦うことよ」

「誰と？」

カグヤからの言葉を、私はすぐに否定することができなかった。
「あなたを傷つけようとする者全てをよ。あなたは、守りたいものために戦ってもいいのよ」

「……でも、私」

「私があなたなら、いいえ、あなたを守るためなら、解放団の連中を殺すことだって躊躇わないわ」

カグヤの過激な言葉が、耳に入ってくる。否定しようとして、できない。

「……私は」

どうしたいのだろう。なぜ、こうも頑ななのだろう。もっともつと奥まで、自分を探る。自問自答を繰り返す。

ああ、そうか。

「……私は、私のままでいたい」

お父さんと会ったときに、お父さんが戸惑わないようにするために。大切に守ってくれて、私を大事に思ってくれたアリスの思いを、無駄にしない為に。私に遊びを教えてくれたと言ったマリサのために。私と遊びたいと言ってくれたチルノのために。私のことを気遣

ってくれた人里のゲンや、ケイネのために。そして、私と友達になつてくれたカグヤのために。皆のために。

「それなら」

「でもそれは、戦って、解放団を皆殺しにして、私の敵を殲滅したら守れることじゃない、と思う」

私がそう言うのと、カグヤはにっこりと微笑んだ。

「答え、見つかったみたいね」

「うん。ありがと、カグヤ」

どういたしまして、とカグヤは私の頭を撫でてくれる。

「ノーマの様子はどうかだったかしら？」

カグヤは私を撫でる手を止めてそんなことを聞いてきた。

私はカグヤにゆっくりと抱きついて、背中をさする。

「大丈夫だよ、カグヤ」

「本当に？」

「うん。辛そうだったけど、多分大丈夫」

確信はない。けど、わかる。ノーマは、私と違って頑固じゃない。いつか助けが差し伸べられるのを、待ってるんだ。

「……情報、ありがとうね、漣」

「こっちこそ、慰めてくれてありがとう」

私たちは離れると、お互いを見て微笑んだ。私の表情は動かなかったけど、わかってくれたと思う。

「とりあえず、私たち永遠亭は解放団と徹底抗戦するわ。漣、こんな頼むのおかしいんだろうけど、気が向いたら戦闘に参加して」

「気が向いたらね」

そう言って私は外へ出る襖を開けた。

「ふふふ、用がなくても、遊びに来てね。今度はとびきり楽しいことをしましょ」

「うん。じゃあね」

とびきり楽しいこと？　なんだろう、すごく興味がある。この問題が収束すれば、またここに来よう。今度は、純粹に遊ぶために。

「それじゃ」

私は襖を開けた。驚くべきことに、レイセンが扉から少し離れたところで立っていた。

「……聞いてた？」

私が聞くと、彼女はふるふると首を振った。

「ごめんね。でももう、あなたや姫様の友達が攫われるわけにはいかないから。帰る？」

頷く。

レイセンは私の手を引くと、玄関まで私を連れて行ってくれた。

「濡、どうだった？」

玄関では、アリスとエイリンが何かを話していた。アリスとエイリンも、顔が陰しい。

「ん。来てよかった」

「それは何より」

エイリンが仏頂面のまま言った。

「何かあった？」

「……何でもないわ。二人とも、今日何か予定あるかしら」

「これから少し調査に出るところ」

「そうか。急ですまないが、頼みたいことがあるのだけど」

「……どうする、濡？」

私は頷いた。

「そうか。頼みたいこと、というのにな……」

エイリンは厳しい表情で、口を開いた。

振り払われた手と私

エイリンのお願いというのは、単純だった。

「ノーマを、助けてあげたいの」

「……んなことわかるわよ」

アリスは苦しそうな表情だった。親しい人がいなくなる苦しみを、アリスは何度も味わってるはずだから。……ごめん、アリス。

「ありがとう、アリス。お願いっていうのは……、濡に潜入してほしいの」

アリスは渋い顔をした。

「……で？」

「そこで、ノーマを連れ出して逃げるか、せめてアジトがどんな場所なのかくらいでもわかったら……」

エイリンは私を見た。

エイリンは、苦しんでた私をいつも助けてくれた。レミリアに魅了されかかったときも、死にかけたときも、自殺しかけたときも。だから、できるだけ思いには応えたい。けど……。

「もしそんなマネして、向こうが濡を裏切り者だと認識したらどうすんのよ。その状態であいつらに捕まったら、終わることのない責め苦が待ってるのよ？ 子供にそんなことさせるつもり？」

「だけど、今幻想郷の人間で解放団が接触してこようとするのは濡一人なの」

幻想郷の人間、と言われたことが、嬉しかった。私は名実ともに仲間だと言われたような気がした。

「あのね。だからってスパイみたいなマネさせられるわけないでしょ。この子もう二度も捕まって地獄を見てるのよ？ 次そんな目に遭ったら今度こそ壊れるわよ？」

エイリンは呻いた。苦しそうに、悲しそうに。

「……そう、ね。私が、考えなしだったわね。は、はは。月の頭脳

が、とんだ体たらくだ」

月の、頭脳？　なんだろう、この人偉い人だったのかな。それとも、ものすごく賢い人だったのかな。

「気持ちわかるわ。でも」

「私、行く」

二人が、驚いたようにこっちを見た。

「私、頑張る。ノーマを、助ける」

ノーマは友達ではないけど、ノーマに何かをしてもらったわけではないけど。

けど私は、アリスの家族なんだ。アリスが見ず知らずの私を助けたように、私も見ず知らずのノーマを助けよう。

「……でも、そんなことしたら」

「裏切ったことがばれたら、私、今までよりもずっと酷いことをされると思う」

怖い。例えようもないくらい、耐えようもないくらい大きな恐怖が私の心を鷲掴みにしようとしている。でも。

でもそれよりも私が怖いのは痛みの先にあるもの。ノーマを助けられなかったら？　心の底から向こうの仲間になってしまったら？

それが、怖い。

「ねえ、お姉ちゃん。もし私が私でなくなっても、お姉ちゃんは私の家族でいてくれる？」

アリスは頷いてくれた。

「……絶対に、永遠に家族よ」

「それなら、もう何も怖くない」

私が壊れても、私が私でなくなっても、私が狂っても、アリスは家族。その安心が、私を恐怖から解放してくれる。

「じゃあ、行ってくる」

「待ちなさい」

竹林の中に飛び込もうとした私の肩を、アリスが掴んだ。

「……本当に、行くつもり？」

「もちろん。私、ノーマのために、皆のために、頑張るよ」

いつも、私は必要に迫られて頑張った。今、初めて他人のために頑張っている。家族の役に立てるのが、幻想郷の皆に恩返しができるのが、嬉しかった。

「……帰って、来なくてもいいわ」

「え？」

「無事でさえいてくれたら、心の底から解放団に入ってもいいのよ。お願いだから、無茶してボロボロにならないで。お願いよ」

「……」

私は答えなかった。絶対に、解放団の仲間にはならない。それだけは、譲れない部分だったからだ。

「行ってくる」

アリスの手を振り払い、私は竹林の中を駆ける。

しばらく走り、エイリンとアリスの姿が見えなくなったところで、目の前に御陵臣が現れた。いつも不敵で気味の悪い笑顔を浮かべていた顔は、複雑そうな表情になっていた。

「……あんな相談を我々が聞いていないと思った？」

私は首を振った。

「あなたの仲間になりたい。アリス達に言ったのは、全部嘘」

アリス、私、頑張るよ。

「……ほう」

「私は拷問なんてしたくない。でも、解放団には従う」

「それは、いけません。入団の儀式はあれだと決まっているのだから」

「もしそうなら、私が今の解放団を皆殺しにして、私が新しい解放団のリーダーになる」

御陵臣は顔を引きつらせた。

「解放団を乗っ取って、何をするつもり？」

「幻想郷から出る」

私は静かに言った。

「もう、こんなところにいたくない。協力させて」

「さもなくば、皆殺しに？」

私は頷く。

そうすると、御陵臣は大笑いした。

「あははは！ わかった、わかった。

来る者拒まず去る者は地の果てまで追いかけて、裏切り者は許さない、幻想郷という檻から解放を目指す唯一の団体、解放団へようこそ！」

私はその嘘くさくて白々しい文言を聞いた次の瞬間、後頭部を思い切り殴られ、意識が飛んだ。

目を覚ますと、私は王座のような豪華な椅子に座らされていた。縛られてもいない。私の体には大きいくらいのマントも羽織らされていた。周りを見渡すと、多くの人が私に頭を垂れていた。ごつごつした岩が壁や床になっている、洞窟みたいな広い部屋だった。遠くにある部屋の入り口からこの玉座のような椅子まで、真っ直ぐに赤絨毯が敷かれている。

「……御陵臣は？」

私が呼ぶと、私の隣に御陵臣がいた。相変わらずの、神出鬼没。

「どうかしましたか、姫様？」

「どういうつもり？」

もとより、と言って御陵臣は語り始めた。

「姫様には、こうして我々のアイドルとして幻想郷の人間と戦ってほしかったのですよ。死なず、老いず、そしてなりより強い。そんな、まるで夢のような存在。それが、あなたです。さあ、姫様。我々はあなたの指示を待っています」

元から、こうして私を持ち上げるつもりだったのか。だからあんなに熱心だったのか。

たぶん、ここまでもちあげても、裏切った瞬間私は姫様からただの供物に早変わりするのだろうか。どういうつもりなのだろう、本

当に。

「……」

どうするべきだろう。指示を？　どんな指示？　どんな指示ならいいのだろう。

「お食事はいかがですか、姫様？」

「私、ごはんはいらない」

私が言うと、御陵臣は軽く笑った。

「我々と同じ食事を姫様が欲しているとは思いません。……おい」
そう彼が呼ぶと、入り口が開き、たくさんの生肉が運ばれて来た。それは皿に盛られた、たくさんの、人の肉だった。

「ごはんはいらないと言った」

「しかしもう調理してしまいました」

私は立ち上がって、その大きな皿まで歩く。食べたい衝動を我慢しつつ、それをよく観察する。一つ一つのパーツが小さい。……そんな。

「……まさか、子供の肉？」

「お目が高い。ここの人間の子供ですが、お口に合うかと」

「まさか、寺子屋から攫って来た、の？」

御陵臣はこともなげに頷いた。

悲しそうに私を気遣うケイネの顔が浮かんた。

「……他にも攫った子は、どうしたの？」

「皆、姫様のために」

私はかくりと膝をおとした。ケイネの生徒はみんな、みんな、私のせいで、私のために死んだ？

「……うそだ」

「証拠をお見せしましょう」

御陵臣が指を鳴らすと、次から次へと、皿に盛られた人の肉が運ばれてくる。それが終わると、私の周りには、ゆうに三十人を超える数の人の死体があった。

「……殺したの？」

「はい。入団の儀式の一環として」

私は周りを見る。人の死体ばかりだ。全員、ケイネの生徒だったであろう人たち。

「……もし、私が食べないと言ったら？」

「別に。その者たちが全てゴミとなるだけです」

私は、もう我慢ができなかった。最低。こんな人間達と同じ所属？私！？

「ノーマはどこ？」

「ノーマ？」

「死なない子」

ああ、と御陵臣が言った。

「持って来ましょうか？」

「お願い」

御陵臣が、何か合図をした。するとしばらくして、ノーマが連れてこられた。その顔は無表情で、目は虚ろ。何をされたのか、小さく小刻みに震えていた。

「こっちに」

私は自分から歩いて行って、ノーマの肩を抱いた。

「御陵臣。短い間だったけど、本当、気持ち悪かった」

私は臂力にまかせて、ノーマを運んできた人を吹き飛ばした。その人は壁に激突すると小さく悲鳴をあげて気を失った。

「裏切りですか」

「当初の予定通り」

にこりと、御陵臣は微笑んだ。

「それならば、こちらからです」

御陵臣が、何かのボタンを取り出した。なんだろう、と思っていると、彼はそれを押した。

部屋の周りから大量の人が、現れた。

「……」

「裏切り者には、死を。しかしあなたは死にません。ので、狂うま

で痛めつけることにします。泣いても叫んでも、これが最後のチャンスです。心の底から仲間になると誓い、その少年を喰らいなさい」もし、ここで断って、逃亡に失敗すれば、私はどうにかなっても、いためつけられるだろう。ここで仲間になって幻想郷と敵対する、というのも選択肢の一つなのかもしれない。

私の心は、捕まったら与えられるであろう苦痛にもう折れ始めている。

アリスの言葉が頭に浮かぶ。

アリスは心の底から仲間になっていいと言った。

ケイネの悲しそうな顔が思い浮かぶ。

帰りを待つケイネの気持ちを踏みにじった人間と、同じになるのか？

カグヤたちの言葉を思い出す。

彼女たちはノーマの帰りを、今も待っている。私は、ノーマを助ける為にここに来たのだ。

他にも、たくさん、私が出会った人たちの顔が浮かんでは消えて行く。

私は、決めた。

「仲間になど、誰になるか。私はノーマを助けにきたんだ」

ノーマの手を掴んで、入り口から逃げようと歩き出す。

すると、ノーマが私の手を振り払った。私はノーマを見る。かたかたと震えて、小さくうずくまってしまった。

ああ、折れてしまったのか。

私はノーマを責めることができなかった。たぶん、私もすぐにこなるのだから。

ノーマを振り向いて、彼を見ていたのはほんの数秒。けど、もう全てが遅かった。もう私は包囲され、なぜだか身動きすらとれなくなっていた。動きを縛る、誰かの力だろう。本当に、なんでこんなにもいろんな力を持っている人がいるのだろうか。

もう、私には何もできない。あとはただされるがまま。

私は早々に諦めた。二度攫われたのが、私の心に響いていたのだろう、抵抗する気力もあまり湧かなかった。

壊れる前にもう一度アリスに会いたいな。会えるかな。

私が捕えられる前に懸念したのは、そんな事だった。

それから私は、私は……。

生き地獄と私

疲れたなあ……。

私はぼんやりとそんなことを思った。

そもそも私って、なんだっけか。

私は手術台のような冷たい鉄の台に裸で縛られ、磔にされていた。四肢の動きを封じられている。

まあ、どうでもいいっか。

「ああ、本当に残念だよ……漣」

まだ、拷問は続いている。何時間も、苦痛を感じ続けている。

お腹を切られて、内臓を取り出された。私は呻いた。

痛みのない、普通の状態ってどんな感じだったっけ。ちょっと忘れかけていた。

「まったく。最高だ、君は」

御陵臣は笑って私の下腹部にナイフを突き立てた。じわりと淡い痛みを感じる。

「ふふふ、まさかノーマが裏切るとは思わなかったでしょ？」

そういいながら、彼は私の目を指で抉り取った。私はあまりの痛みに悲鳴を上げた。

「いい声。ほんと、愛らしい……」

私の両目がえぐられ、私は体を弓なりにして痛みに耐える。両目とも、すぐに元に戻る。

「さあ、次は……薬にこう」

そう言って、彼は注射器を取り出した。

「……な、なんの、クスリ」

「この前もつかった弛緩剤。ま、量は桁違いだけど。普通の人なら心臓止まって死ぬんだけど、君だから」

チクリと、腕に微かな痛みが。せめてもの抵抗に暴れられる範囲で暴れるが、両手両足が台に縛り付けられているせいでカチャカチ

ヤと拘束具を鳴らすだけに終わった。

「ほんと、君って面白いよね。普通の人ってやればやるほど反応薄くなっていくんだけど、君は逆。最初何の反応もなかったのに、今はこんな風に可愛げのあることをしてくれる。

もうほんと、大好き」

その歪んだ愛情が恐ろしかった。注射器の中の液体が私に侵入してくる。なんとかしないと、長く苦しむことになる。吸血鬼の力を使おうとしても、何を使えばいいのかわからない。

悩んでいるうちに、息がしにくくなってきて、最後には息が出来なくなった。

お腹を押された。軽く、今までで一番優しい刺激だったけど、今の私にとってはまだ肺に残った空気を排出させるための拷問でしかなかった。

「か、は」

「最高」

私は御陵臣に口づけされて、息を吹き込まれた。生暖かい空気が、気持ち悪い。

空気が体の中に入ったのに、まるで楽にならない。そうか、この行為も、空気が体に入っても無意味だということを知らせるための拷問、か。

……初めての、キスが。初めて、だったのに。

このまま私は、本来なら恋人と経験することをたくさん経験するんだろう。そして、そんなこと気にもならないくらい壊されてしまふのだろう。

そんなのは嫌だ。

でも、逃げられない。抵抗できない。

私はあきらめた。もう経験するのは、仕方がない。でも、せめてその瞬間を覚えずにいられますように……。

私は誰かに祈った。

「もっと、もっと」

指をノコギリで落とされた。一本一本、丁寧に。私は指を動かして逃れようとするけれど、無駄な努力だった。

私の両手の指が全部なくなって回復して、そしてまた全部落とされた。それが二回も続いた。

「もつと」

なぜ私は、息もできないのに、こんな苦痛があるのに意識が続いているのだ。

なぜこんなに痛めつけられてもまだ狂わない。なぜこれほどの苦痛で壊れない。

壊れたい、狂いたい。もう私なんていらなから。もう私は私でなくていいから。私を壊してください。

私を苦痛から解放してください。
だれか。

「もつと、楽しもうよ」

願いは、届かなかった。

私はお腹を開かれた。内臓を晒したまま、動かない心臓を少しずつ削られた。例えばような痛みを感じる。

……神様。

「楽しいなあ、本当」

私は針で色んな所を刺された。もうどこを刺されたかなんて考えたくもない。

……神様っ。

こんなに願っても、こんなに念じてても、神様は、助けてくれなかった。誰も助けにきてくれなかった。

神様、神様。

「……さ、そろそろ薬が切れるかな。ほんと、麻薬がないのが残念だ。じゃ、後遺症が残るような拷問いつてみようか」

すっと、御陵臣が私の耳に口を寄せた。

「君に幻覚を見せてあげる。アリスに拷問されてみなよ」

「そ、そんな、こと、で、きるわけ、が」

にっ　と御陵臣は笑った。すると、彼の顔が歪み、私の大切な、大好きな、愛しているアリスに姿が変わった。

「……アリス」

「お、効いてる効いてる。さすがキア。いい仕事だ」

アリスは微笑むと、笑顔で包丁を握った。そして、私の胸に突き刺した。

私は低く呻いた。

「くふふふ」

今度は皮むき機を手にした。何をする気なのかは、わかった。けれど。

「やめ、て、アリス」

「いや」

アリスは意地の悪い笑顔を浮かべて、私の腕の皮を……。

「あっ……」

そうして、私は丹念に剥かれた。裸なのは変わらないのに、私はさらに一段剥かれた。

「アリス……」

すぐに体は元に戻る。

このアリスは御陵臣。わかってるのに。

「ふふふ」

ぎゅっと、アリスは慈しむように片手で抱きしめてくれた。

その時、私の脇腹に鋭い痛みが。空いた方の手で、アリスは私の脇腹にフォークを突き刺していたのだ。ぐりぐりとかき回され、私は身をよじる。アリスに押さえられ、私は身動きが取れなかった。

「ふふふ」

私の記憶に、その時のアリス、いや、御陵臣の顔がずっと残った。苦痛はまだまだ終わらない。

いくら痛くても、どれほど苦しくても、私の体は存在し続ける。私の心も在り続ける。

どちらもなくなってほしいのに、なくならない。

どちらも壊れて欲しいのに、壊れない。

どちらも狂ってほしいのに、狂わない。

もう、痛いのは嫌なのに。もう苦しいのは嫌なのに。

「ううっ……」

「大丈夫？」

マリサの姿形をした御陵臣が、そんな言葉を吐きながら私の右腕を掴み、肘の関節を逆方向に思い切り曲げた。体が熱くなって、断続的な鈍い痛みが訪れる。

「あぐっ」

もう、痛いのは嫌。こんなのもうたくさんだ……。

マリサはもう片方、と言わんばかりに、左腕を掴んだ。

「も、もう、やめて」

「なんだって？ 聞こえなかったよ、漣。もっぺん言ってくれるか？」

マリサが聞いてきた。その間に、左腕も逆に曲げられた。ばかりと嫌な音がした。

違う！ これはマリサなんかじゃない。違うんだ。

「や、やめてください」

「なんでやめなきゃいけないの？」

「な……なんでも、しますから」

私はついに、その言葉を言ってしまった。マリサはにっこりと笑った。

「そりゃありがたい。じゃあ、あと三日楽しませて。そうすれば、仲間にしてあげる」

そ、そんな。

こんなのが、あと三日？ ただでさえ、辛いのにあとそんなに長い時間、痛めつけられないといけない？

「許して」

私は涙を流して懇願した。マリサはにかりと、まるで本物がするみたいに明るく笑った。

「だーめ。君、自分がどれだけ楽しめる存在かわかってないでしょ？
吸血鬼で、すぐに体が回復する。永遠で、絶対に死なない。

女の子だから、色んな楽しみ方がある。しかも、子供。大人より
素直でいい声で叫ぶ、稀有な存在。

ほんと、仲間になんてならなくていいから、ずっと我々のおもち
やになつてよ」

私の希望を、私の最後の望みを、マリサは鼻で笑った。

カリカリと、自分の正気が削られていく音がする。

「た、たすけて、アリス」

「助けなんて来ないよ」

「たすけて、助けて」

誰でもいい。私を、救って。なんでもします。だから神様、お願
いします、私を……。

「おしゃべりは、おしまい。つづき、行こうか」

涙する私の目に、真っ赤に熱せられた鉄の棒が突き入れられた。

自分の絶叫が、耳に痛い。

痛いのは嫌。苦しいのは嫌。

助けて、誰か助けて。早くしないと、私は……。

「ああああああああああっ！」

自分の絶叫が、耳に響いた。もういやだ。

助けが来ないというのならせめて、神様。

痛みを感じないようにしてください。

「ぎゃあっ！」

自分の悲鳴で、目が覚めた。

「お、起きた起きた。だいぶ反応弱ってたよ、大丈夫？」

チェーンソウを持ったレイムが、いた。

「レイム、助けて、お願い！」

「嫌」

そう言って、チェーンソウを捨てると、目覚めたばかりの私の指

を捻じった。ぱきりと小気味のいい音がして、私に痛みをもたらす。「ああ、ほんと、さいっこう。何にも感じなくなるまで遊び尽くしてあげる」

そうレイムは私の耳元で囁いた。ナイフを私の下腹部へと滑らせ、おへその少し下くらいで止まった。

「ふふふ……ん？」

レイムは私とは全然違う方向を見た。それから、驚いたような顔をした。

「へえ。よくここがわかったね。隠し場所には自信あったのに」

「ノーマが教えてくれたわ」

艶のある、美しい声が聞こえた。

カグヤの声だった。

「……ちっ。裏切ったのか。もっと丹念に仕込んどけばよかった」

「この惨状の説明をお願いできるかしら、霊夢……いえ、解放団」

カグヤが、怒ったようにそんなことを言った。

「この子、我々のおもちゃになったんだ。自分から言っただよ？」

「それがどうした」

カグヤは間髪入れず、そう言った。

「私は友達を助けにきたのよ」

「お姫様は、我々卑しい賊のおもちゃが、友達だと？」

「その称号が滯を助ける邪魔になるのなら、いらない。私は滯と同じ下賤でもいい。私は、せつかくできた友達を、守る」

すた、すた、と歩く音が聞こえた。

「……従者なしでいいのですか？」

「お前はこの手で吹き飛ばす」

レイムは、ふるふると首を振った。

「は、はは。冗談きついなあ。じゃ、じゃあ弾幕勝負しましょうよ、弾幕勝負」

「その前に、一発殴らせろ」

カグヤがそう言うと、レイムは苦々しい顔になって舌打ちをした。
「ちっ！　ここまでか。宗！　キア！　撤収。引き上げ」

次の瞬間には、レイムだった人間は御陵臣へと戻り、彼はいなくなっていた。

それから、走る音が近づいてくる。

「濡、大丈夫！？　今外すからね、待ってて」

たどたどしい手つきで、カグヤは私の拘束具を外していく。ボタン一つで外れるようになっていたのか、しすぐに私は解放された。けど。

「どうしたの？　ほら」

「……あれ、立つのってどうするんだっけ」

うまく体に力が入らなかった。しかも、体の感覚もおかしい。ふわふわと浮くようで、気味が悪い。

「抱き起こそうか？　……あ、えっと、触ってもいい？　大丈夫、私はあなたの味方で、あなたの友達よ。絶対に傷つけたりなんかしないわ」

カグヤの言葉が、胸に浸透する。

「うん、大丈夫だと思う。叫んじゃうかもしれないけど、気にしないで」

カグヤは頷くと、優しい手つきで私の体を抱き起こしてくれる。カグヤの手が身体に触れて、私はついピクリと痛みに耐えようと身体を強張らせた。カグヤの手が止まる。

「大丈夫」

それからゆっくりと、カグヤは私を抱き起こした。カグヤは動きやすそうな着物を着ていて、下は袴。まるで武士のようだった。なぜか天井以外の景色が懐かしく思えた。

「今、夜？」

「まだ昼間よ」

まだ昼、か。

「……ねえ、濡、あなたが攫われてから、一週間が経ったわ」

私は手術台から降りようとして、動きを止めた。

「……一週間？」

「え、ええ。一週間みんなで探し回って、そしてようやく、解放団から逃げてきたノーマを保護して、この場所を聞き出したのよ。本当大変だったんだから。アリスはも霊夢も魔理沙も必死になって、時には寝ずにあなたを探してくれたのよ」

一週間？　一週間！？　私、そんなにいっぱい記憶、ない。もしかして私、自分が気がつかないうちに、何かされた？　何を？　わからないのがとても怖く怖い。

「濡、濡？　聞こえてるの？　あ、えっと……とにかく、出ましょ。こんなところ」

「う、うん」

私は手術台から降りた。うまく立てなくて、バランスを崩して膝をつく。

「大丈夫？　……そ、そうだ、これ、着なさい」

そう言ってカグヤは着物の袂から、大きめのタオルを取り出した。「とりあえずこれを巻いて、永遠亭に行ったらシャワーを浴びて服を着て」

「うん、ありがと」

私はゆっくりと立ち上がると、カグヤからもらったタオルを自分の体に巻いた。自分の体は血まみれで、正直、肌色よりも、赤黒い血液のほうが多い。

カグヤは私の手を握る。彼女は私の方をみてにっこり笑って頷くと、歩き出した。

「……しばらく、永遠亭にいなさい。私がそばにいてあげる」
「いいの？」

私は静かに言った。

私が捕らえられていた部屋を出ると、もう外だった。しかも、見覚えがある。ここは幻想郷に来たばかりのころ、東野と初めて出会ったときに攫われた洞窟だった。

あのときは何もないと思っていたのに。まさか、どこかへ繋がっていたなんて。

「どうして、ダメだと思うの？ 迷惑なんて気にしないでいいのよ？」

「……本当に？ 私、半日分くらいの記憶しかないんだよ？ ちょっとしたことで叫んで、怯えて、錯乱するかもしれない。こんな子供、いないでしょ？」

カグヤは友達。その認識だけは、絶対に変えなくなかった。今、私が安心して接することのできる相手は、もう、きっとカグヤだけだから。

「……いない、なんてことはないわ。大切な、大切な友達よ」

「カグヤ、本当に、ありがとう。しばらく、お世話になっていい？」
カグヤは頷いてくれた。

道すがら、モコウとすれ違った。なんだか、凄く二人とも雰囲気
が険しくなった。

「よお、姫。お外に出てもいいのかい？」

「うるさい。とっとと失せろ。今冗談に付き合ってる暇ないの。それから、この子今大変だから過激な言葉避けてくれる？ 無理なら
ころ……、違う、つぶ……これも違う。倒すわ」

カグヤは私を指差してそう言った。モコウは私を見た。

「おお！ 濡じゃん！ 本当この前はありがとうな！ お前のおかげで助かったよ。今頃クズと行動することになってたかと思うと、
ほんと、ありがたいよ。」

なあ、今度一緒に遊ぼうぜ。好きな遊びしてやるよ」

その熱で体の表面を焼かれたことを思い出した。慌てて、私はカ
グヤの後ろに隠れた。

「……おい、どうした？」

「も、燃やさないでください」

「あたしが誰彼構わず燃やすと思ってんのか！？」

びっくりと、私は目を閉じる。焼かれると思ったのだ。

「妹紅。後で事情は話してやるから、今はどいてくれるかしら」

「ああ？　なんであたしがお前の言うことを……」

「漣に感謝しているという言葉は、嘘だったのかしら」

ぐ、と呻いて、モコウは頷いた。

「……わかったよ。漣になんかあったんだな？　後で絶対教えろよ。

漣をそんなにしたやつ、ぶっ飛ばしてやる」

モコウはそう言うと、肩をいからせて竹林の奥へと消えた。私は息をついてカグヤの後ろから隣へと移動する。

「大丈夫？」

「モコウの顔をした御陵臣に、酷い事をされたのを、思い出してしまつて」

燃やされた、だけだったか。なんだか、焼けつくような、じりじりとした感覚が身体を包んでいたような気がする。丹念に、弱火で少しずつ肉を焼かれていったのだったか。蒸し焼きにされたのだったか……本当に、記憶があいまいだ。

「……辛いわね。ほら、永遠亭に行けば、それこそ永遠の休息よ。好きなだけ、好きなように身体と心を休めなさい」

カグヤの優しい言葉が、身に染みる。

「ありがと、カグヤ。今日、一緒に寝てもいい？」

「……ノーマも、一緒……だけど」

言いにくそうに、カグヤが言った。ノーマ。助けに言ったのに、裏切られた。けど、恨んではない。あと少しカグヤが来るのが遅ければ、私も彼のように裏切り、カグヤの手を振り払っていただろう。それに、私の記憶の中、彼によって苦痛が与えられた事はない。だから、大丈夫。

「大丈夫。でも、夜中飛び起きるかもしれないから、ノーマの方が迷惑かも」

気にしないでいいのよ、とカグヤは言った。

それからしばらく歩くと、永遠亭が見えてきた。

「そうだ、アリスや……魔理沙には連絡した方がいいのかしら」

私はしばらく何も言えなかった。

二人とも、私を虐めた。違う！

わかってはいる。けれど、私の記憶にあるのは嬉しそうに私を拷問にかける二人の顔だった。

二人は優しい。マリサは私に遊びを教えたいと約束してくれた。アリスは私と家族になってくれた。だから、私を傷つけたりなんかはしない……はず。

ここで断じれない時点で、私はおかしいのだ。

「ごめん、みんなには、まだ連絡しないで……違う、してもいいけど、連れて来ないで」

「……わかったわ。伝えとく」

「で、でも！ 私みんなが嫌いになったんじゃないで、その、こ、怖くて……」

大丈夫よ、とカグヤは微笑んでくれた。

「何も、心配はいらないわ。あなたを大切に思う人が、事情を察せないわけがないわ。だから、大丈夫。今は、心身共に休むことだけを考えて」

永遠亭の扉まで、たどり着いた。カグヤが四回ノックすると、中から弓を持ったエイリンが出てきた。

「姫様、お帰りなさいませ。……滞」

私を見ると、エイリンは物凄く申し訳なさそうな顔をした。

「とりあえず、中に入って」

カグヤに促され、私とエイリンは中に入った。

恐れと私

中に入ると、レイセンが出迎えてくれた。

その隣に、ノーマの姿もあった。そして、玄関に入ったところで、エイリンが私に頭を下げた。

「……滞。本当に、申し訳ない。私のせいで、君は……」

エイリンの謝罪を受けて私は、首を振った。

「もういいよ」

遅いから。私は言葉を濁すように言ったのに、エイリンは納得してくれなかった。

「もういいとは、どういうことだ？」

「もう、いいの。だから気にしないで」

「そうはいかない。何かお返しがしたい。何がいい？」

「じゃあ、私に何もしないで。虐めないで、攻撃しないで」

私のお願いに、三人は驚いた。

「……滞」

カグヤが、そんないたたまれないような声を出した。

「あなたは、休みなさい。何も考えず、ゆっくりと」

私はカグヤの方をみた。

「いいの？」

ええ、と彼女は笑顔で頷いてくれた。罨ではないかと疑う自分が、恨めしい。

「じゃ、上がって」

「うん、お邪魔します」

永遠亭に上がる。パリパリと、足の裏の乾いた血液が木の床でそんな音を立てた。

自分の血が気持ち悪い。私は少し神経を集中して、はりついた血の塊を皮膚から吸収した。

吸血鬼としての力は、捕らえられていたときは気が動転してる

で使えなかったけど、今ならだいぶ使える。

訓練しないとなあ。せめて、不意を討たれて捕まっても、普段通りに力を使えるくらいにはならないと。

「……あなた、吸血鬼の力、使えたの？」

「でも、捕まっている間は使えなかった。かなり集中しないと使えない。無意識的に使えるようになるまで訓練したい。……まあ、別にいいけど」

ふむ、と言ってカグヤが廊下に入り、私の前を歩き出した。私も、カグヤに続く。

「あなたの好きにして。でも、無理に強くならなくても、私達が守るから」

「……うん」

信じられない、なんて言ったらきつと傷つくだろうな。そんなのは嫌だ。

「永琳、滯に服を」

「わかりました」

廊下を行き、カグヤの部屋に入る前、彼女は後ろのエイリンにそんなことを言った。

「……カグヤ、ありがとう」

「気にしないで。さ、ゆっくり休みましょ。ここは、安全だからね」安全、か。信じるしか、ないのだろう。カグヤの言葉が信じられなくなってしまうたら、私は一体誰を信じていけばよいのだろうか。

「何かしたいこと、ある？」

部屋に入ると、カグヤが私のほうを見てそんなことを聞いて来た。「疲れた。眠りたい」

私は畳にへたり込むようにして座り込んだ。まだなんだか助かったという実感がわかない。頭がぼうつとする。いまいち、うまく考えられない。

「眠たそうね。待っててね、すぐ布団用意するから」

「自分で、やる」

私は立ち上がろうとして、できなかった。疲れがピークに達したみたい。ずっと気を張っていたから、だろうか。それとも何かの後遺症だろうか。どっちでもいいけど。

カグヤが押入れから布団を取り出し、それを敷き終わるまで、私はピクリとも動かなかった。眠くて、眠くて。

「……ほら、服は寝てる間に着せて置いてあげるから」

「うん、ありがと」

私はそう言うと、カグヤが用意してくれた布団に潜り込み、目を閉じた。

私の頭が撫でられるのを感じる。もしかしたら、次に目を開けたらまた地獄かもしれないと思ったが、どうでもよかった。つかの間の休息でもいい、今は休みたい。

ゆっくりと、私は静かな眠りについていった。

ズタズタにされる夢を見た。アリスとレイムとマリサに寄ってたかって切り刻まれ、私はいつしか自分のことを布か何かだと思い始めるのだ。私という布を刻む三人の顔は笑顔に満ちていて、物凄く楽しそうだった。

目が覚めて、一番最初に見たのは、私の服を脱がそうとするカグヤだった。

思い切り手を振って、カグヤの身体を弾く。立ち上がって、体勢を崩した彼女に襲いかかる。無我夢中でのかかって、その首を刎ねようと手を振りかぶったところで、我に返った。

眠る前にどんな会話をしたかも、全部思い出した。

「……カグヤ、ごめん」

私は飛びのいて、頭を下げる。カグヤは身体を起こすと、柔らかく微笑んだ。

「まあ、予想してたし別にいいのよ。怖い夢でも見た？」

頷いて、私は自分の体を見た。絹の柔らかい下着の上に、可愛ら

しい水玉模様のパジャマを着せられていた。私がここにくる前によく愛用していたものによく似ている。私はカグヤがとめようとしてくれたボタンを自分でとめると、もう一度謝った。

「ごめんなさい。私、あなたに大変なことをするところだった」

「ま、お互い不死なんだし、いいじゃない。ほら、数十分しか寝てないとまだ眠いでしょ。一緒に寝てあげるから、休みましょう」

カグヤが私のそばまで来る。その様子が、御陵臣と被る。違う。あ、あいつとカグヤは違う。

「……きて」

私はそばに來たカグヤを布団に引き込むと、一緒に布団を被る。よく見ると、カグヤは寝やすそうな白い着物を着ていた。最初からこうして一緒に眠る心づもりだったのだろうか。

もしかして、私に何かするつもりなのだろうか。違う、何もするはずがない。

けど、どうしても御陵臣にされたことが頭に浮かんでしまう。

「……カグヤ」

「何かしら」

「物凄く優しくて物凄く友達想いな親友を、クズで最低で人を痛めつけることしか考えていない化け物と重ねる私は、なんなのだろう」カグヤが、私のことを抱きしめる。ゾクゾクと、背中から恐怖が上ってくる。

「……いいじゃない、私とあいつを重ねても。怖いのなら、出ようか？」

「いい。ここにいて」

一人はもっとと怖いから、私は首を振った。

「……ねえ、カグヤ」

眠い。けど、私は言葉を紡ぐ。

「どうしたの？」

「……なんでもない」

何を言おうとしたのだろうか。わからなかった。私は首を振ると、

目を閉じる。

すぐに眠りは訪れた。

夢を見た。

肉が敷き詰められた床、肉が壁紙代りに掛かっている壁、見えな
いほど高い天井。私はそのひろい部屋にたった一人でいた。裸で肉
の床に座し、自分の食糧が大量にあることに安堵する。

肉の床に、指を沈めてみる。にちゃりと心地のよい弾力と共に、
抗いがたい食欲が湧いてくる。私は周りを見渡し、誰もいないこと
を念入りに確認すると、肉の床から肉を一片、すくい上げる。匂い
から、それが人の肉だということがわかった。美味しそう、食べた
い、食べたい。

欲求のまま、私はその小さな塊を口に入れ、咀嚼した。血の味と
生肉の固いような柔らかいような独特な感触が気持ちよかった。あ
あ、食事とは快楽なのだな、と肌で実感する。私は衝動と欲望に身
を任せ、好きなように、好きなだけ肉を喰らっていく。誰の肉かな
んて気にせず、どこの肉かなんて気にも留めず。

「ん……ああ」

艶かしい自分の声が聞こえる。

「ああ……んっ。」

ああ、なんて、おいしい」

肉に牙を突き立てて、滴る血をすする。カラカラに渴いた肉を、
まるでゴミか何かのように乱雑に放る。至上の贅沢をしているよう
な気分になった。

ふと我に返って自分の身体を眺めて見た。全身に血を浴び、目は
赤く光り、爪は鋭く尖り、背中からは悪魔のような翼が生え、口元
には鋭い犬歯がきらめいていた。

そう、私は吸血鬼。人を食糧とする、化け物。

私は床と壁にあった肉全てを喰らい尽くすまで、その夢を堪能し
た。

目が覚めた。夢見はよかった……のだろうか。

ふふ、あんなことをされたばかりだというのに、私は吞気に食べることを考えているのか。なんだ、案外私の奥底は、されたことを気にしていないのかな。

……まさか。

「……」

私は隣で寝息を立てているカグヤと、カグヤにくっついて寝ているノーマを起こさないよう注意しながら、立ち上がった。ノーマ、いつの間に。

周りがよく見える。僅かな光源が、太陽の光のようにも思える。時間は今、夜なのだろう。感覚も鋭いし、なんでもできるような万能感すらある。

「……」

人を襲いたい。とにかく食べたい。誰がいいだろう。仕方なく、善意からではない、吸血がしたい。悪意に満ちた私の最初は、一体誰がふさわしいだろう。

……私の最初のキスを奪ったあの男だろうか。

そうだ。あいつしかいない。私の心と体を踏み荒らして、壊して、捻じ曲げて。あんなことをしたあいつを、私は許さない。

同じことを、してやる。私以上の苦痛をあいつに与えてやる。

「……滞り？」

「カグヤ。起こしちゃった？」

「ううん。こんな時間にどうしたの？」

きっとカグヤには私が何を見てるかなんて想像もつかないだろう。私がカグヤの真珠よりも綺麗な首筋に釘付けにされているなんて。

「カグヤ、私は復讐がしたい」

彼女が目を見開いた。

「……どうしちゃったの？」

「昼間の私は気弱。でも、夜の私も私。御陵臣を、殺したい」

私と、そしてたくさんの方の思いを踏みにじったあいつを、生かしておくわけにはいかない。

「グチャグチャにして喰らってやる」

「……本気？ 本当にいいの？」

「構わない」

私はしっかりとそう言った。

「……それから、カグヤ」

「何かしら」

「明日、寺子屋に行こう」

カグヤは首を振った。

「そんな必要ない。あなたには学校なんて……」

「ケイネの生徒が攫われたのに、私は何もできなかった。せめて、謝りたい」

「……わかったわ」

昼間の私は、なぜこのことを思いつかなかったのだろう。自分の事しか考えていなかった自分に、腹が立つ。

急に、抗い難い空腹感が私を襲った。

「ねえカグヤ、お腹空いた。何か食べたい」

私がそう言うと、カグヤは立ち上がった。

「この時間に？ 仕方ないわね、エイリンに用意させるわ。焼き魚くらいならすぐ……」

「私、普通の人と違うんだよ？」

私はカグヤに少しずつ近寄った。カグヤは普段通りの表情だった。

「人が欲しいと、そう言いたいのか？」

普段通り、カグヤはそう言った。何を考えているのだろうか。まるで、御陵臣のよう。違う。あいつとカグヤを重ねるだなんてしてはいけない。

「ダメ？」

「……昼間のあなたは、そんなこと言わなかったわ」

私は首を振った。

「昼間の私は、昼間の私。今は、夜だよ。吸血鬼のための、漆黒の時間。私の時間」

すべすべの手をとり、その手のひらを爪で優しく撫でる。

「そう、私にとって人は食糧なんだよ、カグヤ。御陵臣だって、そう」

「……強くなりたいのね、誰にも負けないくらい」

私は、撫でる動きを止めた。なんで気取られたのだろう。強がっていることが、こんなに早くバレるなんて。

「……変？」

「普通よ。弱いから捕まったとあなたが思ったのなら、強くなろうと気を張るのはごく普通」

カグヤは、優しいな。

「私は、きっと誰よりも強くなりたいんだと思う。御陵臣に復讐したいなんて嘘。だって強くなれば、誰にも傷付けられずに済む。誰にも、虐げられずに済む」

「守ってもらうのじゃ、嫌？」

「三回とも、誰も守ってくれなかった。だから、自分の身は自分で守る」

ずっと、優しく抱き寄せられた。私は手で、押し戻す。私達の距離が空く。

「抱き締めないで。怖い。わかってくれる？ 私、こうして抱き寄せられただけで全身が強張るの。それは、異常なの」

カグヤは首を振ってくれた。

「違うわ。一週間も痛めつけられたら、何もかもが怖くなるなんて当たり前よ。だから、嘆かなくてもいいのよ」

「でも私は、恩人のアリスや、優しくしてくれたレイム、マリサ達さえ怖がつてる！ そんな自分が許せない！ 強くなれば、誰よりも強くなれば、誰に何をされても大丈夫なようになれば、私はみんなを恐れずに済むの。だから」

「……漣、だから強くなっても、きっと孤独になるだけよ」

カグヤの言葉が、胸に響いた。

「じゃあどうすればいいの？ 私、みんなが怖くて、いろんなことが怖くて、怖いことがいっぱいあって、どうすればいいのかわかんなくて」

カグヤは、私の方に歩み寄って、腰を下ろして私の手をとった。

「焦らないで。」

ゆっくり、時間をかけて癒していきましょう。誰もあなたを責めやしないわ。誰もあなたを、攻撃してこない。だから安心して、自分を癒すことに時間を使っていいいのよ。ね？」

そうなの、だろうか。私は、静かに頷いた。

「……ありがと、カグヤ」

優しい言葉が、少し怖かったけれど。けれど私は、カグヤを信じることにした。

「信じる。カグヤ、信じてるから」

「ふふ、ありがと。食事はどうする？」

カグヤはそう言うのと、立ち上がった。

私は首を振った。お腹はすいてるけど、いらない。我慢しないと。

「……そう。私は寝るけど、滞はどうする？」

「……力を使う練習をしておく」

そう、と言ってカグヤは再び自分の布団に戻った。

私は目を閉じて、力を集中する。手を水平にあげる。手のひらに力を集中させる。

すると、手のひらから大量の血が吹き出した。それは地面に落ちず、床や壁を汚すことなく空中に留まった。まだ、自分の力は制御の中。その血液を、ナイフの形に固めて行く。

吸血鬼とは血液だ。そんなことを書いてあった物語があった。私はもはやその吸血鬼なのだから、私がかつて読んできた本の知識が、役に立つはずだ。

ナイフの形に固めた血液を、自分の手のひらに当てて引いてみる。傷一つつかなかった。切れ味を持たせるには、もう少し修行がい

りそうだ。

もっというんなことを試してみよう。私は何ができる。私は何ができない。それ知るといふことは、強くなることに繋がるのだから。次は、剣を作ってみた。さっきと同じで、形はうまくいっても、まるで斬れ味がなかった。才能がないのだろうか。

そう思っていると、さっきのカグヤの言葉が思い起こされた。

『焦らないで』

私は、小さく頷いた。

焦ることは、ないのだ。時間はそれこそ無限にある。それをどう使うのかは私の自由。誰にも邪魔できないし邪魔をさせない。

私は、自由なんだ。だから、だから、焦ることなんてない。

斧。曲剣。大剣。

色んな武器を想像のまま、作っては体に戻すを何度も何度も繰り返す。

同じ作業を延々と繰り返し続けていたせいかな、だんだんと眠くなってきた。寝たばかりだというのに。

私は睡魔に襲われるまま、カグヤの隣に潜り込み、目を閉じる。

好きなことをして、好きな時に眠る。ささやかなことだけど、私はそこに自由を感じた。

それからしばらくして、私は眠った。

戦意と私

凄惨な夢を見た。私の親しい人が怯えたような表情で並んでいる。その人たちを私が笑いながら斬り裂いていく。強く、強くなった私。けれど、それはひたすらに孤独であることを現していた。恩人のアリスが怯える顔を楽しむと、私はその胸に血液でできたナイフを突き立てた。返り血が、甘い匂いをただよわせていた。

「……」

私は目を開けると、ゆっくりと身体を起こした。外を見ると、かなり明るい。周りを見ると、誰もいない。でも、自分が畳の布団の上で眠っていることを確認すると、ほっと息をつく。

それから、途方もない罪悪感に襲われる。

アリスを殺した。それは夢だったけど、殺したという感触はまだ手に残っていた。

なんで。御陵臣を殺す夢でさえ見たくもないのに、なんでよりもよってアリスなんだろう。どうして、親しい人達ばかりが並んでいたのだろう。私、恩を仇で返したいのかな。

「あら、おはよう」

「……おはよう」

私の挨拶は妙に暗かった。それは、カグヤに簡単に気取られた。

「随分暗いわね、どうしたの？ 何か夢でも見たの？」

「……親しい人達を、皆殺しにする夢」

私は、特に躊躇うことなくするりと白状していた。カグヤならいか、そんな安心がどこかにあった。

「あら、それは嫌な夢ね。でも夢よ」

「……ありがと」

私はお礼を言おうと立ち上がった。

「カグヤ、寺子屋に行こう」

「こんな朝早くに？ いえ、そうね。慧音寂しいでしょうから……」
そう言って、カグヤはどこかへ行ってしまった。

彼女の言葉が、胸に響いた。ハウリングするような、嫌な響き方だった。

ケイネの生徒は、私のために、死んだ。私の、食糧として。

ケイネ、きっと私のこと嫌うだろうな。

こんなふうには私は色んな人に嫌われていって、いつしか、今日見た夢のようになるのだ。

そんな妄想をしていると、再びカグヤが部屋にやってきた。

その手には、綺麗に折りたたまれた着物があつた。大きさから見て、子供用。

「これ、着替え。自分でできるかしら」

私は首を振った。

「着物なんて、着たことがないからわからない」

じゃあ、と言ってカグヤは私に近づいてきた。

「私が着付けてあげる」

私は頷いて、カグヤに身を任せた。少し不安ではあったけれど、まあカグヤならいいか。

服を脱いで、色々と着せられる。カグヤの肌がよく見えて、すごくいい匂いがする。

「カグヤって、お姫様だったんでしょ？」

「もう十世紀以上の事よ」

その時から、不老不死だったんだ。

「お姫様って、何もしなくても召使いがしてくれるんじゃないの？」
それなのに、どうして着付けなんてできるんだろう。

「覚えたのよ。もう姫じゃないんだから、自分のことは自分でできるようにしないと、って思っただけ」

「すごいね、カグヤは」

そんなことないのよ、とカグヤは笑って言った。それからしばらく、無言が続く。

「……はい、できた」

されるがままにされていると、カグヤがそう言って私の肩に手を置いた。その手から匂う香しい香りは、私の正気を削っていく。

「うん、似合ってる」

そう言われて、自分の体を見回す。

ピンク色の花柄模様に、可愛らしい朱色の帯の、女の子用の着物だった。こんな可愛らしいもの、ここに来るまではめったに着なかったな。

「どこかおかしくない？」

私はくると回ってカグヤに聞く。

カグヤは笑顔で頷いてくれた。

「ありがと。じゃ、行こう」

私がこう言うと、カグヤは私の手を引こうとした。私は思わず、その優しい手から退いてしまう。ほとんど無意識の拒絶だった。

「……ごめん、カグヤ」

「いいのよ。さ、行きましようか。食事は……」

私が首を振ると、カグヤはそう、と言って部屋を出た。私も続く外に出ると、レイセンが待るように立っていた。

「今から寺子屋に行くわ。永琳を呼んで」

「わかりました」

レイセンは一礼すると、すぐそばの部屋の中に入った。それからしばらくして、エイリンが出てきた。その手には大きな弓があり、その腰には大きな矢が下げられていた。まるで巨大な生物を狩りにもいくような格好だった。

「行くわよ」

カグヤが短く言う。エイリンは深く一礼した。どんな関係なんだろう。いまさらながら疑問に思う。

カグヤは永遠亭の玄関まで行くと、扉を開ける。私がついて行くと、私の後ろを弓に矢をつがえたエイリンが続いてくれる。

守ってくれる、ということなのだろうか。

「濡、もうこれ以上、あなたを傷つけさせはしないわ」

エイリンとカグヤ、二人がそう言った。

「ありがとう」

私は心の底からお礼を言った。この服を、汚したり破ったりするわけにはいかない。大切な友達の物なのだから。

竹林を少し進んだところに、モコウが待ち伏せをするように竹によりかかっていた。

「……おう」

私は思わずカグヤの背中に隠れた。

「濡、あたしは何もしない！ 信じてくれ」

モコウは両手を開いて主張した。

「何の用？」

それに構わず、カグヤが鋭い口調で聞いた。

「その、昨日怖がらせたみたいだからさ、その、謝ろうと思って。

ごめんな、濡」

昨日と随分対応が違う。なぜ違うのか、ということが非常に気になる。

「……別に、いいです」

私の口は勝手に動いていた。

私の言葉に、モコウはショックを受けたような顔をした。

「あたし、いつでもお前の味方だからな。だから、なんかあったら、あたしのところに来い。守ってやるから。それから、その服似合ってるぞ」

モコウはそう言うと言わたちの進行方向とは別の竹林へと歩いていた。

「……ま、私のところが嫌になったら行くといいわ。いけすかない奴だけど、まあ、悪い人間ではないから」

「うん」

カグヤは再び歩き始めた。それからかなり歩きどおしだった。時々、会話もした。そのどれもが私を気遣うような物だったが、

その事実が私と二人が少し遠ざかってしまったことの証拠にも思えた。

寺子屋につくと、外でケイネとチルノが柔らかそうな、ふわふわとしたボールを投げ合っていた。キャッチボールをしているのだろうか。キャッチボール、か。

私もお父さんとしてみたかったな。

「おー、漣だー！ 着物だー！」

チルノがボールを投げたところで、私たちに気付いた。

「チルノ」

私は一人で彼女の元へ駆け出そうとして、やめた。急がず、後ろにいる二人と離れずに歩く。

私がチルノのところに着くと、彼女は私の両手を握って上下に振った。

「漣、遊びに来てくれたのか？ あたいは嬉しいぞ！ さあ、慧音、一緒にボール遊びしよう！」

満面の笑顔が、胸に痛い。きっと、死んでしまったあの子達も、かつてはこんな笑顔に満ち溢れていたのだろう。

「……どうした、輝夜に、永琳、それに、漣。もう大丈夫なのか？」

慧音が不安そうな表情で聞いた。その目にはクマができていた。夜も眠れない、のだろうか。

「漣が、ここに来たいと言ったから。私達は、特に用はないわ」

「そうか。……そうだな。最近物騒だからな、それがいい」

暗く落ち込んだケイネを見ていると、チルノが耳打ちしてきた。

「慧音、最近あまり寝てないらしい。なんか、奥に閉じこもったまま、出てこないことが増えて……。だから、気晴らしでもしてあげたくて」

それは、どういうことだろうか。何かを考えているということ、なのだろうか。それとも思いつめているのだろうか。

「二人とも。私は、人里を隠そうかと思う」

慧音は、耳を疑うようなことを言った。人里を、隠す？

「……それも、ありね」

「いいや、これ以上被害を出さないためにも、必要なことだ」

本格的に会話を始めてしまったケイネとカグヤ。私はなんと切り出せばいいかわからずにいた。もしかしたら、このままさようならなんて流れになってしまいかもしれない。

それは、ダメだ。

「漣？」

私はチルノと手を離し、ケイネのそばに行った。彼女は不思議そうな顔でこちらを見た。

「どうした？ 私と話してもつまらないぞ。ほら、チルノと一緒に遊んでおいで。解放団から逃げ帰ってからろくに遊んでいないだろう？ 勉強もそうだが、君らの年頃は遊ぶことも重要だ。さあ、私たち大人に構わず、好きに遊ぶといい」

チルノと私、二人を氣遣った言葉に、私はもう我慢ができなかった。

「ごめんなさい」

「どうした。なぜ謝る」

私は深く、深く頭を下げた。

「ごめんなさい！ 私、私の、せいで、あなたの生徒達は、その、あの」

なんて言えがいいのだろう。食糧になった？ 殺された？ なんていえば、傷つけずに済むのだろう。

悩んでいると、ポン、と肩に手を置かれた。私は顔をあげる。

「……自分を責めるな。君のせいじゃない。

だいたい、そんな気は、していたんだ。

ありがとう、漣。君のおかげで、あの子らの、ことが……」

それから先は、声にならなかった。顔を手で覆い、ポロポロと大粒の涙をいくつもながし、声をあげるのを堪えて嗚咽をこぼす。

「……ケイネ。その手で、私を。贖罪には、なると思う」

ぎゅっと、抱き締められた。湧き上がる恐怖、震える身体。でも、

それ以上にケイネに対する申し訳なさが、心苦しかった。

「そんなこと、できるわけがないだろう……。子供を……。殺めるなど」

うっ、うっ、とケイネの泣く声が耳に残る。

「ごめん、ケイネ。私が、いたから……」

「お前は、悪くない。悪くないのだ……」

背中に回された手に、さらに力がこもった。

「うう、うう……」

私はケイネを抱きしめ返した。怖かったけど、それでも私は、想いを伝えたかった。

「……絶対、仇はとるよ」

「そんなことしないでいい！ お前は、子どもは、子どもらしく大人に守ってもらえ……」

ズキズキと、胸が痛む。ケイネを見るのが辛くてしょうがない。

私のせいで。私が吸血鬼になったせいで。私が、吸血鬼だから、こんな風にケイネが苦しんでる。

「私、吸血鬼だから、戦えるよ」

「……だとしても、戦わないでくれ。死なないでくれ」

「私は死なないよ」

背中の手が、私を撫でるように動いた。

「死なないなら、死地に飛び込ませてでもいいのか？ 不死ならば、

どんな責め苦にも耐えられるのか？ 違うだろう？ お願いだから、

もう私に悲惨な子どもを見せないでくれ……」

私はもう何も言えなかった。子供のことをこんなにも想う人がいるのに、どうして御陵臣はあんなひどい事を。

そんなの、何を疑問に思う。彼はただ楽しいのだ。楽しいから、あんなことをする。私は、彼が許せない。

御陵臣を、許さない。

「……ケイネ、私、頑張るよ」

ずっと、私はケイネの手を引き離す。私が離れると、ケイネは驚

いたような顔をした。

「何を頑張るといふのだ？」

「秘密」

私は背中から翼を生やしてばさりと動かした。ケイネが驚くのがわかった。

「な……」

「言ったよね。私、吸血鬼」

ケイネから離れて、翼をはやしたまま歩いてカグヤとエイリンのそばまでいくと、私は二人に言う。

「カグヤ、レミリアのところへ行こう」

「なぜかしら」

「強くなりたい」

私は聞いてきたカグヤの目を見据えて言った。

「強くなっても、辛いだけよ」

「それでも、いい。私は、強くなる」

アリスとレイムの言葉を思い出した。

レミリアなら、吸血鬼としての力にも詳しい、と。

そして、言葉を思い出しても全く恐怖を感じないことに、凄く安心した。私はまだ、記憶まで壊れてはいない。よかった。

「……本気？」

「私は、いつでも本気」

私が言うと、カグヤは嘆息した。

「強くなるって、簡単じゃないわよ」

「覚悟は、ある」

アリスやレイム、マリサを怖がらないためじゃない。御陵臣を倒すための力が欲しい。

私の心をめちやくちに荒らしたあの男を、ケイネの生徒をバラバラにしたあいつを、拷問小屋に捨てられていたあの子達をぐちゃぐちゃにしたあの化け物を、倒すために。

「……私は、賛成できないわ、滯」

「応援して欲しい」

カグヤは首を振った。

「無理よ。あなた、攫われて、帰ってきてまだ一日よ？」

「今のままじゃ、いつまでたっても被害はなくなるない」

私がそう言うのと、ケイネが私のところまでやってきた。中腰になり、目線が合う。その瞳は、泣き腫らした跡があった。

「だから、自分は傷も癒えぬまま強くなりに行くのか？」

「傷は、癒えた。もう十分動ける」

私はあえて、そんな言い方をした。

ケイネが、首を振った。

「心は、違うだろう」

私は強く言う。

「心は無視できる」

「するな」

あまりに語気を強めた言い方に、私は呆氣に取られた。

「心は、無視するべきではない。心とて、体の一部なのだから」

心が、体の一部。そんなこと、初めて言われた。

「心の傷が癒えるまでは、絶対に戦うな。飛び出すな。……お願いだ」

ぽん、と微笑んでケイネは私の頭に手を乗せ、優しく撫でた。

「……何も心配するな。な？」

私は首を振った。

「皆の仇を取るの」

ケイネは悲しそうな顔をして、首を振った。

「そんな必要はない」

「みんなと約束したの」

私はそう言って、ケイネから飛び離れ、カグヤとエイリンの手をつかむ。

「行こう、紅魔館へ」

カグヤは動かなかった。

「……滯」

どうして。私、しなきゃいけないことがあるのに。

「行こう」

私を無視して、カグヤはケイネを見た。ケイネは黙って首を振った。

「帰りましょ、滯」

私を見たカグヤは、慈しむような声でそんなことを言った。

「……なんで」

ぎゅっと、手を握られて、引き摺られるように引っ張られた。ゾクっと、背筋に冷たい汗が流れた。

「やめてっ！」

思わず手を振り払って身を守るように自分で自分をかき抱く。翼を、自分の体全体を覆うように動かす。

「ちよっと引っ張られただけでそんな反応するくらいなのに、背負いすぎよ。荷物を下ろして休めと言っているの」

「休んでなんていられない。早くしないともっともっと辛い思いをする人が増える！ そんなのはいやだ！」

私は叫んだ。それでも、二人は頷いてくれなかった。

「なんで応援してくれないの？」

「応援なんて、できるわけないでしょ」

カグヤは静かに首を振った。

「あなたは、休みなさい」

「いやっ！ 私は……っ！」

「……わかったわ」

私が叫ぼうとしたところで、カグヤが折れた。

「そこまでいうなら、応援するわ」

「やった！ じゃあ」

「でも、せめて一人で外に出るのが怖くなるまではダメよ」
その言葉で、私はキョトンと脱力した。

「それ、いつになるの？」

「少なくとも、そんな風に聞き返してこなくなるまでね」

「でも、それじゃあ」

「ごねようとした私の手を、カグヤが優しい手つきでとった。

「傷だらけの人が戦っても、死ぬだけよ」

「私は死さない」

「心が死んだら、あなたはあなたでなくなるわ。心の傷を癒してからにしないさい」

……私は、譲歩することにした。

「わかった。じゃあ、今日は帰る」

そうは言ったものの、私の胸には得体のしれない罪悪感が残っていた。

「ああ、それがいい。絶対に一人になるなよ、漣」

ケイネがそんなことを言ってくれた。

「わかってる。だから、大丈夫。それじゃあね、ケイネ」

私はつとめて明るくそう言っていると、カグヤと一緒に歩き出した。

永遠亭までの足取りは、妙に重かった。

知らない家族と私

私、カグヤ、エイリンの三人で竹林を歩いていると、十五歳くらいの女の人と出会った。

その人は周りをキョロキョロと不安そうな顔で観察していて、今にも泣き出しそうだった。

服装はついさっきまで布団に入っていたんではないかと思えるような、パジャマ姿だった。容姿端麗だし、こんなところにいたら攫われてしまうかもしれない。

私はゆっくりと、その女の人に近づいた。

「ひ、人？ ……女の子？」

「私、ミオ・マーガトロイド。あなたは？」

私はその人から距離をとって聞いた。

「わ、私は、星空美沙。は、初めまして」

私の方へと歩きながら、美沙という女性は答えた。

「星空……」

私は後ろの二人を見る。珍しい名前に驚いているようだったが、それだけ。私の旧姓と同じだということは、悟られなかった。

それも、そうか。カグヤとエイリンと出会ったころには、もうアリスの家族だったから。

……アリス。

「今、ここは物騒。とにかく、一人になってはいけない。私たちについてきて。悪いようにはしない」

そう言って、私は美沙の手をつかんで引っ張る。

「え、ちよっ」

「カグヤ、エイリン、この人、永遠亭に連れて行っている？」

二人は頷いた。

「ま、友達の頼みだし……その子、面白そうね。さ、行きましょうか」

カグヤは、そう言うのと歩き出した。私は美沙を引っ張ったまま、カグヤについていく。

「ね、ねえ、ここどこ？　ちょっと、説明してよ！」

「黙ってついてきて。大丈夫、ちゃんと説明してあげる」

私がそう言うのと、信じてくれたのか美沙はそれ以上話すのをやめた。

永遠亭につくと、レイセンが出迎えてくれた。

「おかえりなさい、みなさん……？」

一人増えているようですが」

戸惑ったような声を上げたレイセンに、カグヤは一言。

「ま、とりあえずお客さん出迎える準備して」

はい、と返事をする、レイセンは走って永遠亭の奥へと向かった。

それからしばらくして、美沙は客間へと通された。

お茶に、お茶がし。広いテーブルに、私とカグヤ、美沙の三人が座っていた。エイリンとレイセンは外で見張りをしている。

「……滞ちゃんと、輝夜さん？　説明してくれる……んですよね？」

美沙は冷静になったからか、丁寧語になっていた。

「ここは幻想郷、という場所よ。妖怪悪魔、神様から魍魎魍魎までなんでもいる、不思議な世界」

衝撃を受けたような顔を、美沙はした。

「……な、なんで私そんなところに」

「忘れられたか、迷い込んだかのどちらか」

私はこの人に教えてもらったことを、そのまま口にする。

「迷い込んだ？　……そんな、なんでこんなことに……。私が何をしたって言うのよ！」

涙声になって、美沙が言った。前の世界が楽しくて楽しくて仕方なかったのだろう。だから、違う世界に来たことがこんなにも悲しいのだろう。羨ましいな。

「……大丈夫だよ」

「大丈夫なもんか！ お父さん自殺しちゃうし、お母さんはそのせいで病院通い詰めになっちゃったし、しかもその上……っ！」

お父さん……。

私の想像が正しければ、私のお父さんと美沙のお父さんは同一人物。それがどういう意味を持っているかなんてこと、私がわからないわけがない。

「その上、お父さん、隠し子いたんだってさ！ なによそれ！ わけわかんない！ しかも違う世界に飛ばされるし！ なんで私ばかりこんな目に遭わなきゃいけないのよ！」

だん、と美沙は机を叩いてさめざめと泣いた。

「……美沙、辛いのはわかるわ。でも、悲観することなんてないわ。もしかしたら、帰れるかもしれないから」

見かねたカグヤが、うっとおしそうにそんなことを言った。

「……ほんと？」

ゆっくりと、美沙が顔を上げた。

「でも、特殊な力がなければの話」

私は注釈をつけるように言い足した。

「だ、大丈夫よ！ 私ごく普通の女子高生だし？ 問題なく帰れるって！」

カラ元気だろうか、美沙は無理に明るく笑った。きっと、クラスでもムードメーカーで、みんなの人気者なんだろうな。

「私も、そう思ってた。だから、期待はしない方がいいかもしれない」

その笑顔は、私の言葉で固まった。

「……あなたも、違う世界から？」

「外の世界から忘れられてここに來た、外来人」

「あなたみたいな可愛い子が、忘れられて？」

私は頷いた。

「……今は、立派に幻想郷の人げ……幻想郷の住人になろうとして

る」

自分が人間でないことを思い出し、言い直す。

「偉いね。私には、とてもできない覚悟だと思う」

「そう。取り敢えず、今は一人で外に出てはダメ」

私は取り直すように言った。不思議そうに、美沙は首を傾げた。

「え、なんで？ コンビニ行く時とかどうするの？」

「コンビニなんてものはないわ」

カグヤの言葉に、美沙はぎょっとした。

「それに、今は幻想郷から外来人を解放しようとしてる解放団という集団がいるから、外は危ない」

というかそもそも、なんで見知らぬ土地で好き勝手に行動するところが前提で考えるのだろう。

「解放？ その人達と一緒にいたら、帰れるの！？」

私は首を振った。

「名前ばかりの集団。今のところ、悪逆無道なことしかしていない」

「なによ悪逆無道なことって」

私が口を開こうとしたとき、カグヤが手で私を制した。

「いくらなんでも話しすぎよ、滯。これ以上は辛いでしょ？ 美沙、

後で教えてあげるから、今は我慢して」

「えーなんでー？」

ひくりと、カグヤのこめかみが引きつるのを私は見逃さなかった。

「だから、後でって言ってるでしょ」

「でも、解放団がいい人達かもしれないでしょー？」

私はすくりと立ち上がった。

「一週間痛めつけられてもそう思えるのなら、解放団へ行くといい。カグヤ、少し、席を外す」

「ええ。一人になっちゃダメよ」

私は頷いて、客間を出た。

扉を閉めて、うずくまる。

……いい人？ あいつらが？ 違う、ちがう、ちがう。あいつら

は悪い人達。あんなことを平然とできる人間を、いい人だなんて。私は叫びたくなるのを必死でこらえた。じっと、体の中から激情が過ぎ去るのを待つ。

「……ねえカグヤ、あの子なんなの？」

襖の向こうからそんな声が聞こえた。私は思わず、振り返って部屋の方を見る。二人の姿は見えない。だから、二人がどんな表情をしているか知りたかった。

「いい子よ、すごくね」

「でも、表情変わらないし、変に頭良さそうだし、気味悪い」

私は思わず息を呑んだ。なんで、嫌われているのだろう。

「凄く純真な子よ。見かけはそう見えないけどね。それから、私の友達を悪く言わないで頂戴」

「あ、ご、ごめん」

意外と、美沙は素直に謝った。

「……でも、なんで解放団が悪い人だなんて思ってるの、あの子？」

「……さあ、なんでか聞いてみなさい。そうしたら嫌われるでしょうけど。」

……まあ、他にも子どもがいる前じゃ聞きにくいこともあるでしょうし、あの子がいない間なら、答えられる質問なら答えるわ」

「じゃあ、輝夜、彼氏いる？」

いくらふすま越しとはいえ、カグヤが固まるのを感じた。戸惑っているのが手に取るようにわかる。

「い、いきなり？ いないわ」

「え？ 超可愛いのに」

「色恋沙汰にはもううんざりよ。でも、他人の恋路は見てるだけで楽しいわ。あなたはどうかなの？」

カグヤは楽しそうに言った。美沙は朗らかに笑うと、いないと言った。

「ほら、いい人現れなくてさ。なんていうか、パツとしない？ よくわかんないけど、付き合おうかなって思わないんだよね」

「ま、気持ちにはわからないでもないわ」

言葉尻はそっけなかったけれど、その声は楽しそうだった。恋愛話に花を咲かせられる、というのは素晴らしいことなのだとは学んだ。

恋愛、か。もう私には無縁の事かもしれない。

「だよね。そうだ、話し変わるけど、濡ちゃんって何があったの？」

「なにが、とは？」

カグヤの声が少し低くなった。

「ほら、さっき出てくときなんか暗かったから。……もしかして、解放団になんかされたの？」

「詳しくは、言えないわ。けど、彼らにされたことが原因で、今あの子一人で外に出ることすらままならないわ」

へえ、と美沙は感心したような声を上げた。

「あの年で、ねえ。……私、悪いこと言っちゃったね」

「反省してたのね」

「そりゃまあ。でさ、あの子って幻想郷から帰れないの？」

カグヤは頷いたのだろう、美沙が息を呑むのが聞こえた。

「な、なんで？ あの子、あんなにちっちゃいのに」

「特殊な力を持つてるから。あなたも、もしものときの覚悟はしておいたほうがいいわよ」

「……わ、わかったわ」

それから、しばらく無言が続いた。頃合いを見計らい、私は部屋に入った。

「あら、おかえり濡」

「ただいま」

私は美沙を見た。すると彼女は、私から目を逸らした。

「……カグヤ、美沙の事だけど」

私は単刀直入に、話を切り出す。

「どうしたのかしら」

「少し、二人きりで話がしたい」

カグヤはいい顔をしなかった。

「なぜかしら」

「聞きたいことがある」

私が言うと、カグヤは立ち上がった。

「……わかったわ。なにかあったら、叫びなさい。絶対よ」

私が頷くと、カグヤは部屋の外に出て、襖を閉めた。多分、話を聞いているんだろうけど別にいい。

私は美沙が座っている反対側に座った。

「あなたのお父さんについて聞かせてほしい」

「……は？」

素っ頓狂な声を、美沙はあげた。

「優しかった？」

「……まあ、それなりには。普通よ、普通」

普通、か。普通の優しさってどんなものなのだろうか。

「どれくらいの頻度で帰って来た？」

「毎日に決まってるでしょ？ 何言ってるの？」

毎日。羨ましいなあ。

「どんな仕事、してたの？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「興味があって」

私のお父さんって、どんな人なんだろう。それを、知りたくて。

「興味って……。なんで？ ごく普通のサラリーマンよ？ 収入も

普通、性格も普通の人。変なことっていうかムカつくことって言え

ば、浮気してて隠し子までいたってことだけ」

怒気を孕んだその言い方に、私は少し聞いてみたくなった。

「その、隠し子について、どう思う？」

「んー？ 私よりいい生活してんだろうなあーって思うとちょっとイラっとするけど、まあ、その子に罪はないしね。仲良くはなれそうにないけど」

私は、この人と仲良くなれそうな気がする。

「で？ こっちも質問していい？」

私は頷いた。

嬉々とした表情で、美沙は聞いて来る。

「ねえ、あなたってここに来る前どんなことしてたの？」

「普通。朝起きて朝食を採って、本を読むか辞書を開くかして、昼食まで時間を潰す。昼食を採ったら、買い物に行って夕食と次の日の食材を買いに……」

「いや、学校は？」

私は首を振った。

「友達とは合わないから」

「だから行ってないの？ ……でも、お父さんとかにも言わないの？」

「母は私が六歳の時に死んだ。お父さんにも滅多に会えなかったし、もう、死んだ」

美沙は痛ましそうな顔をして、顔を背けた。

「……ごめん」

「気にしないで」

「……でもさ、お父さんもお母さんもいなかったら、どうやって生活してたの？」

「全部自分でやってた」

「は？」

美沙は素っ頓狂な声をあげた。

「何かおかしい？」

「今いくつ？」

「二千百歳」

「は？」

「冗談」

さっきからずっと暗かったから笑って欲しかったのだけど、うけなかった。やっぱり家族には明るくいてほしい……と思うのが、普

通だから。

「ホントは十歳」

「まだ十歳でしょ？ お金は？」

「毎月お父さんが二百万くらい送ってくれていた」

美沙はぽかんとした顔をした。

「じゃ、じゃ好きに生活してたの？」

私は首を振った。

「毎日節約して、お金貯めてた」

「は？ なんで？」

「お父さんがお金なくて帰って来てくれたとき、すぐにでも渡せるようにするために」

美沙はあぜんとした表情で、口を開けていた。

「いくらくらい貯まった？」

「さあ。わかんない。八千万くらいは貯まってたかも」

「それ、お父さんが金くれって言って帰ってきたら全部渡す気だったの？」

私は頷いた。

「……滞ちゃん、そのお父さんって、滅多に帰ってこないんだよね？」

「お母さんが死んでからは、一度も帰ってこなかった」

美沙は悲しそうな顔をして、うつむいた。

「ずっと帰りを待ってたの？」

「家族だから。もう、死んじやったけど」

私も、この身体でなければお父さんのところにいるだろう。そう

思うと少しだけ、自分の身体が恨めしくなった。

「……その、ごめん」

「気にしないで、お姉ちゃん」

思い切って、そんなことを言ってみた。

「……お姉ちゃん、か。妹ができたみたいで、こそばゆいね。別に、滞ちゃんみたいに可愛い子だったら嬉しいんだけど」

美沙お姉ちゃんは、意外とすんなり受け入れてくれた。
もっと踏み込んでみようかな。

「私の名前、ここで貰ったんだ」

「……確か、まーが……なんだっけ」

「マーガトロイド。こっちでできた家族の名前」

ふうん、と美沙お姉ちゃんは相槌をうった。

「日本にいたとき、どんな名前だったと思う？」

「さあ。わかんないわ。教えてくれる？」

……どうしよう。しらを切ろうかな。

でも、もしここで黙ってしまったら、もう二度と話すチャンスはやってこないだろう。これからずっと美沙お姉ちゃんを騙すことになる。そんなのは嫌だ。

「星空。私の名前は、星空滯……だった」

鳩が豆鉄砲をうたれたような、そんな表情を美沙お姉ちゃんはした。

「……うそ」

「お父さんの名前は、星空七星」

今度はピシリと、石のように固まった。

「……あ、あなた、が？ 私の、妹？」

「おそらく」

怒られるだろうか。嫌われるだろうか。

「……ご、ごめん」

「どうして謝るの？」

なぜか美沙お姉ちゃんは、頭を机に突っ伏するように低く下げて、私に謝罪の言葉を言う。

「その、私のお父さんのせいで、苦労させちゃって」

「大丈夫。もう、お父さんを待つ必要はないんだから」

ここにいる。この世界の地獄に。

「ど、どうして？ お父さんは、自殺……しちゃったし」

それを言うときの美沙お姉ちゃんの顔を見ると、本当にお父さん

のことが好きだったんだな、ということがわかる。

「生き返らせるから。何年たっても、必ず」

「……は？」

美沙お姉ちゃんの気持ちを想像するなら、きっと疑問の連続でいっぱいいっぱいなんだろうな。私と違って、元の世界との繋がりが多いからもっと混乱するのだろう。

「私は何万年、何億年と生きていられる。だから、いつか、お父さんを生き返らせる。その時は、私と、美沙お姉ちゃんと、お父さんと、アリスお姉ちゃんとで一緒に暮らそう？」

美沙お姉ちゃんは微妙な顔をした。

「い、いや、待ってよ。アリスお姉ちゃんって誰？　というか、そりやお父さんが死んで悲しいのは悲しいけど……もう一度暮らそうかって言われると……正直、微妙。あなたみたいなちっちゃい子を放つとくような最低な奴だってわかったし」

「お父さんは最低なんかじゃない！」

私は思わず叫んでいた。美沙お姉ちゃんは驚いて目をパチクさせた。

「……あなたでも表情変わるんだ」

「私、ちゃんと人らしい感情持ってるよ」

「そう。でも、お父さんが最低なのは変わらないよ」

その、まるで侮蔑するかのような言い方に、私はつい苛立ってしまふ。

「なんでそんな言い方するの？　大切なお父さんでしょ？」

「いくら大切だろうと隠し子放ったらかしで金だけ渡してりゃいいやっていういい加減なことを許すわけにはいかない」

鋭い言い方だった。完全な否定も含まれているかのような、強い口調。

「……私にとっては、どんな人でも大切なお父さんだよ」

「私にとっても、よ。でも、それとこれとは話が別よ」

どうして？　どうしてこの人はこんなことを言えるんだろう。

「……漣、あなたは知らないんだろうけど、愛することと、全肯定は違うわ」

「……」

私は何も言えなかった。

「愛してるから何をしていても認めるんじゃない。愛していたからこそ、許せないことだってある」

「……私は、間違ってたの？」

本気で、愛することとは認めることだと思っていた。相手の言うことを鵜呑みにして、全部肯定して、そうすることが愛することだと信じていた。

「あなたは、まだまだ子供よ。これから、いくらでも変わっていく。ま、子供の私が言うのも変な話だけどね」

そう言って美沙お姉ちゃんにくすりと笑った。

「……ありがとう、教えてくれて」

愛することって、なんだろう。私はそんなことを疑問に思い始めていた。お父さんを失って、アリスと家族になって、美沙お姉ちゃんとも家族になって、それでようやく私は、自分の中にある愛に、疑問を持つことができたのだ。遅すぎるかな。

「気にしないで、妹だもの」

「でも、血は繋がってないよ？」

間違いない。私が、妾の子。そして母は浮気していた。私はどの誰とも知れぬ子供だ。

「……うん、それでも、妹！」

美沙お姉ちゃんは、そう言って笑いかけてくれた。

ありがとう、とお礼を言っていると、私は立ち上がってカグヤが出て行ったふすまを開けた。

誰もいなかった。

「カグヤ？」

「ん？ もういいのかしら」

廊下の奥からカグヤがひょっこりと顔を出した。

「うん」

「そう」

カグヤは頷くと私の方へ来た。部屋に入ると、テーブルにすわる。私は部屋の出入り口付近で立っている。

「話してどうだった？」

カグヤが美沙お姉ちゃんに笑いかけた。

「すごくいい子ね、私にはもったいないくらいの妹よ」

「……妹？」

そういえば、事情を説明していなかった。

「カグヤ、私の旧姓は、星空」

そう言うだけで、カグヤは察してくれた。

「……お姉ちゃんがいたの？」

「私も、この人に会うまで姉がいたなんて知らなかった」

「私もよ。まさかこんな妹がいたなんてね」

でも、私は美沙お姉ちゃんとも血が繋がっていない。私に血を分けた肉親は、もういないのだろうか。

……いなくても、いいか。私には、アリスも美沙お姉ちゃんもいるんだから。

「でさ、滞」

「なに、美沙お姉ちゃん」

美沙お姉ちゃんが、立ち上がって私の方へくる。

「まずはちよつと表情変えてみようよ」

「……私、いつも頑張ってるけど動かないの」

いつから、こんなふうになったのだったか。もう忘れてしまった。

「でも、さっきは表情変わったじゃん」

「そう？ でも、私意図して変えたわけじゃない」

「普通は、何も考えなくても笑ったり泣いたりするもんだよ」

「私は、普通じゃなくていい」

「なんで？」

私が表情を無くしたのは、きっと理由と意味があるのだろう。

「表情なんて、変わっても愉しませるだけ。ない方が、早く終わる」
そう、御陵臣にされたことだって、きっと私の表情が変わらなかつたからあんなものですんだのだ。もし普通の反応をしていたら、今頃私は……。

「何が早く終わるっていうの？」

「いろいろ。お姉ちゃんは、攫われたことってないの？」
美沙お姉ちゃんは絶句した。

「……あ、あるわけないでしょ」
そうなんだ。……いいなあ。

「今一人でお外に出たら攫われて滅茶苦茶に痛めつけられるから、一人で出ちゃダメだよ」

私が言うと、美沙お姉ちゃんは神妙な面持ちで頷いた。なんだろう、お姉ちゃんから警戒心が足りないように思う。まさかと思って、私は聞いてみた。

「元の世界でも攫われたこと、ないの？」

「それこそありえないわ……」

今度は私が驚く番だった。

「お姉ちゃん、そんな綺麗な顔なのに、よく無事でいれたね」

「……あなたは、攫われたことあるの？ 元の世界で？ 日本で！？」

私は頷いた。

「うん。だから、お外は嫌い。怖い人がいっぱいいるから」

私が学校に行かなかったのは、攫われ続けたことも関係しているのではないかと今更思い始めた。

「……そ、そう。ね、ねえ輝夜。その、宿屋とか近くにないかしら」
色々と衝撃を受けていたらしいカグヤは、美沙お姉ちゃんの言葉ではっとした様子で普段どおりに戻った。

「宿なんてこの近くにないわ。しばらく滯と一緒に暮らさない」
「え、でも」

「せっかく会えた家族なんだから、一緒にいてあげて」

カグヤは美沙お姉ちゃんの方を見据えて言った。その表情は、妙に悲しそうだった。

「……わかったわ」

こうして、私は新しい家族と一緒に友達の家で暮らすことになった。

早くアリスに紹介したいのだけれど、カグヤとした『休む』という約束は守りたい。だから、もうしばらくだけ、休んでいよう。ゆっくりと、時の許す限り。

そう思ったとき、私の心が少しでも軽くなったような気がした。

お姉ちゃんと私

御陵臣の元から生還して、二日目の夜が来た。私はカグヤ、ノーマ、美沙お姉ちゃんの三人と一緒に部屋で床を共にしていた。ノーマに美沙お姉ちゃんを紹介すると、彼は案外あっさりと床を共にするとことを了承した。

まあ、「いい?」と聞いて彼が頷いただけなのだが。言葉が使えない、ということは物凄く不便だろう。彼も御陵臣に何かをされたようで、表情もあまり変わらない。だから、余計に何を考えているのかわかりづらくなっている。

他の、ごく普通の人から見たら私たちはさぞ相手をしにくいのだろう。美沙お姉ちゃんや幻想郷の人がとびきり優しいだけで、元の世界の人はみんな、解放団のような人たちばかりなのだろう。

「……」

私は感覚の上昇した自分に戸惑いながらも、吸血鬼の力を使う練習をしていた。形だけの武器を作ることにはもう慣れたから、今度は斬れ味をあげていこうと集中する。けれど、どうもうまくいかない。なぜだろう。一度休憩がてら、武器制作を中断し、翼を生やす、生やすを繰り返す。

「……何してるの?」

私は声が出た方を見た。美沙お姉ちゃんが私の動く気配を感じ取り、起きたのだろうか。彼女は私の方を見て、驚いたように目を見開いていた。

「起こしてしまった? ごめんね」

「う、ううん。何してたの?」

「戦う練習」

「どうして? あなたまだ子供でしょ?」

私は威嚇するように背中の翼を広げた。美沙お姉ちゃんが息を呑むのが聞こえた。

「約束したの。仇を取るって。戦うって。そのために、私はこの力を使う」

私はゆっくりと、美沙お姉ちゃんに近付いていく。おいしそう。弱々しい仕草や雰囲気がすごく、そそられる。

もし、この鋭い爪で突いたら、きっと驚くだろう。最初は冗談か何かだと思うに違いない。それが本気だということを理解したら、今度は悲鳴を上げるのだ。許して、やめて。

きっと、悲鳴が乗った彼女は、とても美味だろう。

そこまで思っ、自分で自分を殺したくなった。夢で見るのは百歩譲るとしても、意識があるうちに、肉親を食す妄想をするなど、絶対に許されないことだ。

「……吸血鬼、なの？」

私は頷いた。

「そう。私は化物。元人間の、愚かな怪物。……軽蔑した？」

私は静かに言っ、布団から上半身を起こしている美沙お姉ちゃんを見下ろす。怯えたように身体を引く仕草が愛らしくて、食欲が湧く。しばらく反応を待っていても、何も言わなかった。

「……お姉ちゃん、かわいいね」

私は美沙お姉ちゃんの首筋を見つめて言っ。カグヤのように瑞々しい肌。牙を埋めたら、きっと夢のような快楽が手に入る。

食べたい。でも、食べてはいけない。ノーマも、カグヤもアリスも、みんなダメ。私が食べていいのは、御陵臣ただ一人。

「……わ、私を食べないの？」

「どうして？ 大事な家族なんだよ？ どうして食べるの？ おかしいよね」

私は冗談を言うように、軽い口調で言っ。

ダメ。我慢しなきゃ。食べてはいけない、食欲を湧かせてはいけない。しずまって。

私は無理なことを体に言い聞かせていた。だんだん理性が怪しくなってきて、食らいつきそうにさえなっくる。ダメ。なにがあっ

でもダメ。耐えて。耐えなきゃ。とびかかってもいけない。だから、耐えて。

私は、正しい愛なんて知らない。まちがっていない愛し方なんて知らない。だから、正しいそれを知っているお姉ちゃんを、食べてはいけない。教えてもらうんだ、本当の愛を。

打算的に食欲を抑えようと思っても、うまくいかなかった。

「……そ、そうだね。おかしいよね、は、はは……」

美沙お姉ちゃんはそう言って笑った。顔は、引きつっていたけれど。

「おやすみ、お姉ちゃん」

私はお姉ちゃんのそばまで行くと、恐怖で固まっているお姉ちゃんを寝かしつけるように横にしてあげる。食べられると思ったのか、お姉ちゃんはピクリと体を強張らせた。まるで、私がレミリアと最初に出会ったときのようなだった。

可愛い。愛おしい。ずっと愛でていたい。ずっとこの手に置いておきたい。でもこの感情はきっと姉に向けるものじゃない。きっとこれは、人間が愛玩動物に向ける感情だ。そんなものを姉に向ける自分が、腹立たしい。

「食べないから、安心して」

「……滞ちゃん、あなた、すごく悲しそう」

私は、虚をつかれた。

「え？」

「暗いからよくわからないけど、なんだかすごく、泣きそうな感じがする。表情は、多分変わってないんだろうけどさ。でも、悲しそう。何か、あった？」

優しい姉。新しくできた、愛すべき家族。

「何もないよ。お姉ちゃんの、勘違いだよ」

だから、心配をかけたくなかった。私のされたことを全て話してしまおうか。そんなことも考えたけれど、私は口を閉ざすことにした。お姉ちゃんのために。

「……ホントに？」

「うん。ホント。だから、安心して。私、全身全霊をかけて、お姉ちゃんを守るから」

私がそう言っていると、お姉ちゃんはクスリと笑った。

「かっこいいよ、漣。ありがと。おやすみ」

お姉ちゃんはそう言っていると、目を閉じた。

「おやすみ」

私はできるだけ優しい声色でそう言っていると、布団をかけてあげる。

しばらく見つめていると、お姉ちゃんの魅力に囚われてしまいそうだったので、私は自分の布団に戻った。吸血鬼の力を練習しようとする、すやすやと眠るノーマが視界に入った。

ノーマ。口の利けない、外来人。私が一週間も囚われの身となった原因。あのときこの子が私の手を振り払わなければ、私は……。

そこまで考えて、私はかぶりをふった。

何をバカな。一度は納得したのではなかったのか。あんなことをされて、折れないわけがない。そう思って、自分を言い聞かせたのではなかったのか？ ふらふらと思考が行き来する自分が恨めしい。

「……」

これ以上考えても、嫌な事を思いつくだけだ。私はそう思うと、ひたすら吸血鬼の力を使う練習をした。空が白んできたころ、私は布団に入り、眠りについた。

血と私

夢だ。

これは夢。

私の理想の夢。

だから、私の好きにしてもいい。だから、私は好きにしてい

「……」

殺戮。

暴食。

嗜虐。

吸血鬼になる前は嫌いだったもの。それを私は、夢で見るほどに渴望している。

殺したい。

食べたい。

誰彼構わず、支配したい。

私の能力が、私の感情を操作している。そんな錯覚に陥った。

閉ざされた部屋、たくさんの人間がひしめきあっている。好き勝手に、私はその人たちを食べる。殺す。虐める。

最後の一人は、美沙お姉ちゃんと同じ顔をしていた。

「……いや、やめて」

恐怖で顔を青ざめさせ、カタカタと震える彼女はひどく扇情的で、食べる前に色々と楽しみたくなるような気持ちさえ湧いてくる。

「だから、言ったのに」

「な、何が？」

私は手を振るかぶる。

「表情なんて変えても、愉しませるだけだ、って」

私は答えを聞かず、彼女の首を刎ね飛ばしていた。

お姉ちゃんの体は、非の打ち所がないような味だった。

私は飛び起きた。外を見てもう日が高く、周りを見ると布団は私のものしかなかった。

「滯、そろそろ起きて……って、あら」

レイセンが、部屋を覗き込んでそんなことを言った。

「いまおきた。すぐいく」

私は立ち上がると、レイセンのそばまでいく。

「……どうしたの？　ちよつと雰囲気暗いけど」

私は首を振った。

「なんでもない」

なんでもない、ただ、レイセンをご飯だと思った自分が、心底嫌になっただけ。

私はどうしてこんなことを考えてしまうのだろう。大切な人なのに。ダメなことだっただけでわかってるのに、それなのに、私はこの気持ちを、渴くような欲望が止められない。

「……ねえ、レイセン」

私はレイセンの目を見据える。赤い瞳。食べてしまいたい。

「なにかしら」

「吸血鬼って、吸血衝動を我慢できるものなの？」

レイセンはしばらく黙った。私の手を引くと、どこかに連れて行くとする。

私は思わず手を振り払った。

「ど、どこへ連れて行く気？」

「あ……ご、ごめん。お師匠様……永琳先生のところよ。だから、安心して」

レイセンはそういうと、再び私の手を掴んで、廊下を歩き出した。

「……滯、吸血鬼にとって、血を吸いたってというのはご飯を食べたいという気持ちとほとんど同じよ」

「知ってる。だから、我慢できる？」

「できるわけがないわ」

私はそんな事を言われて、衝撃を受けた。

「で、でも私は……」

「まだ渴ききつてないから我慢できるのよ。本当に渴いたら、我慢なんてできないわ」

「じゃ、じゃあどうすれば？」

レイセンは一つの部屋の前に立つと、ノックもせずに扉を開けた。中には、普段の奇妙な服を着たエイリンがいた。

「……どうしたの、騒々しい」

「お師匠様、滯を診てあげてください」

エイリンは私を見た。

「どうしたのかしら」

「吸血衝動があるそうなんです」

レイセンが、そんなことを言った。

「私は、我慢できる」

「辛いわよ」

私は頷いた。

「いくら辛くてもいい。皆に喰らいつくくらいなら……」

エイリンは肩を竦めた。

「無理に人であろうとしない方がいいわ。割り切って、適当な人間を見つけて血を吸ってきなさいな」

「な、な……」

私は驚きすぎて、声もあげられなかった。

「……体は血が欲しい。けど、あなたの心は、まだ人でいたい。これが、あなたの問題よ」

静かな口調で、エイリンが私に言った。

「体の方は、もう変えられないわ。蓬莱の葉は、服用者を、服用時の姿形にとどめ続ける葉だから。吸血鬼の状態で永遠になったあなたはもう、人には戻れない。だから」

エイリンは、私の心臓がある部分を指でさした。

「だから、心を変えていかなきゃ。まず、輸血パックの血から試していきましょう」

ま、待って。理解できない。なんで。

「なんでエイリンは、私を吸血鬼として完成させようとするの？」

「だって、吸血鬼でしょ？ それとも、薬を飲まされ続けて、縛りつけられて、最後にはただ血を求めることしかできなく方が好み？」

その言い方に、私は背筋が凍るような思いをした。

「……脅かしちゃったかしら。ホントはこんなことしちゃだめなんだけどね。ダブルバインド……とかいっても、わかんないか。ごめんなさいね」

悲しく、エイリンは私に謝った。

「……麗仙、トマトジュースに輸血用パックの血をちょっと混ぜて持ってきて」

そんな雑用を命じられても、レイセンは文句ひとつ言わずに頷いた。

レイセンが行ってから、エイリンは顔を引き締めた。

「……あなたには、感謝してる」

「なら」

「だからこそ、苦しんでほしくない。たとえそれが、人間と敵対する結果になったとしても、あなたはノーマの恩人で、姫様の親友なんだから。お願いだから、自分を許してあげて」

「……自分を、許す？」

エイリンは頷いた。

「そう。血を吸うあなた自身を、許してあげて」

「でも、そんなことしたら、私は、私は……」

私は、本当に化け物になってしまう。体は、もう仕方ないのかもしれない。けど、心は。心だけは、人のままでいたい。

「人でいたい、というのはわかるわ。でも、あなたはもう……」

「私は、吸血鬼。それはわかってる。だけど、私は……」

私は、心まで吸血鬼になって、夜な夜な人を襲って食べるようにはなりたくない。なにより、そんなことをしてしまえば、優しいと

言ってくれたアリスへの裏切りにもなってしまおう。もう、これ以上アリスを裏切るわけには、いけないんだから。

「ためらうのは、構わないのだけど、そんな風に人の心を保ち続けていたら、いつか本当に干からびてしまおう」

「……」

そうなのもいい、だなんてことは言えなかった。きっと、その瞬間が訪れても私の意識はあるのだろう。渴きと飢えを感じながら、ひたすら自分の中の欲望と戦っているのだろう。

そして、時の終わりまでそんな風にしているのだ。

「……そんなの、やだ」

いくらなんでも、自分勝手だ。自分で自分を笑いたくなった。

干からびるべきなのに。それなのに私は、生きていたい。お父さんを蘇らせて、もう一度会いたい。母のようになりたくない。

「……それなら、ね？」

「で、でも、私は人でいたい。体がダメなら、せめて心だけでも」

私は自分の胸に手を乗せて宣言するように言った。

「……頑固ね。まるでアリスみたい」

そう言われて、物凄く嬉しかった。今まで、家族に似てるなんて言われたことがなかったから。

「うん。私、アリスの妹だから」

「それは、いいのだけど。冗談とかじゃなくて、本当に、吸血しないのね？」

私は頷いた。

「そう」

エイリンはそう言うと、しばらく目を閉じた。

「じゃあ、輸血パックは飲んで」

「で、でも」

「大丈夫、輸血パックなら、誰にも迷惑かけないから」

私はそう言われて、僅かだが食欲が湧いた。頭を振って、それを追い出す。

「い、いらない」

「変に気を使わなくていいのよ」
気を使っているのでは、ない。歯止めがきかなくなりそうで、怖いのだ。

「……滯、よく、聞いて」

「なに？」

「血というものはね……」

エイリンが何かを言おうとしたとき、後ろの扉が開いて、赤い液体が入ったガラスコップを持ったレイセンがやってきた。

「……滯ちゃん、これ、トマトジュース」

中に、血が入ってる。そんなことはわかってる。中に入ってる血は、誰のものともわからぬ、輸血パックの血。

私は震える手でレイセンが持っているそれを掴むと、一気に飲んだ。血の味を覚えなくなかったからだ。

何度か、血だけでなく肉も味わったけど……。あまりにも美味で、癖になってしまいうさだった。だから、もうこれ以上血液を渴望しないためにも、血を味わうわけにはいかなかった。あの、甘美でどんな淫靡な行為にも及ばないような快楽を、癖にするわけにはいかない。

「……ありがとう」

それでも、私の体は少しの血で歓喜した。
湧き上がるように有り余るほどの力が私の中で生まれた。

「……エイリン、私やっぱり変だよ」

そして、収まるかに思えた食欲と渴きは、一層強まった。

「そうかしら」

「みんなを食べたいだなんて思う私は、異常だよ」

……美沙お姉ちゃんの顔を思い浮かべる。微笑みはすぐに恐怖の表情に塗り替えられ、その嫋やかな腕は中身を晒していた。それはまるで、魚を見て、調理後の姿を思い浮かべるような感覚に近かった。

だからこそ、自分が恐ろしい。

「変に我慢してたからよ。適当な人間を喰らえば、次第になくなるわ」

「どうしてそんな怖いこと言うの？」

私は何度聞いてもその理屈が理解できなかった。私は化け物。それは仕方ない。でも。

「じゃあ、どう言えばいいっていうのかしら」

「血を吸わずにいれる方法は、ある？」

エイリンは首を振った。

「あなたは、そうね、砂漠の真ん中、喉が渴いてしょうがないときに見つけたオアシスの水を飲まずにいれるかしら」

私は頷くことができなかった。

「そ、そんなに辛いのか？」

「あなたにとって血は、水であり、食糧であり、力なのよ。水を飲むよりも食事を摂るよりも訓練を積むよりも、効率がいいの。だから、余計に体は血を求める。飲まずにいたら、最後はさながら、麻薬中毒者のように……って、わかんないか」

私は戦慄した。

「……」

辛い、というのはわかっていた。今だって辛い。けど、この辛さの比ではないのか。そんなに辛いのか。どんな感じなのだろう。御陵臣にされたことのように苦しいのだろうか。

わからない。わからないのが、怖い。怖い！

「……落ち着いて。大丈夫よ。すぐにそんな風になるというわけではないから」

まだ来ぬ苦しみに怯える私の手を、エイリンがとった。私ははつと彼女を見上げる。

「……。ね、輸血パックだけでいいから、ちゃんと血を吸って。あなたが干からびるのを見るなんて、嫌よ」

真摯なその瞳。私への思いから紡がれる言葉。それらを私は、無

にするのか。

「わかった。輸血パックだけなら、飲む」

私は頷くと、診察室の外へ出た。扉を閉めると、扉によりかかる。私は、辛いのが嫌だから、エイリンの言葉にかこつけて、逃げただけ、なのかな。

本当はエイリンに対してなんとも思っていないくて、血を飲む自分を許すために都合の良い言い訳をしているだけじゃないのか。

「……私は最低だ」

そんなことを悩んでいると、扉の奥から話し声が聞こえた。

「お師匠様……」

「ダブルバインドなど、詐欺師のやることよ。医者の名乗る者がすべきことではないわ。特に、幼子になんて……っ」

「し、しかし、お師匠様、そうでもしなければ、滯ちゃんは……」

「急激な変化に人間がそう順応できるわけがないのは知ってるでしょ？ 大人しく待ってやることだってできた。だけど、私が焦ってしまったのっ。狂うか汚れるかなど、あんな子どもに選ばせるべきではないのに！ そんなことは明白だったのに、何を私は……」

泣くようなエイリンの後悔が、胸に響いた。私がちゃんと選ばなかったせいで、苦しめてしまった。

「……」

これからは、誰にも心配をかけないようにしよう。誰も苦しめないように生きよう。私はそう決心した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256y/>

東方幻想入り

2012年1月13日22時58分発行